582-157
1200501522666
582
57

新選
小山内薫集

新選 小山内薫集

寄贈本

紙本

新選

小山内薫集

昭和二十八年・内閣図書

582-157

新選小山内薫集目錄

土藏	八八頁
月明の晴	八一頁
月夜の星	四七頁
河童	四六頁
不良少年	四〇頁
多摩川	二六頁
千三百年祭	一三頁
蜜柑	七七頁
年	四五頁
人生の問題	一頁

色の褪めた女　一頁
手　四頁
病友　七頁
十三年　一五頁
乞食　二九頁
不思議　四〇頁
不男　四六頁
足拍子　四九頁
堀田の話　八一頁
粘土　八八頁

梅龍の話　九七頁
手紙風呂　一〇二頁
逆戻り　一〇九頁
英一蝶　一三六頁
江島生島　一六五頁
第一課　二一四頁
黄昏の世界　三二六頁
背教者　四五五頁

色の褪めた女

大井君が死ぬ一年前の日記を見ると、非常に綿密な日と非常に粗雑な日とがある。朝何時何十分に起きて何と何の新聞を讀んで、何時に學校へ出て、第何時間目に何處の教場で何を教へたところが、生徒がむづかしい質問をして困らしたとか、欠伸をして癪に障つたとか、歸りに牛肉を買つて竹の皮包を抱へて來たとか、今日で電車の回數切符がなくなつたとか、こんなつまらぬ事を明細に書いてある日があるかと思ふと、何一つ出來事は書かずに、

「嘘と嘘とは手を握る能はず。」

とか、

「生くべき人の死なむとするを死すべき人の生きよと止む。」

とか、感想の樣な格言の樣な文句が大きく書いてあるだけの日がある。又さうかと思ふと「あづき煮て寢ころび食ふや春の雨」とか「ひとり覺めて我が宿寂し百舌の聲」とか、發句一行で濟ましてある日がある。數字で何か計算のやうな事だけしてある日がある。「今日は三兩二分稼いだ。」とだけ書いてある日がある。「日記を記す暇なし。」と忙しさうに書いた日がある。まるで眞白な日がある。この位不規則な、不統一な日記はない。どう考へても一人の日記とは思へぬ。哲學者と實業家と俳諧師と學校教師と小說家と職人とが一日代りに書いた日記だ。

この不思議な日記の中に次のやうな不思議な事が書いてあつた——

十二月五日。

夕刻、四年振で品川の村田君（當時街鐵社員）を訪ね、ビイルの御馳走になりながらいろいろ電車の話を聽く。發電所の石炭焚で石炭の焚きやうの熟練一つで非常な月給を貰つてる爺さんがあるといふ話を聽いて何だか酷く感心する——自分の月給と石炭焚の月給と比べて見て、又一つ感心する。

大分夜が更けたなあと思つて時計を見ると、もう十二時近い。慌てて挨拶もそこそこに八ツ山下の停車場へ駈けつけると「赤」が今出るところだ。急いで乘ると、誰もゐない。車掌に「今川橋まで。」と斷つて置いて、扨隅つこを占領して寢支度をする——車は動き出した。

……

ガタ、ガタ、ガタンと電車が留つたので、眼が覺めると、もう大門！　客はやつぱり僕一人だ。

誰か乘るのかなあと思つてゐると、一人の若い女がはひつて來た。僕と反對の側の隅つこに腰をおろす……

見ると女は羽織を著てゐる、頭巾を被つてゐる――頭巾はもと紫だつたが、今ではもう灰色に褪めてゐる。羽織はもと茶だつたが、これも灰色に褪めてゐる。著物の色も褪めてゐる。帶の色も褪めてゐる。羽織の紐も褪めてゐる。白足袋は灰色に汚れてゐる。

この日和續きに足駄を穿いてゐる。足駄の齒にいつくつついた泥だか灰色に乾いてゐる。右の足駄の横鼻緒が一本切れてゐる。鼻緒の色も褪めてゐる。うつむいて物思はしげに眼を閉ぢた顏の色も褪めてゐる――頭の天邊から足の爪先まで、色の褪めてない處は一つもない。これは色の褪めた女だ！

どうしてこの女はこんなに色が褪めたのだらう。盥の水にでも浸つてゐたのかしら。さうだ、「苦勞」といふ者が若し水なら、その水に二年も三年も全身を浸してゐたのだらう――ゐるのだらう――水も大分呑んだらしい、舌の色もきつと褪めてゐる、心臟の色もきつと褪めてゐる……

車掌は鞄の口をあけて、片手に帶をした切符を、片手にペンチをまさぐりながら、機械的に女に近づく。

女は顏も上げずに、帶の間から財布を出した――財布の色も褪めてゐる……

財布を振ると中から往復切符の「復」が一枚出る――女の財産はこの切符一枚らしい。その貴き一枚に車掌は容赦もなくペンチを入れて、これを女に渡しながら、

「何處までおいでになります。」

（行先を訊くのは道を急ぐ爲だ。）

「何處まで行つてもいいんでせう。」

女は尙うつむきながら言ふ。

車掌は笑つて、

「何處まで行らしても構ひませんが、この電車は上野の車庫へはひるんですから。」

「え。」

「この電車は上野までしか參りません。」

「では上野まで。」

と言つて又眠るともなく眼を閉ぢる……

木場の堀に何年も使はれずに浮いてる色の褪めた材木――場末の吳服屋に何年も賣れずにぶら下がつてる色の褪めたメリンス……女を見てるといろいろな事が頭に浮ぶ。

おれもいつか色の褪める時があるだらう――いや、今褪めてる最中かも知れない。と思ふと、ぞつとする――今川橋！

降りようとして、ひよつと見ると、色の褪めた若い女は前後も知らず眠りこけてゐる。

一體女は何處まで行くんだらう？　家へ歸つて床へはひつても氣になる。

十二月六日

ゆうべの女は何處まで行つたらう。車掌は「上野の車庫まで」と言つたが、けふもあの電車は唯一人色の褪めた女を載せて走つてるやうな氣がする。いつまでもいつまでも走つてるやうな氣がする――廢物が塵取で掃溜へ運ばれるやうに、色の褪めた女は電車で掃溜へ行くのではあるまいか……

けふは電車に乘らずに學校へ行く。

（明治四十年六月。淺草にて。）

手

ドンが打つと機械場で拍子木が鳴る。輪轉機の運轉が礑と止む。植字の字を歌ふ聲も直ぐひつそりする——村井君は赤インキの筆を置いて、印刷所を出た。

非常な風だ。空つ風が土砂を捲いて、靑く澄んだ冬の空も、下から半分どころまで黃色になつてゐる……印刷所を出た村井君は、電車の線路を横切つて直ぐ筋向うの蕎麥屋へはひつた—村井君は「交通月報」の校正係で、毎月廿日から廿五日までは、印刷所に詰切りで、お午はいつもお蕎麥と定つてゐる。

村井君は五目を誂へた。校正係のお辨當としては贅澤である。けれども村井君は社から貰ふ一日廿五錢の日當を、電車と晝飯に費つてしまはなければ氣が濟まないのだ。「月給は月給、日當は日當。」村井君の頭には劃然と區別が附いてゐる——五目の來ない內に、村井君は更にあんかけを誂へた。

五目とあんかけとは中味が同じである。蒲鉾と玉子燒と菜つ葉と麩と椎茸と——白と黃と綠と淡褐と深褐と——村井君はこの配合がひどく好きなのだ。

五目とあんかけは一緒に來た。村井君は直ぐ箸を取る。

腹のへつた村井君は夢中で五目を平らげてしまふ。さて第二のあんかけに移つた、村井君は箸にかかる菜つ葉を見て、ああ好い色だと思ふ。ふと箸を見る。汚い箸だ。お天氣の日にかういつた蕎麥屋の前に手際よく盛り上げて乾かしてあるあの箸だ。ふと箸を持つてる自分の手を見る。箸を汚いと思つたが自分の手は更に汚い。親指と中指には赤インキが附いてゐる。食指には墨が附いてゐる。手全體に活版のインキが泌み込んでゐて、厭にどす黑い。

村井君は考へた。成程手を見ると人の商賣は分かる——どう見たつておれの手は校正係の手だ。汚い手だ。實に汚い手だ。

村井君はそれからそれと、いろいろ手の事を考へた。

嘗て石版の下繪をかく友達の處で、和蘭の畫家が亞米利加の博覽會へ出品したとかいふ、手ばかり澤山かいた畫の寫眞版を見た事がある——餘程の大幅らしいが、何でも空の上の方に運命の神の顏だけが、苦り切つて、丸く太陽のやうに懸つてゐる。すると下の方から數へても數へ切れない程澤山人

間の手が出てゐて、みんな何かを摑まうとしてゐる。鎖で縛られた手頸が出てゐるかと思ふと、兩手に赤んぼの手を持つてこれを差し上げてるのがある。鋤を翳してる手があるかと思ふと、十字架を突出してる手がある。血だらけの双物を持つてる手があるかと思ふと、ペン を振り上げてる手がある。若い男の手が若い女の手と緊ぎ合つて出てゐるのがある……おれの手も始めて女の手を握つた時分は隨分綺麗だつた。と村井君は考へる。

村井君はにこつとした——始めて女の手を握つた時の事を思ひ出したのだ。

おれもあの時分は年も若かつたし、戀として女に接するのは始めてではあつたし、隨分きまりが惡かつた……おれはいきなり女の手を摑んで、下を向いて、小さな聲で「僕は……僕は……」を五六遍言つて、それから、思ひ切つて、「君が好きなんです。」と單刀直入した。すると女はなんにも言はない。暫くなんにも言はない。どんな顏つきをしてゐるか見ようといふ勇氣がないから、下を向いた儘でゐると——女はやつぱり默つてゐる。併し手を放さうとする樣子はない。

ものの十分間も經つたかと思ふと、おれの手へはらはらと熱いものが落ちて來た。涙だ。熱い涙だ。驚いて顏を振上げると、女は堅くおれの手を握り緊めた——泣いてゐる。「どうして泣くのです。」とおれは又單刀直入にやつた。女は聞えるか聞えない位の聲で、「あんまり思ひがけない事だつたものですから。」と言ふ。「ぢや悲しいのですか。」とおれは更に突貫した。この時聞いた「いんえ。」程好い心持のした「いんえ。」はない。

ああ。あの淸い涙のかかつた美しい手も、今はこんなになつてしまつた。可哀さうな手だ。憐れな手だ。氣の毒な手だ。

これから先は村井君自身も何を考へてるのか分からない程ぼんやりしてしまつた。と、八角時計が聲高にボオンと一つ鳴る——村井君は眼が覺めた。見ると十二時半だ。

お蕎麥は二つとも空になつてゐる。頭に繃帶をした蕎麥打の職人と蕎麥屋のおかみさんとが株の話をしてゐる。

「おいくらです。」と村井君は寢ぼけた聲で訊く。「十五錢頂きます。」とおかみさんが答へる。「へい。」と言つて、村井君が廿錢銀貨を投り出すと、繃帶の職人は立つて來て、その銀貨を拾ひ、帳場へ行つたかと思ふと直ぐ引返して來て、五錢の白銅を「へい、おつり。」と突き出す。

村井君はつりを取らうとして、ふとその白銅の載つてる掌を見ると、眞白だ。蕎麥粉で眞白だ。指の間から爪の間までなけりやならん。」と村井君は思つた。「夢を食つて生きてるのは、貘とかいふ獸ばかりだ。人間は夢を食つて生きてる事は

出來ない。さあ行つて働かう。働いて疲れて、寢て、起きて、又働かう。夢を見てゐる若い男の美しい手にかかつた女の涙より、更に淸い更に貴い何者かの涙が、このインキだらけな汚い手にかからないとも言へない。」

村井君は蕎麥屋を出た。風は少し歇んだが、空はやつぱり淒い程黃いろい。電車の線路を横切つて、筋向うの印刷所へはひると、輪轉機は旣に轟々と運轉してゐる。植字は旣に字を歌つてゐる——村井君の借りてる机の上には何の表か罫組の校正が八ページ來てゐた。

（明治四十一年正月。淺草にて。）

病友

一

「好い天氣だね。」

「好い天氣だ……君と僕と散步する時はいつでも好い天氣だ。」

「天は僕等二人を、この暖い日光とこの朗な空氣で看護してくれるんだね——有難いなあ。」

「看護してくれるのも天だが、病氣にしてくれたのも天だ……」

「……」

「……どうだい君、樫の新綠が白く光つて綺麗ぢやないか。」

「どうして白く光つてるのだらう。」

「空を見給へ、空を。」

「成程、白い雲が走つてるねえ。」

「けさの雨で濡れた葉へ空が映るのさ。」

「自然は何時見ても生々してるね……人間はだめだ。」

「人間だつて生々してるさ。」

「君や僕はだめぢやないか。」

「僕等は出來損ひなんだから爲方がない。」

「出來損ひ。」

「繪かきが繪をかいて、自分の氣に入らなければ破つて棄てちまひたくなるだらう。」

「そりやさうだらう。」

「造物主だつて人間を造つて、これは出來損ひだと見れば直ぐ毀してしまひたくなるだらうさ——君や僕はその出來損ひなのだ、天の思召に適はない人間なのだ。」

「何處が出來損ひなんだらう。」

「繪かきの心は繪には分からないさ。」

「では、默つて破かれてしまふのか。」

「まあ、さうさね。」

「反抗したらどうだらう。」

「反抗は出來ないさ。」

「繪の如き無生物には出來なからうが、吾々人間には出來る——人間には意志があるもの。」

「在るのではあるまい、貰つたのだらう——繪の具は繪のものぢやない、繪かきのものだ。」
「して見ると、造物主の前では吾々人間もそこらの草や木も同じものなのか。」
「恐らくさうだらう——君は枯つ葉の落ちるのを見て、莫迦な奴だ、反抗すれば好いのにと思ふか。」
「さうは思はんさ。」
「だらう。僕等は枯つ葉だ——風に逢へば落ちるより外はないのさ。」
「……風はいつ吹いて來るか分からない……吾々は風が吹いて來るのを待つてる爲に生きてるやうなもんだね。」
「……」
「枯つ葉は地面へ落ちて、それからどうするのだらう。」
「箒で掃き集められて、燒かれるか、掃溜へ捨てられるさ。」
「けれども、森や林ぢやあ掃く人もあるまい。樹の根に堆高く積るだらう。」
「それは腐つて土に混つて樹の滋養分になるといふ話だ。」
「して見ると、吾々も死んで人の滋養分になるのかしら。」
「あんまりなりさうもないねえ。ハハハハ。」
「君は來世は在ると信じてるんだね。」
「ああ信じてるよ。」
「僕にはどうしても分からん。君はどうしてさう信じるのだ。」
「さう信じなくちゃ生きてをられんもの。」
「では必要上信じてるのか——意志の力で無理にさう信じてゐるのか。」
「無理に信ずるといふ事は出來ないさ。智も情も意もすつかり滿足しなければ信にはならないさ。」
「ぢや君のは三つとも滿足してゐるのか。」
「ああ、滿足してるよ。」
「どういふ風に滿足してるんだ。」
「僕がいつか英吉利の詩を讀んだところが、かういふ事が書いてあつた——鳥が空を高く向うへ飛んで行く、初は翼を動かしてるのがよく見える——」
「ふうん。」
「その鳥が段々小さくなる——段々小さくなつて終に黑い點になつてしまふ——」
「ふうん。」
「たうとう見えなくなつてしまふ——」
「ふん。」
「併し、見えなくなつても鳥はゐないのぢやない、鳥はやつぱり空を向うへ飛んでるのだ。」
「成程。」
「僕の來世觀は卽是さ——僕は今の詩を唯一の慰めにしてる

のさ。」
「羨しいなあ……僕も早くさういふ信仰が得たいものだ。」
「おなかの中さへ綺麗にすれば、いつでも信じられるぢやないか。」
「腹の中。不幸にして僕の肺は腐つてる……」
「……」
……
「今行つたのは佛法(佛蘭西法科の略名)の人だつてね。」
「二人で歩いてるといつでもここで會ふね。」
「丈夫さうな人だ。」
「見給へ、あの後姿を。」
「肥つてるね、立派な男だ。」
「いつでも寮歌を唱つてるね。」
「あの聲の力のあること……いつ聞いても、かう、何だか愉快で愉快で堪らなさうだね。」
「どうだい、あの太いステツキを振り廻しながら、橋を渡つて行く風の愉快さうだこと。」
「活動の權化だ。」
「この空と、この光と、この新綠とに、如何にもよく調和してる……」
「ああ、丈夫な人は好いなあ。」
「ほんとに……丈夫な人は好い……」
「……」
「……」
……
「もう避病院だ——別れよう。」
「腦病院から避病院まで——僕はいつでもさう思ふよ。病人にこれほど調和してる道はない……」
「君は今佛法の人に調和してると言つたぢやないか。」
「あの人は避病院から田端のステエションまで歩くんだ、病院を離れて活動世界へ向ふのだ……僕等の道はどつちをどう歩いても病院から病院だ……」
「途中に寺がないだけまだ好いのかも知れない。」
「ハハハハ……ぢや失敬。」
「又あした」

二

「僕はたうとう古道具屋を追ひ出されたよ。」
「ふうむ、どうして。」
「やつぱり病氣を嫌はれたんだらう。」
「さうか……で、どうした。」
「淺嘉町の下宿屋へ移つた。」
「あんな汚い家より下宿の方がさつぱりして氣持が好いだらう。」

「氣持は好いが、どうも調和しない。」
「なぜ。」
「僕は人間の廢物だらう。古道具屋の二階が非常によく調和してゐたのさ。」
「……つまらん……さう言へば、君んとこの店の正面の柱にぼんぼん時計の古いのが下がつてたね。」
「うん、あるよ。」
「僕はあの時計が不思議でならないのだ。」
「ふうん、どうして。」
「君のとこへ遊びに行く度に、あの時計の針のある處が違つてる。それで、いつでも留まつてるのだから可笑しい。おとといとひ三時のとこに留まつてるかと思ふと、きのふは十一時半のとこに留まつてる、と思ふと、けふは又六時廿分のとこで留まつてる……」
「うん、あれかい。あれには訣があるのさ。」
「へえ、どういふ……」
「何も不思議な事はないのさ。客が來て「あの時計を」と言ふだらう。すると親爺二つ三つ螺旋をかけて動かして見せる。客が買はずに歸るとその儘うつちやつとく。素より怪しい機械なんだから直ぐ留まつてしまふのさ。明くる日又客が來る、又動かして見せる、客が買はずに歸る、又留まつてしまふのさ。だから毎日違つた處で留まつてるんだ。」

「成程。さういふ訣か——ちつとも氣がつかなかつた。」
「丁度僕等の體と同じ事さ。少し何か爲ようと思つて、こつこつこつこつ始めると直ぐ厭になつてしまふ——少し動き出すかと思ふと、直ぐ留まつてしまふんだ。」
「永久に留まると、それが死か。」
「さうさ。ハハハハ。」
「麥がすつり大きくなつたね。」
「青々して目が覺めるやうだ……おう、びつくりした……何だと思つた。」
「麥の中に降りてゐたんだね——たいへんな雀だなあ。」
「二人の足音に驚いたんだね。」
「どうだい、あの、ばあつと飛び立つ時の勢の好いこと。」
「一羽一羽の翼一枚一枚に活動の氣が充ち滿ちてゐるねえ。」
「病人はつまらんねえ……」
「全くつまらん……」
……
「面白い事を發見したぞ。」
「何だ。」
「ほら、ここいらは左が麥畑で右が葱畑だらう。それからその先は左が葱畑で右が大根畑だらう。又その先は左が大根畑で右が麥畑だらう——百姓は色の調和を考へて畑の區劃をするのか知らん……や、また佛法の人が遣つて來た。」

「相變らず歌を唱つてるねえ——力のある聲だなあ。」
「自然の生氣と調和してるねえ。」
「丈夫な人は好いなあ。」
「ほんとに丈夫な人は好い……」
……
「隨分足の早い人だねえ——もうあんな處へ行つてしまつた。」
「長いコンパスを開いて、とつとつとつとつと歩いてくとこを見ると、まるで軍人のやうだねえ。」
「軍人。吾々はとても軍人にはなれんねえ。」
「當り前ぢやないか。」
「いや、赤い帽子を冠る軍人になれんのは無論の事だ……人生の戰に出る軍人になれんと言ふのさ。」
「そりや全くだ——僕等は「人生」の豫備校にはひらうとして體格試驗に落第したのさ。」
「殘念だなあ。」
「一體僕等は何の爲に學問をしてるのだらう。」
「死ぬまでの時間潰しさ——ステエションで呉服屋の廣告を讀んでるのと同じだ。」
「もうもう廢さう、そんな話は……や、避病院へ患者がはひるね……」
「追々暑くなると、ここは又……繁昌だ。」

「大層咳をするね、坂を上がるのは餘程辛いか。」
「大變近頃……また……弱つた。」
「大事にし給へ……餘り勉强しちやいかんぜ。」
「勉强はしないよ——時間潰しに過ぎんと思つてるのだから。」
「……地藏樣の涎かけが新しくなつたな……」
「ほう成程。」
「ぢや失敬。」
「あした學校で會はう。」
「今度の下宿へ遊びに來給へ、吉祥館といふ家だ。知つてるだらう。」
「吉祥館……煙草屋の路次をはひつた處だらう。」
「さう、さう。」
「ぢや、いづれ行く。失敬。」
「失敬。」

三

「久し振だねえ一緒に歩くのは……暑くなつたねえ。」
「暑くなつた。」
「もうすつかり好いのかい。」
「風邪はすつかり取れた、併し……」
「？」

「たうとう宣告を下された。」
「なんて。」
「喉頭結核。」
「……さうか……實は僕も食つたよ。」
「？」
「非常に惡性な肺尖加答兒。」
「肺尖なら好い……」
「何が好いものか。斷頭臺と絞首臺とのプレフアレンスだあね。」
「僕は寢てゐる内に、いろいろ來世に就いて考へて見たが、どうしても分からない。」
「あれを讀んだか。」
「君のくれた聖書か。すつかり讀んだ。成程君の言ふ通り來世に對する信仰がなければ、聖書の過半は無意味なものだ。」
「さうだらう。」
「復活がなければ基督の生涯は斷篇に終つたのだといふ說も分かつた。」
「さうだらう。」
「けれども、僕は肝心の基督に對する信仰がないのだからだめだ。」
「どうして。」
「つまり今までの僕の生涯が餘りに單調で、餘りに無事だつたんだねえ。泣いて神の裾に縋るといふやうな經驗がないんだ——折角送つてくれた本も慰藉にはなつたが力にはならなかつた。」
「けれども、力になつて、それから信ずるのぢやあるまい。信じて始めて力になるんだらう。」
「併し、目に見えないものを綺麗だと褒める事は出來んだらう。」
「君はピリポだ。」
「さうだ、ピリポだ。『主よ我儕に父を示し給へ、然らば足れり。』だ。」
「基督の答を讀んだか。」
「讀んだ。」
「滿足出來ないか。」
「出來ない。」
「……」
「……」
「併し僕は、その代り或新しい希望を得た。」
「ほう。どういふ……」
「僕が死ぬと同時に全世界の生物がみんな死ぬ——かういふ希望だ。」
「そりや病的だ。」
「或は病的かも知れない—併し、僕にとつては確な慰藉だ。」

「そんな事は在り得べからざる事だ。」
「と同時に、在り得べき事だ——僕と一緒にきつとみんな死ぬ——きつと死ぬ。」
「僕もか。」
「……無論さ。」
「君と一緒なら僕は進んで死んでも好い……けれども世間はさうは行くまい。」
「いや行く——きつと行く。」
「ハハハハ、大變强いね。」
「ハハハハ……けふは佛法の先生道つて來ないね。」
「ほんとに來ないねえ、どうしたんだらう、試驗で忙しいかな。」
「あの體では二晩位の徹夜は平氣だらうねえ……や、豆の花が咲いてる、綺麗だなあ、とつても好いだらう。」
「好いだらうつて。」
「……さ、君も一つ持つてつて何かに挿し給へ。」
「有難う……あした君まだ學校へ出やしまい。」
「ああ。まだ行かないつもりだ……君……もう少しゆつくり歩かないか。」
「さうか、失敬失敬。坂はやつぱり苦しいね。」
「ああ。」
……

「ぢや失敬。」
「君、懷の郵便出すんぢやないか。」
「さう、ここへ入れるんだつた。有難う。」
「學校へ出すのか。」
「ああ……屆さ。」
「ぢや、あしたは僕が君んとこへ行かう。」
「さうか、ぢや、さうしてくれ給へ。」
「失敬。」
「失敬。」

四

「君、あの人は死んだとさ。」
「誰。」
「ここでよく會ふ佛法の人さ。」
「え。死んだ。いつ。」
「君が學校休んでる間に——僕もけふ始めて聞いたんだ。」
「どうしてね。」
「腸窒扶斯で急にださうだ。」
「へえ。分からないもんだね。」
「寄宿では傳染病だといふんで大騒ぎださうだ。」
「寄宿にゐたんだね……へえ、あの人がねえ……あんな丈夫な人がねえ……氣の毒だなあ。」

「……實に氣の毒だ。」

「あゝいふ人の死にはどういふ意味があるんだらう……あんな人も君の所謂「出來損ひ」なのかしら。」

「やつぱりさうだつたんだねえ――僕等には分からなかつたんだけれども。」

「過つて大事な畫稿にインキを瀉してしまつたんぢやなからうか。」

「造物主はそんなそそつかしやではないと思ふ。」

「青い葉が枯つ葉より先へ落ちるところを見ると、まんざら風ばかりを恐がるにも當らないやうだねえ。」

「……けれども、風はやつぱり恐いに違ひない。」

「……一體僕等はいつ死ぬんだらう。」

「ほんとにいつ死ぬんだらう……………」

……………………………………

（明治四拾年正月。巢鴨にて）

十三年

追憶の一。

授業が終へると鞄と草履を抱へて小學校の門を出た。二三人の友達と道草を食ひながら歸る。午後三時。

招魂社の馬場を突つ切つて……馬場のまはりの土手には枳殼の花が白く咲いてゐた……富士見軒の横町へはひると、琴の音がする――僕の家だ。

また琴の會だなと思ふ――だらだら坂を降りると三階家がある。これが僕の家だ――琴の音は止んだ。

家へはひると、直ぐづかづかとお座敷へ通つて、お母さんに「只今。」と挨拶する。お客樣にもお辭儀をする――お客樣の中に僕の好きな吉野のをばさんがゐる。

今一曲濟んだところと見えて、一つ一つ爪をはづしてる人がある。乾いた手拭に絃の先を卷きつけて絃を締め直してる人がある。琴唄の本をあつちこつちと明けてゐる人がある。細い可愛い烟管で烟草を飲んでる人がある――吉野のをばさんはお菓子を二つ三つ半紙に載せて僕にくれた。

僕は直ぐ自分の部屋へ引つ込んでしまつた。その時分僕は賑かなとこの嫌ひな、口數を利かぬ、おとなしい、妙に物寂しい子だつた。毎日部屋へ閉ぢ籠つて本ばかり讀んでゐる……けふも「鐵假面」の續を讀み出した。

奧では又琴の合奏が始まつた――誰だか一人調子つ外れな聲を出して唄ふ人がある。

その時分僕の家は中の上といつた階級の婦人連の一種の倶樂部であつた。家に用のない夫人連が毎日のやうに集まつて來ては何かしらして遊んだものだ。僕の母も家に用のない夫人の一人だつた――僕の父は僕が五歲の時、少からぬ遺產を殘して死んだ。

琴が濟むと、三味線が始まつた。三味線もひとしきり段物を彈くと、新內の流しだの、芝居で覺えて來た三寶の立廻りだのといふものが研究される。それが濟むと何か食べるのであらう、ぱつたり靜になつた。

下女がお茶とお壽司を僕の部屋へ持つて來た――お裾分だ。僕は海苔卷を丸ごと頰張りながら尙「鐵假面」に讀み耽る。

やがて奥では話が始まつたらしい。さかんに笑聲が聞える。誰か便所に立つたと見えて手洗水の音がする。

追憶の二。

僕の家に妙な寫眞がある。僕の母を初として十人あまりの夫人が、よそゆきの著物に態とお揃に黒繻子の襟をかけてお揃に黒繻子の帶を締めて、お揃に帶の上に細い時計の鎖を見せて、お揃に紙で出來た櫻の大きな花簪を差して映つてゐる。裏を見ると、母の若い時の手で「明治廿四年四月寫」としてある。寫眞屋は淺草公園の江崎禮二、お花見の歸りにとつたものらしい——僕の好きな吉野のをばさんも氣取つて映つてゐる——印畫には一面に星が出てゐる。

十人あまりの内、一人はその頃帝國大學の教授をしてゐた或英吉利人の外妾だ。一人は當時亞米利加公使館の書記官をしてゐた人の内縁の妻だ。一人は陸軍監督の夫人だ。一人は軍吏の夫人だ。一人は非職騎兵中佐の夫人だ。吉野のをばさんはその頃鳴らした或政治家の奥さんだ。僕の母は陸軍々醫の寡婦……

又その頃の寫眞で、母が僕の姉の著物を著て、吉野のをばさんが僕の妹の著物を著て、髪もおのおのその年頃の形に結つて、二人向ひ合つて横を撮つたのがある——假裝は當時の流行だつた。

又もう一枚、母と吉野のをばさんとが、いづれも意氣な縮緬浴衣を著て、二人とも後向きで、吉野のをばさんは島田、母は銀杏返し、今にも水の垂りさうな出來たての髪を撮したのがある。

母はその頃卅二三であつた。吉野のをばさんも——母よりは年下であつたが——大方似合の年恰好であつた。母は年相應に老けて見えたが、吉野のをばさんは年よりはずつと若く見えた。

「番町のおばけ」とは吉野のをばさんの綽名であつた。吉野のをばさんが束髪に結つて歩くと、年が分からぬといふ噂であつた——をばさんは五番町に住んでゐた。それで「番町の」と言はれたのだ。

それから更にもう一枚、吉野のをばさんが一人で映つてゐる手札形の寫眞がある。これは一番町の武林でとつたものだが、少しも星が出てゐない。十五六年前の吉野のをばさんの姿は髣髴として一枚のP、O、Pに刻みつけられてゐる。

この寫眞の吉野のをばさんは、前の二枚の寫眞の吉野のをばさんとはまるで風が違つてゐる——をばさんは洋服を著てゐる。黒いセルカンとかの洋服を著て、肱掛椅子に腰かけてゐる。襟から胸の前へかけて、黒天鵞絨の飾がしてある。兩方の袖口を折り返したところにも同じ黒の天鵞絨が用ひてあ

る——天鵞絨の艶と柔みとがよく寫眞にとれてゐる。黒の手袋をはめて、手袋の上から腕環を嵌めてゐる。右の手に細いのを二つ、左の手に巾の廣いのを一つ。胸の中程から左へ斜に、時計の金の鎖が二筋垂れてゐる。鎖の先は左の手に隱れて見えぬ。鎖には小さな金の寫眞入が附いてゐる。

頭は油氣なしと見えて、毛が一筋一筋あざやかに撮れてゐる。束髪は頭のてつぺんに平に丸くパンの形にあるやうに捩つてある。前髪は剪つたのを廣く房々と下げてゐる。束髪の左に小さな薔薇の生花を一輪差してゐる。

をばさんの顔は美しいといふ方ではないのだが、何となく人の氣を引きつける。頰は痩せて少し貧相だが、眼がぱつちりしてゐる、眉毛が濃い、口に愛嬌がある。何よりも人の氣を引くのは、その活々した、利口さうな、隙のない、眼の働きだ——それは寫眞にも見える。

をばさんは丈の高い、恰好の好い、立派な女だつた。

僕の家へ集まつた連中の中で、洋服を著たのはをばさん一人だつた。あつちの人の世話になつてゐた人もゐたが、さういふ人は却つてみんな極々日本式の女で、洋服など著て見ようとする者さへなかつた。をばさんは英語をよく話した。これも連中の中に一人しきやない。なんでも下六番町の或耶蘇教の學校を卒業したのだとか聞いた。

追憶の三。

僕が始めて吉野のをばさんの家へ遊びに行つたのは、なんでも六月頃の或土曜日の晝だ。

その日はをばさんの家に何か會があつた。けれども僕の母や僕の家に集まる夫人連は誰も來てゐなかつた。僕の家に集まる連中の會とはまるで性質の違ふものらしい。

お座敷の障子を取り外して、緣側にまで多くの男女が居こぼれてゐた。床の間の前に紺青の天鵞絨をかけた大きな机が置いてあつた——その天鵞絨に「神者愛也」と黄いろく刺繍がしてあつた。

顎にも鼻の下にも髯の生えた、肥つた、色の黒い、フロツクコオトを著た男の人が、机の側に立つて兩手を高く擧げると、座敷から緣側に居流れてゐる總ての人が手を額へ當てて俯向いた。

僕は庭のブランコに腰をかけてこれを見てゐたが、みんながやるので、自分も訣は分からず、見やう見眞似に額に手を當てて俯向いた。

その髯の人は、暫く低い聲で何だかごとごと言つてゐた——ちつとも聞えない。

その内に「アアメン。」と言つて止めた。座敷に溢れてゐた男女も「アアメン。」と言つて頭を上げた……

僕も「アアメン。」と眞似をして頭を上げた。

をばさんの家の庭には山もない、池もない、たひらな廣い地面に一ぱい梅の樹が植えてある。まだ礫ほどの青い梅の實が鈴なりになつてゐた。

書生がサブレエを半紙に捻つて、庭まで持つて來てくれた——「奥さんからですよ。」と訛のある詞で言つた。

この書生は名を田丸といふ、非常に眼の近い、面皰だらけな男だつた。

追憶の四。

吉野のをばさんが出たとかいふ下六番町の耶蘇の女學校に、何かの慈善會があつた事がある。

吉野のをばさんはかういふ種類の會のためには、いつも率先して切符を賣つて廻る——その賣り方が又巧いので、まるで知らない人のやる會までが頼みに來る。それが今度は自分の出た學校の事である。をばさんは十日ばかりといふものは、今まで毎日のやうに來た僕の家へも顔を見せずに奔走してゐた。

當日になつた。

僕の母は芝居や演藝會へは好きでよく出かけたが、さういつた會はあまり好きの方でなかつたものだから、義理で買つた一枚の入場券は僕にくれてしまつた。

僕はそれを持つて得意で出かけた。

學校でをばさんに會つたら、「よく一人で來てくれたのね。」と言つて、大變喜んでくれた。自分の用などはそつち除けにしてしまつて、僕の側を離れない。僕も知らない人ばかりゐる所で、をばさんが側にゐてくれるのは、どんなに心強かつたらう——僕は嬉しいと思つた。

をばさんは僕を學校の一番高いところ——屋根の上の運動場のやうなところへ——連れて行つてくれた。市ケ谷の士官學校の馬場で陸軍の生徒が五六人馬を稽古してるのが、人形のやうに小さくはつきり見えた。

をばさんは又、僕をバザアへ連れて行つてくれた。綺麗な著物を著た綺麗な人の手から、西洋の繪本を二册買つてくれた。僕は本が好きだつたから、非常に喜んだ。僕の喜ぶ顔を見て、をばさんも喜んだらしい。

この二册の本の内、一册の表紙には英吉利の水兵の繪が色刷になつてゐた。もう一册の表紙には、赤い三角帽を冠つた厚い外套を著た、白い髯の生えたサンタ・クロオスが雪の積つてゐる煉瓦の塀を今あつちからこつちへ越えるところで、塀の上に左の片肱をかけ、右の手頸をかけて、躰を丁度肩まで出したところである——その眼を細くしてにこにこ笑つてゐる顔は今でもはつきりと覺えてゐる——中にはどんな繪があつたか、もうすつかり忘れてしまつた。

僕はその本の匂を嗅いだ。生れてから今まで一度も嗅いだ事のない匂だと思つた。僕はこの時からこの匂が好きになつた——西洋の本の匂を始めて嗅がせてくれたのは吉野のをばさんだと、それは今でもさう思つてゐる。

餘興が始まつた。

春の野原のやうなところに、綺麗な女の子が大勢手を鎖いで歌を唱つて遊んでゐる。その綺麗な女の子の中に、たつた一人みなりの汚い女の子がゐる。なんでもどうかしてその著物の汚い女の子が野原の眞中にたつた一人殘されてしまふのだ。すると遠くの森で——舞臺の後で——「ララ。」と呼ぶ聲がする。又違つた方角で「ララ。」と聲がする。又何處かで、「ララ。」と呼ぶ聲がする。その「ララ。」「ララ。」と呼ぶ聲が悲しく尾を引いて、何となく胸の底に泌み渡る。僕は寂しい處へ引き入れられるやうな氣がした。寂しい野原の夕暮の朧の中へ自分の體が消えてしまふやうな感じがした——をばさんはもう僕の側にゐなかつた。

ララといふのは、取り殘された女の子の名らしい。その後の筋はどうであつたか、もう少しも覺えてゐない。

この會に僕がおとなしくしてゐたといふので、その後をばさんは僕を、かういふ會のある度に、紅葉館だの鹿鳴館だのへ連れて行つてくれた。

追憶の五。

僕の家に假裝會があつた事がある。

吉野のをばさんは二三人の夫人連と一緒に、髪の毛の先を剪つて、大髻に結つて、草鞋を穿いて、手古舞姿で庭から乘り込んだ——何處で覺えたのか、どうとかかうとかして「……藤の花」などといふ木遣を節廻し上手に歌ひながら。

その時分僕の家に食客をしてゐた非職看護卒の顔中髯だらけな叔父さんは、赤毛布を頭からすつぽり被つて、達磨になつて出迎をした。

手古舞姿の連中が緣側へずらりと腰をかけて、御馳走を喰べたり、笑つたりしてゐる内に、僕の家では僕の家の方の越向がすつかり出來上がつてしまつた。

手古舞姿の連中が吉野のをばさんの家へ引き上げるのを、僕の家では一同で態と送つて行つた——僕も澁々連れて行かれた。

十五六臺の人力車が勢よく吉野のをばさんの家の門に著いた。

手古舞姿の連中が草鞋の儘づかづかお座敷へ通つて、一休みしてゐる内に、僕の家の連中は早速の假裝をし濟まして、勢猛にお座敷へ押し寄せ、手古舞の連中を驚かした。

中にも僕のもう一人の叔父さん——これは軍醫、當時三等軍醫——は、カイゼル髭のある顔へ白粉をつけて、女の著物

を著て、その上へ又簑を著て、菅笠を冠つて、緋縮緬の扱帶を碁盤の足へ結ひつけて、品をしながら引き出した。碁盤の上には將棋が五つ六つ乘つてゐた。

何が始まるのだらうと、一同は暫く鳴を靜めて見てゐた。

叔父さんは芝居でするやうな女の聲色を使つた。「紅葉のあるのに雪が降る、さぞ寒う――」と切つて、「ごばんしやうぎ」と言ひながら、碁盤と將棋を指さした――大喝采。

僕はその晩始めて吉野のをばさんのとこへ泊つた。をばさんは疲れた體を横たへて僕と一緒に寢た。

追憶の六。

吉野のをばさんは遊び好きも遊び好きだが、贅澤も隨分贅澤だ、といふ話を聞いた事がある。

嘗て箱根の湯本に逗留してる間に、二日に一度宛東京から氣に入りの髮結を汽車で呼び寄せて頭を結はした事がある。

寫眞の話は「追憶の二」にも書いた。吉野のをばさんが寫眞を撮しに行つて、決して一枚で歸つて來た事はない。必ず横向とか後向とか、色々な位置で幾枚もとらせる……

をばさんは僕の家へ繁々來るやうになつてから、耶蘇教の方の會へは餘り出なくなつたらしい。併し日曜だけは義務的に會堂へ行つたものと見えて「神のことば」の書いてある小さな綺麗なカアドを時々僕に持つて來てくれた。

洋服も餘り著なくなつたらしい。初の内は芝居だけはつきあはなかつたものが、それも終にはあつちから誘ひに來るやうになつたらしい。

僕の母の方の連中はみんな芝居好きだつた。歌舞伎座新富座へは替り目毎に團十郎菊五郎の芝居を見に出かけた。中にも好きな二三人は、姿を俏して緞帳芝居の立見にまで出かけた。

吉野のをばさんはかういふ連中の一人でありながら、また眞面目な宗教の方の交際社會にも一と言つて二と下らぬ地位を得てゐたのだ。

吉野のをばさんは立派な宗教界の貴婦人だ。

吉野のをばさんは藝者のやうな人だ。

この二つの考へは子供の僕の頭の中にも始終ごつちやになつてゐた。

追憶の七。

とある春の日曜の晝、僕は吉野のをぢさんに始めて會つた。

をぢさんは代議士たる傍、或大きな新聞の社長をしてゐた。中々忙しい人であるから、うい今までに會つた事はなかつた――同じ家にゐるをばさんでさへ一週間に一度會ふか會はな

い位ださうだ。

その日はをぢさんの書齋に澤山學生が集まつて、珈琲やお菓子の御馳走になりながら、なんだか大きな聲で話をしてゐた――をばさんに連れられて、僕は始めてをぢさんの書齋といふところへはひつた。

をぢさんの書齋は西洋風の書棚が三方の壁を埋めてゐて、窓のあるのは一方だけだ。窓から庭の梅の若葉が見える――書棚には英語の本が一ぱい詰まつてゐた。

をぢさんは鼻の下にだけ髭のある、小兵な、すばしつこさうな人だ。始終にこにこしてるので「惠比須樣」だの「大黑樣」だのといふ綽名がある。をばさんが僕を紹介すると「好い子だ。」と言つて、菓子を挾んでくれ、「そこへお掛け。」と安樂椅子を指してくれた。僕は小さくなつて隅つこの小さな古い椅子へ腰をかけた。

をばさんは僕を書齋へ置くと、直ぐ何處か外へ出て行つた。

學生達は僕などには眼もくれず、しきりに「內閣が……」とか「豫算が……」とかいふ話をしてゐる。

をぢさんは僕がはひつて來てから話題を變へたやうな樣子で、洋行をした時の失敗談、額にして書齋にかけてあるナイアガラの瀧の寫眞に就いて、その實見談などをしてみんなに聞かせた。

學生の一人は早稻田の專門學校へ通つてゐて、新聞記者を將來の目的としてゐる人だつた、名を村瀨といふ。一人は高等商業の生徒で、名を三橋といつた。一人は法科大學の學生で、森といふ人だ。この三人は中にも吉野のをぢさんの眷顧を得て、始終吉野のをぢさんのところへ出入をしてゐるのだ。

村瀨さんは佛蘭西人のやうな髭が自慢だ。年が若いのに頭が禿げてゐる。常に「天下の大勢」を論じてゐて、人生問題などに頭を苦しめた事はない。交際家。樂天家。

三橋さんは髭のない柔和な顏、別に大きな野心も抱いてゐない。算盤上手の番頭氣質。

森さんは三人の内で一番好男子。學問は出來るのださうだが、氣が小さいので口頭試驗にいつも失敗する。僕が會つた時は、二年級だつたが、一年級に二年ゐて、二年級を一度遣り損つたその二度目の二年級だつた。どういふ訣か「あやめ」といふ女のやうな號を自分につけてゐる。そして小さな人形に菖蒲の花の模樣のある著物を著せて、硝子の箱に入れて、自分の机の上に始終載せてゐた。

をばさんが外を遊んで歩いてゐる時、をぢさんはいつもかういふ學生達を話相手にしてゐた。

併し、をばさんは學生達を可愛がつた。學生達も亦をばさんを慕つてゐた。

この日僕は學生の一人から、をぢさんとをばさんとは子供の時からの許嫁で、同じ家に同じ乳を飲んで育つたものだと

いふ事を聞いた。

追憶の八。

僕は繁々吉野のをばさんのところへ泊りに行つた。自分から泊りに行つたのではない。をばさんに連れて行かれるのだ。

をばさんは僕の家へ遊びに來て、夜になると、きつと「今夜も借りてきますよ。」と母に斷つて、僕の手を引いて歸る。僕もをばさんが好きだから、默つて附いて行く。

一體僕は子供の時からよそへ泊るのが大好きだつた。「僕にはお父さんがないのだ。」といふ事を自覺してから、なんだか男つ氣のない自分の家が家のやうな氣がしない。何處へ行つても可愛がつてさへくれれば、そこが自分の家のやうな氣がするのだ。だから氣に向いたところなら、何處へでも泊る。何處へ泊つてもよく睡る。それは今でもさうだ。

僕は吉野のをばさんのところへ毎晩のやうに泊りに行つた。けれども、ついぞをぢさんに會つた事がない。をぢさんは忙しくて僕が寢る時分には、いつでもまだ歸つて來ないのだ。僕が朝歸る時分にはきつとをぢさんはまだ寢てるのだ。

僕は吉野のをばさんのところへ泊りに行くと、九時にはきつと一人で先へ寢てしまふ。をばさんはをぢさんの歸るまで田丸と二人きりで起きてゐて、をぢさんが歸ると、をぢさんを寢かして、そして自分は僕の側へ來て寢る——をぢさんの寢る所と僕達の寢る所とは大變離れてゐた。

をばさんは子がない。そして子のないのを始終嘆いてゐた。或時人に勸められて、多摩川の方から八つばかりになる女の子を養女に貰つた。田舍風の女の子ではあつたが、眼の大きな、可愛い子だつた。僕は直ぐ仲好しになつた。

をばさんは自分に子がないから、それで僕を可愛がるのだと今まで僕は思つてゐた。ところが多摩川から女の兒が來てからも、やつぱり僕を連れて來ては泊らせる。そして女の子とは一緒に寢ないで、やつぱり僕と一緒に寢る。

をばさんは僕と女の子と仲を好くするのさへ、餘り好まなかつたらしい。

或夏の夜中に雨がひどく降つて、非常に雷の鳴つた事がある。僕は眼が覺めた。隣の部屋で女の子が恐がつて泣いてゐる。僕が起きて行かうとすると、をばさんはどうしても遣つてくれない……

間もなく女の子は里へ歸された。

追憶の九。

これも夏の晩である。

ふと夜中に僕は眼が覺めた。見ると、僕の眼の直ぐ前に、

をばさんの白い足が寢卷を外れてゐる。をかしいなと思つて眼を擦つて、よく見ると、僕は倒に寢てゐたのだ。

そこで、まつすぐに寢直した。

をばさんは口の所へ白い手を當てて、微に鼾を立てて、よく寢てゐた。

追憶の十。

これも夏の事だ。夏の事ばかり思ひ出すところを見ると、一番しげしげ泊りに行つたのは夏らしい。

何だか恐い夢を見て眼が覺めると、側に寢てゐた筈のをばさんがゐない。はてなと思つてゐると、暗い遠くの部屋で誰と誰とだか物爭ひをしてゐるやうな聲が聞える……

やがて臺所の方から、燈もつけずに、暗い廊下をばたばた歩いて來る人がある。やがて、僕の寢てゐる蚊帳の外に、女が手桶を重たさうに提げて行く影が黑く見える。廊下を踏む足の音と廊下にこぼれる水の音とが暗闇に響いて凄い——女の影は右の方へ消えた。

どうも今のはをばさんらしい。をばさんに違ひない。一體どうしたんだらうと思ひながら、ついうとうとと眠つてしまつた。

朝起きると、をばさんは僕の側でよく寢てゐる。僕は一旦家へ歸つて、それから學校へ行くのを常としてゐたから、そつと一人で起きて、廣い臺所で顏を洗ひながら、それとなくゆうべの不思議を女中に訊いて見た。

女中の言ふところに依ると、をぢさんはゆうべ餘程おそく歸つて來たらしい。おそく歸つて來て、寢間へはひると、間もなくをばさんと喧嘩を始めた。をばさんは肝癪を起して、床の間の花瓶を柱に叩きつけた。そのかけらがをぢさんの眉間にぶつかつて、血が出た。をばさんもこれには驚いて、自分で臺所まで來て、自分で水を汲んで行つて、自分でをぢさんの傷を冷したのださうだ。

どうして喧嘩をしたのか、それは分からなかつた。家へ歸つて母に話したら「困つたねえ。」と言つたきりで、何が困つたのか僕には分からなかつた。

それから後といふものは、吉野のをばさんも餘り僕を連れに來なくなつたし、母も僕に泊りに行けといふ事を餘り言はなくなつた。

その時分から早稻田の村瀨さんだの、商業の三橋さんだの法科大學の森さんだのが僕の家へみんな遊びに來るやうになつた。夫人連の會の外に、時々かういふ學生連を御馳走する會が出來た。その中の一つで、僕が今でも覺えてゐるのは、幾皿でもお代りお搆ひなしといふライスカレエ會。

吉野のをばさんのとこへは、なぜかみんな遊びに行かなくなつた。

けれども、僕はをばさんが好きなのだ。時々みんなの眼を竊んでは遊びに行く。けれども、遊びに行つて見ると、なぜか前のやうに面白くない。

女中や何かが餘り搆ひつけてくれぬ。をばさんも何か內證で僕を接待してゐるやうだ——をぢさんは始終家にゐる。

追憶の十一。

これは秋の事だと覺えてゐる——なんでも單衣が薄ら寒くなつた頃の事だ。

僕の母のところへ一通の封書が屆いた。僕は母のところへ郵便をよこす人は大抵知つてゐる。ところが、この封書は「川路きみ」といふ聞き馴れぬ女の人から來たのだ。

そこで僕は母に訊いて見た。母は「お前の知らない人だよ。」と言つて敎へてくれぬ。

その時分、吉野のをばさんはどうしたのか、ぱつたり僕の家へ來なくなつてしまつた。

僕はをばさんに會ひに行きたいと始終さう思つてゐたけれども、「今行つてはいけませんよ。」と母が嚴しく言ふので……

追憶の十二。

「川路きみ」といふ女の人からの手紙は、その後しげしげ母のところへ來た。

僕はその手紙を見つける度に、母にせがんで、その誰であるかを訊いた。

「よう、誰ですつたら、よう。よう、お母さん。」

「煩さいねえ。子供の聞く事ぢやありません。」

度々こんな事を繰り返した揚句、

「煩さいねえ、吉野のをばさんだよ。」

と、母は終に實を告げてしまつた。

「川路きみ」といふのは、僕の好きな吉野のをばさんだ。をばさんが「きみ」といふ名だつた事は始めて知つたが、なぜ苗字を「吉野」といはないで「川路」といふのだらう。

僕は又母にせがんでその訣を訊いた。

母は「子供の聞く事ぢやありません。」の一點張で、容易にその實を明かさなかつたが、餘り僕が煩さく訊くので終に、「御離緣になつたのだよ。」

と、怒つた聲で言つた。

併し「御離緣」といふ事は、當時の僕にはまだはつきり分からなかつた。兎に角「追ひ出された事」だとは思つたら追ひ出される」といふ事は子供にもあるし、子供が恐い事の一つでもある——僕は僕の好きな吉野のをばさんが「追ひ出さ

れた」と聞いて悲しくなつた。自分の母でも奪はれたやうに心細くて心細くて、二三日は好きな本も手につかなかつた。

追憶の十三。

僕は吉野のをばさんがなぜ「御離緣」になつたのかと、研究し始めた。

どうしても分からない。

をばさんは僕を可愛がつてくれた。爲になる事を澤山敎へてくれた。あんな好い人はないと思つてゐる。なぜあんな好いをばさんを、をぢさんは追ひ出したんだらう。

多摩川から來た女の子を可愛がらなかつたからかしら。をぢさんに怪我をさせたからかしら。併し「それつぱつちな事」で追ひ出すのはひどい。

また母に煩さく訊いた。

母は、

「あんまり贅澤をしたからです。」

と言つた。成程、贅澤は隨分贅澤だつた。月々大層なお金が入るといふ事は、前から度々耳にしてゐた。成程、贅澤な爲に追ひ出されたのかも知れない。

併し「贅澤」では母もお仲間であつた事を思ふと、母が自分でさう言ふのはをかしい。

きつとまだ他に訣がある。

追憶の十四。

早稻田の村瀨さんに聞いて漸く分かつた。

面皰だらけの書生の田丸と吉野のをばさんは悪い事をしたのだ。「悪い事」といふのも、當時の僕にははつきり分からなかつたが、夫のある女が他の男と仲よくする事だといふだけはぼんやり分かつてゐた。

田丸も同時に吉野さんから追ひ出されたのださうだ。

吉野さんにも書生は澤山出入りしたが、田丸は居つきの書生でゐながら、最も人の眼につかぬ、つまらない男だつた。僕もこれまでは然程注意しなかつた。

この事を聞いてから、俄にその態度容貌擧動などを想ひ起して見たが、どうも利口な吉野のをばさんの氣を惹く程の男とはどうしても思へない。

嘘だ。嘘に違ひない。と僕は幾度もさう思つた。

併し、村瀨さんは現に敎會裁判にまで臨んだといふ話をした。敎會裁判といふのは、どういふ事をするのかよく知らぬが、村瀨さんの話によると、吉野さんの家族が行きつけの會堂で、特に或日信者の古顏を牧師が集め、吉野のをばさんと田丸とを說敎壇の上に列んで立たせて、この二人は悪い事を

したのだから、今日限り破門をすると言つたさうだ。をばさんと田丸とは、默つて、青い顏をして、壇を降りて、二人別々に會堂の裏口から外へ出たさうだ。

さうして見ると、本當かしら。

それにしても會堂といふところは、酷い事をするところだと、僕は口惜しく思つた。

追憶の十五。

吉野さんの家を出たをばさんと田丸とは、會堂で別れたきり、もう永久に會はなかつたらしい――だから、僕はいまだに村瀨さんの言つた事が本當だとは思へぬ。

をばさん……川路のをばさんは、吉野さんを出て、暫く京橋の方の下宿にゐたらしい。その後、淺草の或金持の家庭教師になつた。

家庭教師をしてゐる時分、一度僕の家を訪ねてくれた事がある――これが僕のをばさんに會つた最後だと思ふ。

をばさんは粗末な風をして來た。顏も何處か物寂しくなつたやうだ。をばさんが僕の家でまづいお物菜をみんなと一緒の食卓で、贅澤も言はずに喰べるのをぢつと見て、僕は思はず涙をこぼした。

をばさんは二三日僕の家に泊つた。著物は大抵母のを借りて著てゐた。

夜になると、僕が學校で習つて來た英語をさらつてくれた――英語を習ふやうになつたのだから、僕は十一か十二になつたのだ。

をばさんは自分の教へてゐる淺草の家の二人の子の出來なくて困るのをこぼして、そして僕は大層出來ると褒めてくれた――僕は嬉しかつた。

僕はその時をばさんから Soldier といふ英語を始めて教はつた。

英語の復習が終へると、僕はをばさんと一緒に僕の部屋に寢た。

追憶の十六。

暫く行方を失つてゐた田丸から、僕の家へ宛てて栃木の方から田舍新聞を一枚送つて來た。

明けて見ると、田丸が續き物の小說を書いてゐる。題を「慘又慘」と言つた。どういふ事が書いてあつたか、もう覺えてをらぬ。

追憶の十七。

吉野の……川路のをばさんは、その後或私立法律學校を出た人のとこへ嫁いだ。この人は學校を出てから毎年高等文官試驗を受けて、もう五度も落第してるのださうだ。「まことに意氣地のない人で困ります。」とは、をばさんから母へ宛てて來た手紙にも書いてあつたさうだ。

それでも、をばさんは、自分の著物や何かを賣つて、試驗料をこしらへては、試驗のある度に夫を勸めて受けさせた。

けれども、餘程出來ない人と見えて、どうしても及第が出來ない。

たうとうをばさんも失望して、この力のない夫を連れて、越後の高田へ落ちたといふ事を聞いた。

高田へ行くと、をばさんは「琴曲指南」の看板をかけたさうだ――をばさんは山田流の奧許しを取つてゐる。

をばさんは第二の夫の力を借りて、も一度世の中に出たかつたのだ(?)。それだから一所懸命になつて、あの懶惰な夫の尻押もしたのだ。ああ併し、それも今は空頼みに終つてしまつた。

僕は今でも、冬になつて雪の降る度に思ひ出す。ああ、あの寒い國で、凍る三本の指に琴爪をはめて、吉野の……否、川路の……否、今は苗字も分からぬをばさんは、あの愚圖な、爲すところのない夫を養つてゐるのであらう……、

追憶の十八。

吉野のをぢさんは、その後また美しい奧さんを貰つて――間もなく可愛い子が出來た。

併し、往來などで逢つて、僕がぴたりと立ち止つて、行儀よくお辭儀をしても、をぢさんはもう知らない人のやうに見向いてもくれない。

村瀨さんも三橋さんも學校を卒業した。村瀨さんは望み通り新聞記者になつた。三橋さんは香港の或商會へ雇はれて行つた。森さんだけはどうしても口頭試驗が惡いので、たうとう學校を退學して、遞信省の外國爲替課へはひつた。

やがて日清戰爭が始まつた。初花をやつた僕の叔父さんも佐倉の二聯隊に附いて金州半島へ向つた――達摩をやつた叔父さんも、職に復して東京衞戍病院へ出るやうになつた。母の連中は赤十字社の恤兵部の運動で忙しかつた。

千載一遇の邦家の大事に、眇たる「僕の好きなをばさん」はたうとうみんなに忘られてしまつた。

母の連中も、をばさんをあの儘にして置くのは、隨分酷いぢやないかと僕は屢さう思つた。

僕は今でもをばさんを忘れない。どんなに年をとつた、どんなに窶れたをばさんに、どんな不思議なところで逢はうとも僕はきつと今のをばさんの眼の內に、昔のをばさんを見つけずには置かぬ。

をばさんの消息は、もう十三年からない。

追憶の十九。

これは追憶と言つても、つい二三年前の事だ。

僕の家――その後牛込の矢來へ越した――僕の家へ、むかし母や吉野のをばさんが贔負にした髪結が訪ねて來た。

吉野のをばさんのありかを聞きに來たのだ。ありかさへ分かれば、以前の御恩返しに出來るだけのお世話がして上げたいと言ふのだ。

感心な髪結だ。

併し、悲しいかな、をばさんのありかは分からぬ。

髪結はもうすつかり白毛になつてゐた。僕の顔なども、もうすつかり忘れてゐた。

乞食

僕は時々乞食に錢をやる。併しそれは、決して可哀さうだとか氣の毒だとか思ふからではない。

僕には妙な理窟がある。

僕は乞食を一つの商賣だと思つてゐる。僕等と同じ商賣をしてゐるものだと思つてゐる――ただ種類が違ふだけの話だ。

冬は凍つた地面に坐つて、夏は燒埃の中に膝を突いて、額に土をつけて、手の平を泥だらけにして、出來るだけ短い時間の間に出來るだけ澤山のお辭儀をして、さも悲しさうな作り聲をして「ああ可哀さうに」といふ感じを人に與へよう與へようと勉めてゐるところは、一種の努力だ。

僕が乞食に錢をやるのは、この努力を買ふのだ。

かういふ努力を買はうと買ふまいと、それは各自の勝手だ。僕は面白いと思ふから買ふのだ。面白くないと思ふ人は別に買ふ必要はない――玉乘を見に這入らうと這入るまいと、それが道德上の問題にはならぬ。

乞食は一種の不生産的な商賣だ。不生産的な商賣の中でも、最も不生産的な商賣だ。その最も不生産的なところが、僕の氣に入つてゐるのだ。

また別にかういふ理由がある――

僕は時々「寂しい病」といふ妙な病氣に取りつかれる。これに罹ると、もうゐても立つてもゐられなくなる。これも亦僕の妙な癖で、さういふ時には知つてる人と口を利くのが厭で堪らなくなる。だから、直ぐ家を飛出してしまふ。そして見も知らぬ往來の人の誰とでも話がして見たくなる。併し、如何なる場合でも僕にはきつと常識が纏つてゐて、狂じみた眞似をすることはどうしても出來ぬ。そこで、要りもせぬ酸漿を買つて、酸漿屋の婆さんと話をしたり、買ひたくもない人形燒を買つて、人形燒屋の爺さんと話をする。

別に大した話をするのではない。景氣が好いとか惡いとか儲かるとか儲からないとか、雨が續いて困つたとか、惡い病氣がはやりさうだとかいふ極平凡な話をするのだ――それで滿足出來るのだ。

さういふ意味からも、僕は時々乞食に錢をやつて、乞食の

側にしやがんで、乞食と話をする。

この間の晩、淺草の公園の池の緣を通ると、女乞食が借物の子供を三人連れて出てゐた。そこへ筒袖の浴衣を著た職人體の若い男が一人來かかつた。若い男は暗闇に乞食が坐つてゐるのを見ると、突とその前にしやがんだ。そして懷中から今川燒の這入つた新聞紙の袋を出した。

「おれ一つ貰つて行くぜ。」

と言つて、男は袋の中から今川燒を一つ出して、それを頬ばつた。そして殘りの今川燒を袋ごと女乞食の膝の上へ置くと、直ぐ立上がつて、何處かへ行つてしまつた。

勿論、乞食に賴まれて今川燒を買つて來たわけではない。今川燒を買つてから、ひよつこり乞食に逢つたのだ。乞食に逢つてから、今川燒をやる氣になつたのだ。それを「おれ一つ貰つて行くぜ」と如何にも乞食の方に權利があるやうに言つたのは面白い。

あの職人は吾黨の士だ。あの今川燒も、僕式に、食ひたくもないのに買つたものかも知れぬ。

併し、これは餘談だ。僕は今、近頃出來た僕の乞食友達に就いて話をしようとしてゐるのだ。

三四ケ月前の或晩だつた。ちやうど櫻の散る時分だつた。「季節の代る悲み」といふやうな感じの、しみじみと身に迫る時分だつた。

僕は例の「寂しい病」に取りつかれて、家を飛出した。

元柳町から吉川町、矢の倉河岸から濱町河岸と、さんざ方々歩き廻つた揚句、偶と明治座の前へ出た。

明治座には大坂の役者が掛つてゐた。狂言は何だつたか忘れたが、何でももう二番目の終ひ方で、幕見の入口には「この幕十錢」といふ木の札が出てゐた。

幕見へ這入つて、見物の誰かと話をしようかと思つたが、芝居が邪魔になるからだめだと思つて止めにした——尤も、懷中も怪しかつた。

それから、明治座の前の橋を浪花町の方へ渡つた。

橋の袂の薄暗い蔭に、子供の乞食が三人出てゐて、例の悲しさうな作り聲をしながら頬に憫みを乞うてゐた。

僕は一錢銅貨を二つ投げてやつて、さつさと人形町の方へ向つて行つた。子供では相手にならぬと思つたからだ。

人形町へ出て見たが、夜店は大抵もう終ひかけてゐた。赤黑いカンテラの搖めく火の蔭で、腰を屈めた黑い人影が、何かに追はれるやうに默々として荷を拵へてゐる景色は、何となく不安だ、何となく寂しい。

僕は堪らなくなつて又明治座の方へ引返した。

子供の乞食はまだ橋の袂に坐つてゐた。明治座はいつ終つたのか、小屋も茶屋も、もうすつかり暗くなつてゐた。

見ると、三人の小乞食は、何か小聲で呟きながら、埃の中を搔き廻して、頻に何か探してゐた。

「何を探してるんだ。」

僕は偶と子供の乞食を相手にして、話を始める氣になつたんだ。

「一錢なくしちやつたんだよ。」

三人の內誰かが斯う答へた。

「おれのやつた奴か。」

僕がかう言ふと、三人の中の眞中にゐた男の子が首をあげて、凝と僕の顏を見た。可愛い顏をした利口さうな奴だ。

「ああ、さうだよ。」

と言つて、また三人で探し始める。

「探したつてあるものか。もう一錢やるから、もう探すなあ廢せ廢せ。」

「うん。」

僕は一錢銅貨を一つ出してやつて、そして三人の前にしやがんだ。夜が大分更けたと見えて、もう人通りは餘り無い。

男の子の左右にゐるのは、いづれも女の子だ。一人は丸々と肥つてゐる。一人は小さく瘦せてゐる。併し、どつちも卑しい顏はしてをらぬ。無邪氣なおつとりした顏だ。男の子はなりが一番小さい。

「毎晩幾時頃までここにゐるんだ。」

「貰へるまでさ……二時までだつて、三時までだつてゐるよ。」

と、男の子が答へる。

大抵毎晩幾ら位貰へる。」

「二錢五厘のことも、二貫のこともあるよ……一文なしのこともあるよ。」

と、丸く肥つた女の子が優しい聲で答へる。

「晝間は何をしてゐる。」

「內で遊んでるんだ。」

また男の子が答へる。

「お父あんやお母さんも貰ひに出るのか。」

「ああ出るよ。」

「別に出るのか。」

「ああ……今夜は淸正公樣にゐるよ。」

「御前達、家は一體どこなんだ。」

「花町だよ。」

と、今度は丸い女の子が答へる。

「花町つて、本所のか。」

「ああ。」

「みんな同じ家にゐるのか。」

「ううん、みんな違ふよ。」

「家を借りてるのか。」

「木賃だよ。」
「さうか、木賃か。」
「あたいんとこは二疊に蒲團が三枚で十三錢だよ。」
と、男の子が口を出した。
「あたいんとこは二疊に蒲團が三枚で十五錢だ。」
「あたいんとこは二疊に蒲團が三枚で十三錢。」
と、痩せた女の子が始めて口を利く。
「毎晩三人で出るのか。」
「まだあすこにゐるよ。」
と、男の子は左手の角の電信柱の下を指す。
「ほら、あすこに荷物見たいになつて、寢てる子があるだらう。あの子が一番大きいんだよ。」
見ると、電信柱の下に、人か荷物か分からぬやうになつて寢てゐる子があつた。乞食の子はなかなか巧い形容をする。
「毎晩柳橋に出てる、あれはお前達の家と違ふか。」
「ああ、あのかつたい坊の女かい。」
と、肥つた女の子が訊く。
「うん。」
「あのかつたい坊、同じ家だよ。」
「さうすると、お前達の宿は、大抵みんな乞食ばかりなんだね。」
「ああ大抵さうだよ。」

「一遍遊びに行かうか。」
「お出でよ、をぢさん。」
と、男の子が言ふ。
「おまはりさんにとつ捕まるやうなことはないか。」
「あるとも……兩國の眼鏡が一番恐いんだよ。」
と、又男の子が答へる。三人の内ではこいつが一番その方の經驗に富んでゐるらしい。
「眼鏡つて、眼鏡をかけたおまはりさんか。」
「ああ、いつでもね、黑い眼鏡をかけてるよ……恐いんだよ……分署へ連れてつてね、劍でぶつたり、頰ぺたを手でぶつたりするんだよ……いつかなんか、マツチで頭へ火を點けられた。」
「ひどい事をするもんだ。」
「毛がじりじりつていつて熱かつたよ……それから一晩止められて返されたんだよ……家へ歸つたら又お父さんにぶたれちやつた。」
「この子はよくぶたれるんだよ。」
と、肥つた女の子が口を出す。
「たまには好いおまはりさんがあるかい。」
「あるとも……好いおまはりさんは、「あつちへ行け行け」つて、逃がして呉れるよ。もつと好いおまはりさんは「貰つてろ貰つてろ」つて言ふよ。」

「一體お前達は幾ら貰へば、家へ歸れるんだ。」
「二貫貰へば歸れるんだ。」
やはり男の子が答へる。
「今夜はもう二貫になつたらう。」
「まだ中々だねえ。」
と、三人顏を見合す。
「ぢやあ二貫にさへなりやあ、どんなに早くつても歸れるんだね。」
「ああ。」
と、三人一緒に答へる。
「お前は今夜幾ら貰つた。」
僕は先づ丸く肥つた女の子に訊いた。
「あたいは十錢。」
「お前は。」
今度は男の子に訊いた。
「あたいは十六錢。」
「お前は。」
今度は痩せた女の子に訊いた。
「あたいは十四錢。」
「それではお前に十錢と、」と丸い女の子を指し、「お前に四錢と、」と男の子を指し、「お前に六錢と、」と小さな女の子を指して「それだけやれば、みんな家へ歸れるんだね。」

と、僕が言ふと、
「ああ。」
と又一齊に答へる。
「ぢやあ、それだけやるから、早く歸れ。」
「ああ。」
と嬉しさうに、又三人が答へる。
僕は蝦蟇口から、みんなの言ふ通りに出してやつた。三人は少しも爭はずに、各自分の要求するだけを取つた。
「ぢや、もう、歸れ、歸れ。」
「ああ。」
三人は立上がつた。
「兩國の方から歸るのか。」
「うん。」
「ぢやあ途中までおれが一緒に歸つてやらう。」
「をぢさん、何處まで歸るんだい。」
「兩國の方だ。」
「ぢやあ一緒に行かう。」
「あすこに寢てるのは起さなくつて好いのか。」
「寢てるから好いよ。」
と言ひざま、男の子は早くも橋を明治座の方へ駈けて行く。
「おい、おい、待てよ、待てよ、一緒に行つてやるから。」
僕はもうこの子供の乞食達と別れるのが厭になつたのだ。

「今、小便するんだよ。」
と、大きな聲で叫りながら、男の子は河岸の共同便所へ駈込んだ。
「あたいもして來ようや。」
と言ひながら、肥つた丸い女の子が、また共同便所へちよこちよこと這入つた。
痩せた小さな女の子は一人僕の側に立つてゐた。二人は中々便所から出て來ない。
「どうした。ばかに長いぢやないか。」
と獨語のやうに僕が言ふと、痩せた女の子は便所の方を向いて、
「保、保、早くしないか。」
と大きな聲で叫つた。
「今行くつてば。」
と言ひながら、直ぐ二人は一緒に出て來た。
僕は三人の乞食の子と一列にならんで、明治座の横手へ這入つた。
「今、保とか何とかいつたね。お前の名か。大層立派な名ぢやないか。」
と、僕は男の子の方を向いて言つた。
「ああ、あたいの名だよ。あたいの名はね、ほんとはね、吉高保つてんだよ。」

「お父さんは何て言ふんだ。」
「お父さんはね。吉高……ええと……吉高親父つてんだ。」
「親父なんて名があるか、ばか。」
と、僕が言ふと、
「ヤハハイ、ヤハハイ。」
と保をからかひながら女の子二人が賑に笑ふ。
「お前のお父さんはやつぱり貰つてるのか。」
「ううん、もう死んぢやつたんだ。」
保は首を振る。
「死んだのか。」
「ああ……大阪の汽車會社へ出てゐたんだよ……汽車に轢かれて死んぢやつたんだ。」
「ふうん。ぢや、お前は大阪で生れたのか。」
「ああ。」
「あたいは京都で生れたんだ。」
と丸い女の子が言ふ。
「あたいは東京で生れたんだ。」
と痩せた女の子が言ふ。
「保は幾つだ。」
「九つよ。」
「お前は。」
と、京都で生れたといふ女の子に訊くと、

「あたいは十。」
「お前は。」
と、東京で生れたといふ子に訊くと、
「あたいも十。」
「十が隨分多いよ。」
と保が言ふ——彼等の仲間には九つから十位のが多いさうだ。
「お前の名は何て言ふんだ。」
と、僕は痩せた女の子に訊いた。
「おきみちやんてんだよ。」
と、保が横から口を出した。
「さうか。」
「ああ。」
と、お君ちやんは素直に頷く。
「お前は。」
と肥つた女の子に訊くと、保が又口を出して、
「おてちやんていふんだよ。」
「何。おてちやん。」
「おていちやんて言ふんだよ。」
と、小さい女の子が直す。
「ああ、おていちやんか。」
お貞ちやんは頷く。

「だつて、みんな、おてちやん、おてちやんて言ふんだよ。」
二人の女の子は、又聲を上げて、賑に笑つた。
三人はもう餘つ程僕に馴れて來た。病院と何かの家との間の横町を這入つて、つたやの方へ行く時分には、三人が先を爭つて僕に話をしかけるやうになつた——この横町は何だか曖昧な家の多い横町だ。
向うから藝者が二人に客が二人、何か大聲で叫りながらやつて來た。擦れ交ひざまに、彼等は——殊に女達は——凝と僕の顔を見た。それから乞食の子三人の顔を凝と見た。そして僕と乞食の子達を見比べたが、不思議な顔をして、何も言はずに行つてしまつた。
「あのねえ、をぢさん。」と、お貞ちやんが僕の顔を見上げて言ふ。「保さんは今繼親なんだよ。」
「本當のお母さんは足を怪我して、今養育院にゐるんだよ。」
と、お君ちやんが言ふ。
「お母さんが歸つて來ると、保さん隨分お小遣つかふよ。」
と、おてちやんが言ふ。
「今は繼親だから、隨分ぶたれるよ。」
と、お君ちやんが言ふ。
「みんな繼親か。」
「ううん、おてちやんは本當の親だよ……だから、毎晩出ないでも好いんだよ。」

と、保が答へる。
「お前達は小遣を貰ふのか。」
「ああ、日に二錢貰ふよ。」
と、又保が答へる。
「それは豪氣だ。」
「五厘宛四度貰ふんだ……それから夕方出がけに一錢くれるよ。」
「飯は内で食つて來るのか。」
「ああ。」
「買食ひをするやうなことはないか。」
「買食ひすると叱られるよ。」
「二十錢より餘計に貰つた時は、餘計に貰つただけ買食ひしたつて分かりやしまい。」
「だめだよ……内へ歸るとね、直ぐ口の端を見るんだよ……何か附いてると、また何か買食ひしたなつて叱られるんだ……この間も大橋でしる粉を喰べて歸つたら、餡粉がここんとこに附いてたもんだから、ぶたれちやつた。」
と言つて、保は口の端を抑へた。
「なぜ乞食なんかしてるんだ。辻占でも賣つた方が好いぢやないか。辻占より乞食の方が儲かるか。」
「そりやあ辻占の方が儲からあ。」
と、保は言下に答へる。

「あたいは今に大きくなつたら煙草の工場へ行くんだ。」
と、お貞ちやんは少し得意さうな口調で言ふ。
「あたいは烟草の工場なんかへは行かないんだ。」
と、これも稍得意な調子で、お君ちやんが言ふ。
「ぢや、何處へ行くの。」
と、お貞ちやんが反問すると、
「何處でも好いの。」
と、少し曖昧だ。保は嘲る如く、
「ヤハアイ、何言つてやがるんでえ。」
と、大きな聲を出す。
小常磐の臺所では、繩の暖簾の中で、男と女が二三人ごしごしと、何か洗ひ物をしてゐた。もう火を落したらしい。表はひたと締まつてゐた。
そこを左へ曲つて、東友軒といふ球突の前まで來ると、
「おうい、おうい。」
と、後から追つかけて來る子供がある。
僕等は構はず電車道へ出ると、その子供はやがて追ひついた。
「やい、よくも手前等おれの邪魔あしやがつたな。腹が立つて、腹が立つてなりやあしねえ。」
と、嗄れた聲で、憎ていな口を利くから、振向いて見ると、髪をめちやめちやに毀した、口の大きい、色の黑い、卑しい

顔をした女の子だ。ひどい襤褸を著て、四角な空罐に眞田紐の古いのを附けて鞄のやうにしたのを肩から懸けてゐる。三人から見ると餘程なりが大きい。三人は、この一人の聲を聞くと、怯えるやうに突立つてしまつた。
時々――ほんの時々――歸りを急ぐ終ひ方の電車が通る。
「をばさんにいつけずにやあ置かねえぞ。ほんとに、ほんとに、腹が立つて爲やうがありやしねえ。」
「だつてお前寢てたから悪いぢやねえか。」
保は小さくても、流石は男だ。ふんといつた調子で、かう言つた。こいつきつと「荷物見たいに」寢てゐた奴に違ひない。お貞ちやんとお君ちやんとはもう口も利けないで、慄へてゐる。この散ばら髪を餘程ふだんから恐れてゐるものと見える。
「まあ、さう怒るなよ。お前寢てたから悪いんぢやないか。」
と言ひながら、僕は蝦蟇口を出した。散ばら髪の女の子は凝と僕の手元を見詰めた。
蝦蟇口の中には、もう一錢銅貨が一つしか無かつた。僕はそれをその女の子の手に載せてやつて、
「今夜はそれで我慢しろよ。もう遣りたくも空つぽだ。」
と言つて、蝦蟇口の口をあけて見せた。
散ばら髪は、覗き込むやうにして、蝦蟇口の中を凝と見た。
「さあ、それで好し好し。さあ、みんな一緒に仲よく歸るんだ。」
と言ひながら、僕が花やしきの方へ眞直に行かうとすると、その散ばら髪が、
「そつちは分署があるからだめですよ。」
と言ふ。
「成程さうか。ぢやあ河岸へ出よう。」
「ああ、それが好いや。」
と、保が言ふ。
僕は四人の乞食の子を連れて、濱の家の前から、倶樂部の前を通る。
「お前の名は何ていふんだ。」
と、僕は今來た散ばら髪に訊く。散ばら髪はもう御機嫌が直つた樣子で、にやにや笑ひながら、例の嗄れ聲で、
「あていかい。あてい、お幸ちやんていふんです。」
流石は大きいだけあつて、時々「です」といふ丁寧な語を使ふ。
「幾つだい。」
「十一です。」
「それぢやあ、お君ちやんやお貞ちやんとたつた一つつきやあ違はないんだね。」
「ああ。」
「それにしちやあ大きいなあ。」

電車道へ曲る所の暗闇に巡査が一人外套を著て立つてゐた。四人は小聲で何か囁き合ふかと思ふと、いきなり聲を合せて歌を唄ひ出した——

チリリンリインとやつて來るは、
自轉車乘りの時間借り、
曲乘り上手と生意氣に、
兩手を放して氣障男。
あつち行つちゃ危いよ、
こつち行つちゃひよろひよろ、

そうらあぶないといふ間に、ころがり落つこつた。

勢よく、しかも巧に、このはやり歌を唄つた四人は、どうしても乞食の子とは見えなかつた。殊に暗闇だから著てゐる物はよく分からないし、巡査は全く四人を僕の連と思つてしまつたらしい…知らん顔をして河岸の方を向いてゐた。

僕は、こんな時分から「人をごまかす術」は自然に涌いて來るものかと思つて、それが如何にも可笑しかつた。

無邪氣な歌聲は、一しきり暗い大川の川面に響いた。僕はステツキを振つて好い加減な拍子を取つてやつた。四人は段々浮れ出した。お幸ちゃんの爲に一時萎れてゐたお貞ちゃんもお君ちゃんも、お幸ちゃんの機嫌が直つたんで、又はしやぎ出した。中にも保は、

向島、花ざかり、團子の横食ひ、うで玉子…

といふやうなことを言つて、無暗とそこら中踊り廻る。

三人の女の子も、一緒になつて囃す。

矢の禍の土塀の外へ來ると、アセチリンの青白い光が、五人の影を眞黑に地へ印した。四人の子供の影の眞中に、一人丈の高い大人の影のあるのを見て、僕は孤兒院の監督でもしてゐるやうな氣がして來た。

思へば、今から八年前だ。つまらぬ事から人生を悲觀して、いつそ孤兒院の監督にでもなつてしまはうかと思つたことがあつた。

併し僕にはまだ全く世が捨てられなかつた。この世に一縷の望を繋いで、未練がましく世に生きて來たばかりに、たうとう僕は乞食のお辭儀を金で買ふやうな人間になつてしまつたんだ。

乞食の子供を四人連れて歩いてるところは、外から見ると、如何にも同情のある人だ、如何にも慈善家だ。併し僕自身から言へば、同情を寄せてるのでもなければ、慈善をしてるのでもない——僕は四人の乞食を僅の金で自由にして、今夜の遊び相手にしてゐるに過ぎない。藝者を買ふのも同じだ、淫賣を買ふのも同じだ。

僕は一刻と雖自己を思ひたくない、一分時と雖この不快極まる自己を忘れてゐたい。自己を忘れるには一所懸命に遊ぶか、一所懸命に働くより外はない。だから僕は、晝間は一所

懸命に働らく。用が無ければ、無理に用を拵へても働く。夜になると一所懸命に遊ぶ。金があれば美しい女の顏を見に行く。金がなければ人形燒の爺さんを相手に遊ぶ。今夜のやうに乞食を相手に遊ぶこともある。

兩國公園の前まで來ると、保は一人連を離れて公園の中へ駈込んだ。暫くすると、口の端を濡らしながら出て來た。水道の水を飲んで來たのだ。餘り騒いだので咽喉が渴いたのだらう。兩國橋へ來た。

「ぢやあ、もうここで別れよう。」

「をぢさん、あしたの晩も亦來るかい。」

保が訊く。

「さうさな。あしたの事はあしたの事だ。今から分からない。」

「あしたもお出でよ。」

と、おてちやんが鼻を鳴らして言ふ。

「有難う。ぢやあ、みんな、さよならよ。」

「さよなら。」

「さよなら。」

「さよなら。」

保とお君ちゃんとお貞ちゃんとは、一人一人僕に別を告げた。

「どうもお有難うございます。」

と、戯けるやうに言つたのは、散ばら髪のお幸ちゃんだつた。そして、

「をぢさん、今度もおくれよ。今度は二貫おくれよ。」

と、甘えるやうに附加へた。

「ああやらうな。」

四人は笑ひながら、鐵の橋を本所の方へ渡つて行つた。

この晩を手初めとして、その後時々僕は明治座前を訪問した。二人ゐることもあり、三人ゐることもあり、四人ゐることもあるが、いつでもきつとゐるのは保だ。僕はすつかり保と仲が好くなつてしまつた。

僕は夜の遊び場處が一つ殖えたんで、一時は非常に喜んだものだが、この頃はこれにも少し倦きて來た。

保は錢ばかり欲しがるから厭だ。たまには金錢以外の交際もして貰ひたいぢやないか…

近い内、又何處かで新奇な遊び場處を見つけたいものだ。

不思議

玉天齋は別に不思議な事をするのではない。

中入前に「羅馬の取寄」と稱する誰にでも出來る奇術を一つやれば、それで一晩の職務は濟むのである。

高座の background に黒い幕を一面に張る。その黒い幕の眞ん中に大きな額縁を裏返しにしたやうな眞新しい木の框を吊る。框の中には何もない、後の黒い幕が黒く見えるばかりだ。

それから、木の框の上に石蠟を十四本列べてつける。高座の鼻へ二十三本石蠟を列べてつける。幕を明けて、口上を濟ますと、電氣をみんな消してしまふ。

玉天齋は木の框の中の暗い所から、客の好む品物を何でも出すのである。

併し、それに不思議はない。

玉天齋は總ての客に紙片を配つて、望みの品物を書いて貰ふ。それを高座へ持つて來て、一つ一つ讀む。讀んでしまふと、その紙片を固めて置いて、一掬み掬む。そしてそれを茶壺に臺をつけたやうな黄色い罐へ納つて蓋をする。直ぐ蓋を明けると、その罐から紙片を一つ一つ取り出して客に讀ませる。客の讀むに從つて、品物を一つ一つ出すのである。

出る物はいつも極つてゐるのだ。そして、それだけの物はいつも樂屋に用意してあるのだ。出すに極まつてゐる品物の名は豫め紙片に二通り書いて置く。その一通りは玉天齋が隱して持つてゐて、客の書いた紙片を讀む時に、それを一緒にまぜて讀む。他の一通りは例の罐の二重蓋の内に隱してある。一度蓋をして明けた時は、樂屋で書いた紙片だけが殘るやうに仕掛けてある。

それからはもう樂なものだ。

用意してある品物を、樂屋の芳爺が一つ一つ黒い幕の間から出せば好いのだ。見物は框の上の蠟燭の光と、高座の前の蠟燭の光とに眼を欺されて、品物が宙に浮いて出たやうに思ふ。

出る品物は大抵どこの席でも同じだが、場所の便不便によつて多少の相違は出來て來る。端書、胡瓜、惠比壽ビイル、薪一把、紙屑籠、急須、蒟蒻、粟餅、煎餅、奴豆腐、澤庵な

どはいつも動かぬ所である。外に「浴衣の反物」といふのと「觀音樣の白鳩」といふのを大抵出す。この二つに大抵な客は感心してしまふのである。

玉天齋は手品師でも何でもない。今言つたやうに、品物の受次を毎晩やつてれば、それで好いのである。併し、出た品物は景物として、寄席から客に進呈する事になつてゐるので何處でも中々人氣がある。

玉天齋は今まで一度も東京の眞ん中の寄席に出た事はない。左柳といふ「怪談ばなし」を眞打とする一座に附いて、千住、澁谷、品川、佃あたりを打つて歩いてゐるのだ——左柳は「お茶の水おこの殺し」といふやうな古臭い新聞種をいつも高慢な顏で話してゐる。

玉天齋の前身については誰も知る者がない。この一座に一番古くから附いてゐる樂屋の芳爺の話によると、今から三四年前、左柳が埼玉あたりを打つて歩いてゐる時に、勘定方を兼ねて拾つて來た役場の書記の古手だといふ事だ。

玉天齋はもう五十幾つといふ年だ。頭が禿げてゐる。その禿げが赤黒くてかてか光つてゐる。口が大きい。鼻が赤い。手足が頑丈に節くれだつてゐる。十二になる色の白い黒目勝な娘と、二十三になる體のひよろ長い目の濁つた甥と、かう三人で、この一座に加はつてゐる。

玉天齋は不思議といふ事を知らない男だ。子供の時からどんな事に出會しても不思議だと思つた事はないといふ話だ。

その玉天齋にも一度不思議があつた。

それは左柳に拾はれて、俄拵の手品師になつた時の事だ。敎はつた「羅馬の取寄」は少しも不思議ではない。あまりに當り前だ。玉天齋はばかばかしいと思つたが、まあ試しにやつて見た。

すると見物がしきりに感心する。「えれえ手妻だ。」とか「てえした魔術だ。」とかいふ囁きが方々で起る。

玉天齋は生れて始めて、「不思議だなあ。」と思つた。「こんなつまらない事がどうして不思議なんだらう。誰だつて出來る。誰だつて分かる。何處に不思議があるんだ。こんな事を見物が不思議がつてゐるのは不思議だ。」

併し、その不思議感も段々に鈍つて來た、この頃ではもう見物が不思議がるのを當り前だと思ふやうになつた。見物といふものは何をしても不思議がるものだ、不思議がらなければならぬものだと思ふやうになつた。從つて自分も天晴一角の手品師になつたやうな氣がして來た。自分で自分を何か非常な不思議でも行ふ人のやうに思つて來た。天地の一大祕密を握つてゐるのは俺だといふやうな氣にもなつて來た。

ところがその玉天齋に近頃又第二の不思議が起つた。

怪談ばなしの左柳は、東京の時代に遲れたので、近在廻りを始めたのだが、近在では何處へ行つても景氣が好いので、

又東京が戀しくなつて來た。

「俺のやる事を時代遲れだなんていふが、何が時代遲れなもんか。近頃奥山でやつてる實物應用活動寫眞なんてものは、つまり俺の式を眞似たものぢやねえか。俺は何も遲れたのぢやあねえ。飽きられたんだ。藝人といふものはきつと一度は飽きられるもんだ。褒めるのが熱ぼりなら、飽きるのも熱ぼりだ。熱ぼりがさめた時分に歸つて行きやあ、又人氣が出て來るに相違ねえんだ。」

こんな事を考へた。

「こんなにここいらぢやあ入があるんだ。東京にだつてまだ少しは話せる奴もあるだらう。」

こんな事も考へた。

左柳は一座を連れて、久しぶりで東京の土を踏んだ。そして人形町附近の或小さな活動寫眞の小屋を借りた。前を電車が通る。護謨輪の人力が通る。自動車が烟を立てて走る。角には自働電話もある。ここへ「怪談ばなし大魔術左柳一座」といふ立看板を出した。

「大魔術」といふのは、玉天齋がやる「羅馬の取寄」の事だ。

初日は一向客が來なかつた。併し、それはまあ初日だからといふので、誰も氣にしなかつた。

ところが二日目もやはり客が來なかつた。併し、その日は又近所に緣日があつたから、その方へ取られてしまつたのだとみんなまあさう思つた。

さて三日目の中入前にもなつた。

玉天齋は娘が高座鼻の蠟燭と木の框の上の蠟燭をつけ終るのを待つて、幕を上げさせた。

玉天齋は緣取の古びたフロツクコオトを著て、例の鑵が載つてゐるテエブルの前に立つた。右手にモスリン仕立の慰斗目に小倉袴を穿いた娘が立つてゐる。左手に鼠つぽい筒袖に古びたモスリンの袴を穿いた甥が立つてゐる。

玉天齋は口上を言ひ始めた。

「ええ、私のところは、「羅馬の取寄」と申しまして、お客樣お好みの品物を御前に於きまして……。」

やつぱり今日も客が薄い。

「併し、俺が遣つてる内には、段々遣つて來るだらう。ゆうべも俺の時分には大分詰めかけて來たからな。何しろ澁谷では毎晩滿員だつたんだ。さう來ないといふ道理がないて。」

こんな事を考へながら、玉天齋はひとりでに口を滑つて出る暗誦的な口上を續けた。

「……さう致しまして、その出ましたる品物を福引にして皆樣に差し上げるのでございまする。しかもその内二三品はお宅へ歸つて御覽になりますると、ここから持つてお歸りにな

つた品物とは丸で違つてゐるのでございまする。昨晩もバケツのつもりでお持ち歸りになつたのが土瓶の弦になつてをつたり、鍋のつもりでお持ち歸りになつたのが輕石になつてをつたり致したさうでございまする。」

これは嘘だ。この嘘は玉天齋が一二ケ月前から用ひ始めたのだが、大分樂屋の評判は好い。

娘と甥が紙片と硯箱を持つて客に望みの品物を書いて貰ひに歩いてゐる内に、玉天齋は一度樂屋へ引つ込む。そして服を著換へる。

結襟で、袖の細い、胴の締まつて裾の開いた、西洋の坊さんが著るやうな服の、しかも茶色にぼけたのを著て出ると、もう娘と甥が集めて來た紙片をテエブルの上に山にしてゐる。

玉天齋はも一度客席を見廻した。やはり薄い。玉天齋は少し不思議になつて來た。

「ええ、先づ第一が「洋服」、次が「天どん」、お次が「唐茄子」それから「ハンキツ」これはハンケチでございませうな……」

玉天齋は客の書いた紙片を讀み出した。子供のが多いから中々讀みにくい。

「金魚五疋」「木枕」「靴」「玩具の汽車」。なに、「奴豆腐」か……」などと、さも驚いたやうに自分の樂屋から持つて來た紙片をまぜて讀む。

「「シヤツ」「烟草盆」「行燈」ええ「親父入れるよな火消壺」……」

客が笑ふ。

玉天齋はちよいと客の方を見る。やはり薄い。

「「机」「時計」「うどん」「蒟蒻」「卷烟草」「觀音樣の白鳩」……」

玉天齋は態と困つたやうな顏をする。客はその困つたやうな顏を見て喜ぶ。

紙片の山から一掴み掴んで鑵へ入れると、一度蓋をして、直ぐ蓋を取る。

娘はそれを持つて客席に降りる。

電氣を消させる。

漂ふやうな「昔」を思はせるやうな蠟燭の光の中に、玉天齋の禿頭と茶色の服がぼんやり見える。

娘は客に一々紙片を見せた後、自分でその品物の名を讀む。甲高な、嗄れた、悲しい聲だ。

玉天齋は先づ品物の名を樂屋へ聞えるやうに大きな聲で言ふ。それから、鞭を振つて身を捩りながら、出鱈目な呪文を稱へる。

木の框の中へ朦朧と現れる品物を、玉天齋は物をちぎるやうな手附で一つ一つ取つて來て、高座の鼻へ列べる。端書、胡瓜、惠比壽ビイルなど、例の通りである。

「觀音樣の白鳩」といふ時は、本當に白い鳩の足に赤いリボンの結んであるのを出す。そして、

「ええ、これは觀音樣のでございまするから、觀音樣へお返しを致さなければなりません。でございますから差し上げるわけには參りません。」

かう言つて、樂屋へ逃がしてしまふ。

「浴衣の反物」といふので、出る物がお終ひになると、電氣をつけさせて。蠟燭を消す。

それから客の持つてゐる木戸札の裏に書いてある番號に依つて、出た物を配る。

やはり客が薄い。さつきから一向殖えた樣子がない。景物を配る段になると、澁谷や千住あたりで大騒動だつた。ところがここでは一向靜かだ。澤庵が配ばられても、蒟蒻を持つて行つても一向騒ぐ者がない。

玉天齋はつくづく不思議になつて來た。

高座を降りると、服を脱ぎながら、氣の重さうな顏をしてゐる眞打の左柳に聞いて見た。

「師匠、どうしたんでがせうな。」

「客かい。」

「はい。」

「田舍者ばかりへえり込んで來やがつたんで。分かる奴がゐなくなつたんだ。話をしてゐても、急所がちつとも堪へねえ樣子だ。」

「分からないのですかな。」

「以前の東京はかうぢやあなかつた。」

「はい。」

「江戸が滅びたやうに、又東京も滅びるんだ。」

「かう來ないといふのは不思議でがすな。」

玉天齋は體の汗を拭いて。白地の浴衣に著換へると、夏羽織のぺらぺらしたのを引つかけて、木戸へ第二の務を果しに行く——上がりを勘定しに行くのである。

幕が明いて、左柳が「お茶の水おこの殺し」を讀み始めた。

左柳の膝の前には眞黑な臺のやうな箱のやうな物が置いてある。その臺のやうな箱のやうな物の左の端と右の端に黑く塗つた四角い筒のやうな物が立つてゐて、その筒のやうな物の上に蠟燭が一本づつ點いてゐる。

客席の子供達は今まで一度も見た事もない物を見るといふやうな顏をしてゐる。左柳はさういつた子供達に向つて、しきりに入の無い愚痴やら厭みやらを零してゐる。

玉天齋は木戸へ行くと、木戸札を調べて、その晩の上がりを算盤で寄せて見た。現金と引合せて見た。ちやんと合ふ。

併し、どうも上がりが少ない。あの位方々で評判をとつた一座が、どうしてここではこんなに客を呼ぶ事が出來ないのか、それが玉天齋には不思議でならない。

左柳の上さんが上がりを取りに來た。丸髷に結つて、薄化粧をした、瀟洒の跡のある、若い女だ。

「不思議ですなあ。」

玉天齋は金を渡しながら小聲でかう言つた。

「何が。」

「かう客が薄いといふのは、不思議でがすなあ。」

眞面目な顏をして、同じ事を又丁寧に言ひ直す。

「へん、誰が來るもんかね。」

と、左柳の上さんは苦い顏をした。

玉天齋は愈不思議で堪らなかつた。

高座は今青白い光で照らされてゐる。左柳は毛の長い鬘を冠り、顎に長い髯を釣つて、松平紀義の聲色を使つてゐる。

電車の通る音や、護謨輪のベルの鳴る音が、しつきりなしに外に聞える。

玉天齋の第二の不思議は、いつになつたら鈍るだらう。

不男

「それぢやあ、やつぱり斷りますか。」
書記の柳田は主人のデスクの横に立つて、卓上電話の受話器を弄りながら言つた。
「やつぱり斷つて置いてくれ給へ。」
主人はタイプライタアから手を放して、悲しさうに書記の顏を見上げながら、響の無い聲で言つた。
教育が無いからいけないとか何とか言つてね。」
今にも涙のこぼれさうな眼つきをして、主人がかう附け加へると、書記は同情に堪へぬといふ調子で、
「でも今度のなどは隨分好い方なんですがねえ。第一仲人が木村子爵なんですし……」
と言ひかけると、主人はコンマの釦をトンと一つ押して、寂しい笑を洩らしながら、
「やつぱり斷るより爲方がないさ。流石に子爵のお見立だけあつて、これなら僕も結構だと思つてはゐるんだが。」
と言つて、ほつと溜息をつくと、
「どうせ破れるものなら、恥を掻かない内に破れた方が好いからね。」
と言ひながら、訴へるやうな眼つきで、又書記の顏を見上げた。
「けれども今度は子爵のお世話でもありますし、先方の親御も大分乘氣なやうな話ですから、どうです、せめて三四日待つて見ては。なんしろ昨日の今日ですからね。」
書記は主人の顏を憫れむやうに覗き込んだ。
「いや、いや。」
主人は深く決する所のあるやうに頭を振つた。
「きつと又斷つて來るに極まつてる。どうかお願ひだから、向うから何とか言つて來ない内に早く斷つてくれ給へ。」
「どうしても斷るのですか。」
「ああ。」
「今日斷るのですか。」
「ああ。」
「どうしてもですか。」
「うるさい……君は主人の命令を聞かんのか……」

主人の聲は俄に荒々しくなつた。
書記は默つて首を垂れて、靜に自分のデスクへ歸つた。そして、力なげに主人の方を見ながら、ライチング、タブレットの表紙をはねて、太い、長い、萬年筆を取り上げた。

主人は今までに三十何度と見合をした。そして、みんな女の方から斷られた。主人は金持である、建築學界の泰斗である。商店建築の熟練な技師として日本は愚か歐米にも名の高い人である。勿論外國へも幾度か行つて來てゐる。それ程の人物がどうして見合の度毎に女の方から斷られるのであらう。
主人は有名な不男である。主人は亞米利加の建築大學にゐる頃、「ブル」といふ渾名を附けられてゐた。主人の鼻はブルのそれのやうに黑く、短かく、そして上を向いてゐた。主人の右の眉毛は中程から禿げてゐた。子供の時樹から落ちて枝を突き差した傷の跡が赤くてらてらと禿げてしまつて、いまだに毛が生えないのである。左の耳の後には瘰癧を切つた跡が蛇の首のやうな形をして光つてゐる。眼は如何にも細くて、唯顏の皮膚に裂け目があるといふだけである。
主人は幾度見合をしても、女の方から斷られるので、この頃では女の方から斷られない内に自分の方から斷るやうになつた。氣に入つたと言つて遣つてから斷られるのを恥に思つて、氣に入つても氣に入らないと言つて遣るやうになつたのである。主人はどんな美しい女にでも、どんなに教育のある女にでも、無理に何か缺點を探し出した。氣に入らぬと言つて遣つてから斷られる分はまだそれ程恥でないと思つたのである。こつちから斷つてやると、大抵行き違ひに向うからも斷つて來た。
主人はもう結婚に望みを絶つたかと言ふと、さうではない。さうでないから、いまだに人に周旋をも賴み、いまだにその果敢ない見合をも續けてゐるのである。
主人はこつちから斷つてやつても、向うから押して來たいといふやうな女を求めてゐるのである。

書記の柳田が木村子爵家へ斷りを出した明くる日、子爵の執事から返事が來た。
書記は主人がプランを引いてる大きな机の側でそれを讀んだ。
「玉翰拜誦。貴臺益御清榮賀奉候。陳者子爵閣下御推擧遊ばされ候福島繁子義、御緣無之由遺憾至極に奉存候。然る所本日先方よりも星廻り宜しからぬ哉にて破談申入れ參り候に付右樣御承知被下度、却て雙方便宜の義と相成、閣下も愁眉を開かれ申候。猶良緣も有之候はば必ず御世話仕るべく、精々心掛け居り候。餘は拜芝萬縷。早々不宣。」
主人は烏口を机の上に置くと、活き歸つたやうな調子で、

「それ見給へ。やつぱり斷つて好い事をしたんだ。今度もまあ恥を掻かずに濟んだ。」

と言つて、嬉しさうに笑つた。

「さうですねえ。」

と、書記は萎れて手紙を卷き返すと、それを持つて自分のデスクへ歸つた。

「助かつた。助かつた。」

と、主人はプランに向つて獨語を言つた。

足拍子

一

私は實際飛んだことをしてしまつたと思ひました……

十年も前の戀――それも、唯舞臺の上にゐるのを、遠くの追込から見て單に見初めただけの話なのです――尤も三四年の間は、その姿が忘れられないで、その人の出る芝居といふと、何處へでも出かけて行つたものですが……

勿論、當時はまだ學生の身分でしたし、會ふの話をするのといふやうな機會は絶對にありませんでした――謂はば高嶺の花で、唯遠くから見て、胸を焦してゐるに過ぎなかつたのです……

それが、十年も經つてから――實を言へば、もう忘れた時分に――はからず、人に引き合されて、始めて會つたのですね……

女はもう三十を過ぎてゐました――昔の容色は何處へやらで、若し往來ででも會つたら、とても分かりつこはない位に變つてゐるのです……

あれは明治座で、たしか高島屋の芝居か何かの時でした。横濱にゐる私の友達の親父さんが連中をしたんですね。そこへ私も手傳ひ半分見物半分に行つた時に、その友達の親父さんが、お茶屋で紹介してくれたのです……

「花柳美津江さんです……これは伜の親友で、この頃賣出しの山本さんです……」

女が役者をやめて、この頃踊の師匠をしてゐることは、私も聞いて知つてゐました……

「まあ、山本さん……山本重雄さん……」

さう言つて、私の顔を穴のあく程ぢつと見てゐましたが、

「あたし、一遍あなたにお目にかかりたいと思つてゐましたわ。」

と言ふのです。

その時分、私はやつとまだ文壇といふところに顔を突つ込んだばかりだつたのですが、珍しいもの好きな批評家が、なんのかんのと評判をするので、もう少しは世間に名が知れてゐ

たのです…人間は誰しも自惚のあるものですから、さてはこの人も自分の名を知つてくれてゐたのかと思つて、直ぐと好い氣持になつたものです…

女はもう顏の皮膚に弛みが來てゐましたし、白粉つ氣はなし、髪も引つ詰めか何かに結つてゐましたし、とても昔「ハムレツト」の折枝をやつた時分の容色はありませんでしたが、それでも流石に目つきにはまだ色氣が十分にありましたし、十年前には私も夢中になつた人なので、昔懷しい氣持も湧いて來て、ぢつと見詰められた時は、ふらふらとしました…

さあ、その「ふらふら」です…これが抑も間違ひの元でした…

二

一體、この美津江といふ人は、若い女の身で、男ばかりの新派の一座へはひつて來るまでにも、隨分いろいろな經歷があつたらしいのですね…

なんでも、元は金澤の名うてな藝者だつたといふ話なのです——それは「ハムレツト」で初舞臺をする當時も、いろいろ新聞などにも書き立てられてゐました——それから、東京へ來て、市川米八といふ女役者の弟子になつたのですね——米八といふ役者はもうその時分可なりな年寄で、三崎座に出てゐたのですが、女役者といふものがはやらなくなつたので、思ひ切つて男の新派の方へ飛び込んだのですね。そこで、その弟子の美津江も自然その方へ附いてはひつたんです…

勿論、役者としての藝はまだ物になつてゐなかつたんですが、さうした經歷をして來た女に似合はず、おぼこらしいところがあつたので、勿論きりやうは好いし、初舞臺から折枝といふやうな大役がついたわけなのです…

併し、美津江はその一座の興行では、ほんの一二回顏を見せたぎりで、暫く休んでゐたやうでしたが、その內師匠の米八とも別れて、ずつと格の下がつた新派の芝居をそれからそれと渡り歩いてゐましたが、やがてばつたり消息を絕つてしまつたのです…

一番はじめにゐた一座の中に川西芳夫といふ女形がゐましたが、なんでもこの男が美津江に熱烈な戀をしかけて、女もこれに動かされた揚句が、二人とも商賣をよしてしまつて、牛込邊に家を持つて近所の人の氣を惡くさせる程な仲の好い同棲ぶりを見せつけたものださうですが、どうしたのか、突然男の方が見捨てられてしまつたのですね。川西はすつかり絕望して、たうとう頭を剃つて、坊主になつて、流浪の旅に出てしまつたのです…それも私はその當時新聞で讀んで知つてゐるのです…

それまでにも、「ハムレツト」を書いた作者と、何かわけが

あつて、その作者が又それを小說に書いたなどといふ話も聞きました…

兎に角、舞臺以外にいろいろな芝居のあつたのだけは確なのです…

川西の一件以來、私はとんとこの女の噂を聞かないでゐたのですが、この頃、花柳の名取になつて、場末で踊の師匠をしてゐるといふやうな話を、誰かに聞いてゐたのです…

そんなこんなで、たとひ昔それ程思つた女であるにしろ、こつちももう初心な學生ではなし、美津江に對する考へはすつかり變つてゐたのですが…

それでゐて、その「ふらふら」となつたのが、所謂魔がさしたのですな…尤も、自惚も大分手傳つてゐましたし…私もまだ若かつたので、好奇心もありましたからな…

いや、もう、今考へると、全く冷汗です…

實に一生涯拭ふべからざる汚辱を蒙つたのですからな…

三

明治座の茶屋で一度會つてから、女は頻々と私のところへ手紙をよこすやうになりました。

勿論、當時はまだ獨身で、築地の方の或しもた屋の二階借をしてゐましたが、そこへさかんに端書や手紙が舞ひ込んで來るのです。

初めは普通の挨拶や、御機嫌伺ひ見たやうなものばかりでしたが、段々に色つぽい文句が目について來ました——それが又、さうした女に似合はず、實に立派な字で、文章も奔放な美しさに溢れてゐるのです…

さうしてゐる內に、また芝居か何かで顏を合せる。會ふと、今度はいつ何處の芝居へ行くから、あなたも入らつしやいなどといふ樣なことを言はれて、ついそこへ行く氣になる…何しろ才氣潑溂たる女ですし、男を男とも思はないやうな態度で、話をすれば文學藝術のことも相當に分かるし、乳臭い女學生や何ぞとつきあつてゐるよりは遙に面白いので、しまひにはこつちからも誘ひをかけて、一緒に芝居を見に行つたり、御飯を食べに出かけたりするやうになりました。

併し、會へば女も手紙で書いて來るやうな色つぽい態度には出ないし、私の方も「ふらふら」は一時の現象で、さうした海千山千らしい女とつきあふのが唯面白くてつきあふといふ風でしたから、これがその儘で濟めば何のこともないのでした…

四

女はその時分、池の端の或小間物屋に部屋借をしてゐました…

私は遠慮のない方ですから、どうして生活をしてゐるのだ

と訊きましたら、むかし藝者をしてゐた時分に旦那だつた金澤の或實業家に、色氣離れて補助をして貰つて、毎日家元へ踊の稽古に行つてゐるのだと言ふのです…

「名前は貰ひましたが、まだとても駄目なので、せつせと勉強してるんです。行く行くは、まあ、國へ歸つて、國の方の花柳界に東京の踊を少しでも廣められればと思つてゐるんです…」

といつたやうな、ひどく殊勝な話なんですが、私にはどうもそれが受けとれませんでした…何しろ野心勃々といつた女なんですからね…それに、その池の端の生活がです。さういつた家の部屋借をして、身裝にも構はず、せつせと稽古に通つてるところだけを見れば、ひどくまじめなやうですが戸棚の中にはいつも大瓶のウイスキイが二本も三本も貯へてあつて、夜になると、そこの家の娘のお時といふのを相手にして、生の儘でコツプをあふるといふ風なのですからな…

その時分は、美津江の話に聞くだけで、當人にはまだ會はなかつたのですが、そのお時といふ子が如何にも女らしい優しい娘で、美津江が飲んだくれて、それを相手に管をまいてゐるところは、はたから見ると、まるで男と女のやうだと言ふのです…

「…只今例の通り妻の時子に酌をさせて一杯やつてゐるところ…」

などいふ文句が、よくその時分來る手紙に書いてありました。ふだんでも、お時の話が出ると、

「ほんとに可愛い子よ。あれはあたしの妻よ…それは從順な妻君よ。」

などと言つたものでした。

五

さういふ風でしたから、私にしても、會つてゐる内は、男の友達にでも會つてゐるやうで、むかし惚れた女に會つてゐるやうな氣持は少しもしませんでしたが、それでゐて、二三日會はずにゐると、來る手紙がやつぱり色つぽいのです…

勿論、色つぽいと言つたつて、普通で言ふ色つぽいのではありません…「會ひたい、會ひたい、會ひたい」とか、「君のことを考へると、ひとりで寢るのがとても寂しい。」とか、「この悶々を酒に遣る。」とか、「君に會へない心の悶えを妻の時子に訴へてゐる。」とか…一寸見ては、男が男の友達にでもやる手紙のやうなものばかりなのですが、私にして見ると、やつぱり平氣ではゐられないやうな文句なのです…

併し、實を言ふと、その當時私は別に夢中になつてゐた女もありましたし、友達に道樂者が多いので、毎晩のやうにそこここと飲み歩いてもゐましたし、美津江の方はほんの芝居か食事ぐらゐなつきあひで、手紙の文句が氣にはなりながら

も、さして問題にはしてゐませんでした…

でも、明治座の茶屋で經驗した「ふらふら」はやつぱり何處かに隱れてゐたのですね…問題にしなかつたといふのも、つまり自惚から來たことで、この調子ならこの女はいつでも自分のものになるに違ひない。併し、あの女も、もうあの老けてしまつては有難くない。おれにはもつと若いのがあるのだからな…といつた風な考へ方をしてゐたのです…

つまり…決して、女を嫌つてゐたのではなくて、女に對する昔の氣持がまるでぼけてしまつて來てゐるところへ、女がいつでも自由になりさうなのが、なんだか應へがなくて面白くなかつたのですね…

唯贅澤な考へ方をしてゐただけで、女に對する態度は一向堅固ではなかつたのです…機會さへあれば、どうなるか分からない――それが私のその時分の心の狀態だつたのです。

六

その機會がたうとう來ました…

一月ばかり休まずに爲事をしなければならないことがあつて、私が箱根の塔の澤へ出かけた時のことでした――塔の澤の宿は私の友達のお母さんが經營してゐるので、萬事手輕にしてくれたのは有難かつたのですが、伴の友達といふところで、私を自分の子供か何かのやうに思つて、小田原あたりへ遊びに行つて、少し歸りでもおそくなると、直ぐに心配するといふ風でしたから、ちと窮屈ではありましたが、丁度冬の寒いさかりで、客もあんまりなし、爲事は可なり氣持よく出來ました…

塔の澤へ來てからも、美津江からの手紙は三日にあげず來ました…相變らず文句は男のやうでしたが、内容は、「會ひたい」と「寂しい」の一點張りでした。やがて「一度遊びに行きたい」とか「遊びに行つても好いか」とか言つて來ましたが、しまひには「ひとりで靜に爲事をするのが憎らしい」とか「近い内に爲事の邪魔をしに行くから、そのつもりで待つてゐろ」とかいふやうな亂暴なことを言つて來るのです…

なんしろ、宿がさういつたわけの家なのですから、若し押しかけて來られでもしたら自分の信用に關はると思つて、私は早速その事情を書いて、ここへ訪ねて來ては困ると言つてやりました…

すると…そんなら、二三日内に湯ケ原へ行くからそこへ訪ねて來いと言つて來ました。宿屋はこれこれで、輕鐵のステイションまで番頭をのせて馬車を出して置くから、默つてそれに乘つて來れば好いのだ、といふやうなことまで事細に書いてあるのです…

こつちへ來るのを拒絶した關係上、行くのは厭だとも言ひかねて、うつかり私は承諾の手紙を書いてしまつたのです…

二三日すると、電報が來て、けふ先方へ行くから、夕方までに必ず來いといふのです。まるで、それが命令なのですね…

見え坊でゐながら、その癖一向張りのない私は、脆くもこの命令に服從してしまつて、その日の午後に宿を出ました——友達が熱海へ來たので、ちよつと訪ねに行くのだといふ風にして…

當然、私は或事の起るのを豫想してゐました。そして、その或事が恐ろしいやうでもあり、また樂しみでもあるやうな氣持がしました…さう言ふと、少し嘘になりますね…實を言ふと、恐ろしさよりは樂しみの方が分量が多かつたのです——やつぱり、愈愈かうなると、例の「ふらふら」が働いて來るのですね…

實際、湯ケ原へ著くと、もう胸がどきどきして、宿屋の番頭に名前を聞かれた時なども、何か悪いことでもしてゐるやうに、びくりとしたものです…何と言つても、まだ初心なところがあつたのですね…

馬車が目的地へ著いた時は、もうあたりが薄暗くなつてゐました。始めての場所ではあり、あたりの樣子はちつとも分からず、うろうろしながら番頭に案内されて湯氣のもやもやとした路次をはひらうとする途端に、向うから美津江が駈け出して來ました…

その時の心持…それは、それまでに幾度美津江と會つてゐても、決して經驗したことのない心持でした…勿論、格別美津江の態度に變つたところはなかつたのですが、薄暗いところでぼんやり見たせゐか、いつもの男らしいところが少しも見えずに、頭から足の先まで、すつかり女になり切つてゐたのですね…

それに、知らない土地で、始めてたつた二人きりで會ふといふ心持…それも働いてゐたに違ひありません…

のろけのやうになりますが、ちよつと忘れられない心持で、いまだに思ひ出して見ても、これだけは、そんなに悪い氣持はしないのです…

七

女は直ぐと私を自分の部屋へ案内しました。そこはちよつと離れのやうになつた部屋で、湯殿もそこだけのが特別についてゐるのです。

部屋へはひると、直ぐに電燈がつきました。硝子戸が湯氣に曇つて、部屋の中が何となくもやもやと溫いのです。そこへ直ぐとチヤブ臺が出て、摘み物にお銚子が來ました。

「けふは飲んでも好いでせう…醉つたらあたしが介抱して上げるから…」

女は直ぐと、こんなことを言ひました——ふだん私がちつ

ともいけないのを承知してゐるものですから…

「でも、僕は駄目です…けふは、お時さんの代りに僕がお酌をして上げませう。」

「いいえ、それは駄目…けふは私女なのよ。だから、けふは私がお酌をして、あなたが飲むの…」

「飲むのつたつて、僕は駄目ですよ…まあ、あなたお飲みなさい…」

「あたしは默つてゐたつて、飲まずにはゐないわよ…あなたから始めなけりやあ、あたし厭。」

女は拗ねたやうに横を向いてしまひました。

「ぢやあ、少しね…ほんのぽつちり…」

「男がなんです。そんな景氣の悪いことを言つて——」

美津江はさう言ひながら、私の盃を一ぱいにしてしまひました。

「さあ、綺麗に一杯飲んで、あたしに頂戴。」

私は目をつむつて、ぐつと一杯飲むと、すぐその盃を女にさしました。

女は一杯飲むと、その盃を私には返さずに、手酌でもう一杯重ねて、それからやつと又盃を私に返しました…

こんなことが始まりで、私も珍しく二三杯飲まされました。女はその間に十二三杯も飲んだでせうか。見る間に好い機嫌になつて來ました…

「…なぜ、箱根へ行つちやあ悪かつたの、誰か困る人でもゐるの…」

「冗談ぢやない…あすこは戸山のお母さんがやつてる家だから、それで困るんですよ。」

「戸山さんのお母さんがやつてゐれば、なぜ困るの…」

「だつて、それは困りますよ…」

「あたしがこんな女だから…」

「さういふわけぢやないけれど…」

「戸山さんのお母さんが恐いの…意氣地なし。」

さう言はれれば、如何にもさうなので——

「全く僕は意氣地なしですねえ…なぜ、もつと平氣にならないのかしら…」

「相當に道樂もしてゐる癖にねえ…」

「道樂なんて、それはひどいや…」

「駄目、駄目。芳町のだつて、下谷のだつてあたしはちやんと知つてゐるんだから…」

「冗談でせう…そんなもの、ありやしませんよ。」

「あつたつて構はないわよ…賣り出しのあなたが、女の一人や二人出來ないやうでは駄目だわ。なんなら周旋しても好いわ。」

「どうかお願ひ申します。」

「白ばつくれて…憎らしいよ。」

私はいやつといふ程膝をつねられました…
まあ、この邊までは平凡でしたが、段々醉つて來るに從つて、女は命令的に物を言ひ始めました…
「さあ、もつと側へ來てお酌をするのよ…」
「へい、へい。」
「下手ねえ…もつと澤山つぐのよ。」
「へい、へい。」
「もうお銚子が空よ…早く手を叩いて、あとをそいつて頂戴よ。」
「へい、へい。」
私はもう何を言はれても、唯「へい、へい」とばかり言つてゐましたが、その内にもうあたりがひつそりして、大分夜も更けて來たやうな樣子でした。
「もうどうです…好い加減に切り上げちやあ。」
「さうねえ…それぢやあ、もう寢ようかしら。」
「さうなさい…僕も實は眠たいんです。」
私はさう言つて、手を叩くと、そこへ來た女中に直ぐ寢床を入れるやうに言ひつけて、
「その間に一杯浴びて來ようかな。」
と、さう言ひながら立ち上がると、
「あたしはさつき一度はひつたから、やめてよ…その間にあるつたけ飲んぢまふわ…」
さう言ひながら、美津江は獨酌でまだ飲み續けてゐました…
これで、私が湯へはひつて、好い心持になつて出て來る…女はもう好い加減に醉つてゐる…夜は更けてゐる…何でもない關係の男と女でも、もうその結果は知れてゐます…しかも、それが、私から言へば、兎にも角にも、十年前にはあれ程夢中になつた女で…女の方から言つても、昨今ではあるが、多少は私に氣がある樣子なのですから、實際危險この上なしなのです…
ところが併し、私はさういつた——世間の人が想像しさうな——結果は豫想してゐませんでした。いづれ變なことになるだらうとは思つてゐましたが——そして、それが多少樂しみでないことはなかつたのですが——普通の場合と同じやうな結果にならうとは思つてゐませんでした…
それがと言ふと——をかしな話をするやうですが——私は前からこの美津江といふ人に、幾度となく聞かされてゐることがあつたからです…
それは…この人がもう男と交はりの出來ない體になつてゐるといふ話なのです…隨分幾度となく聞かされた話なのですが、つまり病氣をして、手術を受けて、さうした一種の不具になつてゐるといふ話なのですね…

ですから、私もその點だけは安心してゐたのですが…
でも、湯から上がつて二十分と經たない内に、私はやつぱり世間並の結果に落ちてしまひました…女の今まで言つてゐたことは、眞赤な嘘だつたのですね…それでも、私の意志さへ堅固だつたらあんなことにはならなかつたのですが、そこがやつぱり例の「ふらふら」が祟つてゐるので、どうにもかうにもしやうがなかつたのです…
やつぱり十年前に一度夢中になつたといふことが、かういふ結果を生むことになつたのですね…
でも、私は決して愉快ではありませんでした…その時は夢中でしたが…箱根へ歸つてからといふものは、實際飛んだことをしてしまつたと思はない日はありませんでした…

八

一體、私は浮氣なのでせうか——それとも、それが男の通有性なのでせうか——隨分夢中になつても、一旦行き著くところまで行つてしまふと、あとは冷淡になるのですね——謂はばどうでも好くなつてしまふんですね…
可なり夢中になつた場合でもさうなのに、この場合は「夢中の出し殼」見たやうな場合なのですからね…
東京へ歸つてからは、出來るだけ女に會ふまいとして、逃げ廻つたもんです…
ところが、女の方は今までとまるで違つて、しつつこく私を追ひかけるのです…そして、自分はもうこんな年寄なのだから、いくらあなたの歡心を買はうとしたつて、それが無理なのは分かり切つてゐる…幸ひ自分の家へは近所の美しいお孃さん達がかるたをしに時々集まるから、一度そこへ來て、誰でも氣に入つたのがあつたら周旋する——といつたやうな手紙をよこして、頻に私を誘惑するのです…
ここに丁度その時分の手紙が一通殘つてゐますから一例に讀んで見ませう——御迷惑でせうが、まあ聞いて下さい——
「あんまり御消息がないので、心配してゐます。けふは二十日で例の連中が集まる筈のところ、兄があてにならぬから見合せました。私も早く會ひたいがあすは午後四時から新橋方面へ踊の座敷で行かなければならず、併し、宅には妻の時子がゐますから、兄が本當に來るなら、多くは集まらぬが、二三人臨時に集めてお待ちいたします。泊る覺悟で來て下されば、おそくも十一時には歸るから、私も會はれます、泊るのが厭なら何時に歸つても宜しい…泊つたつて、今度は決して貴兄を苦しめぬ。私は何だか貴兄を苦しめたと思ふと、涙がこぼれる程くやしい。私は人を苦しめてまで自分を生かさうとは思つてゐなかつたつもりでしたに…今やつぱり時子の酌でやつてゐるところ。兄の「梨

園雜藥」がけふやつと手に入つた。今夜はこれを讀んで寢るのです…貴兄を苦しめた罪をつぐなふべく何なり貴兄の求めるところに（身に叶ふ限り）應じたいと願うてゐます。さよなら。

荒野の枯尾花

エルハルト樣

酒の勢を借りて書いたと見えて、しまひの方は大分字が亂れてゐます。併し、これでこの當時の女の私に對する態度がはつきり分かるだらうと思ひますね…幾度となく、私を苦しめた苦しめたと書いてあるのは、つまり湯ケ原の一件なのです…

別に私の方では、そんなに苦しめられたと思つてはゐませんでしたが、さすがに私の心持は女に分かつたものと見えますね——

序にもう一つ聞いて下さい——

「醉つて管をまくと思はずに聞いて下さいよ。あなたに手紙を上げたいと思つて書きかける。いやいや止さう。裂いてしまふ。同じことを幾度も繰返す、要するに、大した用がないのと、氣が弱いから決行しかねるわけ…疲れて眠くてたまらぬ、机に凭れて、うつ〳〵してゐると、六時頃友達が來た、連れ立つて上野へ夕食に出かける。九時過、大分呑んだくれて歸宅、はづかしながら、醉へば百人力、一向無頓著、人の多忙ぐらゐ我慢しますとも、ええ、まして手紙を讀ますぐらゐのことはね…御同感でせう。ほんとに、たまには手紙ぐらゐ下さいな…但し書くのが面倒なら、白紙へ切手をはつてお出しなさい、切手をはるのが煩さければ、先拂で紙だけポストへ投げ込んで下さい。なあに、それでも嬉しう存じます…我も知らずきのふもけふも君が名を誦せば涙が流るる故を…この醉つた元氣で、これからこの手紙を入れに行きます。あすの朝まで置くと、また氣が變つて出したくなくなる。酒がさめるから。おやすみ、さよなら、グードバイ

酒の粕より

先生」

先づかういつた調子なのです…これが湯ケ原以後に來た手紙なのですからね…女の方がずつと弱くなつてるのが分かるでせう…

夫でも、私は强情に女を訪ねには行かなかつたのです…すると、今度は自分のゐる家の娘——例のお時です——これを見せるから、そして、若し氣に入つたら世話をするからと言つて誘惑し始めました…

これには、私もちよいと乘りましてね…それがをかしいんですよ…前から始終話を聞いてゐたんで、一度會つて見たいと思つてゐたところだつたので、例の好奇心が働いて、

ふいと行つて見る氣になつたんです…

九

さて、約束の日の夕方に出かけて見ると、その小間物屋といふのは、池の端でも、賑かな仲町の方ではなしに、ずつと淸水町に近い寂しいところで、店の前は多分動物園あたりだと思はれる上野の山でした。

店は思つたより間口も廣く、横手にちよいとした庭もあつて、そこにしやれた枝折戸が一つ附いたりなどしてゐました。店口から美津江をたづねてはひると、そこに坐つてゐたお婆さんが愛嬌笑ひをして、どうぞあちらからと言つて、その枝折戸の方を指さすのです。

はは、成程、こつちが美津江の出たりはひつたりする口だなと思ひながら、芝居の道具めいた門を押してはひると、直ぐそこに緣側があつて、十七八の娘が一人笑ひながら立つてゐるのです。はは、これがお時さんだなと、直ぐに私はさう思ひました。

緣側から上がつて、障子を明けると、直ぐそこは八疊の座敷で、美津江はそのまん中で、炬燵にあたりながら、ひとりでもうちびりちびりウイスキイを飲んでゐました…

湯ケ原以來會はないんですから、ほんたうを言へば、飛び立つやうにして迎ひに出て來るのが當り前なんですが、女は人を呼びつけて置きながら、寧ろ極めて冷淡な態度で「おや入らつしやい。」と言つたきりで空嘯いてゐるのです…

はは、芝居をやつてるなと、直ぐ私はさう思ひましたから、そんならこつちも芝居をしてやれとばかりで、わざとお時さんの側へ坐つて、しかつめらしい話をし出しました。

「…不忍の池は夏より冬の方が僕好きですねえ。あの蓮の莖が黑くなつて、萎びて折れてゐる工合なんか、何とも言へませんねえ。」

「ええ、あたしも冬の方が夏より好きですわ。お池に薄い氷がはつて、その氷の上へ鳥が降りると、みしりみしりと音がしますのね。なんだかあの音が寂しくつて、あたし大好きですわ…」

「それに、上野の鐘が霜に氷る晩なんぞ、何とも言へないでせうねえ…」

「ええ、あたしいつもあの鐘の音を聞くと、溜まらなく寂しくなつて、自分で自分を抱きしめますのよ…」

「何を詰まらないことを言つてるのよ…」

いきなり美津江がどなるやうに言ひました——

「およしなさいよ。見つともない。そんな文學青年見たいなこと。溜らないわ——氣障で。」

「どうも濟みませんでしたね。氣障なことを申しまして。併し、僕は生れつき氣障に出來上がつてゐるんですから、どう

にもしやうがありませんよ。」

私がわざとこんな厭みを言ふと、女はいきなり立つて來て、私の手をつかまへると、炬燵の方へ引つぱつて行きました。

「默つておあたりなさい。」

「へい、へい。」

「時ちやんも來ておあたり。」

まるで命令です。それでも、お時さんはちつとも逆らはずに、素直に立つて來て、輕く炬燵に手を入れました。

「さあ、お飲みなさい。」

女は飲み干したコツプを私に差しつけました。

「僕はウイスキイは…」

「飲めなきや、およしなさい。時ちやん、お酌して。」

女は一度こつちへ出したコツプをお時さんの方へ出して、一ぱい注がせました。そして、それをぐつと飲み干すと、

「さあ、今度は時ちやんが飲むのよ。」

「ええ…」

と言つて、お時さんは素直にコツプを手にしましたが、

「でも、ぽつちりよ。」

「いいえ、一ぱいでなきや厭。」

さう言つて、美津江はたうとう一ぱい注いでしまひました。お時さんは爲方なしに、ちよいとコツプに口をつけましたが、いくらも飲まずに、如何にもまづさうに眉の根に皺を寄せました。

「可哀さうぢやありませんか。飲めもしない人に。」

溜らなくなつて、私がかう言ふと、女は直ぐと又私に食つてかゝりました。

「默つてらつしやい。なんにも知らない癖に。時ちやんはあたしの家内よ。だから、ウイスキイの二杯や三杯平氣なのよ。」

「嘘言ひ給へ。今だつて、あんなに苦しさうな顏をして飲んだぢやありませんか。」

「あれは時ちやんの癖よ。あすこが又なんとも言へず可愛いんだわ。」

すると、お時さんが私の方を向いて、

「ほんとに、あたし少しは頂けますのよ。毎晩美津江さんのお相手をしてる内に、すつかりお酒飲みになつてしまひましたのよ。」

さう言ひながら、また眉の根に皺を寄せながら、努めるやうに又コツプに口をつけるのです…

私はこの娘が可哀さうになつて來ました…女が私に對して、大抵こんな態度をとるだらうといふことは、多少覺悟はしてゐましたが、それにしても、お時さんがその犧牲になつて、飲めもしないものを無理强ひに飲まされるのを見ては、聊か公憤を感じないではゐられなくなりました…

私は默つていきなりお時さんの手からコツプを奪ひました。そして、まだ三分の二以上も殘つてるウイスキイを一息にぐつと飲み干しました…

「そら、そんなに飲める癖に。嘘つき。」

女はかう言ふと、空になつた私のコツプに直ぐとあとを注ぎました。

「さうです。嘘つきですとも。だから、この通り鮮に飲みます。」

私はさう言つて、もう一杯ぐつと飲み干しましたが、實際その當時、私はまるでいけなかつたのですから、直ぐと眞つ赤になつて、忽ち頭がふらふらして來ました…

さあ、それからは美津江と私の間を、さかんにコツプが往つたり來たりしました。私はどうかしてお時さんに飲ませまいと思つて、美津江がコツプを空にすると、直ぐそのコツプを奪ふやうにしました…でも、お時さんは今飲んだ一口二口で、もう眞つ赤になつて、苦しさうに頭を抑へてゐるのです…

美津江の横暴なのに比べて、お時さんのこの樣子は、どんなに私の心を動かしたでせう…お恥づかしい話ですが、私は實際變な氣になりました…

一體、湯ケ原の一件を好い加減後悔してるところへ持つて來て、久しぶりに會つた女の態度が、まるで男妾かなんぞを扱ふやうな所置振りなんでせう。いくら昔惚れた女だつて、これぢやあ厭氣がさしまさあ…私はいつそ女が怒り續けて、これつきりになつてくれりやあ好いと思つた位ですよ…

ですから、酒が廻つて來るに連れて、私は平氣でお時さんの手をとつたり、お時さんの顏の側へ自分の顏を持つてつたりしました。お時さんも初めの内は、美津江が恐いので、遠慮をしてゐましたがだんだん大膽になつて來て、しまひには自分の方から人の手をとつたり、體を凭せかけたりして來ました…

元來が、この娘を取り持つやうなことを言つて、私を誘き出したんですから、美津江もこれに對しては一言も口を出すことが出來ないんです。私はまたそれを好いことにして、勝手氣儘な振舞をしたんです…

女はもうすつかり默り込んで、ひとりでがぶがぶ酒を飲むばかりでした。しまひには、流石の猩々も參つてしまつて、炬燵へ足を突つ込んだなり、横つ倒しに倒れてしまひました。

私は心の中で窃に痛快を叫びましたね…

愈歸る時は、枝折戸まで送つて來たお時さんの首をいやつといふ程抱きしめて、たうとうキツスまでしてしまひました。

十

でも、明くる日になると、私は又後悔と慚愧に胸を苦しめました。

苟にも、あんな生娘に、腹からでも何でもなく、一時の勢から、あんな誘惑的なことをしてしまつて、一體これから先どうするのだと思ふと、實に身も世もあられない程、我が身で我が身が悔しくなりました…

たとひ美津江と切れたにしたところで、美津江があすこの家にゐる以上、お時さんをどうすることも出來ないのは分かつてゐますし、第一、あの店に坐つてゐたお婆さん——多分お時さんのお母さんでせうが——あんな人に娘を傷ものにされたとか何とか言つて、どなり込まれでもしたら、自分の出世の妨げになるのは分かつてゐますし、それに、あんな灰汁の拔けない小娘を——實際、お時さんは唯優しいだけで、好い女でもなんでもなかつたんですから——自分のやうな道樂者が、末始終飽きずに可愛がりつこのないことも分かつてゐましたし、こりやあこの儘、離れてしまふに限ると思ひました…

罪と言へば罪ですが、まああの程度で、それつきりにしてしまへば、酒の爲業とでも何とでも言譯が立つと思つたんですね…隨分勝手な考へ方ですが、實際惡いことをしたと思つたんですから、それで許されるやうに思つたんですよ…

まあ、さう思つて、それつきり池の端へは足踏をしなかつたわけですが、さて、分からないのは人間の心ですよ…あとで、よくよく考へて見ると、實はお時さんに對して濟まないといふよりは、美津江に對して濟まないことをしたといふ心の方が勝つてゐたんですね…

暫くさうして家に引つ込んでゐると、また美津江に會ひたくつて溜らなくなつて來ました…

ああした横暴を働くのも、詰まりは生活が寂しいからだ…その寂しい、荒み切つた生活の中に兎にも角にも私のやうなものがはひつて行つて、折角暗闇に花も咲いたのに、その花が存外氣むづかしやで、一度咲いたか咲かない内に、直ぐひねくれて萎んでしまつたんでは、一層寂しい遣瀬ない思ひもしたらう…おまけに私は、いくら女が厭になつたからつて、その女の前で、他の若い女に戯れたりなどしたのだ…横暴なのは女でなくて、實は自分だつたのかも知れない…私はかういふ風に考へて來ると、急に女が可哀さうになつて來ました…

さうしてゐる内に、美津江から手紙が來て、こなひだは酒の上とは言ひながら、大變濟まないことをした。久しぶりで會つた嬉しさを見せるのが口惜しさに、ちよいと拗ねて見たのが、たうとう脫線して、しまひには自分にもわけが分からないやうになつてしまつたのだ。女房のお時も焦れてゐるか

ら、是非一度顏を見せてくれ。といふやうなことを言つて來たのですが、私はお時さんに、二度顏を合すのが苦しさに、返事もせずに置いたものです…

すると、あとから追ひかけ追ひかけ、二度も三度も、そんなやうなことを書いた手紙がやつて來るのです。よそで會つても好いんだが、折角家を知つてくれたのだから、家の方が氣兼がなくて好いと思ふ。もう決して家へ來ても、あんな我儘なことはしないから、助けると思つて遊びに來てくれ。この頃は寂しくて寂しくて、夜もろくろく寢られない。こなひだはあなたの言ふことを莫迦にしたが、實際上野の鐘が身に泌みるやうだ。といふやうなことが、例の巧い字で細々と書いてあるのです。

それでも、私は强情に池の端を訪ねませんでした。女に會ひたいのは山々でしたが、どう考へてもお時さんに會ふのが辛かつたのです。なあに、よそで會へばなんでもない訣なんでしたが、その時分の私には、さういふ人とどんなところでどう會つて好いのだか、さういふ智慧がてんでなかつたんですね…

私はたうとう苦しくなつて東京を逃げ出してしまひました——田舍へ行けば、また湯ケ原の時のやうに來て貰へると思つたのかどうか、そこのところは忘れてしまひましたが——兎に角、苦しくなつて逃げ出してしまつたことだけは確です。それに又、ちと落ちついてしなければならぬ爲事もあるにはあつたのです…

逃げたところは千葉に近い或海邊でした…實は當てどもなしに東京を飛び出したのでしたが、ふとステイションの近所に出てゐる宿屋の廣告を見て、急に降りて見たくなつたんですね…なあに、看板に僞ありで、一向たいしたところぢやありませんでしたが、それでも松林の中にある、その宿屋がひどく靜な家で、存外私の氣には入つたのです…

私はそこから美津江のところへ居どころだけを知らせてやりました…そこは自惚で、直ぐにも飛んで來るだらうと思つて、内々心待に待つてゐたのですが、女からは手紙一つ來ないのです…をかしなこともあるものだと思つてゐると、東京から訪ねて來た友達がこんな消息を持つて來たのです——美津江がまた藝者になつたといふのですね。しかも、新橋から出たといふのです。

私は咄嗟にかう思ひました——先生、池の端の家にゐてはとても僕に會へないものだから、それで藝者になつたのだなと…併し、そんなら、家さへ變りさへすれば好いので、何も藝者にまでならなくつたつて好ささうなものを、先生、やつぱり又元の自由な生活が慕はしくなつたのだな…どつちにしても、藝者になつたのは、僕が原因に違ひない、僕が芳町の若い藝者に夢中になつてゐることも先生は知つてゐるのだ

から、内々それと張り合ふ量見もあるのだらう……私は、まあ、うぬぼれ切つてかう考へたものです……

それから、左樣、一週間もして、女から始めて手紙が來ました。その一節を讀んで見ると、かういつた調子なのです――

「……無論財政の困難が原因だけれどサ――そんな事ばかり考へてゐられぬ性なんですもの――困る――要するに、生きられるかと思つて、また藝者になつたの。賣れる賣れないといふことは、あまり考へてゐなかつた――ところが、出て見ると、やつぱり賣れたい――まあ、そんなことよりあなたに逢ひたい。つくづく逢ひたい。座敷歸りの靜な新道を、連れの藝者の役者ののろけ――をかぼれののろけ――遠慮なく――だらしなく――聞かされる時、つい釣り込まれて、あゝ私の惚れた人は死んでしまつたの。その死んだ人に逢ひたいわと言つてやる――冷たい泪をこぼしてやる。みんなびつくりする。オホホホ。隨分辛いわ。あゝ、いやだ〳〵。(たうとうくだらないことを書き出してしまつた。けふはまだ座敷がかゝつて來ないもんだから。)私そつちへ行かうと思へばいつだつて行けるんだけれど、今度は我慢して助けて上げませう。代りに、歸つたら顏を見せて下さいよ。私の家は二階住居。但し入口は別々だけれど。きたならしい藝者屋の二階も一寸好いものよ。來て頂戴。

重雄樣　　美津

私が今度出るについて名前を選む時、面白い話があつたのよ。あなたの名前から思ひついて……あゝむしやくしやして筆が動かぬ。よすわ。いづれあとから話すわ。さよなら。若しか――若しやこんなこと言つても急に逢ひたさが込み上げて來はせぬかと、それが心配で心配で〳〵」

と、まあかういふのですが、どうも實に、讀むのも氣がさすやうな情緒纏綿たる手紙なんです……大抵の若い男が、こんな手紙を讀んで、どうして平氣でゐられませう。況んや相手は私です。十年前の見初めから、明治座の茶屋の「ふらふら」になつて、それから今日となるまでには、隨分厭な思ひもして來たものですが、池の端の一件以來、こつちは後悔し切つてゐるのですし、また女が戀しくて溜らなくなつてゐる時ですから、强い酒が一時に廻るやうに、私はもうぼうつとしてしまひました。

實に醜態ですが、何とも致し方がないのです……私は直ぐと返事を出して、もう爲事などはどうでも好い。一刻も早く會ひたいから、東京へ歸る。併し、家を訪ねるのは、近所の手前もどうかと思ふから――やつぱり、私は見え坊だつたのですね――どこかよそで會ひたい。それには、いろいろそつちの都合もあらうから、君の方で場所をきめて貰ひたい……

といふやうなことを言つてやつたものです……

女からは直ぐと返事が來ました――それが又直截鮮明で、極めて事務的なところが面白いから御紹介しますが、書き出しから、いきなりかうなのです――

「山城町に春山といふ待合があります。(電車の通る堀端に)そこへ來て下さいまし。もう一軒は築地ののだやといふ料理屋の裏に淀川といふ待合がある。こゝは一寸素人屋のやうな家です。(電話もなんにもない家)どちらにしても私から先づ案内をして置かなければならぬから、きつと東京へ著いたら電話をかけて下さいよ。電話で打ち合せませう。但し、その外、お差合がなければ、竹芝でも宜しい。きつとですよ。電話をかけそこなつたら家へ一寸寄つて下さい。下の人によく〳〵申し含めて置きますから。家から御一緒に出ませう……」

先づ、かういつたやうな手紙なのです。私はもうすつかり藝者の間夫か何かになつたやうな心持で早速、明くる日東京へ歸つたものです……

十一

勿論、藝者屋町へはひつて、美津江の家を訪問する勇氣はありませんでしたから、兩國へ著くと直ぐ電話をかけました――電話の番號は豫め手紙で承知してゐたのです……

電話の打ち合せで、場所は第一の春山、時間はその晩の九時といふことになりました――女は約束を稼いで來てから、私に會はうと言ふのですね……愈藝者の間夫ですな……實際、私はそれまでに一度も經驗のないことなので、かう、なんだか身内がぞくぞくとしたものですよ……

それから、原稿の書きかけに著換へを一二枚入れた小さな鞄をぶら下げて、東京市中をあつちこつちとぶらつきながら約束の時間の來るのを待つて、時計が九時を指すと同時に、その春山といふ家へ飛び込みました……

茶を飲んで、菓子を食つて、尾竹國觀の一軸を眺めて、四十分ばかりぼんやり待つてゐるとやつと女がやつて來ました――潰しに結つて、白襟で、裾を引いて……

私は始めて、この女の藝者姿を見たわけですが、初めはなんだかそれが假裝のやうな氣がして爲方がありませんでした。併し、元々出がそれなんですから、今までとはまるで違つた味で、ちよいとまた妙な氣になりました……

「なんですねえ。不景氣な。待合へ來てお菓子を食べるなんて……」

女は「暫く。」もなければ「今晩は。」もなしで、いきなりかう言ふかと思ふと、直ぐ手を叩いて酒を呼ぶのです……女はもう大分廻つてゐる樣子で、時々目を据ゑては、ぢつと私の顏を見るのです……

「どうしたの……痩せたわねえ……一體、神經を使ひ過ぎるわ。」

女はかう言ひながら、ぴつたり體を寄せて、私の側へ坐つたものです……

「でも、僕が悪いんだから爲方がありません……全く、僕が悪いと思つてゐるのです……」

私がかう言ふと、女はとろんとした眼で私を睨みつけるやうにしながら、

「いいえ、なんにも悪いことはないわ。悪いのはあたしよ。あたしがみんな悪いんだわ、でも、寂しいんですもの。」

と言つて、私の手をぎゆつと締めたものです……

こなひだからのいきさつも、もうこれで一件落著で……勿論、その晩はそれなり泊り込で變なことになつてしまひましたが、湯ケ原の時から見ると、もう双方の氣持がすつかり解け合つてゐますから、私はもうその晩一晩ですつかり女の俘になつてしまひました——

それからはもう毎晩のやうに、女に會ひました。芳町の方などは忘れてしまつて、毎晩のやうに、あしたの約束をするのですね。女の方も可なり夢中で、この分で行つたら、末はどうなるだらうと危ぶまれるくらゐでした。

度々で御迷惑でせうが、その時分の手紙で、もう一通殘つてゐるのがありますから、ちよいと讀ませて下さい——

「先日は失禮。ゆうべ家の前まで入らしつたのですつてね——まあ殘念なことをしましたね。尤も私はまだ座敷から歸つてはゐなかつたけれど——私の所へ先月三十一日から金澤の踊の師匠が孫を連れて、踊の仕入れに來てゐるの。この暑いのに——この狹いのに——毎日朝から稽古で——大分うだつてゐるわ——ゆうべは逢ひたかつたね。なぜ春山へ寄つてくれなかつたの。煙草屋の金ちやんに頼んで、たうとう「港」を手に入れました。あゝ、なんだか生れぬ先きのあなたを見てゐるやうな心持がする。讀んでゐると、一種言はれぬ寂しさに襲はれるのね。私は自分の孤獨といふことが、ます〳〵明かに見えて、ます〳〵切實に感じられて來た——「港」を讀んだ爲に。あゝ「港」の主人公に逢ひたい。逢つて見たい。あんな質朴な、妙にひねくれた、可愛らしい、無邪氣な、小膽な美しい神經がむやみとはたらく、それで情が放縱で、ことに氣に入つたのは、一番初めの對話ね。あれが好い。オホホホ御免なさい。

湯から歸つて認む

藝名 富次

山本 様

——と、かういふのです。「港」といふのは私の短篇集で、「富次」は美津江が藝者にたつてからの名なのです……

女が可なり精神的にも參つて來てゐたことが、これでも分

かるでせうと思ひます。併し、私はさういふ方面のことに就いては、もう相當玄人になつてゐましたから、千葉で貰つた手紙ほど、かういふ風な手紙には動かされませんでした……動かされないどころではなく、寧ろ「甘いもんだ。」と感じました——初めは女の理解を喜んだ私も、その理解の程度が知れて來ると、急に厭氣がさして來ました……

十二

女はだん〳〵狎れて來るに連れて、いろいろ自分の過去の話を始めました——

自分が蠟燭屋の娘で、小さい時には、よく心を通した竹の棒に、厭な匂のする蠟を塗らされた話——お父さんが酒飲みで、木村といふ藝者屋へ賣られてから、富江と名乘つて出て、一人前の藝者となるまでの、死ぬやうな苦しみ——それまでにも、二つや三つの戀はあつたが、それから先きの自分の人氣——踊を習つてゐる東京の踊の師匠に惚れられる話——箱屋に惚れられて、それに髪の毛を切られる話——中學校の先生が夢中になつて通つて來て、しまひに縣を追はれる話——軍人同志が競爭になつて、二人とも免職になつた話——勿論その間に幾度か旦那がついて、商賣をやめたり、又出たりする話——

中でも自慢らしく度々したのは、縣知事か何かのお妾になつて、一時は自分もその屋敷へはひつてお嬢さん達の家庭教師を勤めたといふ、嘘のやうな話でした……

それから、或不良な學生に夢中になつて、方々に不義理が出來て、たうとう土地にゐられなくなつて、東京へ飛び出す話から——役者を志して米八の弟子になり、それに連れられて新派の一座へはひるまでの長い話——川西との一件から、その新派にもたうとうゐられなくなつて、寄席へ出たり、手品の一座へはひつたりした揚句、はからず旅先で會つた昔の旦那の好意で、また東京へ舞ひ戻つて專心踊の稽古をするやうになつたいきさつ——女はいつも飽きずに繰り返し繰り返しおさらひをするのでした。

川西の一件については、私もその昔女の薄情を憤慨した一人でしたから、隨分突つ込んでいろいろと訊きました。併し女の言ふところに依ると、罪は少しも女にはないのです——

「あの人との關係は初めから無理でしたわ。初めから向うが間違つてゐるんですもの……欺してあたしを自分の家へ連れ込んで、ウイスキイであたしを盛り潰して、手足も利かないやうにどろどろにして置いて、手込にしたのが始まりですもの……言はば强姦も同然ですわ。ですから、一緒に住むやうになつたつて、ぢきと厭になるのは當り前ですわ。世間ぢやあ、あたしのことを不人情だの何だのつて言ふけれど、あれはあたしが正當な復讐をしただけのことですわ。ですから、

御覽なさい。今ぢやあ、あの人の方が世の中へ出られなくなつてしまつたぢやありませんか。あたしの方は、兎にも角にも、かうして都で生きてゐられるのに……」

まあ、かういつた話をするのでしたが、どうも私にはそれが信じられないのでした——

「でも、川西は女形としてあの時分相當に人氣もあつたし、それまでの君の生活から考へて見ても、生娘かなんぞのやうに、男の要求を却けるといふことは、ちよつと考へられないがなあ……」

私がこんなことを言ふと、女はいつも向きになつて、

「でも、あの人だけは、實際あたし嫌ひだつたわ。あんまり一本氣で氣味が悪いんだもの……」

「一本氣結構ぢやないか。ぢやあ、君は浮氣者が好きなのかい。」

「浮氣者なんか大きらひよ……」

「だつて、僕なんか、その浮氣者の方だぜ……」

「あなたは別よ。あなたの浮氣者なことは、あなたに會はない前から知つてゐたわ……だから、あなただけは、いくら浮氣をしても、あたし腹が立たないわ……」

「ほんとにさうですか……ほんとに浮氣をしても構ひませんね。」

「ええ、構ひませんとも……あたしさへ捨てなけりやあ。」

「よし、それぢやあ、これから浮氣をしますよ。」

私が冗談のやうにして、話をこんなところまで持つて行つたのには、狡い考へがあつたからで、私はもうその時分、大分美津江に厭氣がさしてゐたので、そろそろ他の女が探したくなつてゐたのです……

厭氣がさした原因は、女の文學好きの底が見え透いて來たのも、その一つでしたが、それよりは女が話した自分の過去の話ですね——いつも男に惚れられて、自分はその男を振つたといふやうな話——それが、ひどく自惚に滿ちたもので、少なからず私の反感を買つたのですね……

「人を莫迦にしてやがらあ。なんぼなんでもあんまりうぬぼれが過ぎらあ……」

氣の早い私は直ぐとさう思ふのでした——その癖、自分も昔はその惚れた一人でしたのに——

「好いから、女の前でうんと勝手な眞似をしてやらう。それでも、女が怒らずにゐれば、ほんとにおれに惚れてるんだが、若しさうでなければ、惚れちやあゐないんだ……」

隨分勝手な理窟をつけたものですが、それでも、その時分の私としては、大眞面目で、何か命がけで、未知の世界でも探りに行くやうな心持だつたのです……

私は先づ、女に向つて、私の氣に入りさうな藝者を呼ぶことを要求しました。女は唯々諾々で、それからといふものは、

きつと二人か三人若いのを呼んで見せましたが、なかなか私の氣に入るやうなのは出て來ないのです……結局、いつもしまひには二人きりになつてしまふのが落ちで、女と私はますます悪い關係を續ける……女はいつも勝利を感ずるといふ風でした。

私はそれが口惜しくつて溜りませんでした……

十三

その内に、たうとう私の氣に入つたのが一人出て來ました。

氣に入つたのと言つたつて、何もさう夢中になる程の女ではなかつたのですが、まあ私の趣味に合ふ程度の女だつたのですね。

一體、私は厚ぼつたい女よりは、薄手な女が好きなんです——その時分、夢中になつてゐた芳町の女も、實はその薄手の方でして、まるで丁抹の小皿でも見るやうな感じのする女でした……

新橋で見つけたのも、その薄手の方で、勿論、家は悪いし、不見轉には違ひなかつたのですから、營業も不良で、何處か影の薄いところがあるやうな女でしたが、それでも、今まで美津江が見せた女の内には、そんなのがなかつたので、ちよいと氣を引かれたのですね……

さあ、さう目星をつけると、今度は美津江が邪魔になつて來ました。美津江の世話になるとか、美津江に周旋されるとかいふことが厭になつて來たのですね……

一時は、美津江の前でうんと勝手な眞似をしてやらうと思つた私も、さうなると、やつぱりそれが出來なくなつてしまつたのですね……

やつぱり、人間は見えがあるのですね……それに、そんなことをして、ほんとに嫌はれてしまつたら困るといふ未練も手傳つてゐたのですね……

私は始めて見た時、直ぐこの女ならと思ひましたが、美津江の前では、やつぱり氣に入らないやうなことを言つてゐました。そして、それから二三日して、美津江には内證で、春山へ出かけて行きました……

春山の女中にお花といふのがゐて、それが私の贔屓でした。私がいつも美津江の我儘を堪へてゐる樣子が、ひどくお花の同情を引いたのですね……

「あなたも大抵ぢやありませんね。たまには浮氣をなさいましよ……」

お花は美津江のゐないところで、よくこんなことを言ひました。併し、うつかりそんなことに乘ると、どんなことになるか分からないと思つたものですから、なあに、それには及びません。私は美津江で滿足してゐますといふやうな顏をし

てゐたのですが、さて、かうなると、お花の力を借りるより外に道がありません…

「實は、けふは美津江に内證で來たのだから…」

と、言ふと、お花は委細承つたといふ顔つきをして、

「お氣に召したのがありましたか。」

と言ふのです。

「をととひ來た小萩といふ若い妓ね…」

「まあ…それぢやあ、やつぱりあたしの思つてゐた通りだわ…あたし、きつとあれならお氣に入るだらうと思つてゐましたわ。」

さう言はれると、私も嬉しくないことはないので、

「さうかい…實は、あれが氣に入つたんだ…富次はあんなことを言つてゐるけれども、やつぱりさうなりやあ氣まづいだらうと思つてね。それで、内證で君に頼みたいんだ…呼んでくれるかい。」

「ええ、ええ、呼んで差し上げますとも…あの子も是非もう一度お目にかからしてくれなんて言つてゐたんですもの…先生、お奢りなさい。」

「冗談ぢやない…まだ、どうなるか分かりやあしないのに。」

「大丈夫ですよ…向うが夢中ですわ。」

お花はうんと油をかけて立つて行きましたが、やがて直ぐ又上がつて來て、

「直ぐ伺ひますつて…どうです。あたしの言ふことに間違ひはないでせう。」

「直ぐ來るつたつて…そりやあ、あいてれば來るにきまつてるぢやないか。」

「ところが、あの妓はなかなかさうぢやないんですよ。」

「なぜ。」

「だつて、店こそ悪うござんすけれど、あれで、あの妓は唯の抱へぢやないんですからね。なんでもあすこの家の舊主人のお嬢さんとかで、そこが落ちぶれた爲に預かつてゐるんですから、他の妓はあんなに稼がせる家でも、あの妓だけは、そりや大事にしてゐるんですよ。」

「なんだか分つたものぢやありやあしない。」

「あら、ほんとですよ…疑ひ深い。」

油をかけられてゐるんだとは思ひながら、かう言はれて嬉しくないことはないので、私も何だか變な氣になつて來ました——美津江に反抗して浮氣をする…なんだか、さういつた以上のことがもちやがつて來さうに思はれたのです。

お花は二間續きの奥の離れへ炬燵をこしらへて、そこへ私を通してくれました。

「ここなら、誰が來ても知れつこはありませんから、どうぞ御ゆつくり。」

さう言つて、立つて行つたかと思ふと、間もなく小萩が、その寂しさうな姿を見せました。

「よく來てくれましたね。」

私は相手がお嬢さんだと言ふので、思はず丁寧な詞を使つたものです。

「あたし、お目にかかりたいと思つてゐましたの…けふは富次姐さんは。」

「あれは來ません。」

「あら、どうして。」

「けふは、あなたに會ひたいと思つて來たのですから」

「でも、それぢやあ、なんだか、あたし…」

「富次に悪いとでも言ふんですか。」

小萩は默つて頷きました。

「そんなことはありませんよ…あれはなんでもないんです。」

「でも、あたし、伺つてゐますわ。」

「誰に。」

「お花姐さんに。」

「お花に。冗談ぢやない。あいつの言ふことは、みんなでたらめですよ。」

「でも、あの方は親切な方ですわ。けふだつて、あなたにお目にかからして下すつたんですもの。」

「ぢやあ、富次のゐるゐないは別問題で、あなたは私に會ひさへすりやあ、それで好いんでせう。」

私も、この邊へ來ると、可なり圖々しくなつたものです——それと言ふのも、美津江の教育が好かつたからで、その點は美津江に感謝しなければならないかも知れませんね…

「ええ、ですけれど、なんだか富次姐さんに悪いやうな氣がして…」

お定まりですが、もうここまで來ればこつちのものです…

勿論、私は小萩とをかしなことになつてしまひました。

その晩、寢物語に聞いた小萩の不幸な半生——それも、私の心を動かしました。お花の言つたこともまんざら嘘ではなくて、小萩は東京でも有名な或紙問屋の一人娘でしたが、父親が人に勸められて株へ手を出したのが、財産の傾く始めで、しまひには有價證券僞造といふやうな罪名で入獄の憂目をさへ見るやうになつたのだと言ふのです。その時分、店にゐた番頭で道樂に身を持ち崩したのが、今新橋で小萩のゐる家の主人なのです。品行の悪い男ではありましたが、ひどい主人思ひで、落ちぶれた小萩がお母さんと一緒に淺草の吉野町の裏店に住んでゐることを人傳に知ると、直ぐ飛んで來て、兎も角も小萩だけを預かつて來たのださうです。藝者になつたのは、全く小萩自身の意志から出たことで、決して强ひられ

たのではないといふ話なのです…。

「…お母さんは反對でしたが、みんなが働いてゐるのに、あたし一人が遊んでゐるのは濟まないと思つて、たうとう藝者に出ることになつてしまひましたのよ。でも、主人は好い人で、決してあたしに無理なことはさせませんのよ。けふは厭だと思へば、お座敷へ出なくつても、何とも言ひませんの…。」

私は小萩のこの詞を全部信ずるわけには行きませんでしたが、それでも半分以上はほんとだらうと思ひました。

「それぢやあ、こんなに長くここにゐたら、家で變に思はれやしませんか。」

「いいえ、きつとお花姐さんと話でもしてると思つてるでせう。お花姐さんと仲よしなことは家でもよく知つてゐますから…。」

そんなことで、たうとうその晩は十二時過ぎになつてしまひました…。

十四

それからといふものは、三日に上げず、美津江に内證で小萩に會ひました。芳町の方は芳町の方で、勿論うつちやつては置けず、美津江には美津江で一週間に二度や三度は會はないと御機嫌を損ねるのですから、その間にかうした惡事を働く私の忙しさつたらありませんでした…。

その内に誰がしやべつたのか、このことが美津江の耳にはひりました…。

美津江は前に私に言つたことがありますから、怒るにも怒られないといふ立場にゐましたが、それでも時折ちくりちくりと針を刺しました…。

「大層氣に入つたのが出來たつてねえ。おめでたう。でも、あんまり初心なのを欺すのは罪だからおよしなさいよ。」

そんなことを言つてゐる内はまだ好かつたのです。

「人があんなに親切に言つてやつてるのに、自分勝手でそんなことをして、今にひどい目に會はしてやるから好い、お花もお花だ。あんな蟲も殺さないやうな顏をしてゐて、人の大事な男に他の女をあてがふなんて…。」

やがて、醉ふと、こんなことを言ふやうになりました。

併し、それは口だけのことで、格別私に辛く當るやうなこともありませんでしたし、お花に會つても機嫌の好い顏をしてるのです。勿論、小萩に迫害を加へるやうなことは全然なかつたのです――やらうと思へば、隨分出來たのでせうが…。

さあ、これがこの女の分からないところで、前のお時の場合だつてさうですが、私がお時に氣のある樣子を見せたつて格別お時を憎むといふやうなことはないのですね――つまり

嫉妬といつたやうなものがないのです…。

併し、本當に惚れてゐるなら、他に女が出來れば、その女を憎むのが當然で――よし、それが男の方から出たことであつても、男は憎まないで、女を憎むのが常式ですから――それが憎くないといふのは、本當に惚れてゐない證據だと、まあ言へば言へるのです…。

勿論、私は初めから美津江に對して、眞實の戀などといふものを要求してゐたのではありません。やむを得ずこんな關係にまでなつてしまつたものの、以前舞臺で見た時分の戀はもう疾うに醒め切つてしまつてゐるのですし、一時の好奇心が過ぎてしまへば、あとは言はばお勤めで、現在の關係をも決して有難いとも辱けないとも思つてゐるのではありません。又向うにしたつて、自分の年をとつてゐることは自覺してゐるのですし、私に深い女のある事は初めから承知の上で掛かつて來たことですから、是が命をかけての戀でも何でもないことは、初めから分り切つてゐるのです…。

それでゐて…それでゐて…やつぱり、かうなると、不滿足を感じるといふのは、どうしたわけのものでせう。自分がさういふ態度、女がさういふ態度だといふことを承知してゐながら、自分が他に女をこしらへて、それで平氣でゐられるといふのが物足らないのですね。嫉妬を要求するのですね。眞實の戀らしいものを求めるのですね…人間といふものは、やつぱり慾が深いのですね…。

併し、それだけ私の方が純眞で、女の方が腐つてゐたのかも知れません――まあ、せめて、さう思ひでもしなければ、自分で自分が厭になりますからね…。

さうは言ふものの、女の方でも決して内心愉快ではなかつたのでせう――窃に私に對して復讐の手段を講じてゐたらしいのですね――尤も、その復讐といふのが、今の眞實から出たのではなく、謂はば「いぢめてやれ」といつた態度だつたことは分かつてゐますが…。

一體、私はこれが自分の本當に惚れた女だとなると、その女にどんな男のどんな噂をされても不愉快になる質の方の男なのですが、この美津江といふ女は、つきあひ始めた時分から、いつも平氣で他の男の噂をするのです。しかも、それがいつも唯の噂ではなくて、きつと惚れたのはれたのといふ話なのです…。

今言つたやうな關係でしたから――それに、これもこの女の技巧の一つなのだなとも思つてゐましたのでー――私も平氣で聞き流してゐましたが、これが、若し眞底惚れてゐる女だつたら、私は決して許しはしなかつたのです…。

それが、この小萩一件以來、益烈しくなつて來たのですね。

やれ、誰々は文章がきびきびしてゐて心持が好いとか、やれ誰それは苦味走つた顔をしてゐて氣に入つたとか、それが、みんな私の友達だの先輩だのことばかりなのです。

なんだか、私以外の男はみんな作物が巧くて、みんな好いたらしい人間のやうに言ふのですね…そりやあ、私にだつて自惚はありますから、さう言はれて愉快なことはありません。

小萩の一件を平氣で見てゐられただけでも、好い加減厭氣がさしてゐるところへ、又これなのですから、私は愈不愉快になりました。

こんな關係をいつまでも續けてゐた日には、とても溜つたものぢやあない。これぢやあ、何のことはない。まるで弄ばれてゐるやうなものだ。態の好い男妾だ…私のやうなものにも、少しは人間らしい性根がありますから、つくづくこの關係が厭になつて來ました。

かてて加へて、私は芳町の方の女に對してほんたうに濟まないといふ氣になつて來ました。苟にも將來を約束したやうな女があるのに、たとひ一時の好奇心からでも、かうした關係を持續することは罪惡だと感じて來たのですね…

芳町の女は私を信じ切つてゐましたから、美津江との關係も萬々承知してゐながら、知らん顔をして、何一つそれに就いて口を出したことはなかつたのです——嫉妬にも値しない「いたづら」だと思つてゐたのでせうね。私もこれには一言もありませんでした…

私がさういふ氣持でゐるところへ、美津江の方はだんだん烈しくなつて來て、やれ誰を周旋してくれとか、誰を取り持つてくれとか言ふことを、平氣で私に言ふやうになりました。

私も、實はお荷物になつて、困つてゐるところですから、誰か他の人が引き受けてくれれば、これに越したことはなかつたのですが、さて、こんな女をどうして自分の友達だの、自分の尊敬する先輩などに周旋することが出來るでせう…

ところが、その内に、しあはせにも、この人なら好いだらうといふ相手が出て來ました。

それは、御存じでもございませう。細川紫峯といふ私の先輩で、年は私より二つか三つ上なだけでしたが、もうその時分には私よりずつと大家で、書くものは巧いし、藝はあるし、器量は好いし、それでゐて金があるといふのですから、大抵な女が心を動かすのも無理はありません…

ところが、この先生、遊蕩にかけては、天下に名を賣つた人で、なかなか私のやうな雛つ子の及ぶところではありません。何しろ、十三の時に淺草の矢場通ひをしたのが始まりで、それからといふものは、女中、看護婦、近所の娘、それからおいらん、藝者と進んで、およそ先生の手に掛からない種類

の女はないといふわけなのです…

その時分の、先生の人氣といふものが又たいしたもので、何しろ外國の文學には通じてゐるし、それでゐて日本の江戸時代の文藝も詳しいし、小説がうまくて、脚本がいつも當つて、隨筆がまた類と眞似手のないあく抜けたものだつたのですから、文學好きの美津江が一苦勞して見たくなつたも尤も至極で、女は前から先生の噂を幾度となくしてゐたのですが、その時分になつて、一層又それが烈しくなつたのです…

「一度會はしてね…お願ひだから…どんなことでもするわ…御馳走でも何でもするわ…あたし、先生の「聖天下」ね。あれにすつかり感心しちまつたの。あの、留吉つていふかざり屋の息子ね。あの人の心意氣が嬉しいわ…」

先づかういつた調子なのです。細川氏のほんとの豪いところも何も分かつてやしないんです。唯世間の人氣に押されてわいわい言つてる程度なのです。この女の文學通が當てにならないことは、もう私も知つてゐましたから、そんな詞を聞いても、もう何とも思ひはしませんでしたが、相手が細川氏なので、私もちよいと考へました…

こりやあ、好いかも知れない…相手が細川氏で、この女がこれなのだから、會へば、きつとすぐどうにかなるに違ひないが、細川氏なら、きつとこの女を手玉に取るに違ひない。私のやうに、この女に引つ掛かつて、少しでも苦しんだり困つたりするやうなことはないに違ひない…詰まり、細川氏なら、この女を世話しても、あとで怨まれるやうなことは決してないと思つたのですね…

こつちも、實はさういふ相手を探してゐた時ですから、先輩の細川氏に對しては誠に濟まないわけだが、女もそれを望んでゐるのだし、細川氏にしても、また何かの材料になるまいものでもないと思つたので、一つ紹介して見ようといふ氣になりました…

「どうも、併し、紹介すると言つたつて、茶屋小屋で四角張つてやるんぢやあ、あの通人のことだから厭がるだらうし、こりやあ、何だ。君の家へ引つぱつて行く方が面白いかも知れない。」

私は道樂者の細川氏を喜ばせるには、これに越したことはないと思つて、こんなことを言ひ出して見ました。

すると、女の方もすぐそれに乘つて、

「まあ、嬉しいわねえ。でも、あたしの家見たいな汚ないところへ來て下さるかしら。あの方は神經質で、それは綺麗好きだつて言ふぢやあないの…」

「それはさうだが、遊びとなれば、また格別だよ。もう一流のところには飽きてしまつて、岡場所岡場所と探して歩いてゐるやうな人なんだからね…」

「まあ、厭だ、そんな道樂者なの…」

女といふものはかうまでなつても、まだかういつた見えが言ひたいものと見えますね…

私はさう言つてやりました。

「それは初めから分かり切つてるぢやないか。あの人の豪いところは、徹底した道樂者だといふ點ぢやないか。あの人の作物を讀めば、すぐに分かることだ。そこへ行くと、僕なぞはどつちつかずで態度極めて不鮮明だ。それは、はつきりまだ人生といふものが摑めてゐないからだ。情ないと思つてゐるくらゐだ…」

こんなことを言ふと、女はすぐ感心をする質ですから、

「成程、さう言へばさうねえ…あなたは全く徹底してゐないわ。」

と、それは好い氣なものなんです。

「ぢやあ、それで好いんだね。君の家へ連れてつて好いんだね。」

と、確めるやうに私が言ひますと、

「結構よ…待つてますわ。」

といふわけなんです。

十五

或晩、私は友達の北川と、それから細川氏と、三人で飯を食つてゐましたが、丁度好い機會だと思つて、美津江の話を

銀座のカフエエを一二軒歩いたりして、時間を消して、丁度十二時を少し廻つた時分に、美津江の下宿をしてゐる家の前へ出たものです。

「もう二階のは歸つてゐませうか。」

私がかう訊きますと、下の婆さんが、

「へえ、もう疾うにお歸りになりました。」

と言ふのです。

途端に、聲を聞きつけたのか、二階からばらばらと美津江が降りて來ました。

「まあ、どうしたのよ、早くお上がりなさいよ。」

女は大分醉つてゐるやうな樣子なのです。

「お連れがあるから…」

と、私が言ひますと、

「だれ…どなた…好いから、皆さんでお上がりなさいよ。丁度、今寢酒を一本つけたところだから…」

と言ふのです。

「實は細川先生に來て頂いたんだ。」

と言ふと、

「まあ、嬉しい…」

と、女は飛び上がつて喜びました。

私も一度は一緒に上がつて、正式に引き合せようかとも思つたのですが、相手が横暴な女のことですから、私の目の前し始めました——斷つて置きますが、その時分細川氏は美津江と私との關係をまるで知らずにゐたのです。

「…隨分荒み切つた女ですが、ちよつと變つたところのある女です。どうです、一度會つて見ませんか。」

私がこんなことを言ふと、

「噂には聞いてゐたが、そんなに面白い女かねえ。一度會つて見たいものだ。」

「ほんとに會つて見ますか。」

「會つて見ても好い。」

「それぢやあ、今夜すぐ御案内しませう。」

「今夜すぐとは短兵急だね。」

「十二時頃、先生が座敷から歸つた時分を狙つて、先生の家へ押しかけて行くのです。」

「何だい。家へぢかに行くのかい。」

「家つたつて、人の家の二階を借りてるんですから、誰もゐやしません。少しも遠慮は入らないんです。」

「そいつあ面白いねえ。」

と、心が動いて來た樣子なのです。そこへ持つて來て、私の友達の北川といふ奴が、また奇を好む奴でしたから、側から何のかのと言つて油をかけるのでせう——好い鹽梅に、細川氏すつかり行く氣になつてしまひました。

それから、その料理屋を出て、藝者屋町をぶらついたり、で、どんなことを始めるか分からないと思つたので、こいつは細川氏だけ置いて自分達は歸るに若かずと思つたのです。流石にそれを見るのは、私も辛かつたのですねえ…

「ぢやあ、先生にだけ上がつて頂くから、宜しく賴むぜ…僕達はこれで失敬するから。」

「君、それは困るよ…僕一人置いて行つちやあ。」

細川氏がかう言つて、私達のゐる方へ來ようとするのを、私は北川と一緒になつて押し返して、無理に家の中へ入れてしまひました。そして、半分明いてゐる表の雨戸を外からぴつたり締めてしまひました。

それから、一町ばかり逃げて來て、暫く樣子を見てゐましたが、それなり美津江の家はひつそり閑としてゐるのです。

「大丈夫かしら、うまく納まつたかしら。」

「相手が細川さんだ、こんなことに驚く人ぢやない。きつと巧くやるよ。」

二人はこんなことを言ひ合つて、それなりよそへしけ込んでしまひました…

十六

その晩が始まりで、仕組通り、美津江は細川さんのものになつてしまひました。

私はやつと自分の肩が拔けたので、その點は有難いと思ひ

ましたが、自分と美津江との今までの關係を、つい言ひそびれてしまつたのも氣になりますし、若しや細川氏が迷惑をするやうなことがあつては惡いと思つて、內心びくびくしてゐましたが…

そこは、やつぱり細川氏で、さすがの美津江も私に對してとつたやうな態度はとれないでゐるやうな樣子なのです…海千山千の美津江も、柔かな調子でゐて、その癖腹のしつかりしてゐる細川氏にはどうにも我儘の出しやうがなかつたのですね…

美津江は一時別人のやうなおとなしい女になつて、ひたすら細川氏の機嫌をとつてゐたやうですが、その內に持前の橫暴が又によきによきと出て來ました…

何でも、細川氏に他に隱してゐる女があるとか何とか言ふので、西洋料理屋か何かで、人の見てゐる前で細川氏の襟上をこづいて、たうとう襦袢だかシヤツだかを破つてしまつたと言ふのです…勿論、それが芝居なことは分かり切つてゐますが、細川氏はその芝居の型が餘りに古過ぎると言つて怒つたらしいのです…

「苟も我輩の女なら、もう少し新樣式の芝居が見せて貰ひたかつた。あんな芝居で動かされちやあ師匠のモオパツサンに濟まねえ…」

まさか、そんなことも言はなかつたでせうが、兎に角、他に二人や三人女があるからつて、ぐづぐづ言ふやうな女ぢやあ話せない。世間の噂ぢやあ、もう少し意氣な女かと思つたら、あれぢやあ、まるで女學生だ…

そんなことで、細川氏は綺麗に女をうつちやつてしまつたのです…

女はまだ十分未練があつたので、これには聊か參つたらしいのです。どうかして、捻を戻さうとして、いろいろ奔走したらしいのですが、たうとうだめでした。

私は痛快を叫びましたね…

十七

ところが、その痛快が痛快で終らなくなつてしまひました。

どう考へても、私の役廻りは三枚目ですねえ…

私は美津江と手を切つてから、少しまじめになつて、もう小萩にも會はなくなりましたし、春山へも行かなくなつたのですが、分からないのは春山の勘定で…勿論、これは男として私が拂ふべきものには相違ないのですが、初めが女にひつぱられて行つたやうなわけですし、毎月の末になつても帳場で何とも言はないものですから、そこは自惚で、美津江がどうにかしてくれるんだらうぐらゐに考へてゐたのです——尤も、その時分、私の懷も決してよくはなかつたのですが…

何でも、細川氏との關係が愈だめになつたと聞いてから、間もなくのことでした。美津江から私に當てて、こんな手紙が來ました——

さぞ近頃は御多忙で入らつしやいませう。春山から勘定書が廻つてゐます。振つた見染の一幕、好紀念のあの晩ですから、懷しい思ひ出にもなるだらうとお察し申して、わざとお屆いたします。新橋村をも御領分に遊ばされた努力の程、かんしんかんしん。おめでたう。

富　次

山本先生

かういつた手紙なのです。人を莫迦にしてゐるぢやありませんか。

まあ、それもよござんす。それも好いが、その勘定書といふのが、決して一枚や二枚ではないのです——美津江の文句に依ると、小萩と始めて會つた時の勘定のやうですが、それもどつちかと言へば美津江が勝手に呼んだわけなので、それから內證に會つてゐた間の勘定は私が自分でしてゐたのですから、今更こんなものを持つて來られる道理はないと思ひました…

けれども、金錢のことで爭ふのは厭ですし、實を言へば女に拂はせるといふのも恥辱な話なのですから、その勘定の性質がどうであらうと、私は引き受けてやらうと決心をしました。

併し、その時分、私は芳町の女のことで、大分懷が苦しくなつてゐましたし、半分は癪にも障つてゐるんですから、拂ひさへすれば、それで好いんだらうぐらゐなことで、つい延び延びになつてゐますと、又しても美津江からかう言つた手紙が來るのです——

扨毎々おうるさくもおぼしめされんが、例の春山よりやかましく催促參り、私もほと〳〵困り入候。實は私よりお立て替へ致し置度存候も御存じの何もかも遣り繰りにて、その日その日を稼ぎ居候ことにて、とても今のところ、見せたくも見せられぬ、ない袖。御推察願上候。それに引きかへ、あなたは多方面に御努力、唯々御精力の程驚入候。從つて御收入もおびたゞしく有之べく、何卒春山の分ぐらゐは左樣にお延ばしなくお拂ひ被下度、この儀伏してお願申上度…

これぢやあ、拂ふ氣でゐるものも拂へなくなるぢやありませんか…どうも、色男も、かうなつちやあ散々ですね。あんまり癪に障つたんで、今度はほんたうにうつちやつて置きますと、たうとう終に家へ押しかけて來て、私のお袋から金をとつて歸つて行つたものです…お蔭で暗闇の恥が明かるみへ出る…お袋にも好い加減油をとられましたよ。

どうも長々詰まらない話をしましたが、私もこの美津江といふ女にはひどい目に會ひましたよ――しかもラストシインが勘定の催促と來ちやあ、お話になりません…

まあ、あの女は何でせうね。かう、男の頭を一人一人踏んづけて世を渡つて行くのでせうね…丁度、踊で足拍子を踏むやうに。

あの女は踊ぢやあ名取ださうですから、足拍子もまんざら緣のないことはありませんよ。

おほきに御退屈でした。

堀田の話

私のよく知つてる新俳優の候補生に堀田靜といふ男があります。これがまだ役者にならぬ前の話だと言つて、こなひだ話した話が、如何にも面白いと思ひましたから、今日は一つそのお話をいたしませう…話は面白いんですが、辯が下手ですから、どうか「言外の意味」とかいふものを十分お汲み取り下さいまし…と言つて、決してこの話の中から、へち嚴しい道德律を引き出せの、教訓を探し出せのと言ふのではありません――唯よく世間で一概に亂暴な話だとか、暢氣な話だとか、滑稽な話だとか言つて、「アハハ」と笑つて濟ましてしまふやうな話でも、一皮奥へ探り入つて考へて見ると、亂暴とはまるで反對な、暢氣とはまるで反對な、滑稽とはまるで反對な意味が伏在してるものだと言ふだけのことです…

大層前置が長くなりました。

この堀田といふ男は横須賀の人間です。御存じの通り、あすこは軍港のことではあり、土地の極狹い所ですから、隨分ごたごたしてをりますが――「船の者」と「地の者」――住んでる人種は先づこの二種類に大別が出來るんださうです。「船の者」は勿論船員のことで、この方の人は始終出たりはひつたり忙しい生涯を送つてをります。

「地の者」は卽ち横須賀根生ひの人間で、これが又盛にみんな働くんださうです。先づ子供などでも學校へ遣らなければ造船所へ遣るといつた風で、ただ遊ばして置くやうなことは決して致しません――内の人も外から來た人も一人として遊んでる人はないのです。みんなあの狹い港の中であつちへ揉まれこつちへ揉まれして働いてゐるのです…

その活動してゐる港町の中に若い道樂者の一團隊がありました。學校へも行かず、造船所へも行かずに、朝から晩まで遊んで歩いてゐるといふ連中です。勿論ああいふ土地の事ですから、寄席や芝居がありましたところで、氣の利いたものは滅多にかかりは致しません。ですから、この連中は「寄席でもねえ。」「芝居でもねえ。」で、多く稽古所ばひりをしたものださうです――そして怪しげな歌澤の一くさりでも唸つて大に粹がつてゐたといふものです…

堀田はこの連中の一人でした――なんでも當時十八か九だ

と聞きました。

堀田などはその仲間の内でも生意氣な方で、凡そ横須賀中で知らない人はないといふ位に顔の廣かつた者ださうです。寄席藝人は勿論、踊や唄の師匠、職工から遊び人、さうかと思ふと友達の家の二階に下宿をしてゐる海軍の將校ともつきあふといふ風ですから、飛白の著物を著て小倉の袴を穿いてゐるかと思ふと、半纏著の尻つこけ帶で歩いてる事もあるといふ始末です。餘り風態の變化が激しいので、なんでも一時探偵に跟けられたことがあるさうです。すると、その探偵とすぐ懇意になつてしまつて、その明くる日はもう探偵の家へ遊びに出かけるといつた風です——先達今堀田の出てる東京の或芝居へ、その探偵の弟の船員をしてる人が見物に來て、樂屋へ使ひものなどをしてくれたとか言ひます——なんしろ、まあ、わけの分からない滅茶苦茶な男だつたのですねえ……自分でもさう言つてゐました。

その時分、この堀田の連中が、よく「柏木田へ行く。」「柏木田へ行く。」といふ事を申したものださうです——柏木田といふのは、あすこの遊廓のあるところです。十七軒しかない小さなとこなんださうですが、堀田の連中にとつては、そこがこよない極樂でも天國でもあつたのです。

堀田も金があるといふ程の身分でも無かつたのですが、根が臆面なしですから、人に御馳走で連れて行かれても、決してびよこびよこなどはしないで、寧ろ尊大に構へてるといふ風でしたから、どこへ行つても、好いとこの息子さんだらう位には思はれたものださうです——それに堀田の姉が藝者をしてたものですから、姉に勸めて姉の旦那を引つぱり出さしたりなどして、それに自分の兄貴と自分とが附いてつて、構はず大騒ぎを遣るといふやうな事が度々あつたんで、すつかり顔が好くなつてしまつたんです。

なんでも堀田の買つてた女とかいふのは、その當時もう三十位だつたとか言ひます——堀田は十八か九ですよ——お職を張り通してゐて、隨分金持な女だつたさうです。

で、よく勘定が足りなくなると、堀田は女から金を借りたものださうです。けれども次に行く時は前に借りただけはきつと持つてつて返して來る、そして又新しく借りて來る、又それを返しに行つて、又新しい借りを拵へて來るといふ風でしたから、割合に厭がられもせず、だんだんに近しくなつて參りました。

その内に女は體が惡くなつて、入院をしました——なんでも二月ばかりはいつてゐたとか言ひます。すると、堀田のお袋が堀田に向つて、「始終行つて世話になつてゐながら、こんな時に見舞に行つてやらない法はない。」つて、五十錢銀貨を一つくれましたさうです。

堀田は早速見舞に出かけました。女に會つて、さて訣を話

して見舞金を出しますと、女は大層喜びましたが、「お志だけで澤山、お金は入りません。」と言つたさうです。すると堀田は「ぢやあ俺が貰つとくよ。」と言つて、お袋の志をお袋に内證で著服してしまひました——無論女には貰つたつもりにしといて貰つて。

それから色々話をして、さて歸る時に、女の枕元に手もつけずに置いてあつた見舞物の西洋菓子を一箱貰つて來たものださうです——見舞物を持つてつた奴がそれを置かずに、人の見舞物を貰つて歸つて來たんです——何でもゴム見たいな菓子だと言つてゐました、多分バナナかマシマロだつたんでせう。

暫くすると、女は病氣が癒つて退院致しました。退院すると、堀田の家へ先達のお禮と言ふので、お赤飯を屆けてよこしたさうです。堀田のお袋は「感心な人だ。」と言つて、大層喜んださうですが、堀田は良心の呵責も受けず、平氣な顔をして、大きな茶碗に六杯とそれを喰べたさうです。

年が明けて、貯めたお金を持つて、女が廓を出て來たのはそれから間もなくだつたと言ひます。

出て來ますと、女は直ぐ堀田の家を訪ねたものです。そして堀田のお袋に會つて、「どうか嫁にしてくれ。」と賴んださうです。けれども堀田には勿論それ程までの考はなかつたことだし、お袋は又年が餘り違ふからといふので、斷つてしまひました——尤も堀田の話に依ると、「べらんめえ、歳が違つたつて夫婦になれねえ訣があるもんか。」位なことは、確に言つたことがあるのです。女はそれを信じて來たのですねえ。

併し、さういつた正直な女ですから、斷られても別に怒りはせずに、「御緣がないんでございませう、致し方がございません。」て、笑つて歸つたさうです。

女はそれから自分の田舍へ歸りました。

その女がゐなくなつてからも、堀田は相變らず柏木田へ出かけたさうです。そして前の女の妹女郎を買つてゐたさうですが、これが又ぢきに引かされて、ゐなくなつてしまひました。

それで暫くその家へ行かずにゐる内に、その家の直ぐ前の家へ行くやうになりました。

この第二の家でも堀田は餘程好いとこの息子と思はれたさうです。始めて上がつた時は例の姉さんのお供でしたが、なにしろ姉を姉とも思はず、姉の旦那を旦那とも思はぬ奴ですから、側から見て居ると、なんのことはない、堀田が旦那で堀田が藝者や取巻を連れて來てゐるやうに見えたと言ひますからねえ。

二度目に行つた時は、友達大勢と一緒だつたさうですが、明くる朝になつて勘定が足りないんです。友達はみんな歸つてしまつて、堀田一人居殘りといふことになりました。

ところが、その日の晩になつても、誰も來てくれません。已むを得ず、もう一晩泊つて、その明くる朝になりましたがやつぱり誰も來てくれません――もう半分自暴になつて、天どんを食つちやあ寢、天どんを食つちやあ寢してゐたさうです。

ところが、その三日目の晩に、自分の寢てた隣の部屋で、大層全盛遊びをしてる奴があります。客の聲は聞えませんが、どうも連れて來てる藝者や何かの聲に聞き覺えのあるやうな氣がします。癪な奴だ。どこの野郎だらう。」といふやうな訣で、堀田がそつと襖の間から覗いて見ると、ばかばかしいぢやありませんか、それが堀田の待ちに待つてる友達だと言ふんです――來てゐながら知らん顏をして騷いでゐたんですねえ。そこで「この野郎。」といふやうなことを言つて、そこへ飛び込んで、又どんちやん騷ぎになつたとか言ひます――さういふ風でしたから、「この人は金がなくともほんとにないんぢやない。」といふ風に、すつかり信用されてしまつたのです――飛んだ信用をされたものぢやありませんか。

ところが、この時この第二の家で堀田の買つてた女は、實は自分の友達が而も自分と一座で以前に買つたことのある女なんださうです。その友達は一度ぎりでばつたり來なくなつてしまつたんだし、その時自分の買つた女は自分も覺えてない位だから向うでももう忘れてるだらう位な考へで、その友達のを自分のにしてしまつたんださうです――さ、それが今の騷ぎでせう、前の女にすつかり見つかつてしまひました。

或晩堀田がその第二の家の格子先へ立つと、その二人の女が兩方から烟管を持つて來たと言ひます。これには流石の堀田も閉口して、頭を抱へて押し上がり、兩方の女に玉をつけて綺麗にこれからは後の女――つまり友達の女――といふことになりました。

こんな餘計な散財をしたので、堀田は始めてその晩その女から金を借りました。女は堀田を金持だと思つてゐますから喜んで貸してくれました。

すると、そのことを前の女が知つて、明くる日後の女に逢つた時に「ゆんべは御散財でしたねえ。」と厭みを言つたものださうです。そこで後の女がむつとして、一日怒り通しに怒つてゐるところへ、その晩堀田が借りた金を返しに參りました。

言はば巧い壺に塡つたので……これから女はすつかり熱くなつてしまひました。

それからといふもの、堀田は隨分女から金をとつたさうです。終には女も怒つてしまつて、態と堀田に馬を引かせるやうなことをしたさうです。さうなると、堀田の方も妙に反抗心を起して、金があつても馬を連れて出て、そして外で拂ふといふやうな事をしたものださうです――それでも何の彼の

と女はやつぱり金を出してゐたのです。

ところが、この女の客で、或商船の船長が一人ありました。船が著いて、この船長が遣つて來ると、この女はもう一切他の客へは出ないことになつてゐました――その代り船長も金は隨分使つたさうです。

堀田はいつでもこの船長が歸つた後を狙つて行つては、女に金を出させたものださうです――ところが或時――もう餘程女を苦しめ拔いた時分です――又いつもの傳を遣つたところが、生憎その時に限つて船長は金を置いて行かなかつたといふので、どうにもならず、大失敗を遣つたとか言ひます。

その頃堀田はふと往來で、以前の第一の家にゐた女に會ひました。女は田舍から又出て來たのださうです。併し、

「相變らずだつてねえ。」

「なあに、その……」

といふ位な極簡單な挨拶で別れてしまつたさうです――間もなくこの女が又第一の家へ出ました。

堀田はそれでも第一の家へ行く氣にもならず、相變らず第二の家の女を苦しめてをりました。

或時、堀田が又「貸してくれ。」を遣りますと、そんなに虐められてゐながら、それでも女は自分の袿から妹女郎の扱帶まで質に置いてしまつて、「今夜持つて來てくれないと、もう店が張れないんだから賴むよ。」と吳々も言つて貸してくれたさうです。

堀田はさすがに氣の毒になつて、その日の夕方早速金を拵へて出かけたものださうです。ところが、これが例に依つて一杯機嫌か何かで出かけたんだから堪りません。計らず第一の家の直ぐ側を通りますと、その又出たといふ以前の女が、大きな聲で「濕情だねえ。」とか何とか格子の中から叫つたものださうです。すると、堀田はもう第二の家の方のことなんかはすつかり忘れてしまつて、「何言つてやがるんでえ。」などと言ひながら、その第一の家へ押し上がつてしまひました。

ところが、もう第二の家でさんざ惡いことをしてるのが、第一の家へも知れてゐますから、さう優遇もされません。その一晩は誠につまらない思をして、入用な金を使つてしまつたさうです。

それやこれやで、もう土地にもゐられなくなつて、たうとう堀田は田舍廻りの書生役者の一座へ飛び込んで、諸所方々と流浪して歩くことになりました。

諸所方々と歩いた揚句、堀田の出てゐる一座が又横須賀へ歸ることになりました。もう時も二年も立ちましたし、元々臆面のない男の事ですから、堀田は平氣で故郷の芝居の舞臺を踏んだものださうです。

その時の芝居は、堀田も外題を忘れたと言つてゐましたが、なんでも北海道を舞臺にした芝居で、或年寄の易者が先生の

娘を養つてると、そこへ金貸が催促に來て大層年寄を苦しめる。すると、易者の隣家に住んでる相撲が出て來て金貸をとつて投げるといふやうなとこのある芝居ださうです——堀田はその相撲をやつてゐたのです。

或晩のこと、堀田はいつもの通り相撲で出て、因業な金貸を「やつ。」と投げて、きつと見えをしながら、ふと土間を見ると、自分の直ぐ目の下に色の眞つ黑な女が、目を光らして、一心に堀田の顏を見てゐました——それが又大勢の客の中でも際立つて黑い顏をした女で、それが目を光らして一所懸命に見てゐるといふのですから、唯さへ好い氣味な筈はありませんのに…堀田は更に驚いた事があるのです。

この色の黑い女は堀田が柏木田へ行く時分、第一の家で買つた女でした——病氣見舞に行つて菓子を貰つて來た——嫁にしてくれと話のあつた——田舍へ行つた——それから又元の商賣になつた——あの女でした。

堀田はこの女に對しても、第二の女に對してと同樣、隨分酷いことがしてあつたさうです。

堀田はその黑い顏の、光つた眼で、ぢつと顏を見られた時は、實際慄へたさうです。

「この薄情野郎め。」か何かで、舞臺へ女が飛上がつたといふやうな事はよくある話なんですから、堀田はもう氣も漫になつてしまつて、立廻りの手は間違へる、臺詞はとつちる、散々な舞臺をして、樂屋へ駈け込んだかと思ふと、靑くなつてぶつ倒れたさうです…なんでも色々後で調べて見ると、その後水夫に引かされて、それと誓く一緒になつてゐたのですが、その水夫が大の飲んだくれで、自分の持つてつた物はすつかりこれに飲まれてしまひ、結局別れ話になつたんださうで、もう田舍から取寄せる貯蓄もなし、今では土方の女房になつてるんださうです。その土方が又病身なんで、色々と糊口に困つた結果、たうとう女は「よいとまけ」になつてしまつたのです——その日はその「よいとまけ」が、月一回の骨休めに芝居見物に來てゐた訣なのです。

堀田はどうかして歸りに會ひたくないもんだと思ひまして、すつかり客の歸つてしまつた時分を見計らつて、樂屋口を出ると、路端にさつきの黑い女が立つてゐて、

「役者になつたんだね…好いねえ…なんかお奢んな。」

と卑しげな口調で言つたさうです。堀田はぞつとして、

「今日はその…又今度」

と曖昧なことを言つて、たうとう逃げてしまつたさうですが…

それつきり堀田は又この女のことを忘れてしまつてゐたさうです。

ところが、或夏の夕方、堀田が潮染か何かの浴衣を著て、高慢な顏をして、錢湯から出て來た藝者に得意で話をしながら、

芝居の方へぞろぞろ遣つて來ますと、向うから汚い手拭を姉さん冠りにして、尻を端折つて、脚絆に手甲をした、色の眞黑けな女が、大きな辨當箱を小脇に抱へて遣つて來たさうです…と見ると、それが例の女です——昔馴染みです。

堀田が道を避ける暇もなく、女はどんどん近寄つて來て、堀田の前へ立ち塞つたかと思ふと、

「今出かけんの。」

と一種異樣な目つきをしながら馴々しく詞をかけたさうです——この時ばかりは流石の堀田も頭から水をぶつかけられたやうにぞつとしたと言ひます。

「私はその時、ほんとの、あの悔悟とか後悔とかいふことをしたのですねえ。」と堀田は笑ひながら言ひましたつけ。

けれども、それは當てになつたものではありません——堀田は今でも大して異つた生涯はしてをりません。相變らず亂暴な暢氣な滑稽な生涯を送つてゐるのです。

お話はこれだけなんです——あんまり面白い話でもありませんでしたねえ…

粘土

一

私の仲の好い友達に楠といふ男があります。私より五つも年上なんですが、私よりは余つ程若く見えます。學校を卒業してからも二三年といふものは、錢がなくて不相變學校の制服を著て歩いてゐましたが、それでもちつとも可笑しくないんだから不思議です——別に落第生にも見えなかつたといふんですからね…

既にさういふ怪物ですから、總てが變つてゐます。盆栽が素敵に好きで、苦しい中からも、これだけには惜氣もなく金を使ひました。毎晩寢る時には氣に入つた盆栽をきつと一つ枕元に置いて、それを眺めながら寢なければ寢られないんです。部屋の障子が破れても決して繕つたことのない男で——障子の穴がいろんなかつかうをしてるのを面白がつて見てゐるんです。「障子の穴を繕ふ人は、雲の形を塗り消す人だ。」始終こんな變つたことばかり言つてゐるんです。

この男はほんとに笑つたことがありません、ほんとに泣いたこともありません、ほんとに怒つたこともありません。何を見ても、何を聞いても、どんな難事に遭遇しても、唯にやにやと笑ふばかりです。一度友人の借金の連帶責任か何かで、財産差押を食つた時にも、例のにやにや笑つてばかりゐるので、執達吏が飯焚の婆さんに、「お前んとこの旦那はキ印か。」と訊いたさうです。

そんな風ですから、この男は一體強いのか、弱いのか、神經が有るのか、無いのか、感情を抑へてゐるのか、或は感情が全くないのか、ちつとも分からない人間なんです。ですから、その言ふことだつて、嘘なのか本當なのかさつぱり分からないんです。嘘にしてしまふと本當だつたことがあつたり、本當にしてしまふと嘘だつたことがあつたり——私も隨分この楠にはおもちやにされました。

おもちやにされても、好きで好きで堪らないのは、どつか好いところがあるのでせう。頼みがひのない捕まへどこのない人のやうに見えてゐて、どつかに頼みがひもあれば、捕まへどこもあるんでせう…

併し、楠の紹介はもうこの位にして置きませう——この話は私が主人公なんですから。

さて自分の紹介となると、少し困ります。他人のことは言へても、自分のことは言へないもんですからねえ。私はまあ薄つぺらな人間だと思つてゐて下されば、それで間違ひはありません。併し、弱いのかと言ふと、始終弱い訣でもないんです。では強いのかと言へば、始終強いといふ訣でもありません。場合によつて、ばかに弱くなるかと思ふと、又場合によつて、素敵に強くなるんです。先づ一枚の半紙ですな。火を點けられれば、ぽつぽと燃えます。燃え切つてしまへば、それでおしまひ——踏まれれば、默つて灰になつてしまひます、吹き飛ばされれば、何處へでもふわふわ飛んで行きます。かういふ人間が楠のやうな人間と仲が好いんですから、時々奇談があるんです。

二

一昨年のことでした。

甚だ恐縮なお話ですが、私が或女に夢中になつてゐたことがありました…

どんな女だと仰しやるんですか。それは申し上げますまい。女にさう變つたのはゐるもんぢやありません。女といふ奴あ丹波酸漿を列べたやうなもんで、大抵似たり寄つたりですからなあ。よく鳴るのと鳴らないのとはありますが…

まあ唯平凡な一人の女に惚れてゐたと思つて入らして下さい。それで話は分かるんですから。

そして毎晩のやうに女のとこへ通つて行つたもんです——通つて行つたと申すと、大層色男じみますが、そんな氣の利いたんではないんです。唯御機嫌伺に伺候したんですな。語を換へて言へば、おべつかを使ひに行つたんですな。一體おべつかといふ奴は商人が客を得る道なんで、人間が戀を得る法ではないんです。おべつかで女の心を得ようとするのが既に無理な話なんです——ところが、大抵な男は女に對して、このおべつかを用ひますな…

おべつかとは何ぞやです。自分の心にもないこと——或は心にあるだけ以上——を言ふことです。つまり自分を全然暴露しないことなんです。出來るだけ自分の欠點を隱して、美點だけ見せようとするんです。ところが、その美點といふ奴がさう一箇の人間に澤山あるもんぢやありませんから、つい拵へ物の美點を列べて女の目を喜ばせようとするやうなことになるんです。そんなことをして女を喜ばして、それで女に惚れられてるなどと思ふのが、抑も愚劣の極です。欠伸をして、放屁をして、氣の多いとこを見せて、金錢に吝なとこを見せて、それでも惚れてるといふのでなければ、ほんとの惚れられたんではありません。この論法を以て見ますと、一體女と

いふ者は開闢以來一度でも男に惚れたことがあるかどうか、甚だ疑はしいんです…

これに反して、男はやたらと女に惚れますな——私も惚れました。惚れて通ひました。そしておべつかを使ひました…甚だ恐縮なお話です。

三

女は初め私を歡迎しました。私は歡迎されて有頂天になりました。女の顏を見てゐなければ、きつと女に手紙を書いてゐました。女に手紙を書いてゐなければ、きつと女の顏を見てゐました。女の顏も見てゐず、女に手紙も書いてゐない時は、きつと女のことを考へながら、女の家へ向つて往來を歩いてゐました。

私は先程自分のことを一枚の半紙だと申しました。その一枚の半紙は今女の手の内に揉まれて皺くちやになつてしまつたのです——皺くちやにならうと何にならうと、女の手の匂の自分の體に染み込むのを喜んでゐたんです。

ところが、忽ち私は女に捨てられました——確に捨てられたと思つたんです。

夜遊びに行つても、どうも前程に歡迎してくれないんです。

さあ堪らなく心配になりました。捨てられたと思ふと口惜しい。併し、ほんとに捨てられたんだかどうだかまだそれは分からない。うつかりそんなことを言ひ出して、若しさうでなかつた日には氣まづい話になる。さうかと言つて、默つてゐるのも業腹だ。一つ怒つて見ようか。俺はとてもあの女に對してほんとに怒ることは出來ない。いんや捨てた訣ぢやあるまい。近頃機嫌が悪いのは體の工合が悪いからだらう…と色々に考へました。

色々に考へ直しはしましたが、やつぱりゐても立つてもゐられません。そりやさうでせう。私はそれまで毎日毎晩女のことばかり考へてゐたんです。戀を職業として、朝から晩までその職業に努めてゐたんです。ところがその職業を不意に奪はれてしまつたんです、途方に暮れるのは當然でさあ。私は職を失つて路頭に迷ふ戀の乞食となつてしまつたんです。

早速楠のところへ相談に出かけました。

四

楠は私と女との關係をよく知つてゐるんです。知つてゐてそれで知らん顏をしてゐるんです——それは私知つてゐました。

案内も乞はずに二階へ上がると、楠は破れ障子の前に立膝をして坐つて、コツプに一杯粘土を入れて、それを竹の篦で

抄つては、小さな黑い鉢に移して、頻に何か小山のやうな岩のやうな形を作つてゐました。側にひろげた古新聞の上には小さな石が二三十と、小さな植木が五六本轉がつてゐました。

私が上がつて來ても、楠は泥いぢりに夢中です。

「おい。」

と言ふと、

「うう。」

と氣のない返事をするぢやありませんか。こつちは重大な問題が起つてゐるのにと思ふと、もう氣が氣ぢやありません。全體戀に燃えてる人間の相談相手なら、鞴で火でもかつかと熾してゐて貰ひたいぢやありませんか。それが竹つ篦の泥いぢりと來ては情ないにも程があります。

私はもう相談をする勇氣もなくなつてしまつて、がつかりして、首を垂れて、ぼんやりしてゐますと、楠はいきなり竹篦を投り出して、

「どうした。」

と言ひます。「どうした。」と言つた後が又例のにやにや笑ひです。私はその惡落著に落著いた顏がもう癪に障つてしやうがないので、默つて膨れてゐますと、

「どうした、錢でもないか。」

と横柄なことを言ふんです。

「錢はある。」

「ある。それは感心だ。酒でも買つて一緒に飲むか。」

「酒を飲んでもつまらない。」

「なぜ、つまらない。」

「俺の胸には苦痛がある。」

「酒を飲んだら癒つてしまふ。」

「酒なんかで取れるやうな、そんなけちな苦痛ぢやない。」

「そんなに深い苦痛を貴樣は今その胸ん中に持つてゐると言ふのか。」

「ああ、持つてゐるとも。」

「では廣げて見せろ。」

「廣げたつて見えやしない。」

「人に見えないやうな苦痛なら、きつと酒で取れる。酒を飲まう。」

「いやだ。」

「厭だ。厭だとか嫌ひだとか言へるのは、まだ貴樣の苦痛に餘裕があるからだ。眞の苦痛にはひつて見ろ。そんなことを言つてる隙はないぞ。」

「さうかしら。」

「さうとも。」

「そりやさうかも知れないな。」

「かも知れないぢやない。さうだ。一體貴樣、苦痛苦痛とさ

つきから言つてるが、そりや貴樣荷物を間違へて擔いでゐるんだぞ。貴樣は自分の背負はないでも好い荷物を背負つて歩いて苦しんでゐるんだぞ。貴樣は人の荷物を背負てるんだ。貴樣はステイションの赤帽だ。」

「失敬な……」

「決して失敬ぢやない——ぢやあ、訣を言つて遣るからよく聞け。」

「うん、聞く。」

「竹川町の一件だらう。」

「……」

「言へ、言へ、さうだと言へ。」

「實はさうだ。」

「あれなら貴樣が莫迦だ。初から貴樣が莫迦なんだ。」

「なぜ。」

「おれは初から貴樣が莫迦だとは思つてゐたんだけれども、せつかく喜劇の序幕が明いたんだ、大詰まで謹んで拜見しないのは役者に對して失禮に當ると思つたから、それでけふまで默つて見てゐたんだ。」

「それは人が惡いぢやないか。」

「人が惡いんぢやない、人が好いんだ。貴樣といふ役者の技藝に對して謹んで敬意を表してゐたんだ。」

「一體どうしたといふんだ。早く言つてくれ。」

「あの女には男があるんだ、初から男があるんだ。」

「嘘だらう。」

「嘘ぢやない。」

「では、その男の名を訊かう。」

「言ふとも。硝子屋の竹ちやん、俗にガラ竹といふ貴樣よりは餘つ程好い男だ。」

「ふうん。」

「何のこたあない。貴樣は竹川町とガラ竹の麵包になつたんだ。人間も麵包にまでなれば、先づ思ひ置く事はあるまい。」

「……」

ああ、果してさういふ女であつたかと、私は心臓が煮えくりかへるかと思ふやうに憤慨をしました。そして、さんざん惡態をつかれた楠に對して、涙を流して頭を下げて、そして禮を言つて歸りました。

私が歸る時、楠はにやにや笑ひながら又竹篦を手にして、又泥いぢりを始めました。

五

私はすぐ家へ歸つて、それから夕方まで一室に閉ぢ籠つて色々と怨みの文句を考へました。その考へついた文句を今ここで列べてもしやうがありません。唯自分が物心ついてから

廿八歳のその時までに、自分が嘗て言つた怨みの文句、人から聞いた怨みの文句、芝居で覺えた怨みの文句、小説で覺えた怨みの文句を三四時間程の間に悉く思ひ出して、それを色々に綴り合して頭の中に一大怨みの文を作つたんです。

その怨みを體中にすつかり納つて、日が暮れると家を出かけました。

家を出ると、すぐ辻車に乘つて、電車のあるところまで行きました。いつも十錢ときまつてゐるんです。ところがその日は十錢出しますと、生憎顏を知らない車夫で、道が惡かつたから、十五錢くれろと言ふんです。癪に障つて堪りませんから、廿錢銀貨を地べたへ叩きつけて、そして車夫の横つ面を拳固で一つ撲り飛ばしてやりました——私が人をぶつたのはこれが初めてです。

それから電車に乘りました。すると又生憎細かいのがないので、五十錢銀貨を出して往復を一枚買ひますと、車掌は默つて銀貨を受取つて、鞄の中で頻につりを勘定してるやうでしたが、やがて一錢銅貨を四十一枚出しました。私は覺えず手にとりましたが、重いのですぐと氣がついて、

「銀貨にして下さいな。」

と優しく言ひますと、

「銀貨はありません。」

と冷淡な言ひやうです。

「一つもないことはあるまい。」

「いんえ、ございません。」

私はもう赫となつてしまひました。手をぶるぶる震はせながら、自分の蝦蟇口を衣兜から引張り出して、車掌の目の前へ突きつけ、

「俺の錢入はこれだ。これへこんなに澤山銅貨がはひると思ふか。」

「だつて、それは致し方がございません。」

「致し方のないことはない。今の金を返せ。俺はこのつりを返すから。俺は降りる。」

「でも、もう切符を切つてしまつたんですから。」

私は口惜しくつて地團を踏みましたが、「こんな物が持つて歩けるか。」と、いきなり車掌の鞄の中へ一錢銅貨を四十一枚がちやあんと投り込んで、驚き呆れた車掌の肩を一つ小突いて、飛降りをしてしまひました。

電車を降りて、煉瓦通りを一人で歩いて行きますと、並木の柳が暗闇で動いてゐるんです。動く度に街燈の瓦斯の光で青い細長い葉が見えたり隱れたりするのに妙に氣をひかれて目の緣が急に熱くなつて來たかと思ふと、ぽたぽたと溫い涙が頰へたを垂れて來るぢやありませんか。意氣地のない男だと自分で自分を叱つて、暗闇でそつと涙を拭いて、又明かるいとこへ出ると、すぐ目の前に水菓子屋があるんです、夏蜜

柑や唯の蜜柑や林檎や葡萄のうまさうな熟したのが、アセチリン瓦斯で光つてゐて如何にも綺麗です・・・・

「あいつは蜜柑が好きだ。」

と思つたかと思ふと、私はもう水菓子屋へはひつて、蜜柑を一箱買つて、錢を拂つてゐました。どうしてはひつたんだか、どうして買つたんだか、自分にも分からないんです。

怨みを言ひに來た筈の男は土産物を擔いで、竹川町の格子戸を明けました。

女はちやうど留守でした——水菓子屋で蜜柑を一目見て氣の挫けた私は、女が留守だと聞いてもう一遍氣が挫けました。

六

三四時間も待つた時分に、やうやく女は歸つて來ました——三四時間待つてる内に、三四時間考へて來た怨みの文句は大抵忘れてしまひました。

楠はあんなことを言つたけれども、あの男の言ふことだもの、なに當てになるもんか、よし果してさういふ者があらうとも、俺に盡してくれる心さへ誠であれば、それで十分ぢやないか。更に一歩を讓つて俺に全然氣がないとしたところで、要するに虐待さへされなけりやそれで滿足ぢやないか・・・・などと、待つてる間に色々勝手な理窟をつけてゐたんです。

女は家へはひると、私の顏を冷かに一寸見て、

「あ、入らつしやい。」

と言つたきり、默つて帶を解きにかかりました——よそ行きの著物を脱ぐのです。

私が蜜柑を出しますと、

「どうも。」

と、言つたきりで、にこりともせずに、又著物に夢中なんです。

やがて女は火鉢の向うに居眠りをしてゐた小女に目をつけました。すると、きりきりつと目尻を釣るし上げて、

「畜生、又舟を漕いでやがるよ。」

と口汚なく罵つたかと思ふと、いきなりその側へ行つて小女の尻を平手で音のする程一つ撲ちました。

私は始めて女のこんなことを見たんですから、唯もうびつくりしてしまつて言句も出ずに默つて見てゐました。

それが始まりで、何が氣に入らないのか、口小言の言ひ通しで、そこら中の人間や物品に當り散らすのです。

帶の疊みやうが悪い、著物の簞笥へ入れやうが悪い、銅壺の湯がぬるい、臺所の燈がつけつ放しだ・・・・それは、それは聞くに堪へん程嚴しいことを言つて、二言目にはその小女に手をおろすんです——そして、私には目もかけないんです。

そこで私は考へました。こりやあやつぱり楠の言ふのが本

當だ。俺は嫌はれてゐるんだ。併し、今までの關係上面と向つてあなたは厭だとも言へた義理ではないから、それで他の人に當り散らして、それで自分の俺に對する感情を見せるんだ。

よし、それなら俺も默つてはゐないぞといふ氣になりました。私は一緒になつて小女を叱りました、女に負けずに叱りました、女に負けずに罵りました、女に負けずに撲ちました——靴の直し方が悪いと言つて、帽子の掛け方が曲つてると言つて。

女は小女を通して自分の感情を私に告げたんです。ですから、私も小女を通して私の感情を女に告げたんです。

小女は二人の道具にされて泣き倒れてしまひました——今思へば可哀さうなことをしたもんです。

私は尙飽き足らず、その泣き倒れた小女の耳に口を寄せて電話でもかけるやうに、

「私はお前のやうな氣の利かない女のゐる家へはもう二度と來ないよ。」

と震へ聲で言つて、呆れて默つて見てゐた女には挨拶もしないで、俺が勝つたぞ。」と言はぬばかりに息張つて格子戸を明けて外へ出ました——實際もう二度と來ないつもりで・・・・

七

その明くる日楠を訪ねますと、又竹箆で粘土をいぢつてゐるんです。私がゆうべの出來事をすつかり話して、

「もう二度と行くもんか。」

と震へ聲で言ひますと、

「それは好いことをした。」

と言ひながら、又にやにやと笑ふんです。

そのにやにや笑ふのを見ると私は厭な氣持になりました。俺は楠に欺されて、あの女と別れてしまつたんぢやないかしらと思つたんです——俺はあの竹箆であの粘土のやうに楠の玩具にされてるんぢやなからうかと思つたんです。

その後は實際もう女のところへ參りは致しません——また參れも致しません——が、今日でも、楠は若しやあの時俺を欺したんぢやなかつたかしらと始終さう思つてるんです。楠は俺があんな女に關つてゐるのを心外に思つて、それで嘘をついて俺を怒らして、わざと別れさしたんぢやないかしらなどと始終さう思ふんです。

併し、それにしては女の怒つたのが訝しいとも思ふんです。と言つて、實はその後蔭ながら注目はしてゐるんですが、どうもその硝子屋の竹ちやんとかガラ竹とかいふやうな男もゐないらしいんです。

事件は二年前に終つたんですが、私の胸ん中はいまだに納まらないんです。

若し今日只今にも楠の言つたことが嘘だと分かれば、すぐ

にも女のとこへ飛んで行つて詫びがしたいと思つてをります――併し、自分で直接女にぶつかつて眞僞を訊す程の勇氣もないんです。

未練。確に未練です。私は粘土のやうな人なんです――粘土だから、時々楠の竹篦にかかるんです……

え、楠ですか。楠は例の事件が濟んで、私がまだぶつぶつ憤つてる最中に支那へ行つてしまひました。ああいふ男ですから、支那へ行つてからも便りといふことをしたことがありません。

女ですか。女はやつぱり竹川町に一人でゐるんです。

たより。たよりは例の事件以來ないんです。

梅龍の話

著いた晩はどうもなかつたの。繪葉書屋の女の子が、あたしのお煎餅を泥坊したのよ。それをあたしがめつけたんで大騒ぎだつたわ。でも、姐さんが、可哀さうだから勘辨してお遣りつて言ふから、勘辨してやつたの。赤坂のお酌梅龍が去年箱根塔の澤の鈴木で大水に會つた時の話をするのである。姐さんといふのは一時は日本一とまで唄はれた程聞えた美人で、年は若いが極めて落ちついた何事にも繼襲を見せないといふ質の女である。これと同じ内の玉龍といふお酌と、新橋のお酌の若菜といふのと、それから梅龍の内の女中のお富といふのと、かう五人で箱根へ湯治に行つてゐたのである。梅龍は目の涼しい鼻の細い如何にも上品な可愛い子だが、食べることにかけては、今言つた新橋の若菜と大食のお酌の兩大關と言はれてゐる。梅龍の話に喰べ物の出て來ないことは決してない。水の出たのはその明くる日の晩よ。あたしお湯へはひつて髪を洗つてゐたの。洗粉を忘れて行つたんでせう。爲方がないから玉子で洗つたのよ。臭くつて嫌ひだけど我慢して。さうすると、なんだか急にお湯が黑くなつて來て、杉つ葉や何かが下の方から浮いて來るのよ。妙だと思つてると、お富どんが飛んで來て、「水ですから、逃げるんですから、水ですから。」つて大慌てなの。なんだか分からないから、よく聞くと、山つなみとかで大水が出たから逃げるんだつて言ふんでせう。それから大急ぎでお湯を出たの。髪がまだよく洗ひ切れないんでせう。氣持が悪いから香水をぶつかけたら、尙臭くなつたの。爲方がないから洗ひ髪をタオルで向う鉢巻なの。好い著物は汚すといけないからつて、お富どんがみんな鞄の中へ納つてしまつたんでせう。あたし宿屋の貸浴衣の長いのをずるずる引き摺つて逃げ出したの。でも若し喰べ物がなくなると困ると思つたから、牛の罐詰と福神漬の罐詰の口の明けたのを懷に捩ぢ込んで出たの。ところが慌てて福神漬の口の方を下にしたものだから、お露がお腹の中へこぼれてぐぢやぐぢやなの。氣味が悪いつたらなかつたわ。

外へ出ると、眞暗で雨がどしや降りなの、半鐘の音だの人の騒ぐ聲だのは聞えるけど、一體どこにどの位水が出たんだ

か、まるで分からないのよ。兎に角向う側の春本つて藝者屋へ逃げるんだつて言ふから、あたしもついて行くと、もうその家は人で一ぱいなの。鈴木のお客さんをみんなそこへ逃がしたんでせう。下駄なんか丸でどれが誰のだか分からないやうに澤山脱いであるの。

その内に向う川岸の藝者屋が川へ落ちたつて言ふのよ。なんだが少し恐いと思つてると、水力が切れて電氣がみんな消えてしまつたの。

蠟燭を上げますから一本宛お取りなさいつて言ふ人があるの。それからみんな手探りで一本宛貰ふのよ。あたしそつと二度手を出して二本取つてやつたわ。あたし達はそれから二階へ通されたの。貰つた蠟燭は、大根の輪切りにしてあるのを臺にして、それへ一本宛さして、みんな自分の前へ一つ宛置いてるのよ。姐さんはお守りをちやんと前へ置いて、お行儀よく坐つて兩手を合せて一所懸命に何か拜んでるの。

春本の藝者はあたし達を東京の藝者だと思つたらしいの。

〔梅龍は時時こんな物の言ひやうをする。自分は藝者といふ者と一向關係がないやうに言ふのである。それではお孃さんぶつてゐるのかと言ふと、さうでもないのである、要するに唯何でも構はず思つた通りをどしどししやべるのである〕だけど、聞くのも惡いと思つたんでせう。なんだかもぢもぢしてるのよ。「こんなところにゐては詰まりません。」だの何だのつて言ふの。なんだか愚痴見たいな心細い話ばかりするのよ。

その内に向うの山が崩れたつて噂なの。

すると何だか、轉がつて來たものがあるから、見ると、おむすびなの。一つ宛つきやくれないのよ。それでもお腹が減つてたからおいしかつてよ、姐さんはどうしても喰べられないつて言ふから、あたし姐さんの分も喰べて上げたの。お數は懐の福神漬を出したんだけど、若菜さんは、そんなお腹ん中でこぼれた物なんか穢くて喰べられないつて言ふの。だから、あたし一人で喰べたわ。

たうとうその晩は夜明かしよ。

朝の三時頃にお星樣が見えたの。みんなの喜びやうつたらなかつたわ。

明くる朝は、又雨風がひどいのよ。いつまでそこの藝者屋にもゐられないし、それにもう塔の澤は一體に危くなつたから、今度は湯本の福住へ逃げるんだつて言ふのよ。

出ようと思ふと、床の間に紙入が一つ乘つてるのよ。あたし姐さんのだと思つたから、澄まして自分の懐へ入れつちまつたの。すると、そこへどつかの奥さんが上がつて來て、「あの、若しやこの床の間に紙入が乘つてゐませんでしたかしら。」つて、あたしに訊くのよ。さあ、あたしどうしようかと思つちまつたわ。あたしは確に姐さんのだと思つてゐるけど

も、若し姐さんのでなければ、その方のに違ひないでせう。でも、そこで自分の懐から出して聞いて見る訣にも行かないわ。自分の懐から出して見せて、若しその奥さんのだつたらきまりが惡いでせう。だから、あたし目を白つ黑しながら、「いいえ。そんな物ありませんでしたよ。」つて言つたの。さうすると、「さうですか、どうも失禮しました。」つて、その方は直ぐ下へ降りておしまひなすつたの。

姐さんは恐い顔をしてよ。「梅ちやん。お前さん、知つてゐて隱してゐるんぢやあるまいねえ。人間てものは、かういふ時には妙な氣を起し易いもんだから、氣をつけなくちやいけないよ。お前さん若し持つてるなら、お願ひだから出しておくれ。」つて言ふんでせう。あたし何だか氣味が惡くなつて來て、「だつて、これは姐さんのでせう。」つて、懐から紙入を出して見せたの。すると姐さんは尙と恐い顔になつてよ。「ほら御覽。持つてるぢやないか。よそ樣の物を懐へ入れるといふことがありますか。」つて言ふの。「だつて、あたし姐さんのだと思つたんですもの。」つて言ふと、「直ぐ下へ持つてつてお返しして入らつしやない。」つて言ふのよ。それから、あたし下へ持つてつて、「今よく探しましたら、戸棚のわきにありました。」つてその奥さんに渡したの。奥さんは幾度もお禮を言ふのよ。ほんとに、あたしあんなに困つたことはなかつたわ。顔がぽつぽして、汗びつしよりなの。

それから支度をして外へ出ると、ざあざあつて雨なの。橋を渡らうとすると、橋の板が一枚一枚めくれさうにしてゐるのよ。姐さんは死んでも渡るのは厭だつて言ふの。でも逃げないと危いからつて、あたしとお富どんで、抱へるやうにしてやつと渡らせたの。あたしも若菜さんも平氣なものよ。あんな面白いことなかつたわ。大抵な人は一度かういふ目に會ふと懲りるものだが、梅龍は一向平氣なものである。これから却つて水が好きになつたと言ふのだから驚く。こなひだも溜池に水が出て、梅龍の家の揚板の下まで水がはひつた時も、自分の荷物だけはちやんと二階の安全なところへ納つて置いてから。尻つぱしよりで下をはしやぎ廻つたといふ利己的な奴である〕

やつと湯本の福住へ著いて、やれ安心とお湯へはひつてゐると、ここも危くなつたから、又逃げるんだつて言ふの。大變な雨風で傘も何もさせやしないのよ。姐さんは、お金がないと困るつて、信玄袋だけ持つて逃げたの。

やつと別館へ著いたと思つたら、姐さんが目を廻してひつくり返つてしまつたの。別館にはもう大勢お客が逃げて來てゐるのよ。すると、そのお客の中から、大學生見たいな方がどういふ訣だか、マントで顔を隱して、コツプに注いだ葡萄酒をマントの下から出して下すつたのよ。それを飲むと姐さんは直ぐ氣がついたの。あんまり心配したり雨に濡れたりし

たからなんでせう。(この事はその後都新聞へ文章面白く書かれた。その大學生は或博士の秘藏息子であつた。梅龍の姉は大學生の親切が元で思はぬ戀に落ちたといふ風な極古風な艶種であつたが、梅龍はいつも「まさか」と言つて否定するのである)それからお醫者を呼ぶと、芝居のお醫者さん見たいなお醫者さんが來てよ。そりやあ、ほんとに芝居の通りよ。いやに勿體ぶつて、それで藪醫者なの。なんにも分かりやあしないのよ。たうとう終に分からないものだから、家の方が水で危いからとか何とか言つて逃げ出してしまつたのよ。ほんとにあんなお醫者つて始めて見たわ。でも、姐さんはすぐよくなつたの。

別館では大勢で炊き出しをしてるのよ。あたし前の晩におむすび二つ喰べたつきりでせう。お腹が減つてたから隨分喰べてよ。姐さんの分もお富どんの分も大抵あたしが喰べちまつたの。

明くる日お天氣になつたから、玉龍さんと二人で玉簾の瀧へ行つて見たの。方々、水が往來を流れてゐて面白かつたわ。玉簾の庭はめちやめちやなの。瀧はいつもの倍の倍位大きくなつてゐるのよ。あのお池の側の離れ見たいなものね、あれなんかも流れつちまつてゐるのよ。

なんにも喰べる物がないから、お茶屋で懐中じる粉を買つて、お湯で解いて飲んだの。そしたら小さい日の丸の旗が出てよ。旅順口なんて書いてあるの。餘つ程古い懐中じる粉なのねえ。(懐中じる粉は買つたのではないのである。お茶屋ではもう何處かへ逃げてしまつて誰もゐなかつたのである。梅龍達はそこらに落ちてゐた懐中じる粉を拾つて來て水で解いて飲んだのである。これはもうお富に聞いて、私はちやんと知つてゐる)

それから歸り道に大きな石を拾つたの。それは隨分大きな石なのよ。二人で一所懸命に持ちやげたの。どうかしてこの石で姐さんを欺して遣らうと思つて、新聞屋へ寄つて、新聞紙を一枚貰つたの。それからその新聞紙で石を丁寧に包んでおはぎの積りで持つて歸つたの。

家へ歸ると、姐さんは一人で本を讀んでるのよ。「姐さん、おはぎをお土產に買つて來ましたよ。」つて、石を出すと、姐さんは本から目を放さないで。「あいよ。」つて手を出したの。受けとるとばかに重いもんでせう。きやあつて言つて驚いて庭へ投げ出しちまつたの。地響きがしてよ。姐さんは隨分怒つたわ。

庭に穴があいたもんだから宿屋の人にも叱られてよ。でも隨分面白かつたわ。

水の時の話はそれつきりだけど、まだ後で面白いことがあつてよ。あたし達の泊つた箱根の春本の藝者で小玉とか何とかいふ人が、この頃赤坂へ來てゐるのよ。こなひだ三河屋で

一緒になつたら、向うの方で頻に水の話をしてゐるのよ。あの時は家へ來て泊つた鈴木のお客に餘所行の下駄を二足とも穿いて行かれてしまつて、あんな困つたことはなかつたつて言つてるのよ。水が濟んでから二三日してお座敷へ行かうと思ふと、下駄が足駄も駒下駄も兩方ともなかつたんですつて。

あたし、どきつとしてよ。あたし、が穿いて出た下駄に違ひないんですもの。あたし、あの時なんでも構はず出てゐる下駄を突つかけて出た覺えがあるの。

それから、あたしその小玉さんとかいふ人にあやまつたわ。あたし、あやまるの大嫌ひだけども泥坊つて言はれるのは厭だからあやまつたの。そしたら、向うぢやもうあたしの顏よく覺えてゐなかつたわ。損しちやつたわねえ。

手紙風呂

男も弱かつた。女も弱かつた。二人はとても今の世に生存の出來る人達ではなかつた。

或晩、男がかう言つた。

「いつまでこんな事をしてゐたつてしやうがありやしない。きいちやん、若し君に好きな人があるなら、僕が添はしてやるよ。」

その時分、男の背後にはのつぴきならぬ結婚問題が湧いてゐた。親に對する義理、兄弟に對する義理、親戚に對する義理、媒人に對する義理、世間に對する義理で、男の心は十重廿重に縛られてゐた。併し、男の心を何よりも近く、何よりも強く、何よりも苦しく縛るものは三年前の涼みから馴染んだ、可愛い可愛い「小菊」であつた。男は女の返事一つで、地位をも名譽をも財産をも捨てる氣でかう言つたのである。

併し、男の心は弱かつた。男はどうしてもむきつけに「俺の女房になつてくれ」とは言へなかつた。それはきまりかけてゐた嫁に未練があるからでもなく、親兄弟に後髮を引かれるからでもなかつた。若し女に少しでも好きな男があるなら、受け出してもそれと添はしてやらう。その方が自分と一緒になるより女にとつてどんなに幸福だか分からないと思つたからである。自分が女と一緒になる時は、自分も女も世の中から捨てられて、みじめな生活をする時だと思つたからである。

男の心より更に弱いのは女の心であつた。女には「臺さん」より外に「好きな人」は世界に一人もなかつた。併し、女もそれをむきつけに言ふ事は出來なかつた。女は男の周圍にさういつた問題の起りかけてゐる事も薄々知つてゐた。男が今のやうな事を言ひ出したのにも、さういふ意味のある事はよく分かつてゐた。併し、女は男を社會の外に置いてまでも自分のものにしようとは思はなかつた。「あたしの好きな人はあなたより外にありません。あなたと一緒になれなければ、あたし誰とも一緒になりません。」かう言つてしまへばなんでもないものを、女はどうしてもさう言ふ勇氣がなかつた。「あなたより外に」を心の内に念じながら、僅に一言かう返事をした。

「あたし好きな人なんかありませんわ。」

男は女のこの返事に言外の意味を汲みとることが出來ぬ程愚鈍ではなかつた。併し、女にかう言はれてしまふと、男はもうどうすることも出來なかつた。女のこの返事から女の本心をも釣り出し、自分の心の奥底をも繰り出す事は、然程むづかしいことではないのに、男はさういふ詞の綾を少しも知らなかつたのである。

「きつとかい。」

男はやつとこれだけ言つた。

「きつとです。」

女もやつとそれだけ言つた。

この短い詞のやりとりで、二人の緣は永遠に切れてしまつた——緣談は容赦もなく進んだ。二人は運命の遠くへ遠くへと去つて行くのを、唯默つて、目をうるませておとなしく眺めてゐた。

男も弱かつた、女も弱かつた。二人はとても今の世に生存の出來る人達ではなかつた。

さうなつてもやつぱり會つてゐた。緣の切れた二人が緣の切れたのを承知でゐながら、やはり會つてゐるのである。二人の心は世間に對して弱かつたと同時にお互同志に對しても弱かつた。二人は自分達の力で自分達の「命」を絶つ事が出來なかつたのである。二人は世間がまざまざと斧をおろすまで頸を延べて命を待つてゐた。

男は大家の次男であつた。緣談は日一日と歩を進めたが、したくが大がかりなので、式までにはまだ大分の月日があつた。その間にも相變らず男は商用で、月に二度は東京へ來た。東京へ著くと直ぐ、男はステイションから女のところへ電話をかけた。そしてその夕方にはきつと何處かで會つてゐた——

男は女の爲に可なりの金を出してゐたのであるが、女の抱へ主が因業なので、二人はもう女の土地では會へなくなつてゐた。二人は赤坂の或家で會つてゐた。女は夜の十二時を聞くと、きつと差引で芳町へ歸つた。そして明くる朝早い電車で、きつと又山王下へ來た。

女の抱へ主は毎日のやうに女を責めた。

「お前ぐらゐ莫迦な女はないよ。全體、藝者をしてゐて、お客に惚れる間抜けがあるものかね、それも奥さんにでもなれるといふのならまだしものこと、もう近々よそから好いのが來るんだつて言ふぢやないか。そんな人に義理を立てる奴がどこ探したつてあるものかね。それよりか、こなひだから話のある大阪の「秋さん」ね、早くあの方のお世話におなりよ。「臺さん」のやうなしみつたれとは訣が違ふんだからね。」

女はなんと言はれても默つてゐた。

或晩、女は「秋さん」の座敷で、さんざんに醉はされた。女

の抱へ主がその座敷へ出る他の抱へに旨を含めて置いて、無理から女を醉はしてしまつたのである。女は苦しい胸を悶えながら「秋さん」の泊る家へ泊つてしまつた。

その晩一座した藝者で「臺さん」に始終呼ばれるのは、小りきといふ、目の涼しい、口元の可愛い一人だけであつた。

小りきは小菊と一緒に「臺さん」に會ひ始めた時分から「臺さん」を想つてゐるのである。「臺さん」が小菊と深い仲になつてからも、やつぱり「臺さん」を慕つてゐるのである——女はそれを知つてゐた。

ちやうど二三日すると、男が又商用で東京へ來た。女は飛び立つ思ひで赤坂へ駈けつけたが、その家の敷居を跨ぐ時、ふと「秋さん」のことを思ひ出して、消えも入りたい程「濟まないことをした」と思つた。

女は男の顏を見るが否や、疊に額をすりつけぬばかりにして、測らず犯した罪のなりゆきを一つ殘さず打ち明けた——

「濟みません。濟みません。濟みません。」

女は既に緣の切れた男を——よその誰かを妻にする男を——やがては顏さへ見られなくなる男を——操を立つべき夫かなんぞのやうに思つて、ひた謝りに謝るのである。

心の弱い男は、これを聞くと、忽ち自分の今の地位をも、女の今の地位をも忘れてしまつた。男も女を自分の妻かなんぞのやうに思つて、いつもになく強い詞を吐いた。

「よく話してくれた。併し、君は小りきにいひつけられるのが辛いので、自分から白狀したのかい。それとも僕をえらい人だと思つて白狀したのかい。」

「あなたをえらい人だと思つて白狀したんです。」

女は即座にかう答へた。女の調子はいつもになく強かつた。

「よし。ぢやあ、君はその「秋さん」とかにした以上の事を僕にしなければならんね。

男は更にかう言つた。

「以上の事つて、どうすれば好いんですの。」

女には男の心が讀めなかつた。

「證據だ。證據だ。證據を見せるんだ。」

男は息を跳ませて、青い顏をしながら、かう言つた。女は慄へながら、ぢつと男の青い顏を見詰めてゐたが、ふと或事を思ひつくと、

「分かりました。きつと見せますわ。きつと證據を見せますわ。」

と、かう言ひながら、男の膝を兩手でしつかり摑んだ。女はもう慄へてゐなかつた。

男はその晩直ぐ仙臺へ歸らなければならなかつた。二人は車を連ねて赤坂の家を出た。丸の内の暗い廣い道で、車が左右

へ分かれる時、女は男の後から震へ聲でかう叫んだ。

「きつと送りますよ。」

併し、それは男に聞えなかつたかして、男は唯「さやうなら」と何氣ない調子で答へただけであつた。

女はその足で直ぐうぶけ屋へ寄つて、剃刀と小刀を一挺宛買つて家へ歸つた——あすをも待たず、その晩直ぐ指を切つて、男に誓を立てようとしたのである。

今更誓を立てたところで、どうなるものでもないといふことは、女もよく知つてゐた。併し女は、男に嫁が來るからといつて、自分もよその男に乘り代へようといふ氣にはどうしてもなれなかつた。たとひ男がどうであらうと、自分が犯した罪は、自分の犯した罪である。女は自分自身の心に堪へられぬ負債を感じてゐるのであつた。

男に嫁がきまつたのも、考へて見れば自分が惡いからだと女は思つてゐる。あの時一言突つ込んで言ひさへすれば、たとひ男と一緒にはなれないまでも、かうまで緣談が無事に進みはしなかつたのである。自分の返事一つでかうなつたのだから、今更男に怨む筋は塵程もないと、女は正直一途にさう思つてゐる。心の負債を女に輕くするものは何一つ世の中になかつたのである——

女は重荷に背中を壓されるやうな氣持で、自分の家の敷居を跨いだ。自分の部屋へ倒れるやうにしてはひると、羽織もぬがず帶も解かずに、ぺたりと坐つて、人々の寢靜まるのを待つてゐた。

隣の部屋には下地つ子のふうちやんといふのが、既に可愛い寢息を立ててゐた。小菊と前後して歸つて來た抱へ達の著物を脫いだり物を喰べたりする騷がしさも、ひとしきりで靜になつた。やがて下の方で女中のお友の表をしめる音がしたかと思ふと、あたりが急にひつそりして來た。

女はそつと立つて、壁に寄せかけてあつたちやぶ臺の足を開いて、部屋のまん中へ持ち出した。それから、さくら紙を二重と新しい手拭を二本用簞笥から出して、手のついた小さい化粧鏡と一緒に、それをちやぶ臺の上に置いた。それから羽織をぬいで、行儀よくちやぶ臺の前に坐ると、膝を深く臺の下へ突き入れた。それから、買つて來た剃刀と小刀を、帶の間から出して、ちやぶ臺の上に列べて置いた。

女は鏡をちやぶ臺の上に立てて、暫く鏡の中をぢつと見詰めたが、やがて鏡を倒してそれをちやぶ臺の下へ突つ込んだ。女は自分の顏色のいつもと少しも變つてゐないのを確めたのである。

女は剃刀にしようか小刀にしようかと暫く迷つた。剃刀がよく切れさうには見えたけれど刄がそつてゐるので、若しまつすぐに落し損ねたら見苦しいと思つた。そこで、小刀の方

を使ふ事にした。

女は手拭を小さく疊んで口にくはへると、左の小指をちやぶ臺の上に平にのせて、ぐつと指に力を入れた。それから右の手に小刀の柄をしつかり持つて、あたりを一度見廻すかと思ふと、小指の爪の附け根と第一の關節のちやうどまん中あたりを目がけて、力任せにぶすりと突き立てた。一度突き立てた小刀は、骨につかへでもしたか、もういくら力を入れても深くはひらなかつた。三分の一程指へ食ひ込んだのを、その儘にして置いて、女は小刀の柄から手を放した。そして前の方をぢつと見ながら「痛いかしら」と考へて見た。

少しも痛くなかつた——どう思つて見ても痛くなかつた。女はそれが不思議でならなかつた。

女はもう平氣になつた。やがて、右の平手でとんとんと力任せに小刀の背を二三度打つと、双のちやぶ臺にがちりと當る音がして、指の先がほつりと落ちた。

小刀の双にべつたりついて落ちた自分の指の先を見ると、女は始めて安心したやうにほつと太息をついた。女は重荷をおろしたやうな氣がしたのである。胸のつかへが一時におりて、體中を風が吹き通すやうな氣がしたのである。

俄に、切つた指が痛み出して來た。女は直ぐ手拭をとつて指を卷きつけたが、片手業なので、とても堅くは縛れなかつた。血は忽ち手拭をにじんで流れ出した。女は血に濡れた手拭をとつて捨てると、血の出る指を口の中へ突つ込んだ。

血を吸ふと留まるものだといふ事をかねがね聞いてゐたので、女は一所懸命になつて吸つて見たが、血はなかなか留まらなかつた。その内に血が口の中に溢れて、女は嘔氣を催して來た。表へ吐かうと思つて、往來へ向つた小窓をがらりと明けると、その音で隣に寢てゐたふうちやんが目を覺ました。

「だあれ。」

ふうちやんは寢ぼけた聲を出してかう言つた。女は口を塞いだ儘ふうちやんの名を一二度呼んだ。ふうちやんが起きて來ると、女は指をくはへた儘、右の手でふうちやんを側へ呼び寄せて、切つた指の血でさくら紙へ「ウガイジヤワン」と書いた。

ふうちやんが眞鍮のうがひ茶碗を持つて來ると、女は飛びつくやうにして、その中へ血を吐いた。血は赤黑い鳥の肝のやうに、ぽとりと丸く堅まつて出た。

女はそれからふうちやんに手傳はして、そこらの始末をすつかり綺麗にした。血を吐いたうがひ茶碗は、外の汚れ物と一緒に簞笥の一番下の抽斗へ隱してしまつた。落した指の先は紙に包んで、ふうちやんが敷いてくれた寢床の枕元に置いた。血の出る指は、新しい手拭を裂いて、もう一度堅く縛つて貰つた。

さうして、女は床へはひつたが、どうしてなかなか寢られるどころではなかつた。女は床の中で、縛つた小指を抱へるやうにしてゐたが、指はどきんどきんと大きな脈を打つて、血はいつまでも留まらなかつた。あたりに血のついたものはもう一つもないのであつたが、女の鼻はいつまでもいつまでも血の匂を嗅いでゐた。

女は夜の明けるまで、まんじりともしなかつた。

女は朝床を出ると、奈良人形の猩々のはひつてゐる桐の小箱を出して、その中へゆうべ切つた指の先を綿にくるんで入れた。それを小包にして、郵便局へ持たしてやると、あまり小さ過ぎるからと言つて返された。それから、紙入のはひつてゐた桐の明き箱へいろいろ詰め物をして、そのまん中へ指を入れた。今度は郵便局で直ぐ取つてくれた——女はやつと役目を果したやうな氣がした。

女の秘密を知るものは、下地つ子のふうちやんと女中のお友だけであつた。女中だけは知らして置かないと、帶を締める時に困るからであつた。

その外の人々には誰にも知らせたくないと女は思つた。指の痛みはまだ止まなかつたが、女は眉一つ顰めることが出來なかつた。顏を洗ふ時も食事をする時も、女は始終ハンケチを左の手の上にかけてゐた。ハンケチの上から茶碗を持つのを、不思議さうに見てゐた主人は、「きいちやん、なんだい、その眞似は。」と言つた。女は「お茶碗が冷たいから。」と何氣ない態で言つたが、もう落ちついて喰べてはゐられなかつた。

朋輩の一人は、女が左の手を懷にしてゐるのを見て、心配さうに「どうしたの。」と聞いた。「あたし願があつて、當分左の手だけないつもりにしてゐるの。」女はかう言つて笑つたが今にも手を出されはしないかと思ふと、もうそこにぢつとしてゐることが出來なかつた。

女は生れて始めて、左の手のどれ程人間に入用であるかを知つた。わけてもその日は左の手を出さなければならないことが多いやうな氣がした。女はとても隱し切れなくなつて、その日はたうとう假病を使つて寢てしまつた。

二日ばかり立つと、男から手紙が來た。手紙の字には甚しい驚愕と狼狽の色があつた。

「僕はこんなことをさせようと思つたのではなかつた。こんなことをしてくれなくても君の心はよく分かつてゐるのに、君は飛んだことをしてくれた。」こんな事が繰り返し繰り返し書いてあつた。それでも女は少しも男を怨まなかつた。男がどういふつもりでこなひだのやうなことを言つたにしろ、自分は自分でさうしなければならないと思つたことをしたのである。自分が男に誓を立てて、男からも誓を貰はうとしたのではない。自分の立てた誓は唯自分の心に立てた誓である。

女はさういふ風に考へてゐたから、男の手紙にどういふ文句があらうと、ただ指の無事に向うへ著いたことだけを喜んだ。

手紙が來てからちやうど三日目に、男は又東京へ出て來た。來ると直ぐ、赤坂の家から女を呼んだ。女は宙を飛ぶやうにして行つた。

男は女の指を小さな壜に漬けて持つてゐた。女の顏を見ると、いきなりそれを女の前に差しつけて、ひた謝りに謝つた。

「僕が惡かつた。僕が惡かつた。僕が惡かつた。」

男が女の指を貰つた時は、ちやうど男の婚禮の日がきまつた時であつた。男は女の淸い靑をどうすることも出來なかつたのである。

「せめて婚禮の當日まで、僕と君と一緒に暮らすつもりで、かうやつてこの壜を始終持つて歩いてるんだ。當日になつたら、君はもう死んだものと思つて、これはどこかのお寺へ埋めようと思ふ。そして、そこへお墓を立てて、僕は一生お參りに行かうと思ふ。」

男のかう言ふのを聞くと、女は聲を立てて嬉し泣きに泣いた。

男も弱かつた。女も弱かつた。二人はとても今の世に生存の出來る人達ではなかつた。

男が女の指を埋める日が來た。その日を女は男の最後の手紙で知つた。

女はその日を男が死んだ日だと思はうとした。女は朝から夕方まで、自分の部屋に閉ぢ籠つたきりで、男から來た古い手紙を一つ一つ自分の手で裂いた。手紙は箱根細工の大きな箱にぎしぎしに詰まつてゐた。いくら裂いても、いくら裂いても手紙はまだ箱の底に殘つてゐた。女は讀むまい讀むまいと思ひながら、ついつい大抵な手紙は讀んでしまつた。

日の暮れに、女は女中のお友を呼んだ。お友が來ると、手紙の山を指さして、お風呂の焚きつけにでもして一字も殘さず燒いて貰ひたいと言つた。お友は悲しさうな顏をして、男の手紙を幾度にか下へ運んだ。

女は電氣もつけずに暗い部屋の中に默つて坐つてゐた。暫くすると、お友が來て、

「お手紙でお風呂が立ちました。どうぞおはひり下さいまし」

と、言つた。

女は短くなつた左の小指を抱くやうにして、男の手紙で沸いた風呂へ、雪のやうな體をしみじみと漬けた。そして立ち登る湯氣の中で心ゆくばかり涙を流した。

逆戻り

「奥さんは餘程喉頭を痛めてをられます——藥も藥ですが、何より宜しいのは轉地ですな。」

掛かりつけの猶太人の醫者からかう聞いた時、グスタアフは腹の中で雀躍をした。

「リュウゲン島に母の別莊があるのですが、あすこではいけないでせうか。海岸ではいけないのでせう。」

グスタアフは海岸の好い事を知つてゐながら、わざとかう訊いた。目の前に出された皿を、わざと手を附けずに、樂しんで眺めてゐるやうな心持で。

「海岸が好いのです。リュウゲンなら結構です。田舍の醫者ではありますが、あすこには信用の出來る醫者もゐますから、御紹介も致しませう。」

グスタアフは急に額を曇らして、躊躇するやうに妻の顏を見た。

「奥さんの御病氣は神經が九分です。」いつも醫者にかう言はれる妻君のハンナは、心配さうに目を丸く見張つて、醫者の表情のどんな微細な部分をも見逃がすまいとしてゐた。

「ハンナ、行つて見るか。アルバアトを連れて——俺も一緒に行つてやりたいが、この夏はどうしても王立劇場に提出する脚本を書き上げてしまひたいからな。でないと、又一セイゾン遲れる事になる。」

「リュウゲンでお書きになつたらどうです。」

醫者がかう訊くと、好い事を訊いてくれたといふ風に、グスタアフは妻の顏を見ながら答へた。

「あすこなら靜で好いのですが、實は今度の題材がこの伯林の踊り場の出來事なので、どうしてもここにゐないと總てに都合が惡いのです。」

「そりやあ困りましたな。奥さんの御病氣は神經が九分なのですからな。寂しいのが何よりいけません——わたしがお供をして上げると好いのですが……」

醫者がかう言ひかけると、グスタアフは腹の中で凱歌を奏しながら、

「お忙しいのでせう。」

と、突つ込むやうに言つた。唯でさへ値段の高い醫者に、二週間も三週間も一緒に行つてゐられては堪らないと思つたのである。それだけの金があつたら、可愛いロオニイに少くとも二十遍は會へると思つたのである。

「なあに、母は賑かな人ですし、漁師の上さんや何かが毎日のやうに大勢遊びに來ますから、あつちは少しも寂しい事はないのです。」

「それに坊つちやんが御一緒なら、お氣も紛れませう。」

醫者も笑つて相槌を打つた。

妻君はやつぱり默つて、目を丸く見張つて、醫者の顏をぢつと見てゐた。

暫く詞が絶えた。

「どうだ、ハンナ、行つて見るか、アルバアトを連れて。」

暫くして、グスタアフは二度かう訊いた。

「あたしは行つても構ひませんが、あなたがお一人ではお困りだらうと思つて。」

ハンナはやはり醫者の顏を見ながらかう答へた。妻君のこの一語の内には、まるで別の意味が含まれてゐるのである。その暗號を讀む事の出來る人は亭主のグスタアフの外、世界に一人もゐないのである。「自分が留守になると、唯さへ遊び好きな亭主は寫生を口實にして、毎晩のやうに踊り場へ入り浸るだらう。どうも近頃これと目指す女も出來たやうである。若し自分が留守の内に、そんな者と腐れ合ふやうな事になつたら自分はどうしよう。」妻君の世間並な短い優しい挨拶の内には實にこれだけの意味が含まれてゐた。

そこで、グスタアフも暗號で答へた。

「なあに、ジエニイがゐるから、内の方はちつとも困りやしない。唯あの女は俺が何か一つうまいと言つて褒めると、その明くる日もその又明くる日も同じ物ばかり食はせる奴だから、一週間一週間に献立だけは送つて貰ひたい。どうせ、面會謝絶で、内へ引つ込んで書いてばかりゐるんだから、他に用はなんにもないし、俺はちつとも困りやしない。」

グスタアフの暗號は、「献立」と「面會謝絶」に含まれてゐた。前者では妻に對する自分の愛情を表し、後者では妻の留守中の自分の生活を辯護するつもりであつた。

「でも、踊り場へはお出かけになるのでせう。」

ハンナは亭主の詞に矛盾のあるのを直ぐと見つけて、かう訊いた。

併し、グスタアフは少しも慌てなかつた。彼は妻の「善人」な事をよく知つてゐた。自分の妻位欺し易い人間はないと思つてゐた。

「いや、踊り場へはもうさう行く必要はないのだ。唯あすこの給仕頭に時々内へ來て貰ふ約束になつてゐる——色々内幕を教へて貰ふ爲に。」

グスタアフは、落ちつき拂つてかう答へた。

人の好いハンナはもう亭主に返す詞をなんにも持つてゐなかつた。そこで、又心配さうに丸く目を見張つて醫者の顏をぢつと見た。

「奥さん、思ひ切つてお出かけになつたら如何です。この空氣の惡い町に入らしたら御病氣は長引くばかりです。リユウゲンへ入らつしやれば二週間できつと癒ります。」

醫者は太い金鎖のついた大きな金時計を、チヨツキの衣兜から出して見ながら、「早く極めて貰ひたい。」といふやうな顏をして言つた。

「ほんとに、あなたお困りになりやしなくつて。」

ハンナは亭主に、もう一度同じ暗號を言つた。

「困らない。」

グスタアフも、もう一度同じ暗號で答へた。そして腹の中で、「もう大丈夫だ。」と思つた。

その明くる日の晩、グスタアフは妻君と子供を連れて、ステチナア停車場を立つた。

「送つてだけは行つて上げよう。その代り、俺は爲事に掛からなければならないから、直ぐ歸るよ。」

グスタアフは、家を出る時も、自動車の中でも、停車場でも、この事を繰り返して言つた。併し、ハンナはそれを幾度聞いても、決して氣を惡くしなかつた。愈行くと極まつてから、急にグスタアフの顏が嬉しさうに輝いて來たのをも、ハンナは自分の爲に喜んでくれるのだと思つた。そして忙しい中を送つて行つてくれるだけでも、どんなにか有難いと思つた。

汽車の大好きなアルバアトは、その日の朝早くから、餘所行の著物を著て、はしやいでゐた。

汽車は三種の喜びを載せて、闇の中を走つた。三種の喜びは、快く汽車に搖られながら、やがて三種の樂しい夢になつた。

リユウゲンの別莊に著いた時は、夜の白々明けであつた。

早起きの母は、もう著物をちやんと著て、門の外に立つて漁夫の上さんらしい頑丈な女と、土地の訛りで何か大聲に話してゐた。

「まあ、よくお出でだつたねえ。ハンナが何處か惡いさうだが、どうおしだい。なあに、ここへ來てゐれば、どんな病氣でも潮風で飛んで行つてしまふよ。ねえお上さん。」

と言ひながら、グスタアフの母は、漁師の上さんの顏を見たが、これは都の詞だつたので、上さんにはよく分からなかつた。上さんは唯不思議で堪らないやうな顏をして、柄の長いハンナの蝙蝠傘を見てゐた。

「まあ、アルバアトかい。あたしは何處か他の家の子でも連れて來たのかと思つたよ。大きくおなりだねえ。アルバアトや、幾つにおなりだい。まあ、五つにおなりかい。ねえ、お上さん。もう五つになるとさ。」

かう言つて、又母は嬉しさうに漁夫の上さんの赤い顏を見た。上さんは、ハンナの蝙蝠傘の柄から、アルバアトの赤皮の小さい靴に目を移して、伴のハンスにもいつかかういふのを買つてやりたいものだと思つてゐた。

グスタアフは內へはひると、直ぐ母に斷つた。

「僕は爲事がありますから、直ぐ次の汽車で歸ります。どうか二週間程留めてやつて下さい。暇さへあれば又ちよくちよくやつて來ますから。」

母は嫁と孫が可愛くて堪らないので、もう息子などはどうでも好かつた。

「なあに、こつちは安心だから、來なくても好いよ。けふも忙しいんなら、直ぐお歸りが好いよ。珈琲でも飲んで。」

母がかう言ふと、ハンナも賛成するやうに亭主の顏を見て笑つた。

グスタアフは、幾度も心の內で「俺は幸福だ。」「俺は幸福だ。」と繰り返した。

やがて、手製の黑パンと土地で出來るバタと大きな茶碗で黑い珈琲が一杯、グスタアフの前へ出た。

「俺の幸福の封印だな。」

グスタアフは腹の中でかう言ひながら、食卓の上を見た。

伯林行の汽車へ乘り込むと、グスタアフは鳥が飛ぶやうな形をして、二三度兩手を上下に振つた。さうして、狹い箱に載せられて、地面の上を引き摺られてゐるのも知らないで、飛行機にでも乘つて、自由な大空を駈けてでもゐるやうに思つた。

「ロオニイ。ロオニイ。ロオニイ。」と、グスタアフは聲を出して、三度女の名を呼んだ、そして、今まで口に出す事の出來なかつた名前が、何の障碍もなく、自由に平氣で言へるやうになつたのを喜んだ。

「併し、この儘伯林へ歸つて了つては、時間が早過ぎる……伯林へ歸つて、あの寂莫とした家の中で、踊り場のあく時間を、たとひ一時間でもぼんやり坐つて待つてゐる事はとても出來ない。」

グスタアフはかう思つた。彼はこんなに急いで、リュウゲンを立つて來る必要はなかつたのである。併し、放免と極まつた囚人が一刻も早く牢屋を出たいのと同じやうに、グスタアフは、さうと極まつたら、一分時も早く妻と子の側が離れたかつたのである。それで兎にも角にも一人になつて、汽車に乘つてしまつたのである。丁度、グスタアフの乘込んだ部

屋には誰も乘合の客がなかつたので、彼は尙更「自由」を染み染みと味はふのであつた。

「さうだ。「湖水」へ寄らう。「湖水」へ寄つて、フオン・ザイデルを尋ねてやらう。あいつもこの頃は寂しがつてるに違ひないから。」

暫くして、グスタアフはかう考へた。フオン・ザイデルは或男爵の嗣子で、グスタアフの遊び仲間の一人である。大學の法科を途中で廢してから、好きで繪筆を持つ內に、若い繪かきや文學者の友達が澤山に出來て、繪よりは「遊びの道」にかけて、早くも一方の旗頭となつてしまつた。去年或惡足のある女に引つ掛かつて、一萬マアクの手切れを取られてから、すつかり大量な父をしくじつてしまつて、今はビスマアクの從卒をしてゐた事のあるといふ極めて頑固な年寄の執事を附けられて、伯林郊外の或湖水の岸にある父の別莊へ流されの身の上となつてゐるのである。フオン・ザイデルの遊び仲間はここを唯「湖水」と呼んだ。そして、フオン・ザイデルの事を「湖水の男爵」と呼んだ。

「湖水の男爵、どうしてるな。老執事のボイトラアに普佛戰爭の講釋でも聞かせられてゐるかな。こなひだの手紙にも書いてあつたな――ここには Nachtleben もなければ Burmmelei もない、唯湖水の波の眠さうな裾捌きと、白樺と松との接吻があるばかりだつて。可哀さうに、一つ行つて、魔界の近信でも傳へてやらうよ……」

グスタアフは、もう爲事の事などは何も考へてゐなかつた。王立劇場へは、もう四年から續けて脚本を提出してゐるのだが、まだ一度も及第した事はないのである。踊り場のタバランへ通ふやうになつてから、さういふ場所を舞臺にした或三幕物の喜劇を考へついてゐるのは事實であるが、まだ登場人物の數さへしつかり定つてはゐないのである。グスタアフの所謂 Arbeit は、お孃さん育ちの妻君を喜ばす口實に過ぎなかつた。

「だが、ロオニイの事は默つてゐよう。男爵に話すと直ぐ野心を起すからな。あいつは友達に女が出來ると、直ぐ後から行つて横取りをする病があるからな……」

グスタアフは、又こんな事も考へた。そして、

「ロオニイ。ロオニイ。可愛いロオニイ。」

と、もう一遍聲を出して言つた。

「今夜はゆつくり會へるよ。なんにも心配なしに會へるよ。」

フオン・ザイデルは、グスタアフの不意の訪問を非常に喜んだ。併し、二人の側には、見張りでもするやうに、始終執事のボイトラアが、直立不動の姿勢を取つて立つてゐた。二人は言ひたい事を言ふ事が出來なかつた。

「どうだ。繪はかけるか。」

「一向かけないね。僕はハンス・トオマのやうな抒情詩人ぢやないのだから、人間の生活のない所にゐては、繪はかけない……今度のゼツエツシオンには面白いものがあるかね。」

セザンヌの小品に好いのがあつたね。屋根をかいたのだがね、唯ブリキの汚ない屋根と空だけが書いてあるのだ。その中に實に無盡藏な色彩と生命とがあると思つたね。それから若い時分にかいた物らしい「人殺し」といふ繪があつた。眞つ黑に嵐の荒れてる中で、一人の男が一人の男を地べたの上に押し倒してゐるのだ。筆つきはまるでドオミエだ。實に力の充滿した繪だつた。ああいふ所もセザンヌは通つて來たのだね。」

「見たいものだな。繪と音樂ばかりはとても人の話を聞いたばかりでは分からんからね——ホドラアはどうだ。」

「大きな婦人の肖像が出てゐるよ。併し、どうも僕はホドラアには感服出來んね。寫眞を見ると實に線が好いが、實物を見ると、いつでも色でがつかりしてしまふのだ。今度の肖像などでも、マツチのペエパアのやうな、著物の色が實にたまらんね。」

「相變らず君はホドラア嫌ひだな。僕はそれ程でもないね。君のそんな話を聞くと、尙自分で一度見て來たくなるね——君は佛蘭西の芝居が嫌ひな癖に、佛蘭西の繪は好きなのだね。僕は又佛蘭西の繪が嫌ひな癖に、佛蘭西の芝居が好きなのだ。それでゐて、君と僕が仲の好いのは唯一つ趣味の一致する所があるからだね——卽ち……」

と言ひかけて、フオン・ザイデルは執事の側に立つてゐるのに氣が附いた。そして、舌の先まで出て來たLa femmeといふ詞を飲み込んでしまつた。

「時に、君はこの夏は何も書かないのか。もう王立劇場へは提出しないのか。」

「湖水の男爵」はLa femmeと一緒に、珈琲を一口飲むとかう話題を變へた。

「うむ。「踊り子」といふ三幕物の喜劇を書かうかと思つてゐる。」

「喜劇を。」

「うむ。ラインハルトが下らない佛蘭西物の喜劇をカムマアシュピイレなどへ出してゐるのを見て、僕は腹が立つてならないのだ。フエリツクス・ホレンダアも存外分からない奴さ。獨逸座のBätterに獨逸人は喜劇を書く才能が昔から無い、喜劇はやつぱり佛蘭西だなどと書いてゐるのだ。エチアン・レイが何だ。サアシヤ・ギトリイがどれ程の作者だ。」

「でも君、エシアン・レイは有望だと僕は思ふぜ……」

ボイトラアはさつきから目を光らして二人の話を聞いてゐたが、一向分からない話ばかりなので大に當惑したが、まあ下等な話ではないらしいので、「これはそんなに惡いお友達で

はない。」と思つたか、安心したやうに太息をついて、默禮をして、部屋を出てしまつた。

「やつと行きやあがつた。まるで探偵のやうな爺いだ。」

フオン・ザイデルは老執事の後姿を見送りながら、小さい聲でかう囁いた。そして、

「どうだい、グスタアフ。湖畔亭へでも行つて、一杯やらうぢやないか。こんな所ぢやあおちおち話も出來やしない。」

と、言つた。

「よからう。」

と言つて、グスタアフは立ち上がりながら、

「僕もそんな事だらうと思つたから、わざと繪の話か何かでお茶を濁したんだ。」

「一萬マアクにしては、刑が重過ぎるよ、併し、こいつばかりは控訴の道がないからね。」

「なあに、暫くの間さ。まあその間に十分精力を養つて置くさ。」

「この頃は惡夢ばかり見るので、その精力がだんだん細るばかりだ。」

「おや、おや、可哀さうに。」

二人はこんな事を言ひながら、裏門から外へ出た。そして松の木の生えた小さい山を一つ越えて、古い車の齒の跡のある寂しい街道へ出ると、わざと大廻りをして湖水の緣へ出た。二人の話はもうその間に十分白粉臭くなつてゐた。

「成程、白樺と松の木が接吻をしてるね。」

「よし給へ。」

「湖水の波の裾捌きかね。こいつを見て、女を思ひ出す所は、あんまり抒情詩人でなくもないね。」

「よし給へと言つたら——時にグレエテはどうした。」

「あいつはこの頃支那人專問になつたらしいね。こなひだポツツダマア、プラツツで會つたら、青い顏をして、支那の學生らしいぶくぶく肥つた奴と歩いてゐたつけ。僕が目で嚇かしてやると、「男爵にはなんにも言ひつこなしよ。」か何か言つてやがつた。」

「ふうん。すると、あいつも墮落したんだな。」

「君の時分は、極めてnettな婦人だつたからね。」

「よし給へ——それからタバランのエルゼはどうした。」

「あいつはあすこのKapellmeisterと結婚をしたよ。」

「そんな事だらうと思つてゐた。あの伊太利人だらう。僕は初から臭いと思つてゐたんだ。」

「あいつも、君、少し何だつたんだらう。」

「こんな事をしてゐる内に、みんな逃げられてしまふんだ。ああ、つまらねえ、つまらねえ。」

と、わざと卑しい口調で、投げるやうに言ひながら、灰色をした趣のない湖水の面をぢつと見た。沖の方を、ヨツトが

一艘、眞赤な著物を著た女と眞つ白な著物を著た男とを載せて走つてゐる。

グスタアフは一人で自分の幸福を感じながら歩いた。フオン・ザイデルがいくら斯道の通でも、まだ自分とロオニイとのことは知らないのだ。友達がみんな浮かれた派手な戀をしてゐる中で、自分だけは極めて落ちついた地味な戀をしてゐるのだ。ロオニイは六つになる子供もある。半年前にエルトハイムの書記をしてゐた亭主に死なれて、急に困つたところから、好きで習つた踊で親子二人の口を濡らす事になつたのである。ロオニイは決して賣女ではない。子供の將來を思つて、藝一つで身を立ててゐる女である。ロオニイの顏には、どんなに白粉の薄い時でも、この種類の女によく見る疲勞の色がなかつた、卑しい影がなかつた。踊も素人出とはとても思はれぬ程群を拔いてゐた。グスタアフの目には、キイゼンタアルもヅンカンもパウロワも、ロオニイには及ばなかつた。

彼はさういふ女と或機會から相許すやうになつたのである。その晩、珍しく女は醉つてゐた。グスタアフも醉つてゐた。二つの杯は幾度となく口を觸れ合つた。シヤンパアニュの雫は二つの杯の緣をこぼれて、モザイツクの床を濡らした。やがて夜の闇を走り出したタクシイの暗い函の中では、唯人間の手と口とが渦を卷いた。

併し、グスタアフはさういつた一時の興奮だけで滿足する事の出來ない男だつた。やがて、長い手紙の遣り取りとなつた。Chambre separée の密語となつた。グスタアフの戀は段段理性の滿足を得て來た。「自分一人に許してゐるのだ。」といふ信仰が、何よりもグスタアフの誇を滿足させたのである。彼は坊ちやんらしい得意と勝利の觀念で夢中になつた。

「亡くなつた御亭主は君の何處が一番好きだと言つてゐたい。」

「足の親指が一番美しいと言つてゐました。」

「僕は君の白い小さい額が好きだね。」

「あなたの奧さんは、あなたの何處が一番好きだつて言つてらして。」

「妻かね。あいつは僕の耳ばかり褒めてゐる。」

「あら、あたしはあなたの目が一番好きですね。湖水の一番深い所を見てゐるやうで、いつまで見てゐても飽きないんですもの。」

二人はこんな話までするやうになつた。勿論子供の話もし合つた。ロオニイは自分の女の子の自慢をした。グスタアフは自分の男の子の自慢をした。暮らしの話もし合つた。收入支出の細かい話もお互に隱さなかつた。さういつた隔てのない會話の内に、グスタアフは愈益自分の幸福の確實性を感ぜずにはゐられなかつた。

グスタアフはリユウゲンへ妻子を送つて行く事も、ロオニイの所へ手紙で言つてやつたのである。今夜から當分何の心配もなしに會へる事も書いてやつたのである…

「僕は君が羨ましくて堪らない。」

暫く默つてゐたフオン・ザイデルが、突然大きな聲でかう言つた時、グスタアフはびつくりして、急には返事も出來ないで、穴の明く程ぢつと「男爵」の顏を見た。

湖畔亭は直ぐ二人の前にあつた。

禿頭の、鼻の赤い、樽のやうに丸く腹の出た主人は、淺橋の側に立つて、淺瀨で魚をすくつてゐる子供に、何か大きな聲で言つてゐたが、二人の姿を見ると、直ぐその側へ來て、苦しさうに短い首を下げた。

「これは若樣、ようお出でござります。伯林からお友達が……それは、それは、ようこそ。けふは生憎土曜日で少し立て込んでをりまするが、裏座敷では如何でござりませう。」

「裏座敷。」

「男爵」は直ぐ厭な顏をした。

「生憎立て込んでをりまするで。」

主人は困つて、今にも泣き出しさうな顏をした。

「好いぢやないか、裏でも。その内何處か明くだらう。」

グスタアフがかう言つたので、「男爵」は直ぐ諦めて、裏山の方へ歩きながら、

「ところが、中々明かないんだて。ここへ來る奴はみんな一對だからね。中々引つ附いてゐて歸らうとしやがらないのだ。それに、立て込んでるにもなんにも、湖水に向いた方は二部屋しかないんだからね。」

二人は白樺の林の見える裏座敷へ通つた。主人は「男爵」の命令をも待たずに、「男爵」の好きな酒肴を用意した。部屋の惡い所を待遇で償はうと思つて、主人は赤い鼻に汗をかきながら、臺所と裏座敷の間を、忙しさうに往つたり來たりした。

「正直な親爺め、ひどく心配してやがる。」

「男爵」はかう言ひながら、白葡萄酒を二つの杯に注いで、

「南獨逸に親類があるので、葡萄酒だけは一寸伯林でも飲めないやうなのを飲ませるよ。まあ一つ君の健康を祝さう。」

二人は同時に杯を上げて、目と目と見合せながら、一緒に "prost!" と言つた。

「男爵」は一口飲むと、杯を下に置いて、溜息をつきながら、

「ほんとに僕は君が羨ましくて堪らない。」

と、もう一度同じ事を言つた。

「何が羨ましいのだ。」

「羨ましくなくてどうする。君は妻君も子もありながら、か

うやつて自由に遊んで歩いてゐられるのだ。僕は獨り者でゐながら、今のやうな窮屈な生活をしてゐるのだ。」

「でも、君はもう前に散々やつたから好いさ。僕などはこれからだ。」

「冗談言つちやいけない。少しばかり金を使つたからつて、それが何だ。金を使ふばかりが「遊び」ぢやない。そこへ來ると君などは淒いものさ。」

グスタアフは、覺えず嬉しさうに笑つたが、やがて何氣ない態で、

「それは君の事だ。僕などは金も使へないし、金を使はない「遊び」も知らないのだ。まだまだ君の靴の紐を解くにも足らんよ。」

「嘘を言ひ給へ。神樣が御存じだ。けふなどもここでゆつくり時間を計つて、丁度踊り場の明く十二時時分に、伯林へ飛び込まうといふ寸法なんだらう。」

グスタアフは圖星を指されて、少からず狼狽した。

「なあに、さういふわけでもないさ…」

と言ひながら、後が言へないで、窓の外を見てゐると、白樺の林の奥から、麥藁帽子を阿彌陀に冠つた小兵な男が、オペレツタのはやり歌を鼻で唄ひながら出て來た。

「おや。ノイマンらしいぜ。」

「男爵」も外を見た。

「ノイマンだ。」

「先生、どうしてこんな所へ來てゐるのだらう。」

「この近所に Freilicht の芝居が來てゐるといふ話を聞いてゐたが、事によると、先生 Regie をやつてゐるのかも知れないぜ。」

「兎に角、呼んで見ようか。」

「好からう。「莫迦」も酒の肴には好いからね。」

グスタアフは先づ口笛でノイマンを呼んだ。それから、大きな聲で名を呼んだ。

ノイマンはびつくりしたやうな顏をして、鼻唄をやめると不思議さうにあたりを見廻したが、やがて裏座敷の窓に氣が附くと、轉げるやうに山を降りて來た。

「これは、これは、お揃ひですな。どうしてこんな所へ。な、な、成程。グスタアフ君が來られたので、御一緒に。然樣ですか。「男爵」の御別莊へは一度伺はなければならないならないと思ひながらも、色々お話も承つてをりますので、ついどうも…」

ノイマンは窓の外で、一息にこれだけしやべつた。

「君もここに泊つてゐるのか。」

「男爵」がかう聞くと、

「ええ、然樣です。實はそのちよいとした芝居を一週間ばかり持つて來ましたのでね。とてもお目にかけられるやうな物

ぢやないんですよ。」

「へえ、それは面白い。出し物は何だね。」

グスタアフがかう聞くと、

「グリルパルツアアの「海と愛との波」ですがね。夏場で手の明いてる若い所ばかり集めて來たんですから、物にもなんにもなつちやゐないんです。」

と、謙遜らしい事を言ひながら、得意さうに鼻の穴を大きくしたが、二人がもう何とも芝居の事を言はないので、

「それにしても、ひどい部屋へお通ししたものだな。表は明いてゐないのですか。一つ私が談判して上げませう。」

と、額の汗を拭きながら言つた。

丁度、そこへ宿屋の主人が、自慢の魚料理を二皿、片手に持つて、部屋の中へはひつて來た。

「おい、親爺、表は明いてゐないのか。こんな所へこんな方方をお通しするといふ事があるものか。」

ノイマンは、權高な調子で、窓の外から叫つた。

主人は「何を芝居者が。」といふ顏つきで、

「それは旦那よりわしの方がよく知つてゐますが、どうも爲方がないのです。表二階は二部屋しきやないのを、旦那が一つにけふのお客が一つ取つてしまつたんですから。」

と、叱りつけるやうに言つた。

ノイマンは、きまりが惡さうに手と手を擦り合せながら、

「それぢやあ、私の部屋へお通し申さないか。直ぐ行つて片づけて置くから。」

と言つて逃げるやうに窓の側を離れた。

「どうなさります。」

と言ひながら、主人は「男爵」の顏を見た。

「一人で泊つてゐるのかい。」

「はい。お一人で。時々器量の惡い女優が一人訪ねては參りますが。」

「ぢやあ、役者連は他の宿にゐるのだね。」

「ステエションの近所にゐるのださうでございます。」

「どうするね。」

と言つて「男爵」は相談するやうにグスタアフの顏を見た。

「構はないから行かうぢやないか。僕にはやつぱり湖水の方が珍しくて好い。ノイマンのやうな奴はかういふ時に利用してやるより外に用のない男だ。」

二人は直ぐ湖水に面したノイマンの部屋へ移つた。ノイマンは部屋を出たりはひつたりして、給仕人のやうに働いた。一通り酒肴の引越しが濟むと、ノイマンは自分も二人の側へ腰をかけた。

「どうも惡い事は出來ませんな。まさかあなた方がお揃ひで

こんな所へ見えるとは夢にも思ひませんでした。」
「男爵」は冷笑して、
「何か悪い事をしてるのかね――又女優の新色でも出來たのぢやないか。」
「いえ、いえ、どう致しまして。決してそんな――」
と、わざと狼狽しながら、ノイマンは暗に喜びの色を見せた。「男爵」に冷やかされたのを名譽とも光榮とも感じたのである。
「近頃リイザの消息はないかね。」
グスタアフも明に嘲りの色を浮べながら、かうノイマンに訊いた。リイザはノイマンが買ひ冠られて、やがて捨てられた女の名である。
「それが大ありなのです……」
と、ノイマンは遊ばれてゐるのも知らないで、ひどく眞面目な顏をした。
「私は實に珍しい經驗をしました。人生の機微は實にこれにありと思ひましたね――丁度こつちへ來る時でしたがね。役者連を先きへ送つて、直ぐ次の汽車で私が立ちますとね、丁度同じ箱にあのリイザが乘つてゐるのです。それが僕とまともに目を見合せながら、始めてでも會つた人のやうに、まるで知らん顏をしてゐるのです。僕は向うで少しでも笑つたら怒つた顏をしてやらう、向うで少しでも怒つた顏をしたら笑つてやらうと思つて、一瞬間も目を放さずに女の顏を見てゐてやつたのです。けれどもリイザは顏の筋一つ動かさないのです。まるで知らん顏をしてゐるのです。女といふものは實に不思議な藝當の出來るものですね――伯林からここへ來る二時間といふもの、ずつとさうなのです。私は是非一つこいつを心理的に描寫して見たいと思つてゐます。」
「で、結局默つて別れてしまつたのかね。」
「男爵」がつまらなさうな顏をしてかう訊くと、
「ええ、默つて別れてしまつたのです。實に……」
と、まだ何か言ひかけさうにするのを、グスタアフは欠伸をしながら遮つた。
「君は芝居へは行かないでも好いのかね。」
「ええ、もうそろそろ出かける時分です。」
「ぢやあ、構はず出かけ給へ。僕達はまだここでお邪魔をしてゐるから。拜見に上がると好いのだが、僕はどうしても今夜歸らなければならないから失禮するよ。」
グスタアフがかう言ふと、「男爵」も、
「さあ、構はず出かけ給へ。君は責任のある躰だ。僕も見に行きたいのだが、何しろ執事がやかましいのでね。」
と、逃げを張つた。二人はノイマンの部屋を占領しながらどうかしてノイマンを放逐しようと骨を折つてゐるのである。

ノイマンは愈といふ時間の間際までゐて、やつと帽子を冠つて出て行つた。
「やれ、やれ。」
二人は同時にかう言つて、同時にほつと溜息をついた。
「あいつも相變らずだね。あれで始終幸福らしい顏つきをしてゐるから不思議だ。」
「男爵」が伸びをしながら、かう言ふと、グスタアフは椅子を立ちながら、
「あいつは女に捨てられるのを、色男になる資格の一つだと思つてゐるのだ。リイザに會ひながらリイザを逃がしてしまふ所などは、當人の言ふ通り實際書けるね。」
暫く詞が絶えた。
酒の強い「男爵」は一人で杯を重ねてゐた。グスタアフは暫く部屋の内を歩き廻つてゐたが、やがて突とエランダへ出た。
ふと、隣の部屋の方を見ると、グスタアフは仰け反るばかりに驚いた。同じエランダの向うに夢寐も忘れないロオニイが立つてゐたのである……ロオニイはグスタアフの顏を見ると、吸ひ込まれるやうに隣の部屋へはひつてしまつた。グスタアフも慌てて自分の部屋へ引つ込んだ。
この出會ひは僅一秒を出なかつた。併し、グスタアフはロオニイの姿を頭の先の先まで、はつきり見た。帽子には新しい赤のリボンが卷いてあつた。服はグスタアフの大好きな、肩に鳥の羽のやうな飾りの附いてゐる、水色の散歩服であつた。靴は白いのが砂で少し汚れてゐた。ロオニイは自分の持つてゐる一番綺麗な帽子を冠り、一番綺麗な著物を著、一番綺麗な靴を穿いて來たのである。
ロオニイの姿を忽ちはつきり見たやうに、グスタアフはロオニイの境遇を俄にはつきり心に描いた――今夜俺が會ひに行くのを知つてゐながら、平氣でこんな所へ來てゐるのだ。勿論一人で來てゐるのぢやない。連れがあるのだ。男の連れがあるのだ。ロオニイは子供もあるし、夜踊り場へ行く外はめつたに餘所へは出られない身の上なのだから、けふ急に思ひ立つて來たのではないのだ。ずつと前から計畫してゐたのだ。こんなに親しい俺とでさへ、まだ伯林以外へ一足でも一緒に足を踏み出した事はないのに、平氣でこんな事をする所を見ると、俺よりずつと關係の密な男があるのだ。俺の外には誰も許さないと言つたのは嘘なのだ。許さないどころか、俺よりずつと許してゐる男があるのだ。ロオニイもやつぱり他の女と同じ女なのだ。誰にでも媚を賣る、誰にでも心を任せる、誰にでも身を委ねる、賣女なのだ、賣女なのだ、賣女なのだ……
グスタアフの信仰は一たまりもなく覆されてしまつた。彼

は崩れるやうに椅子へ腰を落して、ぐらぐらする頭を兩手で抑へた。

「どうした。」

フオン・ザイデルが、かう訊くと、

「醉つたのだ。」

と、震へ聲で言ひながら、グスタアフは兩手を目の上へ持つて行つた。

今まで少しも氣にならなかつた隣の部屋が、俄に氣になり出した。今までどんな音がしようと少しも氣に掛けなかつた隣の部屋の、どんなに小さな音をもグスタアフは聞き逃すまいとした。

「男爵」は酒が大分廻つたので、稍自暴な調子を詞に出し始めた。

「遊びはやつぱりどう廻つて見ても遊びだ。骨牌をする、勝負がつく、すると骨牌は又めちやめちやに集められてしまつて、少しも前の痕跡を殘さない。それと同じ事だ。女に惚れる、女も自分に惚れる、さう思つてゐると、急に或瞬間が來て、女が自分に惚れてゐたのも嘘なら、自分が女に惚れてゐたのも嘘だといふ事が分かる。即ち勝負がつく。すると男と女は忽ち離れ離れになつてしまふ。そこで又新しい骨牌が始まるのだ。戀といふ奴は、どつちか一人がほんとに惚れてゐれば、決して破れるものぢやない。女が自分を欺したと思つて怒るのは、自分も女を欺してゐたからだ。遊びだからだ——僕はもう「遊び」には飽き飽きした……」

「男爵」はまだ何か一人でしやべり續けた。併し、もう一言もグスタアフの耳へははひらなかつた。グスタアフは食卓に肱を突いて、兩手で頭を抱へて、湖水の方をぢつと見詰めながら、隣の部屋の方へばかり耳を鋭くしてゐた。

隣りでは男と女の話し聲が、湖水の岸を打つ波のやうに、始終低く續いた。時々男の聲が興奮するやうに高くなつたが、直ぐ又低くなつた。女の聲は殆ど聞えない位に低かつた。グスタアフは曇つた眼鏡で物を見るやうに、いらいらしながら、わざと落ちついたやうな顏をしてゐた。

暫くすると、隣の部屋から鼻唄が聞えて來た。女はカルメンを唄つてゐるのである。男はエスカミロを唄つてゐるのである……低い男聲と高い女聲とが縺れ縺れて、グスタアフの心臟を掻きむしつた。

「男爵」も、ふとこれに耳を傾けた。

「大分仲が好ささうだね。」

「やつぱり、君の所謂「遊び」だらう。もうぢき勝負のつくのを知らないのだ。哀れな奴等さ。」

「ひどく惡く言ふね。大分僕にかぶれて來たな。」

と言つて、「男爵」は愉快さうに聲を上げて笑つた。すると、急に隣の唄が止んだ。

グスタアフは暫く默つて、又隣の話し聲に耳を傾けてゐたが、やがてもう堪らなくなつたといふ風で、急に大きな聲で歌を唄ひ出した。同じ「カルメン」のドン・ホセを唄ひ出したのである。その聲は甚しく震へてゐた。時々調子さへ外れた。

「君はオペラの唄ひ手になれるね。ひどく dramatisch だ。」

なんにも知らない「男爵」が、眞面目な顏をしてかう言ふとグスタアフの聲は尙震へた。

湖水は刻一刻と暮れて來た。朝から曇つてゐた空から、いつの間にか靜な雨が降り始めた。

「實に靜だ。男同志ぢやとてもやり切れんね。」

「男爵」がかう言ふ途端に、電氣がこつちの部屋にも隣の部屋にも一度にぱつとついた。

グスタアフは再び仰け反るばかりに驚いた。エランダの欄杆の外にある風避けの硝子戸が一枚、締め殘されてゐた。それが丁度こつちの部屋と隣の部屋との中間にあつた。それに隣の部屋の樣子がまざまざと映し出されたのである——

男と女は食卓の一つの角に、肩と肩とを擦り寄せるばかりにして坐つてゐる。女は既に帽子を脫いでゐた。男の顏はよく分からないが、髮を短く刈つた、上髭のちよぼちよぼと生えた、學生らしい色の白い男である。

男と女は顏と顏を喰つ附けるばかりにして、何か小聲で話をしてゐる。やがて、女は細い手を伸ばして、男の手を柔かに掴んだ。そして、男の手の甲を自分の手で擦りながら、嬉しさうに笑つた——

グスタアフは不意に背中から水でも浴びせられたやうな氣がした。思はず「男爵」の手を掴んで、硝子戸の方を指さした。

「ほほう。大分うまく遣つてるな。これは好い酒の肴だ。」

まだなんにも氣の附かない「男爵」は、冷淡にかう言ひながら、又杯を一杯重ねた。

「まだ吾々に氣を兼ねてゐるのだ。今に Kuss と來るぜ。」

グスタアフがかう震へ聲で言ふと、

「無論さ。こりやあ好い見世物だ。」

と言ひながら、「男爵」は嬉しさうに硝子戸を見詰めてゐる——

やがて、女は一本の紙卷煙草に火をつけた。そして、それを一口吸ふと、自分の手でそれを男の口へ持つて行つた。男は手を出さずに、女の手からそれを一口吸ふと、嬉しさうに笑つた。女は又それを自分の口へ戻して、一口吸ふと、又それを男の口へ戻した——

グスタアフは急に寒氣がして來た。重い荷物でも載せられたやうに、急に兩方の肩が痛くなつて來た。兩手がぶるぶる

と震へて來た。彼は躍り上がりたいやうな氣がした。駈け出したいやうな氣がした。けれども、「男爵」の手前、彼は椅子にぢつと坐つてゐなければならなかつた。

「もう澤山だ」

グスタアフが覺えず、小聲でかう呟くと、「男爵」は笑つて、

「意氣地がないね。これからぢやないか、見ものは。」

と言つた。グスタアフは、もうなんにも言へなかつた。そして一人でがたがた震へてゐた——

煙草は根元へ來るまで、男の口と女の口との間を往つたり來たりした。やがて、それが濟むと、今度は男が女の手を摑んだ。男は樂器のやうに女の腕を兩手で抱へながら、又何か小聲で唄ひ出した——

「もう歸らう。」

と、グスタアフは覺えず怒つたやうな聲を出して言つた。

「まあ好いだらう。もう少し隣の邪魔をしてやらうぢやないか。」

「いや、もう汽車がなくなるから。」

「なくなつたら、ここへ泊るさ。ノイマンはきつと歸りやしないから。あいつ今まで歸らないところを見ると、今夜は役者の宿へ泊るつもりなんだらう。」

「いや、どうしても今夜は歸らなければならないのだ。」

グスタアフはかう言つたが、實はもう歸る目的は無くなつてゐたのである。ロオニイが伯林にゐないとすれば、なんで急いで歸る必要があらう。ロオニイがこんな女なら、もう一生伯林へ歸らなくても好いのである。しかもグスタアフは早くここが出たくて堪らなかつた、早く伯林へ歸りたくて堪らなかつた——もうこの上隣の部屋を見てゐるに堪へなかつたのである。終列車までぐづぐづしてゐて、若し女が歸らない所でも見たら、愈堪られないと思つたからである。

「どうしても終列車より一つ前の汽車で歸らう。さうして女は終列車で歸つた事にして置かう。」

グスタアフはかう思つた。彼は女を見下げ果てながらも、まだ何處かに一縷の望みを繫いで置かずにはゐられなかつた。

「冗談は置いて、僕はどうしても今夜は歸らなければならないのだ。」

グスタアフの調子があんまり眞面目なので、「男爵」ももう無理に止めようとはしなかつた。

二人は湖畔亭を出ると、雨に濡れながら湖水の岸を歩いた。湖水はもう全く暗かつた。遠くの向う岸に、何の燈か、赤い小さい燈が一つ見えた。

グスタアフは、もう一度湖畔亭の二階を振返つて見た。男と女は明かるい燈の下で相變らず引つ附いて坐つてゐた。

グスタアフは又肩が痛くなつて來た。

ステイションへ著くと、丁度終列車の一つ前の汽車が來る少し前だつた。

二人は屋根の不十分なプラツトフオオムに立つて、汽車の來るのを待つてゐた。雨はだんだん激しくなつた。風さへ少し加はつて來た。

グスタアフはもう躰の心まで雨に濡れ通つたやうな氣がした。冷たい汗が背中を流れるのがよく分かつた。ぢかに著た縞シヤツが濡れたタウエルのやうに胸に冷たく觸るのが分かつた。誰か力の強い人に、後から兩方の肩を抑へつけられてゐるやうな氣がした。彼は幾度も肩を振拂つて見たが、それでもやつぱり肩を摑んでゐる手は離れなかつた。彼は肩を竦めて見たり開いて見たりしたが、それでも肩はめり込むばかりであつた。その内に益惡寒が激しくなつて來た。

「ひどく震へるね。寒いんぢやないか。」

「男爵」にかう言はれると、グスタアフは睫についた雨の雫を指で拂ひながら、

「なあに、少し濡れたからだ。」

と、わざと平氣な顏をして言つたが、ふとノイマンの事を思ひ出して、又沈んだ顏をした。

さつき自分はノイマンを嘲弄したが、今の自分にノイマンを嘲弄する權利はない。ノイマンは如何にも莫迦な男だ。併し、現在の彼は、このステイション近くの宿屋でたとひ器量が惡くても女優と名の附く女と逢引をしてゐるのだ。然るに、自分はどうだ。女に毎晩逢ひたいばかりに、妻子を欺して——さうだ、欺したのに違ひない。ハンナの病氣はそれ程重いのではないのだ。看護さへよければ、都に置いても差支はないのだ。それを、何のかのと骨を折つて理窟をつけて、田舍へ送つてましつて、さて女に會ひに行かうとすると、その肝心の女は他の男と旅行をしてゐて、都にはゐないのだ。自分は何といふ莫迦な人間だらう。ノイマンの方が遙に利口だ。ノイマンの方が遙に幸福だ……

グスタアフは妻子の事を思ひ出すと、良心の呵責に堪へられなくなつた。彼は今にも泣き出しさうな顏をして、遠くにゐる妻子に幾度か頭を下げた。

「どうか許してくれ。」

彼はかう口の内で言つた。

「あしたにも俺は紙と筆を持つて、リユウゲンへ行つてしまはう。さうして、もう再びロオニイには會ふまい。そして、ほんとに爲事をしよう。そして、今度こそは王立劇場に採用されよう。そして、ロオニイの顏を見返してやらう。そして……」

グスタアフは今までの生活を一度に黑く消して、あしたか

ら全く新しい白い紙のやうな生活を始めようと思つた。
「ひどく默つてしまつたね。君はやつぱり坊つちやんだね。すつかり今ので興奮してしまつたね。」
フオン・ザイデルにかう言はれると、グスタアフは、
「なあに、さうでもないさ。」
と、投げるやうに言つた。
「でも、君はまだ好いさ。これから伯林へ歸つて、一杯やれば田舍の事なんか忘れてしまふさ。僕を見給へ。これから歸つて、雨の音でも聞きながら、一人で寂しく寢るのだ。おまけに又歸りが遲いと言つてビスマアクの從卒に叱られるのだ。」
グスタアフは、「男爵」の詞を聞いてゐる内に、又未練が出て來た。
「まさか泊るのではあるまい。子供も待つてる事だしするから、歸るには違ひない。事によると、丁度汽車の來る時分に駈けつけて來るかも知れない……」
かう考へながら、グスタアフはぼんやり明かるい改札口の方を見た。そして、知らない男とロオニイが列んで坐つてゐる前に自分が恐い顏をして坐つてゐる汽車の中を心の内に描いた……
汽車が地響きを立てて雨の中を近づいて來た。併しロオニイは終に來なかつた。
「終列車で歸るつもりだな。俺を避けて。」

グスタアフはまだこんな事を思ひながら、「男爵」と手を握つて、汽車に乘つた。
「Au revoir。」
「Au revoir。」
車掌が手を上げて、勢よく "Fertig!" と呼ぶのを聞くと、グスタアフは急に又男らしい氣持になつた。
「新しい生活。」
彼はかう口に出して言つた。そして、笑ひながら、もう一度「男爵」に別れを告げた。

汽車が動き出すと、グスタアフは直ぐ又悲しくなつた。自分の長い間好きで持つてゐた物を、急に捲ぎ取られたやうな氣がしたのである。汽車が誰かの命令で來て、無理に自分を女から引き放して、自分を箱の中に押し入れて、何處か遠くへ連れて行つてしまふやうな氣がしたのである。彼は涙に曇つた目で、同車の人々の顏を見た。同車の人々はみんな髭の生えた男だつた。そして、みんな彼の方をじろじろ見てゐた。彼はこれらの人々に護送されて行くやうな氣がした。
「俺が何を惡い事をした。」
かう呟くかと思ふと、グスタアフの目は急に怒の色を帶びて來た。
「侮辱だ。侮辱だ。」

彼はもう一遍どうしても女に會はなければならないと思つた。この儘逃げてしまふのは卑怯だ。この儘永久に別れてしまつたら、俺の地位は愈みじめだ、どうしても、もう一遍會つて、女を散々苦しめて、女を散々あやまらせた上で別れなければならない。
グスタアフは色々なScenoを心に描いた。先づ徹頭徹尾「沈默」で女に當る場合を考へた。女の所へ訪ねて行くのである。さうして、なんにも言はないでゐるのである。いつまでも唯默つて女の顏を見てゐるのである。女はきつと堪らなくて、急に泣き出すだらう。そして、俺に罪を謝すだらう——彼は女の涙がはらはらと自分の手に落ちる觸感を想像した。
さもなければ、ピストルを一挺持つて行つて、默つてそれを女の前の机に投げ出すのである。あの女は氣が違つて俺を殺すかも知れない。併し、一分と立たない内に、女も俺の後を追ふに違ひない——彼は一種の情死の光景を想像した。
それよりは、先づ手紙を女にやらうかとも思つた。さうして、その返事で女の心を見た上で、女に會はうかとも思つた。何か短い文句で女の肺腑を抉るやうな文句はないかしらと彼は色々に考へた。
汽車はいつの間にか伯林に著いた。グスタアフは自動車を呼んで、眞直にシヤアロツテンブルクの自分の家へ急がせた。自働車の中でも、彼は手紙の文句を考へてゐた。

家へ著いて、暗い階子段を上がりながらも、彼は手紙の文句を考へてゐた。
彼はいつも妻と子供と三人で寢る廣い寢臺へ、たつた一人で横になつた。枕元の小卓の上に立つてゐる妻の寫眞を見ると、彼は又堪らなくなつて、
「ハンナ、どうか許してくれ。どうか許してくれ。」
と、泣き聲を出して幾度も言つた。
さうして、床の中で悶えながら、又女にやる手紙の文句を考へた。恨みの詞、憤りの詞、復讐的な詞が、薄暗い天井で渦を卷いた。彼はどうかして、それらの詞を、恨みらしくなく、憤りらしくなく、復讐的らしくなく言ひ現さうとした。彼は落ちついた短い文句で、女の魂を突き刺してやりたいと思つた。
彼は一晩、心の中で、手紙の文句を、書いたり消したり削つたり殖やしたりした。彼は窓が明かるくなるまで寢られなかつた。
午頃目を覺すと、グスタアフは寢卷を著た儘、顏も洗はないで机に向つた。そして、かう書いた——
親愛なるロオニイよ。
神は硝子戸を通して、總てを僕に語つた。
煙草はうまかつた。手は柔かだつた。湖水の雨の夜は靜

で美しかつた。
君の商賣。君の商賣。
可愛いマリイが「かあちやん」の歸るのを待つて、泣いてゐるよ。

一人の莫迦より。

それから、顏を洗つて、著物を著換へると、食堂へ出た。食堂には一人前のパンとジヤムと珈琲のタツセとが、廣い卓の上にぽつねんとグスタアフを待つてゐた。

彼は新聞を廣げながら、一人でまづさうに珈琲を飲んだ。彼は女中の顏を見てもなんにも言はなかつた。新聞を見ながらも、手紙の事ばかり考へてゐた。

「併し、手紙を出すのは考へ物だ。」

ふと彼はかう思つた。手紙を出すと、先づこつちの腹を向うに見られる事になる。向うはそれに依つて態度を定める事になる。それは戰にとつて確に不利だ。やつぱり默つてゐる方が好い。怒つてゐるのか、怒つてゐないのか、それを女に見せない方が好い。そして、女を苦しませる方が好い。

そこで彼は手紙を出さない事に定めた。併し、今夜直ぐタバランへ行くのは早過ぎると思つた。今夜一晩は内にゐて、女には消息をしない方が好いと思つた。女はきつと今夜俺が來るに違ひないと思つてゐる。今夜俺が行かなければ、女はきつと心配するに違ひない。それから、あした一日女に心配させたところで、あしたの晩會ひに行くのだ。それが好い、それが一番好いと思つた。

グスタアフは帽子を冠つて、ステツキを持つて、外へ出た。何處に行くといふ當てもないのだが、唯家にはとてもゐられないと思つて出たのである。彼は近所の河岸を歩いたり公園を歩いたりした。日曜の事で、人が鎖のやうにぞろぞろ繋がつて歩いてゐた。彼は男と女の二人連れを幾十組となく見た。その中には夫婦らしいのも少しはあつたが、違つた家から會ふ場所を約束して出て來たらしいのが多かつた。

彼は俄に自分の卓の上の手紙が氣になり出した。けふ一日なんにも女に消息をしないでゐるといふ事はとても堪へられないと思つた。あれだけの手紙なら、何でもあるまい。少しは厭みもあるが、毒になる程の厭みではない。女は確にあれだけの事をしたのだ。しただけの事を書いたのに何の不都合がある。勿論こつちの腹を見透かされる程の長文句ではない。あれだけの手紙でも出して置けば、却つてあした會ふ時、沈默を守るのに都合が好いかも知れない——

かう思ふと、グスタアフはもう矢も楯も堪らなくなつた。駈けるやうにして家へ歸ると、急いで朝書いた手紙を封筒に入れて、上書を書いた。上書の字は曲がつたり震へたりした。

彼は駈けるやうにして、又家を飛び出した。そして、直ぐ

近所の郵便局へ飛び込むと、Rohrpost でその手紙を出した。

手紙を出してしまふと、少し氣が輕くなつた。彼はもう一度そこらを散歩して、それから家へ歸つた。

彼は珍しく晩飯を内で喰べた。何年にもない事である。それから、女中を外へ遊びに出して、直ぐ寢室へはひつてしまつた。

その晩、彼はくたびれて、ぐつすり寢た。

その明くる日、彼は一日内にゐた。そしてロオニイからの返事を待つた。併し、返事は午を過ぎても來なかつた。

燈がつく時分になると、彼はもうゐても立つてもゐられなくなつた。彼は當てもなしに家を飛び出した。そして二三の友達を訪ねて歩いた。併し、彼はどの友達に會つても、自分の苦しみを訴へる事が出來なかつた。彼はどの友達の所へ行つても、默つて友達の顏を暫くぢつと見てゐて、そして、なんにも言はずに友達の家を辭してしまつた。

「事によると、まだ湖水から歸らないのかも知れない。」

彼はかう思つて、いらいらしながら、當てもなしに町を歩いた。彼は屢人に突き當らうとした。幾度となく躓いた。

「併し、もう歸つてるだらう。けふまで歸らないといふ法はない。」

彼は又かう思ひ返して、だんだん伯林の中心の方へ歩いて行つた。いつもは Untergrund で一飛びに行く道を、わざと骨を折つて歩いて行くのである。

フリイトリツヒ・シュトラアセへ出ると、もう物を考へてはゐられなかつた。夥しい人通りである。乘合自動車が來る。馬車が來る。電車が通りを横に切る。夜の生活を「遊び」にする男達と、夜の生活を「商賣」にする女達とは、目まぐるしい程に入り亂れて歩いてゐる——

停車場の標準時計を見ると、まだ踊り場のあくには一時間半程時間がある。グスタアフはとあるカフエエへはひつて、ビイルを飲んだり、新聞を讀んだり、出はひりする人の顏を眺めたりして、一人焦れながら、時間の來るのを待つてゐた。

彼は幾度となく時計を衣兜から出して見た。彼は時計の針がいつまで立つても、同じ所にぢつとしてゐるやうな氣がした。

時間が來ると、グスタアフは勘定もそこそこにカフエエを飛び出した。そして、角に客待をしてゐたタクシの自動車に飛び乘つた……

彼は間もなくタバランの客となつた。いつもの席へ腰をおろすと、給仕人が直ぐ側へ來て、シヤンパアニュの栓を拔いた。晝のやうに明かるい燈火の下で、そのぽうんといふ愉快

な音を聞くと、彼は俄に生き返つたやうな氣がした。

踊は既に始まつてゐた。顏に化粧をして黑い燕尾服を著た雇はれの男と、黃、赤、青と樣々な色の舞踏服を著た雇はれの女とは、一組一組、中二階から下の廣間へ降りて來て、客の食卓の直ぐ側を踊りながら、練つて歩いた。女は一人一人の客に目で挨拶をした。特別に親しい客には、踊りながら小聲で何か囁いた——

グスタアフは踊り子の內に直ぐとロオニイを見つけた。そして、ほつと息をついた。

ロオニイも直ぐとグスタアフのゐるのに氣が附いたやうだが、女は男の顏を見ても決して笑はなかつた。そして、グスタアフのゐる所とはずつと離れた所ばかり踊つて歩いてゐた。

「怒つてるな。」

グスタアフは笑ひながら、かう小聲で言つた。

「怒つたつて爲方がない。自分が惡いのだから。」

彼は女に對する或種の勝利を感じて、一人で笑ひながらシヤンパアニュの杯を口へ持つて行つた。

「今に笑ひ出すに違ひない。そして、あやまりに來るに違ひない。」

彼は又かう獨語を言つた。

併し、ロオニイはいつまで立つても笑はなかつた。他の客の總てには笑つて見せても、グスタアフに對しては決して笑はなかつた。女がグスタアフの顏を見る時の目は、氷のやうに冷たくて、氷のやうに凝結してゐた。たまに踊りながら、直ぐ側へ來ても、まるで始めて見る客か何ぞのやうに、知らん顏をして通り過ぎて行つてしまつた。

グスタアフは俄に胸を押しつけられるやうな氣がして來た。彼の勝利の觀念は忽ち敗北の觀念に變つてしまつた。女の冷たい目、女の冷たい口、女の冷たい手、女の冷たい足は、食ひ入るやうにグスタアフの心臟を摑んだ。彼は氣を失つた人のやうに、ぐたりと首を垂れた。

「やつぱり俺が惡かつたのだ。手紙を出したのが惡かつたのだ。」

彼は太息をついて、前をぼんやり見詰めながら、力のない聲でかう言つた。

「あやまらう。あやまらう。別れるにしてもあやまつてから別れよう。」

グスタアフは少しの間かう思つたが、暫くすると、

「いや別れる事はどうしても出來ない。俺はロオニイとはどうしても別れる事の出來ない運命を持つてゐるのだ。」

直ぐ又、かう思つた。

グスタアフはどうかして、一言ロオニイに口が利きたいと

思つたが、女はいつまでたつても側へ來なかつた。

一順踊が濟むと、ロオニイは中二階の或客の側に坐つた。そして、そこから時々グスタアフの方を見おろした。グスタアフは、その冷たい氷のやうな目を見てゐると、堪へられなくなつて來て、覺えず兩手で顏を隱した。

グスタアフの直ぐ隣の卓に、さつきから亞米利加の商人らしい見馴れない客が二三人來てゐた。彼等はミンナといふ英語の出來る年增の踊り子を側へ引きつけて頻に贅澤を盡してゐたが、やがて一人の男とミンナとが聲高に何か爭ひ始めた。男は顏を眞つ赤にして、衣兜からナイフまで出さうとした。併し、女は平氣な顏をして笑つてゐた。

やがて、給仕頭がそこへ來ると、嚴格な併し穩かな調子でこれらの客に退場を迫つた。亞米利加の客は、給仕頭の威に壓されて、女を睨みつけながらも、もう手が出せないで、しほしほと下の廣間を出て行つてしまつた。

「野蠻人、野蠻人。」

といふ聲が、方々で起つた。

グスタアフはこの光景を見ると、愈自分が恥づかしくなつた。

「俺こそ野蠻人だ。俺こそ野蠻人だ。」

彼は繰り返して、自分にかう言つた。

もう客が大分歸つてしまつて、賑かな踊り場も戶を閉ぢて沈默に歸らうとする時分、ロオニイは漸くグスタアフの側へ來た。そして、冷たい顏つきで、

「きのふは御親切なお手紙を有難う。」

と言つた。

グスタアフは女の最初の詞に、もう返す詞がなかつた。彼は良心の責めに堪へられない人のやうに、默つて、俯向いて膝を見てゐた。

「あたしの返事を見ましたか。」

女がかう言ふので、グスタアフは覺えず又顏を上げた。

「いいえ。」

「ぢやあ、まだ著かないんでせう。さつき出したんです。」

女はかう言ふかと思ふと、給仕を呼んで、自分で Chambre separée を命じた。

「もう直ぐ歸るんだから、ちよつとで好いのよ。」

かう言つて、女は直ぐ席を立つた。グスタアフも覺えず席を立つた。そして、默つて、女の行く方へ附いて行つた。女はグスタアフに一緒に來いとは言はなかつた。併し、グスタアフの附いて來るのを拒絕しもしなかつた。

別室へはひるとグスタアフはいきなり女の前に跪いた。

「僕が惡いんだ。僕が惡いんだ。どうか許してくれ給へ。」

彼は泣き聲を出して、かう言つた。併し、女はやつぱり冷

たかつた。
「あたしの返事を見ましたか。」
「いいえ……ほんとに返事を出したのかい。」
「あれを見たら、あなたも怒るでせう。」
「いや、僕はもう何と言はれても怒る權利はないのだ。僕があんな手紙を出したのが悪かつたのだ。僕が悪かつたのだ。」
「もう少し考へると好かつたのですわ。」
「僕は莫迦だつた。僕は決して君を侮辱する積りぢやなかつたのだが、一時の感情であんな取返しのつかない事をしてしまつたのだ。だから、今夜は僕あやまりに來たのだ。ね、ロオニイ、許してくれるだらう。許してくれないか。」
「あたしも手紙を見た時は隨分怒りもしましたが、しまひにはあんまりばかばかしくなつて、可笑しくなつて來ました……あたしは初からあなたが隣にゐる事を知つてゐたのですよ。あの硝子戸だつて、こつちの樣子があなたの方に見える位ですもの、あなたがこつちを見てゐる樣子だつて、ちやんとあたしの方に分かつてゐたのですよ。」
「さうに違ひない。さうに違ひないとも——それが僕には分からなかつたのだ。僕はほんとに莫迦だ。」
「あのお客は前から一度何處かへ行かう何處かへ行かうつて煩さくてしやうがないのですよ。それで一度行きさへすれば氣が濟むだらうと思つて、ちやんとここの主人にも斷つて出たのですよ……」
女はかう言ひかけると、聲を上げて笑ひ出した——
「あのお客があんまり力のあるのを自慢するから、それぢやあ腕を見せて下さいつて、冗談に腕を見せて貰つてゐたのです。それをあなたは變な意味にお取りなすつたのねえ。それから、あの煙草だつてさうですわ。丁度カルウゾオが一本切りになつてしまつたので、それぢやあこれを二人で半分宛飲みませうつて言つて、飲んでゐたんですわ。あんな風な煙草なら毎晩ここで飲んでゐるぢやありませんか。あなたはそれを知つてる癖に、あんなひどい事を書いてよこすんです。」
「いや僕が悪かつたのだ。僕が莫迦だつたのだ。僕はどうしてあの日に「湖水」へなど寄つたんだらう。どうして裏座敷から表座敷へなど移つたんだらう。僕は見ないでも濟んだものを好んで見に行つたやうなものだ。」
「見たつて構やしませんわ。あたしは見られたつて構はない事をしてゐたのです。」
「さうだとも。僕が悪かつたのだ。ほんとに僕は莫迦だ。」
「それをあたしの商賣だなんて、隨分失禮な事を平氣で仰しやるのね。あたしは憚りながら、まだそんな商賣は致しません。」
「それは僕にもよく分かつてゐるのだ。分かつてゐながらあんな事を書いたのは、全く一時の感情からだ。どうか許して

くれ給へ。僕を捨てないでくれ給へ。僕は君に別れてしまつては、とても寂しくて生きて行かれないのだ。」
男は女の言ふ事を一つも否定しなかつた。少しも女を疑ふやうな詞を吐かなかつた。少しも女を責めるやうな事は言はなかつた。唯「悪かつた。」「莫迦だつた。」の一點張りで、初から終まであやまつた。さうして、責める筈の自分が、あべこべに女に責められて、責められる度に返す詞がなかつた。グスタアフはこの二日ばかりの間に胸を痛めて準備してゐた態度を一時に放擲してしまつて、少しも準備してゐなかつた態度を取つたのである。
併し、女は容易に「許す」といふ詞を吐かなかつた。女は男が泣かぬばかりにして、繰り返し繰り返しあやまるのを、冷たい顏をして、笑ひながら默つて見てゐた。男は床へ頭を摺りつけぬばかりにしてあやまつた。女の著物の裾に接吻してあやまつた。しまひには女の靴にまで脣をつけた。
「あたしだつて、あなたが他の女と何處かであんな事をしてゐるところを見れば、きつと怒ります。だから、あなたの怒つたのに無理はないと思ひますが、併し、あたしならもう少し事實の眞相を確めてから書きます。」
女の顏は少し和らいで來た。女のかう言ふのを聞くと、グスタアフは愈罪の呵責に堪へられなくなつた。
「許してくれ給へ。僕が悪かつたのだ。これから、もう決して二度とあんな事はしないから。」
と、彼は細い聲を出して言つた。
「ほんとに悪いといふ事が分かりましたか。」
「分かつた。ほんとに分かつた。」
「ほんとに分かつたら、よござんす。」
女は始めて、曖に笑つた。そして、グスタアフを起して椅子に腰を掛けさせた。
「これからも澤山ある事です。その度に一々あんな事をされるのだと、もう御交際をお斷りしなければなりません。」
「そんな事を言はないでくれ給へ。もう決してあんな莫迦はしないから。」
男はかう言つて、もう一度頭を下げた。
グスタアフはロオニイを自動車で家まで送つて行つた。自動車の中でも、彼は女にあやまつた——
彼がシヤアロツテンブルクの家へ著いた時は、もう夜の白白明けだつた。書齋へはひつて見ると、薄明かるい卓の上に手紙が一つ來てゐた。電氣をつけて、上書の手を見ると、擬ふ方もないロオニイの筆であつた——
親愛なグスタアフよ。
あたしはあんな手紙をあなたから頂かうとは、今まで夢にも思ひませんでした。あたしは始終あなたを紳士だと

思つてゐました。併し、あたしはきのふあなたが極めて野蠻な方だといふ事を知りました。

あたしはなんにもあなたに說明する必要を見ません。あなたは失禮にも人の部屋を覗き込んで、あたし達が一本の煙草を一緒に吸つてゐたのを御覽なすつたさうです。併し、ああいふ煙草なら、あたしは今まで幾度タバランで飲んだか分かりません。あの煙草位に何の不都合がありませう。あたしはあなたに御忠告申し上げます。どうかあなたの子供衆を大事になさいまし。何處か田舍へ連れて入らしたとかいふあなたの子供衆を。

あたしの子供は、あたしが十分見てゐますから、どうか御心配をなさらないで下さいまし。

どうも色々有難うございました。

利口な女より。

手紙にはかう書いてあつた。

グスタアフは手紙を讀み終ると、又胸を壓されるやうな氣がして、手紙に向つて又罪を謝した。

グスタアフは又元のグスタアフに歸つてしまつた。彼はもう爲事の事も妻子の事も思はなかつた。彼は唯ロオニイに捨てられまいといふ事の外考へなかつた。

彼が「湖水」の晩受けた手傷は決してまだ癒つたのではなかつた。併し、彼はそれを女に癒して貰はうともせずに、自分で自分の意志で癒してしまはうと思つた。彼はたつた一つ女に聞きたい事があつた。それはあの晩泊つたかどうかといふ事である。併し、彼はどうしてもそれを訊く勇氣がなかつた。彼は薄手な陶器を取扱ふやうに、びくびくしながら女に接觸した。

勿論、彼は毎晩タバランへ通つた。さうして、自分が女を徹頭徹尾信じてゐるといふ事を、一所懸命に女に見せようとした。

或晩、Chambre séparée で女は男にこんな事を言つた。

「こなひだ「湖水」へあたしと一緒に行つてゐた人は、あなたをよく知つてゐる人ですよ。」

「べえ。」

と輕く言つて、グスタアフはわざと平氣らしい顏をした。

「あなたが隣にゐた事もよく知つてゐたのですよ。そしてあたしにいろんな事を言つてからかふのですよ。」

グスタアフは女の詞をどう聞いて好いか分からなかつた。嬉しいやうな、試されてゐるやうな、變な心持がして來た。自分が二日に亘つて頭を痛めた事は、全く根據のない事だつたかしらとも思つた。併し、まだ泊つたか泊らないか、それだけは氣になつた。

「誰だらうな。」

グスタアフはわざと冷淡にかう言つた。「別に知りたくもないが。」といふやうな顏をして。

「あなたと同じ學校を出た方ですよ。」

ロオニイはかう言つたが、男の名は終に明かさなかつた……

話をしてゐる內に、皿の上の煙草が丁度一本になつた。

「たうとう一本になつてしまつたね。」

かう言つて、グスタアフがその方を指さすと、女は直ぐそれを手に取つた。

「代り番こに飲みませう。」

女はかう言つて、火をつけると、自分で一口飲んで、それからそれをグスタアフの口へ持つて來た。さうして「湖水」の時の事などは、何一つ思ひ出さないやうな、平氣な顏をしてゐた。

「試驗だな。」

グスタアフは女の手から一口煙草を吸ひながら、さう思つた。そして、自分も「湖水」の晩の事などは、何一つ思ひ出さないやうな顏をした。

煙草は男の口から又女の口へ戻つた。やがて又それが男の口へ戻つて來た——

グスタアフは嬉しいやうな、情ないやうな、妙な氣持で、煙草を吸ひながら、思はず向うの硝子窓を見た……もしや映つてゐはしまいかと思つて……

（一九一四、九、二二作）

英一蝶

一

朝湖は欠伸をした。

畫債は山のやうに溜まつてゐる。併し、まだ一つも手がつけてない。こなひだ紀文に貰つた祝儀で、繪の具と繪筆は申訣ばかりに買ひ込んで置いたが、まだ繪の具一つ溶いてもなければ、繪筆一本おろしてもない。この一月遊びに呆けて内を外にしてゐる間に持ち込まれた繪絹や畫箋紙も、卷いた儘違ひ棚に投り上げてある。

一體、淺妻船などといふ下らない繪を何百枚かいたら、世間の人は滿足するのだらう。全體、あの繪は若い時友達に貰つた也足軒の短册から思ひついたものだ。「船中妓女」といふ題で、「このねぬる朝妻船のあさからぬちぎりを誰にまたかはすらん」と書いてあつたあの短册だ。いつか故郷の江州へ久しぶりで歸つた時に、坂田郡の朝妻を訪ねて、ふとあの短册の歌を思ひ出した。それから隆達の小唄を眞似て「あだしあだ浪、よせてはかへる浪……」と通勝卿の歌を飴のやうに引き延して、女郎の心を歌つて見た。それから、それに因んで、水と柳と小舟と、小舟の中にくぐつめの烏帽子と鼓との取り散らしてある樣を走り書に繪にして見た。繪の爲の歌ではない。歌の爲の繪なのだ。全體繪などはない方が好いのだ。

江戸へ歸つて、そのいたづら書を紀文の莫迦に見せると、分かりもしない癖に、ひどく感心したやうな顏をして、「是非この小唄を君の咽喉で歌つて聞かせて貰ひたい」と言ふのだ。繪の方ぢやあ自信はないが、歌の方ぢやあ自信があるから、早速盲女の花都に節附をさせて、吉原の和泉屋で歌つて聞かせて遣つた。すると、俺の美音に感動して、祝儀を三十兩くれた。勿論、歌の意味が分かるんぢやなし、それが古い歌の燒直しだなどとはお氣がつかれないのだ。忽ち、小唄が廓内にはやり出す。序に繪が評判になる。分かりもしない癖に、洒脫だとか餘韻があるとか言つて、あつちからもこつちからも繪絹を持ち込んで來る。丁度、遊びの金に困つてゐた時だつたから、それを好い事にして、俺は大分あの繪を書いた。莫迦の相手には莫迦になるのが一番だと思つたからだ。俺は

勿體らしい顏つきをして、さもさも名畫でもかくやうな態度で、何十枚となくあのごまかし繪をかいた。

幾らかいても、あとから又持つて來る。幾らかいても、又新しい註文が來る。俺は好い加減金が出來ると、もうあとをかくのが莫迦らしくなつた。その内に、烏帽子と鼓だけでは物足りないからなどといふ奴が出て來て、水干姿に烏帽子をした白拍子が舟の中にゐる所をかけなどといふ註文をする。一度そんなのをかいてやると、この方が餘程好いなどと言つて、又それの新しい註文が來る。もうこの頃では、猫も杓子も白拍子をかかなければ承知をしないやうになつた。莫迦らしいにも程がある。

淺妻船ばかりぢやない。女達磨だつてさうだ。俺は半太夫といふ女郎が「達磨は九年、吾々は苦界十年だから、達磨より悟りを開いてゐる筈だ」と言つて笑つたといふ話を聞いて、それをその儘繪にかいて見たのだ。それを世間の莫迦は俺自身の趣向か何ぞのやうに思つて、感心してゐるのだ。「九年何苦界十年はなごろも」と詠んだ祇空の句の方が、俺の繪などより何層倍秀逸だか分からないのだが、そんな事は世間の奴等には分からないのだ。祇空のところへ短册の註文に行く者はない。ところが、俺のところへは毎日のやうに女達磨の註文が來る……

あの棚の上に山のやうになつてゐる絹や紙が、みんな淺妻船か女達磨になるのかと思ふと、俺はもう繪師といふ看板が外したくなる。本當に繪の分かる奴は一人もゐないのだ、本當の繪をかいてくれと言つて來る奴は一人もゐないのだ。世間で評判にさへなれば、それが好い繪だと思つてゐるのだ。そして、おんなじ下らない繪を、あつちでもこつちでも家の寶か何ぞのやうに思つてゐるのだ。莫迦らしいにも程がある。

いや。俺の繪ばかりぢやない。今の世の中は何も彼もが莫迦らしいのだ。總てが下らないのだ。何から何まで詰まらないのだ。

第一、上に立つ奴のする事を見るが好い。亮賢だとか隆光だとかいふ取るにも足らぬ賣僧の爲に、護國寺だとか護持院だとかいふ宏大なものを建ててやつた上に、千五百石だとか二千石だとかいふ寺領まで附けてやつてゐる。それがどうした訣だと言ふと、將軍のお袋が卑しい身分でゐた時に、今に高貴な人になると豫言したからだと言ふ。莫迦らしいにも程がある。何の事はない。世辭で言つた出鱈目が當つたのだ。それで、京都の田舍の生臭坊主が、いきなり天下の高僧になつたのだ。將軍に子種がないからと言ふので、こなひだ中から頻りに子孫繁榮の祈禱を修めてゐるやうだが、一向驗の見えないのも當り前の事だ。あいつらは眞言の密法をさへ、まだすつかりは知つてゐないといふではないか。

生類おん憫みのお觸とかいふ奴も、あの賣僧どもが將軍に勸めて拵へ上げたものだといふ。凡そ天地始まつて以來、世界にこれ程莫迦げた法律の出た事はあるまい。雀一羽吹矢で射殺せば、それで人間の首が一つ飛ぶのだ。嚙みついて來る狂犬を斬り防げば、それで人間が一人島流しに會ふのだ。人間よりは雀の方が大事なのだ。人間よりは狂犬の方が大切なのだ。それで、生類おん憫みなのだ。人間は生類ぢやないのだ。馬鹿らしいにも程がある。

やたらに方々に寺が出來る。材木屋や請負師が大儲けをする。お蔭で吾々末社の潤ふのは有難いが、又その成金どもの金の使ひ方の下らなさはどうだ。人が百兩使へば、俺は二百兩使ふ。人が千兩捨てれば、俺は二千兩捨てる。唯それだけの事だ。奇もない。味もない。趣もない。唯、世間の評判になれば好いのだ。見えだ。外聞だ。深く自ら樂しむなどといふ事はまるで知らないのだ。

紀文の莫迦は江戸中の初鰹を惣仕舞にして、その内のたつた一本を大巴屋で喰べた。その癖、あいつに初鰹の細かい味は分からないのだ。大松屋の月見の晩に、七十兩も掛かつた突拍子もない大きな饅頭をたつた一つ贈つて、茶屋の階子の手すりを毀させたあいつの友達も莫迦の骨頂だが、その又禮に、あいつが何百疋といふ豆蟹の甲に一々客と女郎の比翼紋を金で書かして贈つたのも下らない。淺草川に船遊びをするといふ噂を立てて、見物の舟をうんと集めたところへ、自分は顏さへ見せずに、百幾つといふ盃を流したのは、先づあいつにしては上出來な風流だつたが、あの盃の塗りの惡さ、中にかいた鐵線唐草の下手さ加減はどうだ。總てが請負任せだからだ。自分に鑑識といふものがないからだ。

でも、初鰹の惣仕舞や、豆蟹のねぢ書や、涼みの盃は、まだ好い部類だ。なぜと言へば、これらは何れも黑幕の指金があつてした事だからだ。紀文自身に何か一人で遣らせて見るが好い。あいつは金を蒔くより外何一つ藝のない男だ。節分に和泉屋で小粒を蒔いたのも、あいつらしい平凡な遊びだ。奈良茂の雪見の邪魔をしようとして、三百兩の蒔金で廓の雪を汚したのも、あいつのしさうな智惠のない惡戯だ。金のある奴が金を蒔く。それは誰にでも出來る事だ。誰にでも出來る事をして、世間の莫迦に評判されて、それで得意になつてゐる紀文の莫迦さ加減は數が知れない。

一體、紀文ぐらゐ不器用な男はない。照降町の其角に發句を習つてゐるが、あのいじけた詠みやうはどうだ。勢がない。氣魄がない。同じ螺舍の弟子でも、俺の方が遙にうまい。繪も習ひたいと言ふから、俺が敎へてゐるが、とても物にはなりさうもない。あいつの巧者なのは、唯金儲けだけだ。そしてあいつの取柄は、唯金があるといふ事だけだ。あいつはその金の使ひやうをさへ知らない愚物だ。

それが、奈良茂と來ては紀文にも劣る莫迦だ。高尾を笑はしたと言つて野太鼓に十兩遣る。茶屋で眠つたと言つては、二朱判吉兵衞に三十兩取られる。吉原五丁から山谷田町まで蕎麥を買ひ占めて、その内二つだけを友達のゐる茶屋へ持つて行つて、得意の鼻をうごめかしたのもあの莫迦だ。第一あの黑江町の目算御殿の不風流極まる普請のしやうはどうだ。あいつは金さへ掛かれば何でも好い普請だと思つてゐるのだ。高いものなら、何でも好いものだと思つてゐるのだ。愚の骨頂だ。莫迦の素天邊だ。

「ああ。厭だ。厭だ。何も彼も厭だ。」

朝湖は思はず口に出してかう言ひながら、疊の上に腹ん匍ひになつた儘、片手を延ばして鼻先の障子を一枚明けた。猫の額のやうな庭が、露地から洩れて來るささやかな夕日で斑に黃いろく光つてゐる。狹い庭に不調和な大きな石燈籠が窮屈さうに立つてゐる。その下に猿が手を延ばして餌を求めてゐるやうな形をした古い石が無造作に轉がしてある。

朝湖は、寢ころんだ儘、ふとその石燈籠に目を遣ると、我と我を嘲るやうに、鼻で笑つた。そして、

「人の事が言へるかい。」

と投げるやうに言ふかと思ふと、いきなり障子をぱたりと締めて、今度はごろりと仰向けに寢た。天井の節穴が一つ目小僧の目のやうに見える。そして、その目が笑つてゐるやうに見える。

ああ。厭だ。厭だ。莫迦の太鼓を叩いてゐる内に、いつの間にか俺自身も莫迦になつてしまつたのだ。兩國の石屋に珍しい石燈籠が出た。それを大名が二人で爭つてゐるといふ噂を聞いたので、俺は有り金を殘らず懷にして行つて、横合から二人のよりずつと高い値を入れて、まんまとそいつを俺のものにした。それから、急いでそれを庭へ運ばせて、火を入れて、その燈を見ながら、値段の高い初茄子を生漬にして食つた。それがあの圖體ばかり大きな、總身に智惠の廻りかねたやうな石燈籠だ。俺もあんまり利口ぢやない。

いつか有馬家へ舞樂の六尺屛風を納めて、一度に二百金を貰つた。俺は家へ歸るまでに、この金が無事でゐるかどうか疑つた。その暗示に引つかかつたのだらう。今川橋の道具屋で、俺は奇妙な石を百兩出して買つてしまつた。家へ歸ると金が半分になつてゐて、食へもしない石が片手にぶら下がつてゐた。それがあの石燈籠の下に轉がつてゐるやくざな石ころだ。猿に似てゐるといふ奴がある。犬に似てゐるといふ奴がある。狐に似てゐるといふ奴のないのが、せめてもの見つけものだ。

紀文や奈良茂の惡口が言へた義理かい。考へて見りやあ、俺だつて同じ事なのだ。さう思ふと腹が立つ。業が煑える……

「ああ。厭だ。厭だ。何も彼も厭だ。」

朝湖はもう一度口に出してかう言ふと、手足を突つ張つて大欠伸をした。

日が陰つて、狹い部屋の中が暗くなつて來た。併し、朝湖は起きようともしない。

二

「師匠在庵か」

かう叫りながら、人のづかづか上がつて來る足音に、朝湖は眞つ暗闇で目を覺ました。

「誰だ。誰だ。」

「俺だ。俺だ。なぜあかりをつけねえ。」

「遊扇か。待て。待て。」

朝湖は手探りで燭臺に火をつけた。吉原の揚屋で見るのと全く同じ形をした燭臺である。

痩せた色の黑い容と肥つた色の白い主人とが、蠟燭の新しい灯の中で顏を見合はせた。兩方とも丸坊主である。小さな頭と大きな頭とが、同じやうに燭臺の灯で靑く光つた。

「やつぱり遊扇か。何と思つて來た。」

「なんぞ面白い事はねえか。」

「そいつはこつちから訊く事だ。詰まらねえ。下らねえ。莫迦らしい。俺はさう思つて、飯も食はずに寢てゐた」

「何がそんなに詰まらねえ。錢でも欲しいか。」

「錢は天下の莫迦が唸る程持つてゐる。乃公が太鼓一つ叩けば、百や二百は忽ち掌中だ。そんな事ぢやねえ。」

「散茶女郎にでも嫌はれたのか。」

「燭臺を見てくれ。そんなのぢやあござりやせんだ。」

「成程。こりやあ左京が部屋にあつた奴だの。背中にでもしよつて來たか。」

「おぬしぢやあねえ。俺の口車だ。水引をかけて屆けてよこしたわさ。」

「その色坊主が、なんで詰まらねえ。また紀文に繒の惡口でも言はれたのか。」

「置いてくれ。あんな盲を相手にする俺だと思ふのか。俺は菱川のやうな版下書ぢやねえから、町人に用はねえ。」

「でも、お互にその町人樣で食つてるのぢやあねえか。繒は賣らねえでも、追從口を叩いてよ。」

「もうその繒も厭になつた。太鼓持も厭になつた。一體、世の中が詰まらねえ。時勢が下らねえ。上から下まで莫迦の寄合だ。とんちきのお祭だ。」

「ぢやあ、俺もそのとんちきの一人か。」

「おぬしやあ惡黨だ。おぬしのやうな惡黨ばかりなら、まだこの世の中も少しやあ話せるのだ。」

朝湖が冗談のやうにかう言つたのには、眞面目な意味があつた。

遊扇はもと民部と言つて、鎌倉佛師の二十二代目であつた。民部は親の血を享けて、佛の彫刻が巧かつた。併し、若い時から身が修まらなかつたので、家の財政は親の代からの篤實な弟子で伊兵衞といふのに嚴重な監督をされた。民部は心任せに金を使ふ事が出來なかつた。そこで、何か職以外の事で金儲けがしたいと思つた。丁度、その時分日光の將軍家の御普請があつたので、民部は名を替へてその一口を請負つた。

ところが、御普請役人の内に常々眞負になる武家がゐて、その事を知ると、自分にも半口割込ませろと言つた。民部は已むを得ずその人の言ふ事を聞いて、二人で御用を勤める事にした。ところが、その武家は長年小普請方を駈け廻つた經驗があるので、よろづに巧者であつた。民部は何も知らないので、兎角ないがしろにされた。二言目には「佛師などの知る所ではない」と言はれる。相談もなしに、どんどん事が運ばれる。たまに民部が意見を述べても、「その事ならもう濟ましてしまつた」などと言はれる。民部は腸が煮え返るやうであつた。

やがて、普請が終つて、上から勘定も下がつた。二人はその振分の相談に淺草並木町の或茶屋へ寄り合つた。下請負の大工や左官も顏を揃へた。盃一つ二つ廻る内に、民部は無理な事を言ひ出した。武家がそれを嘲ると、いきなり刀を拔いて相手を斬らうとした。併し、大勢の人が中にはひつたので、その場は無事に濟んだ。仲直りの盃が濟むと、掛り合ひになるのを恐れて、一人立ち二人立ち、やがてみんなゐなくなつてしまつた。

民部と武家は二人切りになると、二階に寢ころんで、四方山の話をした。民部はさも打ち解けたやうな樣子で、冗談口を利きながら、隙を見て、いきなり脇差を拔くと、相手の肝先を五寸程突つ込んだ。それから相手の脇差を拔いて自分の肩先へ自分で一太刀切りつけて、血のついた脇差の柄を武家の手に握らせた。武家は苦し紛れにその柄を握り締めながら死んでしまつた。

檢死が來た。民部は相手がいきなり切りつけたので、こつちも夢中で相手を突いた。あとの事は知らないと答へた。茶屋の亭主がさつきの喧嘩の事を言ひ出すと、それはもう仲直りが濟んでゐたのだ。二階の事は下には知れないと言つた。

民部は所預けになつたが、解死人にはならなかつた。江戸徘徊無用で事が濟んだ。それで、屋敷は弟子の伊兵衞に渡して、自分は松平伊勢守の長屋に隱れた。民部が遊扇と名を變へて、本所の隱れ家から今の石町へ越して來たのは、それから三年後であつた。もう佛師民部ではない。大名出入ひりの大鼓遊扇である。

朝湖はこの舊惡をよく知つてゐた。勿論、民部一人の罪で

はない。相手方も狡い奴には違ひない、併し、相手を殺して相手の刀で自分の體に傷をつけて、その刀を相手に握らせるなどといふ殘酷な智惠は、餘程の惡い奴でなければ思ひつく事ではない。朝湖はそこが氣に入つたのである。平凡な退屈な遲鈍な人間ばかりゐる世の中に、そんな亂暴者の一人でもゐるのが意を得たのである。

「氣味の惡い事を言ひつこなしだ。俺はそんな惡黨ぢやあねえ。これでも元は佛師だ。佛樣を彫る職人だ。」

遊扇は黑い顏を少し赤くしながらかう言つた。いつも酒を二三杯飲んだ時に見せるやうな顏色である。

「佛も彫るが、惡鬼も彫るだらう。何も赤くなる事はねえ。さういふ俺だつて惡黨ぢやあ引けは取らねえ。お互に天下の毒蟲と言はれてゐる仲間だ。一旦毒蟲と言はれた以上は、飽くまでも毒蟲で通さうぢやあねえか。」

朝湖はさう言ひながら、蠟燭の火の搖ぐばかりに大笑した。

三

夜が更けた。二人はもう大分醉つてゐる。角の酒屋へ朝湖と遊扇が交り交りにもう三度宛も通つたのである。

朝湖の罎き飽きた三味線が轉がつてゐる。遊扇の書き飽きた淫な繪が、部屋中一ぱいに散らかつてゐる。

「紀文の奈良茂のと師匠は言ふが、それよりも莫迦な面は近頃の大名だ。素町人の豪遊を羨んで、自分達もその仲間入がしたくて堪らねえのだ。だが、お上がやかましいので、滅な事あ出來ねえ。深編笠のびくびくもんで、散茶女郎がやつとの相手だ。」

遊扇は自分のかいた繪の中に寢轉びながら、罵る相手が目の前にでもゐるやうに、目を怒らして言ふ。

「でも、この頃は大名の中にも莫迦な金を使ふ奴が出て來たと言ふぢやあねえか。俺の得意はみんな眞面目で話にならねえ。おぬしの出入にやあ隨分そんなのがあるだらう。」

朝湖は三味線を枕にしながら、天井に向つて酒臭い息を吹いた。さつきの一つ目小僧がまだ笑つてゐる。

「あるとも。あるとも。そんなのは名は大名でも元は田舍の土百姓だ。將軍家に妾が一人出來る。そいつの伯父だ弟だ甥だ從弟だといふ奴が、急に成り上がるんだ。刀の差しやう一つ知らねえ奴が急に御登城だ何だつて、うろたへ廻る圖と言つたらねえ。まるで猿芝居だ。」

「猿芝居は好い。沐猴にして冠すだからな。」

「違えねえ。だが、莫迦な金を使ふのは、さういふ奴等だ。今まで金を持つた事がねえから、金の使ひやうを知らねえ。金といふものは、何でも紀文や奈良茂が使ふやうに使へば好いと思つてゐるんだ。」

「面白え。面白え。ちとさういふのを玉にして遊ばうぢやあねえか。」

「實はもうちよいちよい遣つてゐるんだ。師匠もその內仲間へ入れよう。」

「無論の事だ。半兵衞も一口位は載せてやるが好い。」

「半兵衞か。あいつも飛んだ善人さの。こなひだも泥町の編笠茶屋で、筋の惡い古馴染に待伏を食つて、賈ひを殘らず取られをつた。」

遊扇に善人と言はれた半兵衞も、二人に負けぬ放蕩者であつた。本銀町の村田といふ相當な商家に生れながら、家業は見返らずに、朝湖や遊扇の仲間入をして、人の金を當てに飲み歩いてゐるのである。唯彼が二人と違ふのは男の好い事であつた。併し、その外に能はなかつた。俳諧の師其角の角と繪の師朝湖の朝とを取つて、角朝と號して得意がつてゐたのでも、彼の愚さが想像される。

「時に師匠。かういふのはどうだ。」

半兵衞の噂で、暫く口を緘ぢてゐた遊扇が、突然何か思ひ出したやうに言つた。

「何だ。」

「百人男といふ惡ずりを拵へるんだ。百人一首をもぢつて、江戸中の莫迦者を片つぱしから罵り倒すんだ。役人でも構はねえ。大名でも構はねえ。金持でも構はねえ。歌舞伎役者でも構はねえ。みんな槍玉に上げてやるんだ。」

朝湖は思はず起き上がつた。血走つた大きな目が燭臺の灯にぎらぎらと光つた。晝間からの退屈が一度に拭ひ去られるやうな氣がしたのである。

「面白え、面白え。そいつあ妙案だ。俺はもう今朝から何かそんな事がしたくて堪らなかつたんだ。あんまり世間が下らねえ。あんまり莫迦が多過ぎる。俺はもう何をするのも厭になつてゐたんだ。そいつあ好い息拔きだ。早速取り掛らうぢやあねえか。繪は俺が書く、おぬし字を書け。幸ひ繪の具も墨も買つたのが澤山ある。」

「早速と言つても、ここぢやあいけねえ。第一、今夜は醉つてゐる。こんな事は醉つてゐちやあだめだ。しらふでゆつくり相談をしながら書かう。百人書くにやあ十日は掛かる。」

「それもさうだな。だが、ここでいかねえとすると、何處で書くつもりだ。」

「あとで難儀を見ちや詰まらねえ。俺の裏に和翁といふ醫者がある。女房もなし、はやらねえから客もねえ。家もここよりは廣くて綺麗だ。あすこで書かう。」

「だが、そんな事に貸してくれようかの。」

「飛んだ浮つかり者だ。喜んで貸すだらう。師匠の名を聞いたら、土下座でもしかねねえ奴だ。」

「そいつあ好い。」

朝湖はやつと自分のする事が一つ出來たと思つた。それから、夜の明けるまで遊扇と、誰はかう書かう、彼はかう書かうといふやうな相談をした。

四

夜具も著ずに、午過ぎまで寢込んだ二人は、目を覺ますと繪の具や墨や繪筆や畫帖を一包みにして、顏も洗はずに和翁の住居を訪ねた。

和翁は當時世に名高い繪師の來臨を悉く名譽に思つた。遊扇が大略來意を告げると、勿論直ぐに承知した。そして、

「愚老も何かお手傳ひが致したい。」

と言つた。和翁は大の手蹟自慢だつた。

「先生は書がお上手だ。では、書の方は先生にお願ひする事に致さう。」

人の惡い遊扇がかう追從を言ふと、和翁は直ぐとそれを眞に受けた。

和翁は毛氈を敷いたり、繪の具皿を列べたり、墨を摺つたり、紙を廣げたり、一人でかひがひしく働いた。

朝湖は畫作に掛かると、いつも無口になる。遊扇が側から趣向を立てると、ぢつと默つてそれを聞きながら、目を怒らして白い畫帖を睨みつけてゐる。

やがて、朝湖の初筆が蜘蛛の落ちたやうに白紙をぽとりと黑く染めた。蜘蛛は恐ろしいやうに早く巢をかけ始めた。忽ち、朝湖の嘲る人物が一人、畫帖の半面に躍動した。それは、近頃山村座の或野郎に現を拔かしてゐる或お留守居役の近姿であつた。

「わが衣手は露に濡れつつ。」

遊扇が猥雜な意味を含めながら、かう詠むと、和翁はなんにも知らずに、それを繪姿の上に認めた。自慢程あつて、佐文山風の見事な筆蹟である。

和翁が自分の書に惚れ惚と見とれながら、畫帖を朝湖の前へ直すと、朝湖は直ぐに溢れるやうな嘲罵を第二の人物に書き現はした。それは坊主から袖の下を取ると噂をされてゐる寺社奉行某の姿であつた。

朝湖は興に乘じて、この日一日に十二人の役人や大名を槍玉に上げた。

明くる日も朝早くから遊扇と二人で來て、名高い僧や學者を嘲弄の繪や歌にした。その明くる日も、その又明くる日も書いた。八日ばかりするとやつと、百人の姿が揃つた。朝湖は最後の筆を置くと、始めて愉快さうに笑つた。

當局の目に觸れれば、直ぐにも筆者の斬罪に處せらるべきこの辛辣を極めた時代の惡罵帖は、先づ遊扇によつて一册が寫され、やがて和翁によつて他の一册が寫された。

朝湖と遊扇は、この「百人男」を會ふ人毎に示しては、誰の

作だらう、なかなか面白く見立ててあるなどと白ばくれた。和翁も得意になつて、病家先などを持ち廻つた。やがて、誰も寫す彼も寫すで、だんだん江戸中にそれが廣まつた。

百人の中に老中阿部豐後守の姿もあつた。併し、その見立はちよいと考へると、老中を褒めてゐるやうに見えた。阿部の出入に或愚な醫者があつた。それが世辭のつもりで「百人男」を豐後守に見せた。

老中は何の挨拶もせずに、その一本を留め置いた。それから、お城へ携へて行つて、町奉行の手に渡した。御府内にかやうな怪しからぬ物を書いた奴がある。きつと吟味あるべしといふ命令である。

奉行は直ぐと與力に探索を命じた。書の筆蹟から直ぐと足がついて、和翁が先づ訊問された。

「如何にも、それは愚老が認めました。」

和翁は「百人男」が當局の怒を買ふ程辛辣な諷刺を含んでゐようとは夢にも思つてゐなかつたので、寧ろ得意になつてかう答へた。

和翁は直ぐと繩をかけられて、奉行所へ引かれた。意外な嚴しい吟味に驚いた和翁は、

「實は、それは朝湖と申す繪師と遊扇と申す佛師が作つたものでございます。愚老は唯手傳ひを致したのみでございます。」

と申し立てた。

そこで朝湖と遊扇とが直ぐに召捕となつた。二人は平氣で繩にかかつて、平氣で白洲へ出た。

和翁との對決になると、遊扇は白々しい顏をして言つた。

「毛頭覺えのない事でございます。大名方をお出入と致しますわたくし共が、何でさやうな恐ろしい作を致しませう。僞と思し召すなら、手前宅を御詮議願ひます。」

朝湖も同じやうに、白ばくれた。

「畫債山をなすわたくし、何でさやうな戲筆を致す暇がございませう。お疑ひもあらば、手前宅も御詮議を願ひます。」

そこで、同心達が二人の住居へ家宅捜索に出かけた。勿論和翁の家もこの運命を逃れる事は出來なかつた、

やがて、三人の家から掻き集められた反古類が殘らず奉行の前に列べられた。ところが、「百人男」の草稿らしいものは朝湖の家にも遊扇の住居にもなかつた。それらしいものは悉く和翁の家からのみ出た。それに、文字といふ文字の悉く和翁の手跡であるのが、何よりの證據となつた。朝湖は悉く畫風を變へてゐたので、繪は何の證據にもならなかつた。

そこで、和翁一人が有罪と極まつた。和翁は白洲を立ちながら、怒の涙をぼろぼろと零した。

「畜類め。惡魔め。俺をだまして、俺の家を使つて置きなが

ら、悪事を俺一人に塗りつける大悪人め。」

和翁は二人を睨みつけながら、かう大聲に罵つたが、もう運命は極まつてゐた。和翁はあべこべに叱られて、手頸の食ひ入る程繩を引かれた。

朝湖と遊扇は顔色一つ動かさずに白洲を出た。白洲を出て顔を見合すと、込み上げるやうに二人で笑つた。

「和翁のあの顔はどうだ。」

「大笑ひだ。莫迦めが。」

二人はさう言つて、また割れるやうに笑つた。

和翁は牢屋に三日入れられて、それから千住で打首になつた。

その晩、遊扇が吳服町の新道に朝湖を訪ねると、朝湖はもう退屈さうに寢そべつてゐる。

「和翁が斬られたさうだ。」

と言つても、

「さうか。」

と言つたきり、詰まらなさうな顔をしてゐる。

「どうした。ひどくぼんやりしてゐるぢやないか。」

「詰まらねえ。下らねえ。また世の中が厭になつて來た。」

さう言つて、朝湖は寢そべつた儘、大欠伸をした。

五

春が過ぎ、夏が過ぎた。朝湖は相變らず繪をかかない。自分の感興からでない繪をかいて、版下書き同然な生活をする位なら、太鼓持をしてゐる方が餘程好い。太鼓持は初から嘘で出來たものだ。嘘と知つて賣り、嘘と知つて買はれるのだ。自己を僞るのではない。「眞らしく」見せるのではない。眞の事をさへ嘘らしく見せるのだ。しかも、相手は天下の莫迦の集りだ。大名にしろ、商人にしろ、我ながら思ひもかけない大金を懐にして、その金の使ひやうを知らないで、まごついてゐる成上がりだ。そんなのを見て、もぢもぢと羨んだり、じめじめと怨んだり、眞面目な顔をして反抗を稱へたりする必要はない。相手は莫迦だ。莫迦な顔をして行けば、直ぐと手下に抱へてぐれる。一旦抱へられたら、うんと莫迦な金を使はして、相手の財産をぶつ潰して了ふのだ。その間には、こつちの懐も暖まる。人の金で飲んだり食つたり遊んだり、したい三昧の事をするのだ。莫迦の金を利口が使つて遣るのだ。あいつらに俺の繪の分かる時などは、永久に來ない。そんな事を苦勞するのは、愚の骨頂だ。それよりは太鼓だ。太鼓を叩けば相手は直ぐに莫迦踊りを始めるのだ。朝湖はさう思つて毎晩のやうに、大名や富豪の供をして、吉原へはひり込む。併し、遊んでゐる間は面白いが、家へ歸つて見るとやつぱり詰まらない。かきたい繪は澤山ある。併し、自分のかかうとするやうな繪は、誰も買ひ手がない。買ひ手のない

のは好いが、見てくれ手さへない。無理に見ろと言へば、見るだらうが、見た處でとても分かるまい。それが詰まらないから筆を取る氣にもなれない。頭の中で繪をかいたり消したりしながら、酒臭い息を吹いて、生欠伸ばかりしてゐる。

「師匠、面白い事があるぞ。」

遊扇がいつもの通りひよつこり黑い顔を現して、いきなりかう言つた。

「株を言つてるぜ。大方また田舍大名の穴つぱひりでも見つけて來たのだらう。詰まらねえ。」

朝湖は相變らず天井の一つ目小僧と睨めくらをしてゐて、起き上がらうともしない。

「そんなんぢやあねえ。ほうけ殿が月見をしろと言ふのだ。」

「ほうけ殿が。また揚屋に葡萄棚でも釣らうと言ふのだらう。くだらねえ。」

二人がほうけ殿と嘲つて言つたのは、井伊伯耆守といふ若大名の事である。近頃、十三萬兩といふ家督を相續して、俄分限になつた嬉し紛れに、遊扇や朝湖や半兵衛を取卷にして吉原通ひに夜を日に繼いでゐる愚な殿様である。

「さうぢやあねえ。俺の指金もあるが、ほうけ殿にしては出來の部だ。屋敷で月の宴を張らうといふのだ。」

遊扇がかう言ふと、朝湖は少し熱心になつた。

「ほう。屋敷でか、それは珍しい。そして、何ぞ催しでもあるか。」

「おぬしに月見の歌を作らせて、その開きをしようと言ふのだ。三味線は市川と本澤とが附ける。平家の進藤も御招伴をする筈だ。」

「あの高慢な琵琶法師か。あの位蟲の好かぬ奴はねえ。いつも俺の顔を見ると、その方達の作る歌はとても卑しくて俺の絲には乘らぬと言はぬばかりの嘯きやうだ。その癖、吉原へ供もすれば、人の金で格子女郎の帶も解くんだ。俺はあいつを「百人男」に洩らしたのが、今に殘念でならねえ。」

「俺もあの勿體ぶつた坊主は大嫌ひだ。今度の月見で、あの坊主を退治ようといふのが俺の趣意だ。實はその相談に遣つて來たのだ。面白いと言つたのはその事だ。」

「成程。そんなら、ちつとは面白い。だが、どうして退治るのだ。あいつ中々一筋繩ではいかねえ厚皮入道だぞ。」

「俺に趣向がある。」

「はて、どういふ趣向だ。」

「月見の歌を頼まれたのが幸ひだ。歌ひ出しを平家にして、あの坊主に口を切らせるのだ。それから、途中で三味線へ移しはどうだ。あいつ、きつと厭がるに違えねえ。平家と小唄を一緒にされては堪らぬとか、何とか、きつと一理窟こねるに相違ねえ。それを無理に語らせるのだ。」

「ほうけ殿の威光を借りてか。」

「ほうけ殿ぢやあ間に合はねえ。金だ。金で面をはるんだ。あの坊主慾張りだから、驚く程な金をやれば、きつと見識も何も捨ててしまふに違えねえ。」

「その金は何處から出るんだ。」

「勿論、井伊家のお納戸からだ。いくら俺達が使はしても、まだ九萬や十萬はある筈だ。進藤の坊主をびつくりさせる位の金は、爪の垢にも足るめえわさ。」

「成程。流石は遊扇の獻立だ。面白い。やつて見よう。」

「作つてくれるか。」

「應とも。」

「それは有難い。」

月見の端唄は二日立たぬ内に出來た。

「あるひはしらら吹上和歌の浦住吉浪花高砂の尾の上の月のあけぼのを詠めて歸る人もあり——」

朝湖は平家の本文通りを先づ嚴に枕に据ゑた。それから、

「われはそれには引き代へて昔がたりと名に立ちし色の村田の中將の——」

と碎けた。「色の村田の中將」とは半兵衞を冷かしたのである。朝湖は想の彈む儘に、廓の月の夜景色を、右からも左からも表からも裏からも叙した。「びつこ引き引き行く程に、このもかのもの仲の町」といふ所は、ついこなひだ遊扇が編笠茶屋の娘に見とれて、小石で足の爪を剝がした事を思ひ出しながら書いた。「晝のおましにいぎたなく醉ひ伏す男月知らず」といふ所は、いつも酒氣の絶えた事のない其角を思ひ浮べながら書いた。「芒に出だす銀月も」といふ所はいつもの頭で繪をかきながら書いた。「月は照るやら曇るやら身あがり暗き女郎の仇目にかかる夜這星」といふあたりから、調子は愈乘つて來た。「のほほん〳〵のんほのういよ〳〵埒がない夜が明けた」と筆を結んだ時は、ほんとに自分にも夜が明けたやうな氣がした。それは、朝湖が小唄の戯作を終る時、いつも覺えるすがすがしさである。

遊扇は誂へ通りの歌が出來たのを、何よりも先づ喜んで、直ぐと草稿を市川檢校のところへ廻した。

六

愈けふが月見である。

白木作りの清楚な書院に、いつもは行儀の悪い伯耆守が、床を後にして端然と座を構へてゐる。床には雪舟らしい三幅對が支那の月夜を粗朴に描いてゐる。幅の前には時代のついた鎧櫃が唯一つ置いてあるだけである。外に裝飾は何もない。

庭に向いた六尺の縁には、新しい莚が外へ垂れるやうに敷いてあつて、青竹の筒に芒、白木の三寶に團子、土器の瓶子に酒が供へてある。

何處にも時勢に媚びた浮薄な華美がない。雜駁な色彩がない。朝湖はそれを愉快に感じた。流石は由緒のある家だ。主人は愚でも、家にはこの品位があるのだと思つた。

「廓の酒にもちと飽いた。物日に五丁町を出し抜くも興があらう。それが女交ぜずのけふの月見ぢや。揚屋同樣氣儘に致せ。金子は如何程でも取らさう程に面白可笑しう騒いでくれ。鷄の啼くまで飲み明かさうぞ。」

これが第一のお聲がかりであつた。遊扇は恐れげもなく大守の前へ躍り出た。

「流石は殿樣、御趣向恐れ入りました。今頃は山本屋のかの君が嘸殿を恨んでをりませう。折角の名月が曇らねば宜しうございます。」

遊扇は自分でこの案を立てながら、さもそれが殿の思ひつきでもあるやうに、褒め立てた。朝湖はそれを腹の中で笑ひながら、默つて床の間の鎧櫃を見てゐた。胴の膨らみに若竹を張つたやうな力がある。時代のついた色は鐵を熔いて塗つたやうである。

「朝湖、鎧櫃が氣に入つたか。流石にそちは目が高いな。」

伯耆守は得意の鼻をうごめかした。

「失禮ながら、御傳來でございませうな。」

「傳來ではない。先達二百兩で予が道具屋から求めたのぢや。」

朝湖は寧ろ傳來だと言つて貰ひたかつた。主人が自分で買つたとあれば、いづれ道具屋に欺されたのであらう。時代も繪の具か何かでつけたのであらう。胴も大方剝ぎだらけだらうと思つた。

「併し、中には何がはひつてをると思ふ。當てた者には褒美を取らせるぞ。」

殿がかう言ふと、直ぐ遊扇が口を出した。

「御先祖初陣の緋縅でもござりませうか。」

「いや、いや、さやうな物ではない。」

すると、今度は半兵衞が言つた。

「では、兜でござりませう。」

「智惠のない答ばかりぢや。朝湖は何と思ふ。」

朝湖は態と笑つて、答へなかつた。

「分からぬか。枕繪が一ぱいはひつてゐるのぢや。」

さう言つて、殿はさも得意げに聲を上げて笑つた。朝湖は座に堪へぬばかり興を醒ました。

丁度そこへ、市川檢校と本澤檢校とが、丸い頭巾を揃へて來た。やがて傲慢な進藤檢校も、丈の高い冠り物を冠つて、ところも姿の物々しくはひつて來た。

「遊扇、檢校達も揃つたから、直ぐと支度をさせるが好い。進藤、今宵は朝湖が作つた月見の歌の開きをするのぢや。そちもそれにゐて聞くが好い。」

伯耆守は何も知らずに、かう言つた。

遊扇は腹の中で笑ひながら、市川と本澤を支度の間へ案内した。二人は直ぐと三味線の音締を合せた。連彈をするのである。

「こなひだも言ふ通り、語り出しは進藤に琵琶でやらせるから、そのつもりでな。」

遊扇がかう言ふと、市川が頭を振つた。

「あの法師なかなか語りは致しますまい。」

「いや。是非とも彈かせて見る。」

「いや、どのやうになされても、迚も合點は致しますまい。本澤は平家の心得がございます。これに口を語らせませう。」

「さう言はずと、まあ待て、俺にしやうがあるのだから。」

遊扇はさう言ひ捨てて、座敷へ取つて返すと、進藤を小蔭へ呼んだ。

「どうでこざりませう。歌の語り出しが平家の本行通りになつてゐるのでございますが、そこの所だけあなたに語つて頂くわけには參らないでございませうか。」

遊扇は態と腰を低くして言つた。

「滅相もない。平家は吾々の本藝。下々の三味線小唄と一緒にされては堪りませぬ。」

檢校は豫想通りの答をした。

「そこをどうぞ今夜の座興に。」

「座興に平家は語りませぬ。」

進藤は肩を上げてかう言ひ放つと、傲然と座敷の方へ歸つて行つてしまつた。

「畜生め。」

遊扇は覺えずかう呟いた。勿論、遊扇はこの法師の金でなければ動かないのを知つてゐた。併し、初から金を出すのも業腹だ。一度は素手で當つて見て遣れと思つたのである。遊扇がもう一度支度の間へ引返すと、市川が一人で寂しさうに坐つてゐた。

「本澤はどうしたの。」

「女房が產を致したさうで、只今急に歸りました。御前宜しく賴むと申しましてな。」

「それ見た事か。愈進藤に語らせにやあならねえ。」

「併し、迚も語りは致しますまい。不出來でもわたくしが平家風に語りませう。」

「まあ待て。俺にしやうがあるから。」

遊扇は前と同じやうな事を言つて出て行つた。併し、今度は直ぐと座敷へは行かずに、先づ納戸へ行つて、用人から百兩の金を受取つて、それから又廣間の隣の疊廊下まで來た。

「檢校。もう一度お顏が拜借したうございます。」

進藤は澁々立つて、出て來たが、遊扇の顏を見ると、直ぐ

に言つた。

「先程の儀なら、どうぞお諦めが願ひたい。」

遊扇は手早く百兩包を法師の袂へぽとりと入れた。

「いや、仰せ御尤もでございます。併し、口のところだけお語り下すつて、三味線にお渡しになると同時に、席をお立ちになつたら、平家の語りかけと言ふだけで、別にお名は汚れますまいが。」

遊扇のかう言ふ内に、法師は袂の重さを十分に引いた。そして、

「どうもあなたの口にはとても敵ひませぬ。」

と言ひつつ、迷惑ながら承知だといふ目の色を見せた。

遊扇は舌を出しながら、又支度の間へ戻ると、直ぐと市川を促し立てた。市川は三味線を取つて立ちながら、訊いた。

「口はどうなりました。」

「進藤が語る。」

「きつと語りますか。」

「きつと語る。」

市川はそれでも疑ひながら座敷へ通ると、進藤はもう琵琶を横に構へてゐた。

「進藤何をするな。」

かう伯耆守が訊くと、

「歌の口を語りまする。」

と、かう法師が答へた。

「ほほう。それは一段と面白からう。」

朝湖と遊扇は目を見合せて、互ににやりとした。同席の家臣は悉く鳴りを靜めた。

「あるひはしらら吹上——」

と、進藤が勿體らしく語り始めた。暗い、鈍い、疲れた足を引き摺るやうな聲である。

「尾の上の月のあけぼのを詠めて歸る人もあり——」

といふ所まで單調な曲が續くと、法師がまだ撥を置かぬ内に、

「われはそれには引き代へて——」

と、市川檢校が三味線であとを受けた。髮一筋をも入れぬ間の巧さである。

曲も唄も、急に花やかに輕くなつた。空でも月が丁度雲を出た。

「片枝枯れたる皂莢も、やれ〳〵戀に痩せたか、そちや異な姿。稻荷の岡に音はあれども、君を思へばのう手編笠——」

歌は節面白く進んだ。明かるい月が澄み渡る空を滑るやうに。

「遣手の宿の念佛講、二丁目あたりに菅掻絶えて——」

ここまで來るとふと唄が歇んで、三味線の手が込んで來た。合の手である。店菅掻の巧な變調である。

撥は愈冴えて來る。月も愈冴えて來る。朝湖も遊扇ももう進藤に對する憎惡などは忘れ果てて、聞き惚れた。

可なりに長い曲が終ると、伯耆守は膝を叩いて、二人を褒めた。

「市川出來た。朝湖よく作つた。」

さう言ひながら、座右の手文庫から、自分の手で市川へ百兩、朝湖へ百兩褒美をくれた。さつき遊扇が進藤の袂へ入れた百兩を併せて、三百兩の歌閉きである。

月の落ちる頃、井伊邸を辭した朝湖は、もういつもの不興の顏をしてゐた。

「だが、思ひ通り進藤に口を語らせたのは、胸が透いたな。」

遊扇が、かう言ふと、朝湖は尙苦い顏をした。

「併し、口を切つただけの琵琶法師と、歌をすつかり作つた俺とが、同じ百兩だと思ふと腹が立つ。いつそこれから三人で吉原へのして、朝からぶん流しの、百兩一度に使ひ捨てはどうだ。」

「流石は先生、氣前が好いな。」

半兵衞が後から、黃いろい聲を上げた。

「置かつせえ。太鼓の太鼓を叩く奴があるものか。」

三人はその儘、吉原へ朝駕籠を急がせて、それから四日大門を出なかつた。

遊扇はそれから後も朝湖と相談して、かやうな愚しい事を幾度となく企んでは、伯耆守に途方もない金を使はせた。

八萬兩ばかりの金が瞬く內に井伊家から消えた。愚鈍な家老はやつとそれに氣が附いて、急に遊扇朝湖などの出入を差し留めた。

「やれ、やれ、たうとう出入留めか。だが、俺達で八萬兩使はしたと思へば、腹も立たねえわ。」

家老から來た愛想盡かしを見ると、遊扇は多少興奮したやうな調子で、かう言つた。

併し、朝湖は相變らず寢そべつた儘、詰まらなささうに天井を見てゐた。

「八萬兩が何だ。くだらねえ。」

さう言つて、欠伸をした。

七

遊扇は暫く大名出入が出來なくて、脾肉の肥りを嘆じてゐたが、當てもなしに惡所をうろついてゐる內に、やがて又大きなのを一度に二人網にかけた。

一人を六角越前守と言ひ、一人を本庄安藝守と言つた。いづれも將軍のお腹三の丸桂昌院の甥で、伯母の推擧で京都から下つて來た、成上がりの俄大名である。

遊扇は早速朝湖や半兵衞を誘ひ合せて、この二人を取り卷いた。例に依つて一晩に百兩二百兩の金を捨てさせるのであ

る。その切り盛りは大抵遊扇がした。

ところが、六角の若殿の方は、朝湖が取り持つた菱屋の小幡といふ女郎が直ぐと氣に入つて、揚詰といふのぼせ方になつたが、どういふわけか安藝守の方は、どんな女を見せても一向に氣に入る樣子がなかつた。遊扇は樣々に心を碎いて、少しでも大名に向きさうな所のある女郎は悉く見せたが、それでもやつぱりだめだつた。

「一體、お殿樣はどういふのがお好みなのでございます。」

遊扇は困じ果てて、或時揚屋で、かう打ちつけに訊いて見た。すると、安藝守が笑ひながら答へた。

「さればの、これまで十二三人會うた女に、一人も傾城らしい者はをらなんだ。みんな予を大名と思うて、恐れる心があつて面白うない。予が會うて見たいと思ふのは、世に謂ふ傾城ぢや。人を人とも思はぬ女郎ぢや。」

遊扇は目金違ひをしてゐたのである。大抵、今までの俄大名は茶の一つも立てるおとなしやかな女郎をさへ當てがへばそれで直ぐ滿足した。ところが、安藝守は多少張りのある女を要求してゐるのである。遊扇は、こいつ中々隅へは置けぬわいと思つた。

遊扇は暫く考へてゐたが、やがて小膝をぽんと打つた。

「若荷屋に大藏といふ女郎がございます。氣質に張りがあつて、器量も美しうございます。あれなら、きつとお殿樣のお氣に召しませうが、困る事には大きな疵つきで、當時廢り者でございます。」

安藝守は座を乘り出した。

「ほほう。それは面白さうな女ぢや。したが、疵つきとはどう致したのぢや。」

「戸津與兵衞と申す男に指を切つて遣つたのでございます。」

「ほほう。さやうな心中立の致しやうもあるものと見ゆるな。それは愈面白い。一つ詳しう話してくれぬか。」

「畏りました。」

遊扇は怯むかと思つた安藝守が存外乘氣になつて來たのを奇貨措くべしとなした。若し、この女で安藝守を捕まへる事が出來なければ、やがて自分達三人も首になるに相違ない。それでは、折角の玉を逃がしてしまふと言ふものだ。どうかして、この女でこの莫迦を墮してしまはなければならない。それには、女を無暗と褒めちぎるより、寧ろいくらか惡く言ふ方が好いと思つた。

遊扇は頭の中で浮世草帝のやうに筋を立てながら、輕口面白く話し出した。

八

戸津與兵衞はもと傳馬町の大きな紙問屋の息子であつた。親から分けて貰つた身代を遊山に使ひなくして、惡所をうろ

うろしてゐる内に、いつか太鼓持のやうなものになり下がつてしまつた。

或時、與兵衞は客の供で、揚屋の橋屋へ行つた。そこで茗荷屋の大藏に始めて會つた。浮氣な與兵衞は大藏を一目見ると、直ぐいたづらをして見る氣になつた。

客が歸ると與兵衞は態とあとへ殘つた。大藏に當つて見ると、女は直ぐと血道を上げて來た。元より大分の金銀を使ひ捨てた身の果である。與兵衞には少しの卑しいところもなかつた。それに、天性の美男だつた。二人は忽ち忍び會ふ仲になつた。

與兵衞の長年會ふ女郎に越前屋の三笠といふのがあつた。與兵衞が大藏と出來た時、三笠はもう長らくの大病で寢てゐた。醫者も見放した。抱主も諦めてゐた。

或時、大藏が與兵衞に向つて言つた。あなたには三笠殿といふ色があるさうだ。若し、その色と切れてくれたら、あたしはあなたともつと深い仲にならう。二世の語らひでも何でもしよう。すると、與兵衞がかう言つた。三笠と切れるのは何でもない。だが、お前がそれ程この俺を思つてくれるのなら、その證據を見たいものだ。すると、大藏はいきなり剃刀を出して、右の手の小指をぽつりと落した、そして、それを紙に包んでくれた。與兵衞は嬉し泣きに泣いた。

大藏の指切りは直ぐと遣り手に見つけられた。「誰に切つておやり遊ばした。」遣り手がかう訊いても、大藏は返事をしない。遣り手が主人へ言ひつけた。主人が怒つて、誰に切つたと責めても、大藏はやつぱり返事をしない。主人は女を土藏へ入れて、物を喰べさせまいとした。

すると、遣り手が口を出した。疵のある者を物も喰べさせずに押し込めて置いたら、命の程も覺束ない。中々その位な事で、有り體に物を言ふやうな大藏殿ではない。それよりは先づ指の疵の養生をさせて、これまで通り勤めに出す方が好い。その内、會ふ客の内で、相手も知れて來よう。主人は、成程それも尤だといふので、又前通り女を揚屋へ勤めに出す事にした。

勿論、與兵衞は卑しい太鼓持の身分なので、晴れて大藏に會ふ事は出來なかつた。或晩、忍んで格子先へ立ち寄ると、大藏がそつと出て來て言ふには、ここではどうも話も出來ない。今、二階から或物を落すから、それをどうにかして、大盡になつて會ひに來てくれ。さう言ふかと思ふと、直ぐ二階へ駈け上がつて、縮緬の腰帶を二つ繋ぎ合はせて、何か包んだ物をずるずるとおろした。與兵衞は受け取りながら、莫迦に重い物だなと思つた。

急いで、宿へ歸つて、包をほどいて見ると、どうして調達したのか、金が七十兩はひつてゐた。與兵衞は女の親切を押し戴いて、直ぐに小袖から、まくり羽織、帶、脇差まで拵へ

て、二日程過ぎると、揚屋へ出て來た。さて、俺も親類共の詫び事で親の勘當がゆりて、又元の身の上になつた。かう與兵衞が言ふと、その風俗の立派なのに驚いた揚屋の上下は、忽ちそれを信じて、這ひつくばつた。「まあ、まあ、それは淨瑠璃本にあるやうなこと。」一人一人が同じやうにこんな事を言つた。

與兵衞は直ぐに茗荷屋の大藏を呼べと命じた。大藏は知らせを聞くと、喜んで飛んで來た。それで、指を切つた樣子も忽ちみんなに知れた。併し、遣り手は寧ろ大藏を褒めた。流石大藏殿は目が高い。必ずこのやうな事になると見通してゐたのであらう。指を切つたのも尤だ。まるで手の裏を返す挨拶である。與兵衞は嘘はつき次第だと、思ふさま我儘を言つて遊んだ。

さうしてゐる内に、一時は危なかつた三笠の病氣が、不思議と段々よくなつて來た。三笠は前のやうに來てくれと、男のところへ頻に手紙を出すが、一向返事といふものがない。その内に、禿が與兵衞の大盡風をして揚屋へはひるところを見つけて來た。それから、氣をつけて見合ひ聞き合ひする内に、茗荷屋の大藏に會ふといふ事が分かつた。

三笠は身を顫はして口惜しがつた。それから、朋輩女郎を大勢語らつて、みんなで與兵衞の歸り道を大門口で待受けた。茶屋の男が。その事を與兵衞のところへ知らせると、今度は氣の強い大藏が承知しなかつた。なんの散茶女郎が何程の事を爲出かさうと、わざと白晝、與兵衞を送つて、仲の町へ出た。

三笠は直ぐと出て來て、男を捕まへた。默つて手を引いて行かうとすると、大藏が割り込んだ。俺の客だ。手もつけてはならないと言ふ。なあに、俺の方が古い。お前などの知らぬ事だと言ふ。與兵衞は右へ引つ張られたり、左へ引つ張られたりした。三笠の連れて來た朋輩女郎も手を出した。大藏の方へも女郎や禿が大勢味方に來た。與兵衞は二つの女軍に奪ひ合はれて、羽織も小袖もめちやめちやに引き裂かれた。髮はむしられる。顏は引つ掻かれる。色男散々の體たらくであつた。

併し、爭は三笠方の勝となつた。與兵衞は大勢の女軍に取卷かれて、三笠のところへ連れて來られた。三笠は二人になると直ぐかう言つた。あれ程深く言ひ交はしながら、今更あんな者に乘り代へるとは、どういふ御量見だ。親方の手前、朋輩女郎の思はく、とても生きてはゐられないから、自害して死ぬつもりだ。自分が死んだら、お前も生きてはゐられない。覺悟を極めてかう言はれると、與兵衞は困惑した。日頃の氣質、死に兼ねぬ女である。與兵衞は疊へ頭を摺りつけて、あやまつた。

これまでの致しやうは、如何にも俺が惡かつた。それは幾

重にも詫をする。この上はもう大藏に二度と會ふまい。どうかそれで許して貰ひたい。男がかう言ふと、女はやつと少し顏を和げた。若しさうなら、深い馴染でもあるから堪忍もしよう。併し、その詞に僞がないなら、今ここで大藏に手切れの文を書け。文句は自分が好むから。さう言つて、女は更に思ふ存分な愛想盡かしを書かせた。

二三日過ぎた或晩おそく、與兵衞は離に大藏を訪ねた。三笠に少しも心はないのだが、死ぬと言ふに困つて、當座逃がれにこなひだのやうな文を書いた。お前の親切で貸してくれた金は、まだここに使ひ殘りが三十兩ある。あとはどのやうにしても返すから、これは一先づ納めて置いてくれ。その內三笠とは手を切つて、きつとそなたを妻に持たう。男は聲を潛めてかう言つた。

大藏はなんにも言はなかつた。畜生同前の人と知らないで指まで切つた自分は莫迦だつた。あたしはあなたのお蔭で廢り者になつた。畜生の金は入らないから、持つて歸るが好いと、金を投げ返すなり奧へ立つて行つてしまつた。

與兵衞は爲方なしに、金を拾ひ集めて、宿へ持つて歸つた。その後は三笠とばかり忍んで會つてゐた。やがて、三笠の年期が明けたので、使はずにあつた例の三十兩で、少しばかりの義理をして、三笠を女房に持つた。

大藏は太鼓持の與兵衞に指まで切つたといふ噂に祟られて今では一人も客がない。廢り者同樣である。

遊扇が身振り聲色面白く話した長い物語の筋は大凡かうであつた。

九

安藝守は脇息を叩いて喜んだ。

「それこそ誠の傾城ぢや。眞の女郎ぢや。早う呼びに遣はせ。直ぐに會ひたい。」

遊扇は態と困つたやうな顏をした。

「でも、あまり落ち切つた女郎でございますから。」

「落ち切つたら、引き上げて、會うたら好いではないか。」

遊扇はもうここまで乘らせれば大丈夫だと思つたので、

「それ程までに御執心なら、呼びに遣はしませう。」

と言つて、態と澁々大藏のところへ使を出した。

大藏は間もなく來た。大門口の騷ぎ以來、始めての揚屋入りであるが、少しも場うてのする樣子などはない。元より、大名などを恐れる女郎ではないから、むづと安藝守に引つ添うて坐つた。疵のついた小指をも强ひて隱さうとする樣子がない。

「いよう、雪女郎の御來臨、御來臨。化かされまいぞ。化かされまいぞ。」

遊扇は忽ちいつもの太鼓持になつて、目をこすつたり、眉

毛に唾をつけたりした。丁度八朔の晩で、女は白無垢を著てゐたのである。

安藝守は先づ女の人を人とも思はぬ驕慢な態度が氣に入つた。指の疵などを少しも氣にかけるやうな樣子のないのも意を得た。やがて、盃事が濟んだ。床入りも濟んだ。安藝守は今までにない思ひをした。

「大藏は今年中揚詰ぢや。必ず他の客に會はせてはならぬぞ。」

悉く上氣した若大名は、揚屋を出る時、愚しうかう叫つた。

明くる日、安藝守は遊扇に命じて、小袖五つ重、夜著蒲團二通り、禿二人の衣裳から遣り手の著る物をまで、大藏の許へ送つた。勿論、遊扇もたんまり酬はれた。

「どうだ。師匠。乃公の腕前は、たうとう本庄を墮してしまつたぞ。」

遊扇は直ぐと吳服町へ報告に來た。

「ほほう。そいつは妙だ。あいつは莫迦殿に似合はぬ氣むづかし屋だが、よくおぬしの辯舌で落ちたな。して相手は誰だ。」

朝湖は珍しく、小さな紙に何か密畫らしいものをかいてゐる。

「指切りの大藏さ。「戶津は石町のはん恥知らず」よ。」

「そいつあ飛んでもねえ者をおつ附けたな。今に尻が割れねば好いが。」

「ところが、餓鬼の守。大氣に入りで、直ぐさま今年中揚詰の談判だ。」

「さうか。あいつは成上がりだから、いつそああいふあばずれたのが氣に入るのかも知れねえよ。」

「大きにさうだ。時に御褒美がたんまりあつた。何處ぞで一杯やりの、本庄をおびき出しはどうだ。」

「よからう。」

朝湖は未練氣もなく、筆を投げ捨てた。

「珍しいの。誂へ物か。」

表へ出ながら、遊扇が訊いた。

「宗珉が小柄の下繪だ。」

「あいつは相變らず眞面目か。」

「眞面目にもなんにも。あんな可笑しな奴はねえ。飛んだ潔癖で、日に幾度著物を著換へるか分からねえ。こなひだも家へ來たから、態とあの汚な細工な雁金餅を出しで遣つた。俺が手を出すとの、しやう事なしに一つ摘んだ。その厭な顏と言つたらなかつた。」

朝湖は珍しく多辯であつた。

十

安藝守の父を因幡守宗資と言つた。三の丸桂昌院の弟である。近頃、嫡子資俊の殊の外不行跡なのを知つて、心を痛めてゐるが、事を荒立てて、累を三の丸に及ぼしてはならないと思つてゐる。これは何でも、姉と相談して、姉から直接言つて貰ふに限る。因幡守はさう考へて、或日お城でその事を桂昌院に話した。

桂昌院は驚いたやうな顏もしなかつた。資俊不行跡の事は疾うから知つてをる。六角越前が卑しい女を妾に致してをる事も知つてをる。併し、それは資俊が悪いのでもない。六角が悪いのでもない。繪師朝湖佛師遊扇村田半兵衞などと申す輩が、資俊や六角を魔界へ誘き入れたのだ。二人ばかりではない。彼等の毒手にかかつて身を滅ぼした五七千石の旗本はまだ外に澤山にある。自分は右三人の毒蟲をいつか重刑に處してやりたいと思つてゐるが、まだ好い機會が來ない。その内きつと始末をつけてやるから、先づそれまでは資俊のしたい通りにさせて置くが好い。桂昌院はかう言つた。男のやうに鋭い理性と判斷とを持つた將軍の母も、自分の甥には甘かつたのである。

因幡守は桂昌院が思ひの外事情に通じてゐるのを驚きながらも、自分の息子のさう悪くは思はれてゐないやうなのをまだしもと喜んで、早々お城を退出した。

朝湖も遊扇も半兵衞も、自分達が桂昌院の怨を受けてゐようとは夢にも思ひ知らなかつた。憎まれるにしても、愛されるにしても、餘りの身分違ひである。三人は六角や本庄が三の丸内縁の大名である事を知つてゐた以外に、自分達と三の丸との間にどんな關係をも思ひ浮べなかつた。

或朝、遊扇が本庄邸へ伺候すると、次の間で年寄二人らしい話し聲がした。

「どなたでございます。」

遊扇が聲を潜めて訊くと、

「なあに、親父のところへ大目付の小田切土佐が話しに來てゐるのだ。心配はない。」

安藝守がかう言つた。遊扇はその日、遊びの相談やら何やら、言ひたい事が澤山胸につかえてゐたが、隣の客の歸るまでは遠慮をしなければならぬと思つて、苦しさうに押し默つてゐた。

すると、隣の部屋から、はつきりとかういふ對話が洩れ聞えて來た。

「恥を申さねば分かりませぬ。實は嫡男資俊、遊所通ひに現を抜かしをり、如何やうに異見を申しても、止みませぬ。餘程、氣に入つた女子がをると見えまする。いつそそれを受け出して當てがうたら、放蕩も止まうかと存ぜられますが、如何でござりませうな。」

「お役柄の手前、拙者善悪は申し上げられませぬ。併し、御

心勞はお察し申します。」

安藝守はこれを聞くと、いきなり遊扇の耳を引つ張つた。

「あれを聞いたか。父上の思召は、氣に入つたら受け出し、その後ふつつり行きさへせねば好いのぢや。この上は、その方遠慮なく働け。首尾よういつたら、伯母御に頼うで、長崎絲割符仲間へ入れて遣るぞ。」

遊扇は直ぐと畏つて、千兩箱一つ納戸から受け取ると、宿へも歸らずに、吉原へ駕籠を飛ばせた。

大藏の身請は九百兩で話がついた。勿論、それ程の値打がある女ではない。遊扇は茶屋の言ふ儘に、法外な金を出したのである。殘りの百兩は悉く祝儀に蒔き散らした。

それから、今戸まで女を駕籠で連れて來て、そこで小屋形船へ乘り換へさせた。遊扇は船へ一緒に乘るとほつと安心した。

「やれ、やれ、忙しい事だつた。併し、もうかうなればこつちの者だ。ところで、大藏のおいらん。この骨折は忘れつこなしだぞ。何を言つても、相手は三の丸御内縁だ。いつ何時俺が身に難儀が掛からぬものでもない、その時はきつと申し開きを頼むぞ。」

遊扇はほんとにさう思つたのではないが、自分の盡力に箔をつけやうとして態とこんな事を言つた。

「たしなまんせ。分かつてゐるわな。おれはお前を親とも思うてゐる。」

女がかう答へると、遊扇は態と首を縮めた。

「いや、もう、こんな恐ろしい事をした事がない。どうだ。この體の顫へやうは。」

女は笑つた。

「それ程恐ろしくば、せぬが好いに。」

「いや。これはあやまりだ。」

やがて、船が江戸橋へ著くと、遊扇は又駕籠を雇つて、女を石町の貸座敷へ案内した。自分の住居の直ぐ側である。

そこで、使を出すと、安藝守が直ぐと飛んで來た。

「渡邊の綱が鬼の腕を切り落すやうな働きで大藏殿を調へて參りました。褒めてやつて下さいませ。」

遊扇がかう言ふと、

「過分。過分。流石は遊扇、爲事が早いな。」

と、安藝守は大恐悦である。

「でも、ついさつきはあのやうに恐ろしがつてゐなさんしたに。」

大藏がかう言ふと、遊扇は直ぐ尻馬に乘つた。

「全く命がけでございました。この上の御褒美には、どうか手前に難儀の掛からぬやう、お願ひ申し上げまする。」

遊扇は態と身を縮めて、さも恐ろしげな樣子をしたが、

「氣の狹い奴ぢや。身が金で身が受け出すに、誰が何と言は

う。父上も御同意は分かつてゐる。氣遣ひせずと先づ酒でも飲め。」

安藝守にかう言はれると、直ぐ安心したやうな顏をした。いづれにしても遊扇は、これしきの事を何とも思つてゐるのではないのである。

やがて酒宴が始まつた。安藝守は下屋敷から腰元を二三人呼び寄せて、大藏に引合はせた。大藏は惡びれもせずに、みんなの盃を丁寧に受けた。

やがて、朝湖が作つた「待乳しづんで」を唄ひ出す者がある。遊扇が立つて舞ふ。安藝守が手拍子を取る。座は段々と浮かれて來た。

突然名主から遊扇のところへ使が來た。直ぐに來てくれと言ふ口上である。遊扇は何の氣なしに直ぐと名主を訪ねた。

「御用があるから、明日晝時に北條安房樣御番所へ、お前を連れて罷り出ろと言ふ事だ。何かお調べを受ける覺えでもあるか。」

名主にかう言はれると、遊扇ははつと思つた。さつきから、冗談で言つてゐた事が讖をなしたのではあるまいかと思つたのである。併し、けふの事が知れるには餘りに早過ぎる。何か吉原の事で參考人にでも呼ばれるのだらう。さう思つて、

「何も覺えはござりませぬ。」

と、答へた。

「では、それまで他出無用だぞ。」

名主はかう言つて、遊扇を大屋に引渡した。

遊扇は平氣で名主の家を出たが、何となく胸が騷いでならない。その內に、これは唯事ではないといふやうな氣がして來た。

遊扇が貸座敷へ歸つて、その事を報告すると、安藝守も驚いた樣子だつたが、

「併し、けふの事が分かつたのではあるまい。まあ、安心してゐるが好い。」

さう言つて、遊扇を慰めた。

「でも、それだけでは餘り賴りなうございます。何とかお役人にお聲が掛けて頂きたいと存じますが。」

「それは宜しい。併し、北條とは懇意でないから、同役の能勢出雲守をあしたの朝屋敷へ呼んで、賴んで見よう。そちも來て、樣子を聞くが好い。」

「それは有難うございます。何分宜しくお願ひ申します。」

遊扇は少し萎れて言つた。

座が白けたので、安藝守は一先づ屋敷へ引き上げる事にした。大藏は腰元をつけて、一時貸座敷に預けて置く事にした。あすにもなつたら、直ぐと下屋敷へ引き取らうと言ふのである。

遊扇は安藝守を送り出すと、急いで名主のところへ駈けつけた。

「本庄の殿樣が町奉行へ話をしてやるから、あすの朝屋敷まで來いと仰しやいますが、如何致したものでございませう。」

遊扇がかう言ふと、名主は本庄の名を恐れて、

「では、朝の內內證で行つて來るが好い。早く歸つて來いよ。」

と、言つた。

二

遊扇は夜の明けるのを待ち兼ねて、小川町の本庄邸へ馳せつけた。四つ時前に能勢出雲守がやつて來た。

「外でもないが、拙者方へ出入を致す佛師遊扇と申す者。今日御同役へお呼出しになつてをるが、何咎も覺えのない者故、房州へ宜しく賴んではくれまいか。」

安藝守がかう言ふと、出雲守が答へた。

「總て御用向、同役懸かりの事に就いては、賴むと申す事は勿論、いろふ事さへ出來ませぬ。併し、何の咎もない者なら口合一通りで濟みませう。總じて安房守は耳驚きをさせて、詮議を致すのが常でござる。その積りで參られたら何の事もござるまい。」

出雲守が歸ると、

「今聞く通りぢや。何の事もあるまい。」

と、安藝守が言つた。併し、遊扇は賴りなかつた。

「あなたは何とも思つて入らつしやらないやうですが、わたしはきのふから物も咽喉へは通りません。」

かう言つて怨んだ。すると、

「さてさて小心な奴ぢや。遊扇でもない。」

安藝守はかう言つて、笑ひながら奧へ這入つて了つた。

遊扇は遲れぬやうに急いで歸ると、直ぐ北條安房守の役所へ顏を出した。すると、朝湖が來てゐる。半兵衞も來てゐる。三人は思はず顏を見合はした。併し、何事で呼び出されたのだか、それは誰にも想像がつかなかつた。

やがて、三人は一緒に呼び出されて、一緒に白洲へ畏つた。すると、安房守がかう言つた。

「先月中から馬が物言うたといふ事を落語といふものに作つて流布した者があるが、今以て犯人が知れぬ。その方達三人は常々口を叩いて、人の機嫌取る事を渡世同樣に致す由ぢやが、馬が物言うたといふ話も、そち達が廣めたに相違あるまい。有り態に申せ。」

誠に意外な訊問である。馬に物を言はせて、生類御憐みを罵倒させた落語の近頃世に行はれてゐる事は三人も知つてゐた。併し、自分達が何でそのやうな事に與らう。三人は餘り馬鹿々々しいと思つた。

「左樣の儀、毛頭覺えございませぬ。」

三人が聲を揃へて、かう答へると、

「然らば、けふは歸つて好い。」

と言はれた。何の沙汰もなしに放還されるのである。

奉行所を外へ出ると、朝湖が欠をしながら言つた。

「蛇が出さうで、蚊も出なかつたの。」

三人は聲を合せて笑つた。それから、吉原へ氣鬱ざましの酒を飲みに出かけた。

二日立つと又呼出しが來た。三人は「また馬か」と、笑ひながら白洲へ出た。すると安房守がかう言つた。

「馬が物を言うたといふ話は、何としてもそち達の作に相違ない。吟味中入牢申しつくるから、左樣心得ろ。」

三人は驚いた。無法な裁判もあればあるものだと思つた。

併し、奉行はもう何を言つても取り上げなかつた。

安房守は三の丸の内意で、この三人を捕へたのである。併し、桂昌院内緣の大名を墮落させたといふだけの科で、三人を罰する事は出來なかつた。第一、それは社會への聞えも面白くない。それに、誘惑した者もした者だが、された者もされた者だ。罪はどつちにもある。三の丸樣は遠島に致せと仰せられたが、それはちと酷に過ぎる。何かこの際罪科を作つて、江戸拂ひ位で濟ませてやりたいものだ。常識もあり同情もある安房守は、さう考へて馬の物言ふ話などといふ思ひもつかぬものを持つて來たのである。

併し、この親切は朝湖にも分からなかつた。遊扇にも分からなかつた。勿論半兵衞にも分からなかつた。彼等は自分達の惡行のどうせ一度は天罰に會はねばならぬのを覺悟しながらも、罪科も定められずに暗い所へ投り込まれてゐるのが、不平で不平で堪らなかつた。三人は二月も牢にゐたが、一度の召喚にも會はなかつたのである。

朝湖が先づ、病氣に付、養生として出牢したいといふ願を出した。やがて遊扇も同じ願を出した。半兵衞も出した。六角、本庄は勿論、ふだん三人を贔負にする大名達も側から力を添へた。

三人は願の通り牢を出る事が出來た。勿論、一人も病氣なのではない。食物が惡いので少し痩せたのと、剃刀を當てないので髯が延びたのだけが、前と違つてゐるだけである。三人は少しも慎む心がなかつた。今まで通り、平氣で盛り場へ出入もしたし、酒食や遊興も思ふ儘にした。

そこで、隱し目付からは毎日のやうにやかましい報告が來る。三の丸からは愈嚴命がある。流石の安房守も終に最後の手段を取らなければならなくなつた。

或日、遊扇が山村座へ芝居見物に行つた。同じ日に朝湖と半兵衞は吉原へ遊びに出かけた。その歸り道に、三人とも召捕になつた。繩つきで奉行所へ引かれると、直ぐと刑の宣告があつた。格別の御慈悲を以て出牢養生仰せつけられたるに

蟄しもせで遊所へ立ち入り、上を輕んじたる段、不屆至極に付、三人ながら遠島に處すといふのである。前の馬の話には不平だつた三人も、今度のこの宣告には異議の申し立てやうがなかつた。

宣告を受けると、遊扇と半兵衞は青くなつた。併し朝湖一人はびくともしなかつた。

どうせこんな世の中である。何處に住まうと、退屈なのは同じ事だ。島だと言つても、人は住んでゐるのだらう。そんなら俺でも生きてゐられるに違ひない。朝湖はこんな事を思つてゐた。

十二月二日の寒い朝だつた。三人は大勢の知人にそれとなく見送られて、靈岸島を船で出た。見送りの中には、團十郎がゐた。七三郎もゐた。紀文もゐた。奈良茂もゐた。其角もゐた。横谷宗珉もゐた。宗珉は人目をも恥ぢずに涙をぽろぽろ零した。

船が伊豆へ著くと、遊扇と半兵衞は八丈島へおろされた。朝湖はたつた一人三宅島へ置かれた。

二

島へ來てからの朝湖は「退屈」その者だつた。毎日寢そべつてばかりゐる。欠ばつかりしてゐる。

彼は自然に興味を持たなかつた。山にも濱にも遊びに出た事がない。長年の懶惰な生活は、彼に漁る勇氣をも培ふ力をも與へなかつた。

毎晩夢に見るのは、江戸の芝居である。吉原である。彼は時勢を唾棄しながら、人を戀しがつた、寂しいのを嫌つた。

彼は時々繪をかいたり文章を作つたりした。「三日詩を言はざれば、口荊棘を含み」などとも書いた。併し、いつも出來上がつて了ふと、

「詰まらねえ。下らねえ。」

と言つては、引き裂いて了つた。

紀文などから送つてくれる穀物や酒で商ひを一度して見たが、それも長くは續かなかつた。浪費といふ事の外何も知らぬ彼に算盤は取れなかつた。

彼は欠伸の外何もせずに、十二年島にゐた。それでも、彼の體は少しも衰へなかつた。彼が自然に冷淡であつても、自然は彼に暖かだつた。

或春の朝、彼が草花に蝶の留まつてゐるのを眺めてゐると——それは、彼にとつて、全く不思議な出來事だつた——赦免の船が江戸から來た。五代將軍が薨じて、六代將軍が宣下をしたのである。

江戸へ歸る船の中で彼は考へた。歸つたら名を變へなければなるまい。彼は母方の姓の花房といふのを思ひ出した。そ

れからけさ見た蝶を思ひ出した。英――一蝶。これで好い。又この名で一暴れ暴れようか。

併し、愈江戸の土を踏むと、もう又江戸が厭になり出した。それに、團十郎ももう死んでゐた。其角も死んでゐた。七三郎も死んでゐた。

「憎まれてながらふる人多の蠅」か。」

彼は記憶にある其角の句を誦しながら、大きな欠伸をした。

江島生島

一

德川家の治世、延寶七己未年の事であつた。

江戸牛込築土邊に白井兵助といふ小祿の御家人があつた。年はもう六十に近かつたが、生れつき活達無賴な事が好きで或は遊所に立ち入り、或は博徒と交誼を結び、稍もすれば喧嘩口論に腕立てをして、白刄の中へ飛び入り、わざと我が身に傷を受けて、巷說に名を賣らうとするおろか者であつた。

妻のお久も夫に劣らぬ不行跡な女であつた。かの女は半太夫が節を巧みに語り、楓江が三絃を上手に彈いた。その交友知己には芝居者が多かつた。元より蓮葉育ちの淫婦であつたから、二人の子供はありながらも、夫がよそに寢泊りする留守には、近所の放蕩者や浮氣娘を招き寄せて、夜の更けるまで彈いたり唄つたりの高調子を上げた。そして、彈き疲れ唄ひ疲れると、賭博に黃白の一夜勝負を快とした。それにも疲れると、男女入り亂れて、居汚なく雜り寢た。

夫の兵助はこれを知らぬではなかつたが、それに對して一言一句の異議をも挾む事は出來なかつた。第一かれは養子の身の上であつた。第二にかれは自身が大の放蕩者であつた。かれが牛込の家に眠るのは、月の內に僅三晩か四晩であつた。

その頃、八官町のお堀通りに「比丘尼」と稱する隱し賣女が巢を食つてゐた。昔、地獄極樂六道の繪卷を衆人に指し示し、繪解きして佛法を敎へ勸めた熊野比丘尼が、いつの間にか自ら墮落して、眉を作り、白齒を磨き、紅をつけ、白粉を粧ひ忌中の男を見るやうに月代を中がりにして、紗綾縮緬縞八丈などに紅裏をふかせ、黑き帶に裾を引き上げ、黑縮緬の投頭巾に色めかしく頭を包んで、異樣に媚めかしい情欲の誘惑者となつたのがそれである。兵助は桔梗長屋にお職を張る比丘尼妙訥、渾名をくされのお安といふのに思ひ思はれて、夜毎に抹香臭い膝を枕にしながら、女が籠に載せて唄ふ丹前柴垣の淫な曲節に、家をも妻をも忘れて、心を現にするのであつた。

お久が夫の留守に招き寄せる男達の中に、達磨三郎兵衞と

いふ博奕の友があつた。かれは元大阪の生れで、七八つの頃江戸へ出府したものであつたが、小才の利く生れつきで、隆達節の小唄などを巧みに唄ふところから、その頃は葺屋町の狂言座市村宇左衛門の芝居に使はれるともなく使はれて、或は樂屋を働き、或は看板を叩いて客の呼び込みをしてゐた。かれは巧みに役者の聲色を眞似た。風俗も派手で、どこやら役者らしい匂があつた。

お久は一目見たその時から、三郎兵衛の容色に深くも心を動かされたのであつたが、假にも不義などをしかけたら、日頃から氣の荒い喧嘩好きな夫に如何なる酷い目を見せられるか分からないと思つて、逸りに逸る意馬の手綱を力の限り引き締めてゐた。

併し、兵助の耽溺は日毎に深くなるばかりであつた。かれが草深い山の手の家へ歸るのは十日に一度が二十日に一度になつた。二十日に一度が一月に一度になつた。お久は夫の留守を、日毎夜毎の逸樂に忘れながらも、さすがに臙脂の炎を禁ずる事が出來なかつた。お久は不貞腐れになつた。

「命を取るなら取るが好い。青比丘尼の手管に腰の拔けた男が、このわたしをどうする事が出來るものか。第一わたしは家附きの娘だ。離緣をするなら、こつちからして遣る。」

お久はかう思つて、一度に意馬の手綱を切つて放つた。達磨三郎兵衛は或晩突然物狂ほしい人妻の抱擁に會つて驚いたが、元より一人身の身輕者とて、決してこの思ひもかけぬ幸福を辭さうとはしなかつた。

二人は忽ち賭博よりも危い歡樂の暗い淵に身を沈めた。二人は子供達の現ない寢言にも、天井を走る鼠の音にも胸を轟かせながら、夜毎に祕密の世界を樂しむのであつた。今まで博徒と蕩兒の賑かな集會所であつた白井の家も、今は姦夫姦婦が寂しく暗い二人ぎりの中宿となつた。三郎兵衛は夜おそく來ては朝早く歸つて行つた。

或朝、お久が寢亂れた臥所をまだ片づけ切らないでゐる所へ、何の用があつてか、隣に住む井上といふ家の老母が突然案内もなしに這入つて來た。老母はそこに列んだ二つの枕を見ると、恐ろしいものでも見たやうに顏を背けた。

お久が月の物を見ぬやうになつたのは、それから間もなくの事であつた。お久はその亂が夫のであるか三郎兵衛のであるかを知るに苦しんだ。併し、一旦井上の老母にも現在祕密の場所を見られた後の事故、とても世間の口に戸は立てられぬと思つた。

或晩、お久は三郎兵衛の膝に凭れて、總ての憂を打ち明けた。そして、最後にかう言つた——

「あたしやいつそここを逃げようかと思ふよ。」

三郎兵衛は待ち構へてゐた事がやつと來たといふやうな顏をした——

「やつとさういふ量見になつてくれたか。俺はもうこなひだ中からそれが言ひたくて言ひたくて堪らないでゐたのだ。有りやうはそつちからしかけた戀とは言ひながら、實を言やあ一目見たその時から、身内の寒くなる程、こつちもお前に打ち込んでゐたのだ。今ぢやあ兵助殿と命の遣り取りをしてもお前を俺のものにしなけりやあ置かねえ量見だ。お前がさういふ量見なら、今夜にも一緒に逃げよう。幸、俺の故郷は大阪だから、兎も角も西へ向つて旅立たう。」

「まあ、さうかい。そんなら早くお言ひなら好いに、お前も飛んだ苦勞性だよ。」

「時に、二人のがきはどうするのだ。」

「どうもするものかね。男の子は男に附くのが御常法さ。折角好い心持で寢てゐるものを無理に起して、『子別れ』の愁嘆場を勤めさせるでもなからうぢやないか。」

「飛んだ思ひやりのあるお袋樣だの。」

「あれ又それをお言ひかい。年寄じみて、あたしやいつそ氣が引けるによ。」

「だが、冗談は冗談だ。ぐづぐづしてゐて、又井上のおきさ婆にでも見つけられたら一大事だ。直ぐに支度にかかるとしよう。」

かう言ひながら三郎兵衛は直ぐと南部籠に手をかけた。併し、その中にある筈の衣類は大方兵助が八官町へ運んで行つて了つてゐた。三郎兵衛はそれでも無いよりは增しと、籠の底をはたくやうにして、ある限りの物を風呂敷に引き包んだ。お久はお久で用簞笥の引出しから貯への限りを懷へ捩ぢ込んだ。

「そんなら、三さん。」

「好いかい、お久。」

二人は雨戸を一枚そつと明けると、足音を忍んで暗い庭へ降りた。

夜が明けて驚いたのは長男の平吉と二男の慶之助である。母の姿が見えない。「いつも來るをぢさん」の影も見えない。母の寢間は盜賊でも這入つた跡のやうに取り散らしてある。まだ頑是ない二人にも、一寸の留守と長く捨てられた寂しさとの區別は自然と感ぜられた。二人は思はず顏を見合せると同時に烈しく泣き出した。

常ならぬ泣き聲に驚いた隣の老母は、齒を染めてゐた筆を投げ捨てて、駈けつけて來た。老母は座敷の樣子を一目見ると、直ぐにゆうべの出來事を悟つた。

氣丈な老母は泣き叫ぶ二人の子を賺しながら、遠い八官町の桔梗長屋を志した。そして兵助に會ふと一部始終の物語をして——

「併し、表立ててはあなたの御損。この不始末が近所の噂に

なれば、如何に小祿でも御直參のあなた、家事不取締の罪でどんなお咎めを受けようも知れませぬ。唯この上はけふにも家を移り、歌比丘尼殿と手を切つて、お子達の成人をお祈りなさるが何よりの罪滅ぼしでござります。」

と言つた。

兵助は話を聞くと、齒嚙みをして口惜しがつたが、家を外なる自分の不身持にも罪の過半はある事とて、怒るにも怒られず、泣くにも泣かれないで、唯冷汗にびつしより背を濡らしてゐた。

白井の家が麴町へ移つたのは、それから間もなくの事である。兵助は別人のやうに柔和になつて、妙訥とも手を切り、お表へも忠勤を勵んで、ひたすら二人の子を愛撫した。

姦夫姦婦は無事に平塚あたりまで落ち延びたが、少しは貯へのあると思つてゐた三郎兵衞の懷に、實は一文の用意もなかつたので、二人は忽ち路銀に窮して來た。

「三さん、お前少しや持つてゐると思つたに、それぢやあどうもしやうがないの。」

「おりやあ又お前がもうちつとは臍くつてゐると思つてゐたのさ。この儘かうしてもゐられまいから、そんなら又江戸へ引つ返すかの。」

「さうさなう。わたしもこの頃は毎朝の惡阻で、大抵苦しむ事ぢやないから、とてもこの先きの長旅は覺束ないによ。」

「そんなら山雀のあと歸りとしようかの。」

「もうほとぼりのさめた時分だから、どつか邊鄙へ隱れりやあ、お江戸は廣いから、大抵知れる事ぢやあないよ。」

二人はこんな相談をすると、直ぐその晩、遂に又江戸へ向けて發足した。お久は草鞋がけで長い道を歩くのが、もう餘程困難になつてゐた。四五日かかつて、やつと江戸へ這入ると、二人は本所の松倉町にささやかな住居をきめた。

そこで、その明くる年の五月に、お久は安々と女の子を產み落とした。七夜の晩、姦夫の三郎兵衞は臍の緒書に自ら筆をとつて、「白井兵助之長女はつ」と記した。三郎兵衞にもこの子が自分のものか兵助のものかが分からなかつたのである。

二人は手內職などして、この場末のあばら家に辛くも世を忍びながら、內々牛込邊の噂を聞いて廻つたが、然程世間の物議をも釀してゐない樣子なので、お初が二歲の春、芝居町に近い葭町へ引き移つて、三郎兵衞は又葺屋町の狂言座へ通ふやうになつた。

立つる烟は細くても、過ぐる命に變りはなくて、お初は早くも六つの春を迎へた。元より器量も美しく、生れつきも悧發なので、夫婦はお初を手の內の珠挿頭の花ともいつくしんだが、年にはませた生れつきなので、その年の夏から手習物

讀みの師匠をとつて、これに通はせ、つい近所に住む振附の師匠若竹佐平次が元へも弟子入りさせて、末は一かどの舞上手ともなれと祈り、やがては杵屋善太郎が稽古所へも通はせて、三絃の道にも秀でさせようとした。

悧發なお初は一を聞いて十を知つた。かの女は僅一二年の內に、指折りの踊り手となり、師匠の佐平次に連れられて富豪の家にも出入りをするやうになつた。お初は三日にあげず貰つた「花」を土產にして、貧苦に惱む兩親を喜ばせた。

お初が三郎兵衞の胤でなかつた事は、この一二年の間に明かになつて來た。お初は五つから六つ、六つから七つと成人するに連れて、その目つき口元鼻の形に、恐ろしきまで實父兵助に相似の點を現して來たのである。三郎兵衞はその兵助に似たお初が、無心で自分に孝行を盡してくれるのを、どんなにか心苦しく思つたらう。三郎兵衞も今は四十幾つの分別ざかりであつた。

嘗ては放蕩無賴に世をのさばつて歩いた「達磨」も、今は悔悟と懺悔に身を小さくして、狂言の座へも祿々通はずに、暗く寂しい家にのみ閉ぢ籠つてゐた。樂屋働きに身を粉にしたところで、ささやかな日當しか得られない身が、かうして家にばかり引つ込んでゐるので、生活の困苦は愈激しかつた。三郎兵衞は夜も眠られぬ程に、苦しみ悶えた。右を見れば兵助に似たお初の寢顏が過去の罪を責める。左を見れば生活に疲れたお久の寢顏が現在の境遇を訴へる。目をつぶれば石町の鐘の音が腸に食ひ入るやうに響いて來る。三郎兵衞は終に氣病みの床に就いた。

貞享四丁卯年の春が來た。門松、注連飾り、凧、遣羽子に賑ふ大江戸八百八町の中心に住みながら、「罪の家」なる達磨一家のみは暗く寂しい正月を迎へた。利口なお初は、近所の子達が西田鹿子に摺箔した流行の衣裳を著飾つて遊ぶのを、心ではどんなにか羨みながらも、飽くまで兩親の氣をかねて不足らしい顏一つせず、靜に父が病床の側で、一人雙六などして遊んでゐた。三郎兵衞はそのいぢらしい有樣を見るにつけても、麩燒一つ買つてやる事の出來ぬ今の境涯を、悉く昔の罪の報いにして、身を切らるるやうに感ずるのであつた。

踊り初めの日が來た。併し、お初の兩親は、お初に著せてやる物を一枚も持つてゐなかつた。夫婦が顏を見合せて困惑してゐる所へ若竹佐平次の所から迎ひが來た。

「よくはございませんが、御祝儀の著物はこちらで用意致しましたから、どうぞふだん著の儘でお出で下さい。」

といふ口上である。三郎兵衞夫婦は愁眉を開いた。お初もいそいそと使の者に連れられて出て行つた。

その夕方、めでたく式を勤め終へたお初は、師匠佐平次に著せて貰つた新しい衣裳を、一刻も早く兩親に見せたさに、暇乞もそこそこに若竹の門を駈け出で、遠くもあらぬ我が家の路次口へ走り入らうとする所へ、不意に小蔭から一人の年を取つた侍が飛び出して來て、慌しくお初に聲をかけた。

「これ、これ、孃や、爺がちとそなたに聞きたい事がある。よい物を取らす程に、ついそこまで一緒に來やれ。」

お初は數へ年で八つの、流石にまだ頑是がなかつた。

「おぢいさん、何處へ行くのだえ。」

「來てくれるか。それは辱けない。ついそこの横町までぢや。」

お初は惡びれもせず、老武士に手を引かれて、新道の小料理屋まで來た。

「おぢいさん、ここへ上がるのかえ。」

「さうぢや。何ぞおいしさうな物でも食べながら話をしよう。」

侍はお初を連れて、奥まつた小座敷へ通ると、一々お初に相談して食べ物を誂へた。誂へた物が來ると、お初は遠慮をせずに直ぐ箸をとつた。

侍はお初が嬉しさうに物を食べる樣子を、暫くぢつと見詰めてゐたが、やがて涙をはらはらと零して、獨り言のやうにかう言つた。

「可愛い奴ぢや、そちが母の不所存ばかりに、そちは今のやうな裏屋住居をしてゐなければならぬのぢや。この頃では三郎兵衞も、先非を悔いて、殊の外身を慎んでゐるといふ事ぢや。今更昔の事は言ふまい。爺は唯そちに會ひたかつた。御本丸よりの勤め歸りに、この近邊をうろついたも、けふでもう一月あまりぢや。それといふも、そちが二つの折、ふと往來で見かけた所、何處となく似た父のおもざし、俄に戀しく懷しく、漸う思をけふ達したのぢやが、かく親しく見れば見る程そちは父の子ぢや。可愛い奴ぢや、よう顔見せよ。」

侍はかう言ひ終るかと思ふと、俄に手を延ばしてお初を膝に抱き上げた。そして、又はらはらと涙を零した。

お初は何が何やら一向に分からなかつたが、馳走をされた嬉しさに、さして根問ひもせずに、侍のするが儘に身を委せてゐた。侍は暫くお初を抱きしめながら泣いてゐたが、やがて手を解いて、お初を疊の上へおろした。

「ええ、われながら不覺であつた。嘸兩親も案じてをらうに。」

侍はかう言ひながら、自分の懷を探つて、かねて用意をして來たらしい一封の手紙と袱紗に包んだ金子とを出した。そしてそれをお初の懷に押し込んだ。

「この二品を落さぬやうに持ち歸つて、父には知らせず、そつと母に手渡ししたがよいぞ。」

「あい。そつとお母さんに渡しませう。」

「利口者ぢや。早う成人して、母の恥辱を雪がねばならぬぞ。」

「そんなら、おぢいさん。もう歸つても好いのかえ。」

「おう好いとも。父や母も案じてゐように、早う歸りや。」

お初は小さい下駄を踏み鳴らして、いそいそと元來た道へ駈けて行つた。侍はお初の姿の遠く見えなくなるまで、延び上がり延び上がり見送つてゐた。

お初は家へ歸ると、侍に會つた事などは曖にも出さずに、唯師匠佐平次に貰つた春著の美しさを兩親に誇るのであつた。

お初が著て歸つた一枚の小さな春著は、陰欝な三郎兵衞の一家に、始めて正月らしい光を齎した。お久と三郎兵衞は爭ふやうにして、代る代るお初を膝に抱き上げた。

お初は久しぶりで父の晴れやかな顔を見たので、何か父に對しては祕密があるらしいかの二品を母親に渡す事が、何となく氣が咎めた。それで、その晩はその儘寢て了つた。

明くる日もお初は母と二人きりになる機を得る事が出來なかつた。三郎兵衞は相變らず、朝早くから夜遲くまで、まんじりともせずに苦しげな目を明いてゐるのであつた。

三日目の夕方、お初が常々贔負になる或綿問屋の隱居から、年玉代りとして僅ばかりの金が屆いた。三郎兵衞は大層喜んで、直ぐお初に餅でも買つてやれと、包みの儘でその金をお久に渡した。

お久はあたりの暗くなるのを待つて、お初の手を引いて町へ出た。お初は好い時が來たと思つた。今夜渡さなければ、もう渡す時があるまい。さう思つてその途中で、默つてかの二品を母の手の内に押しつけた。

「お初、これは何だい。」

「何だか知らないが、よそのおぢいさんがお前にくれたのだよ。父さんに見せてはいけないのだと。」

紫の袱紗包は確に金である。堅く封じた一書は確に手紙である。お久は誰からとも知れぬこの意外なおとづれに胸を轟かせながら、直ぐと手紙の封を切つて、歩きながら提灯の火で讀んで見ると驚いた。

忘れもせぬ先夫兵助が筆の跡である。

「先づ以て御健勝奉賀候。左候へば御身永々の流浪、嘸かし御不自由察し入候。これと申すも元我が放埒より起りし事、今に至り悔悟やみ難く候。元より我は他家よりの養子、御身は白井の血筋なれば、一旦は不義の家出を憤り候へ共、今日迷ひの雲晴れては、御身家附の娘を捨て置く事心苦しく、殊には女子を儲けし由傳へ聞き、よそながら逢ひたく思ひ、折を得て面會せしに、何處となく我が面ざしに似たる不憫さ、愈懷舊の思堪へ難く候。御身これまでの罪を謝しなば、我が

若氣の過に免じ、氷解してその罪を問はざるべく、早々御悔悟祈上候。就いては金子二十兩、些少ながら何かの用意にもと、密に託し贈り參らせ候。」

讀み終ると、お久は俄にぐらぐらとして、危なくそこへ倒れさうにした。けふの今宵までは三郎兵衞の氣病みを、心では竊に嘲つてゐたお久も、流石にこの情の籠つた手紙を見ては、動かずにはゐられなかつたのである。

お久はお初に支へられて、やつと我に歸ると、急にお初の口から細かい事が聞きたくなつて來た。併し、それを聞いてはお初の爲にならぬと思つた。

そこで、幾度となく口の端まで出て來る問を、無理に胸の底へ抑へつけた。

勿論この事は三郎兵衞にも知られてはならぬと思つた。そこで、歸る道々、お初にも口止めをした。袱紗と手紙は一つにして、懷深く隱して了つた。

この祕密が祕密として過ぎる內に、早くも正月の晦日が來た。男主人の病氣を口實に大晦日の拂ひを延ばされた薪屋酒屋米屋などのたぐひが、今日こそはといふ勢ひで、三郎兵衞の家へ詰めかけて來た。

お久は頭を疊に擦りつけぬばかりにして詫びたが、その詫びはもう聞かれなかつた。待ちにくい暮の勘定を待たされた上に、又正月を逃げられては、いつになつたら埒が明くか分からぬと言ふのである、

もうこの上は家財諸道具を運び出して、無理にも引き負ひに當てなければならぬ。債鬼は聲を一つにしてかう喚くかと思ふと、一人は破れ障子を外しにかかつた。一人は鍋釜を運び出さうとした。一人は病人の夜具を剝がうとした。

お久は餘りの事に、蒲團を剝がうとする酒屋の腕に縋りついた。酒屋は用捨もなくお久を突き倒した、途端に、お久は懷深く納つて置いた例の袱紗包を思はず疊の上に取り落した。

ぢしりと落ちた物の響きに、商人達は思はず顏を見合せた。

「これ御內儀、ないと見せてもあるのは金。ずつしり落した重みでは、小粒にしても二十四五兩は確ぢや。三人へ皆濟ましても僅に四兩に足らぬ金ぢや。さあ器用に拂はつしやれ、拂はつしやれ。」

掛乞の一人が透かさずかう言つた時、病人の目は旣に恐ろしい色をして、袱紗包を睨んでゐた。お久は實を告げる事も出來なければ、拂ひを拒絕する事も出來なかつた。

お久は冷たい汗を額にかきながら、袱紗包の結び目を解いた。そして四兩の金を商人の前に列べると、息を詰めながらかう言つた。

「この金はさるお方よりの預り物なれど、今宵につづまる切

迫に、暫く借り受けてお拂致します程に、どうぞもう手荒な事はせずと置いて下さりませ。」

「金さへ下さりやあ、なんで手荒な事を致しませう。」

商人達はかう言ひながら、てんでに金の分け前を取ると、こそこそと逃げるやうに三郎兵衞の家を引き取つた。

病人は掛乞達の足音が路次を出切つて了ふのを聞き澄ますと、いきなりお久の片手を摑んだ。

「これ女房、その金の出どころ言や。俺も昔はならず者で、人の妻まで盜んだ奴だが、この二年越しの煩ひに、今では一念發起して、臨終を待つ三郎兵衞ぢや。如何に貧苦に迫ればとて、人樣の物塵一つ盜まうなどと淺ましい心は持たぬぞ。今掛乞にそなたの拂つた金の出どころ、どうも俺は氣にかかる。どこぞで借りたか。盜んだか。早う言うて安心させぬか。」

お久は返事が出來なかつた。

「返事の出來ぬところを見れば、さてはそなたは盜んだな。人の物を奪うて來たな。」

「いえ、いえ、そのやうな事ではございませぬ。」

「それなら、早う出どころを言や。」

「さ、それは。」

「ええ、大それた事してくれた。たとひこの儘親子三人飢死になるとも、人樣の物を盜む心はないに、女の狹い量見違ひから、あすはお上のお手にあひ、重きお咎めを受けねばならぬか。」

三郎兵衞はくやし泣きに泣きながら、お久の側へ這ひ寄つて、いきなりその襟髮を摑むかと思ふと、足下に踏まへて、散々に打擲した。

「さあ、出どころ言へ。さあ、拔かさぬか。」

三郎兵衞はお久の髮の毛を手に卷きつけ、泣きながら留めに這入るお初を突きのけて、猶も妻を問責するのであつたがそのはずみに、お久の帶の間から手紙らしいものが、はらりと落ちた。

三郎兵衞は手早くそれを取り上げて、行燈の灯に透かして見ると、顏色を變へた。

「むむ、さてはそなたは我が病中に、とうより先夫へ心を通じ、この三郎兵衞を捨てる心か。さうとは知らずに、この年月、よう親切にしてくれると思つてゐたが口惜しい。他人の妻を盜んだ罪で、こんな憂目を見るにもせよ、人情知らずの腐つた根性。病みほうけた目を掠め、よくも白井と通じたな。もうこの上は生かして置かれぬ。覺悟しや。」

三郎兵衞は狂氣のやうになつて、臺所へ這ひずつて行つたが、直ぐと庖丁を手にして取つて返すと、いきなりお久の咽喉を目がけて、それを突き立てようとした。

併し、病人は先程からの烈しい興奮で、もう大分疲れてゐ

た。お久は三郎兵衞に捕へられた左手を逆に拂つて、臺所から表へ逃げようとした。三郎兵衞は逃がすまいとお久の帶にしがみついた。お久は力に任せて腰を拂つた。三郎兵衞は思はず手を放したが、はずみで揚板を刎ね返すと、もんどり打つて脾腹を下流しの角へ打ちつけた。

「うむ。」

と、一聲苦しげに叫んだぎり、病人は目を白くして了つた。

家主が來た。兩隣の誰彼も來た。お久とお初は手を盡したが、三郎兵衞はもう蘇生しなかつた。

十年の惡夢は覺めた。お久は三郎兵衞の葬もそこそこにお初の手を引いて、白井家へ駈けつけた。

白井の家はその頃飯田町にあつた。お初の次兄慶之助はもう死んでゐなかつた。長兄平吉は平右衞門と稱して、もう前髪立の十六歳になつてゐた。兵助ももう昔の剽悍な面影はなくて、後生願ひの好いお爺さんになつてゐた。

兵助は唯お初が可愛くてならなかつた。それ故、お久の罪もさして咎めず、その儘親子を我が家に留めて置かうとした。併し、さういふ異法は「侍の家」にとつて許される事ではなかつた。

「たとひ小祿でも、幕府の御直參ぢや。一旦不義せしものをのめのめ歸宅させしとあつては、お表への聞えも如何ぢや。早う他家へ再緣おさせなされ。」

同僚は口を揃へて、兵助にかう忠告をした。兵助も一旦お久の悔悟を見た後は、そのいまだに水々した美しさを、自分のやうな老いぼれの側で萎縮させるのが氣の毒でならなかつた。そこで、お久にも事情を打ち明け、木梨蓮齋といふ世話好きな町醫を媒にして、同じ御家人の豐島平太夫方へ再緣をさせる事になつた。

お久はお初を連れ子にして、豐島の家へ這入つた。間もなくお久は平八郎といふ男子を擧げた。

お初は僅か一月の間に三人の父親を持つた。さうして、一年立たぬ内に、姓の違つた兄と弟を持つた。

二

段々大きくなるに連れて、自分の家族關係の如何に複雜であるかがお初に分かつて來た。お初は折々ゆうべ見た夢のやうに、幼時の記憶を呼び返すのであつた。馥町の貧しい生活。第一の父の大病。第二の父との邂逅。恐ろしい正月晦日の夜の出來事。お初は段々これらの事の意味が分かつて來るやうに思つた。

お初は子供心にも、「夫婦」といふ者を呪はずにはゐられなかつた。お初は「決して自分は嫁には行くまい」と思つた。

「自分は話に聞いた御殿奉公をして、一生獨り身で暮らさう」と思つた。

お初はさう思つて、御殿女中の資格になりさうな事をのみ學んだ。歌道、書道、諸禮式は勿論、今まで習ひ覺えた遊藝の道をも捨てなかつた。

お初は夜となく晝となく父親をせがんで、どうか諸侯方の奥御殿へお勤めがしたいと言つた。平太夫も妻の連れ子とは言ひながら、同僚白井の胤ではあり人並優れての悧發者故、どうぞして奥向へ勤めさせたいと思つたが、小身者の悲しさとて、便宜のないのを嘆じてゐると、ふと日頃懇意にする同僚諸星藤兵衞の伯母が紀州家の奥向に勤めてゐるといふ事をちらりと聞いたので、早速諸星の家へ出向いて行つた。

「時に貴殿の伯母御が紀伊樣に勤めてござるさうなが、それは誠か。」

平太夫は寒暑一通りの挨拶が濟むと、早速かう尋ねた。

「如何にも誠ぢや、松野と言うて鶴姫樣附の老女株ぢや。」

「それなら、ちと折り入つて願ひがある。」

「何ぢや。」

「手前、當年十四歳になる娘を一人持つてをる。名を初といふが、中々の悧口者ぢや。これを伯母御の部屋子に使うて貰ひたい。」

「造作もない事ぢや。賴んで見よう。」

話はこんな事で意外に早く道が開けた。二三日すると諸星から、早速お召抱へになるといふ返事が來た。

お初は名をみきと改めて土橋御門外なる紀伊中納言綱教の御簾中鶴姫君附の老女松野の許へ部屋子として住み込む事になつた。元祿六年の事である。

おみきは元より才智に優れてゐた。かの女は立居振舞、一言二言の物の言ひやうにも、決して卑しい素性を裏切るやうな事はなかつた。かの女は直ぐと主人松野の氣性を呑み込んで、何事にもその氣に入るやうに氣に入るやうにと勤めた。元より、糸竹の道には優れてゐたので、折々は松野の取持で大守が内君の御前へ内々で召し出だされ、はやりの小唄、舞の一手に御徒然の興を添へる事もあつた。

おみきは自然出世が早かつた。間もなくお末といふ役に召し出されて、それから二十二の年まで無事に勤めたが、その年の春主人と賴む松野にも死なれ、續いて鶴姫君にも御逝去あられたので、終に永のお暇を賜はる事になつた。

おみきが實家の豐島へ歸ると間もなく、母のお久と元の父兵助が、相續いで世を去つた。今は思ひ置く所もなしと、諸方からの緣談を斷つて、明くる年の三月、再び櫻田甲府樣の奥向へ勤める事になつた。元祿十五年の事である。

當時は五代將軍綱吉の治世であつたが、綱吉に正統の男子がない所から、世繼についての樣々な爭論があつた。お傳の

方は愛女の婿紀伊中納言綱教を世に立てようとする。柳澤吉保は自分の妻にお手が附いて出來たと稱する松平吉里を未來の大將軍にしようとする。水戸の藤井紋太夫は私欲から義公の養子綱條を西丸へ直さうとする。議論百出の中で、飽くまで公平無私な正義の論を吐いたのは水戸光圀であつた。

「將軍の兄君甲府綱重殿御在世ならば、當然五代の將軍と仰がるべきであつた。然るに、兄君御逝去遊ばされ、閣下大統を繼がせられたる上は、綱重殿の御子綱豐殿を御養君として西丸へ直し給ふが當然の御事である。」と言ふのである。

綱吉は兄の綱重と仲が好くなかつたから、その子の綱豐をも可愛いとは思はなかつた。併し、東照宮の御孫、一門の長者として天下に人望ある義公の說を無下に斥ける事は出來なかつた。その內に、紋太夫は陰謀を知られて、水戸義公に斬られ、紀伊中納言は病死して了つた。そこで、綱吉は好まぬながら甲府宰相綱豐を世子に立てて、寶永元年十二月に、これを西丸へ迎へる事になつた。卽ちおみきの御主人櫻田の殿樣が將軍の御世繼となつたわけである。

甲府綱豐は好色であつた。近衞家から輿入された御臺所熙子の方の外に、右近の局、新典侍の局、齋宮の局、左京の方などといふお妾がゐた。おみきは左京の方に仕へて、名を初音と賜はつてゐたのである。

寶永六年の正月に五代將軍綱吉が薨去されると、甲府綱豐は六代の將軍となられた。名を家宣と改めて、直ちに本丸へ移り住まはれた。

同時に左京の方も山里の御殿へ住む事になつた。從つて、おみきの初音もそこへお供をした。

左京の方は西丸の大奧にゐる頃から、家宣の胤を宿してゐたのであるが、その年七月三日に、その山里の御殿で鍋松君を生んだ。家宣はそれまでにも、御臺所熙子の方には女子を儲け、右近の局には家千代君を儲け、新典侍の局には大五郎君虎吉君を儲けたのであつたが、いづれも早世であつたところへ、將軍宣下のその年に、計らずもこの世子を得たので、上下の喜びは非常なものであつた。左京の方は直ぐに中老の名を捨てて「お部屋樣」と仰がれ、身分の取扱が「お上通り」となつた。勿論、將軍の寵愛は總ての侍妾を壓して、左京の方一人に集まつた。

おみきの初音は主人の出世に連れて出世をした。かの女は幕府の親藩紀州家に長く勤めた經驗もあるし、本丸へ這入つてからも、決して奉公にそつのあるやうな事はなかつた。素性が卑しくて聰明に育つた左京の方とも意氣相投じた。殊に鍋松君御分娩の際は、表使として殊功を立てたので、左京の方が本丸へ移られると間もなく、大奧總女中の筆頭たる「お年寄」役に取り立てられ、名も江島と改める事になつた。

「お年寄」は男で言へば老中にも比すべき大奧第一の重役である。かの女は日日詰所に端座して、煙草盆を前に置き、御用の外には少しも身を動かす事がない。かの女は諸向きより申し來る大奧一切の政務を一々裁決して命令する。御配膳を司る。到來のお文を披露する。紅葉山、芝、上野などへの御代參を勸める。御臺所に代つて、命令、新任、賞罰などの申し渡しをする。それ故、威權他に秀でて高く、一言口を離るれば、よく詞返しをする者がない。幕府親藩の御簾中などが參內された場合でも、決して頭を疊に附ける事がない。

その住居と言へば、長局の一部屋で、間口三間奧行七間の二階作りである。部屋は六間に仕切られてゐる。南の緣に接した所が幅一間の入側になつてゐて天井に金網を張つた引窓がある。女中はここで化粧をしたり、鐵漿をつけたりする。その次は八疊で、南北に襖が締めてある。西に床がある。間口一間奧行三尺の板疊で、黑塗の框がある。床柱は檜の糸柾で、違ひ棚は槻の溜塗である。それから東に間口一間奧行三尺の佛間がある。座敷から三尺上がつた所に中敷居があつて、これに黑塗本骨の障子が箝めてある。中には一段の壇が設けてあつて、女中親族の位牌並びに將軍御先祖代々の過去帳が備へてある。四方の貼附から天井まで金泥で、蓮華の模樣が莊嚴である。佛壇の外には大抵机などを置いて、書齋にあてたり、他の女中との應接所にしたりする。次は六疊で、南北が襖、西が押入になつてゐる。ここは女中の飲食座臥の間で、多く衣裳などが納つてある。その次に二疊敷の入側があつて、又その隣りに八疊の部屋がある。ここは部屋子のゐる所で、左右は貼附、南は襖、北は障子である。その部屋の西に梯子があつて、ここから二階へ上がるやうになつてゐる。二階の間取りも略下と同じで、北に窓がある。この外、部屋子の間の北に更に一間があつて、北の緣に接してゐる。これが臺所及び玄關である。長局一體の襖は地白に銀で花唐草が押してある。天井小壁の貼附は地白に銀泥で鐵線唐草の模樣が現してある。部屋の北には三十坪程の庭もあつて、泉水、築山、石燈籠などが風情を盡してゐる。

當年のお初は齡三十にして、この要職に就き、この美屋に住む事になつたのである。かの女はかくて左京の方附の家老小林杢之助、笹本靱負と同格の扱ひを受け、祿高六百石を賜はり、大奧の總女中二百八十九人の總支配者となつたのである。

江島の立身に連れて、かの女の近親知己が取り立てられた。實兄白井平右衞門は今まで僅に三十俵二人扶持の同心席であつたのが、お目見え席に進んで、三百俵を賜はり、大阪勤めを承る事になつた。義弟豐島平八郎も新御番に取り立てられた。嘗て江島を紀州家へ周旋した諸星藤兵衞は關東の代官に

任ぜられた。その外、知人平田伊右衞門は御留守居番に擢んでられ、西與一右衞門は御勘定方を命ぜられた。實母お久が豐島家へ再緣する時媒をした木梨蓮齋の甥なる表醫師奥山交竹院も、鍋松君に御異例のあつた時、江島の詞一つで奥醫師に取り立てられ、二百俵の御加增があつて、五百石十人扶持を賜はる事になつた。

正德二年十月十四日に將軍家宣が五十七歳で死ぬと、鍋松君が五歳で征夷大將軍左近衞大將となつた。七代家繼これである。御臺所熙子の方は髮を切つて天英院と稱した。左京の方も、同じく薙髮して、月光院と稱へた。右近の局は本丸を出て、虎の門の屋敷に住んだ。新典侍の局は故郷の京都へ歸つた。翌年將軍宣下の時、月光院は從三位に叙せられ、吹上御殿に移り住んだ。

月光院が將軍の「御母公」として、權勢天下に比びなき者となると同時に、これに附き添ふお年寄江島も、愈々大奥に上なき者となつた。

三

江島は十四の年にお目見え以下の部屋方として、紀州邸へ這入つてから、三十歳の今日、大奥總支配のお年寄に進むまで、一刻として心に油斷をした事はなかつた。かの女は父母の轍を踏むまいとしたよりは、父母の社會的恥辱を雪がうとしたのである。かの女は先づ何よりも出來得る限り自分の身分を高いものにしようとした。利口なかの女は策略に依つて得る位置の極めて危い事を知つてゐた。かの女は蔭日向なく身心を努めて、一歩一歩に基礎の强固な階梯を登らうとした。この結果は「無比の忠勤」となつて現れた。かの女は如何なる人から見ても、極めて正しい進み方をしたのである。

一方に於いてかの女は、自分の卑しい素性を決して人に知られまいとした。かの女は飽くまで言語座臥を慎んで、苟も人に批を打たれまいとした。幼時命をかけて習ひ覺えた遊藝で、たま〳〵御前の興を添へるやうな場合があつても、かの女は飽くまでこれを餘技に過ぎぬといふやうに見せかけた。かの女は意志の力で、「過去」と緣を絶たうとしたのである。かの女は「自然兒」としての自分に、手枷足枷をかけて了つたのである。かの女はあらゆる人慾に對して耳目に膠した。かの女は渾身の慾望を對人的の「立身」にのみ集めた。

併し、かの女は今努力に依つて得られる婦女子最高の地位を得た。御本丸大奥の總女中、お半下、お犬、部屋子に至るまでを併せて千餘人の者が、かの女の口の動かし方一つで、生殺いづれにもなるやうになつた。お表の老中若年寄と雖、かの女に對しては一目を置いた。將軍の生母月光院尼公でさへ、私にはかの女と膝を交へて物語つた。

かの女の上には、もう登るべき峯がなかつた。かの女は今目に遮るものもない晴れ晴れとした山の頂きに立つた。そこで、かの女はほつと息をついた。十六七年張り詰めてゐた心に針程の隙を生じた。その小さな隙に乘じて、俄に頭を擡げて來たのは、長くかの女の體内に息を窒してゐた姦婦お久の血である。無頼漢兵助の肉である。蕩兒達磨三郎兵衞の靈魂である。

五歳の幼兒を將軍として頂く七代の内閣は、男子に權威のある者が少なかつた。大老井伊掃部頭直詰は平凡人で、勢力がなかつた。老中も五人はゐたが、土屋相模守政直は七十餘の老人で、身心悉く衰へてゐた。大久保加賀守忠增、井上河内守正岑、阿部豐後守正喬は、所謂「伴食宰相」で、何事をも獨自に裁決する事は出來なかつた。ひとり秋元但馬守喬朝だけは、多少の才幹を備へてゐたが、それとても一身に責を負ふ勇氣のある人ではなかつた。それ故、天下の大政は將軍のお守役たり後見たる間部越前守詮房一人の手で裁決せられた。詮房は櫻田以來六代家宣に仕へて、幕府内外の萬機を取り裁き、百石の小身から五萬石の大名まで經登つて來た才人である。家宣の寵儒新井君美白石の如きも、かれの庇護を蒙る事が多かつた。

詮房は能役者の子であつた。かれは容色の美を以て、先づ家宣に愛されたのである。かれは嘗て妻を迎へなかつた。又妾をも蓄へなかつた。將軍家宣の侍妾は悉く又かれにも許されたのであつた。

詮房と月光院とは櫻田御殿以來の馴染であつた。家繼が將軍となるに及んでかれは侍從として、これは母公として、日夜幼ない將軍の側を離れなかつたのは、この二人のみであつた。月光院は髮をこそ切つてゐたが、まだ二十五歳の若後家であつた。かの女の艶めかしさは、市井の「物づくし」にも役者と對にせられて、「後家方のよい物――山下金作と月光院様」と唄はれた程であつた。詮房も年こそ五十を越してゐたが、天成の麗質いまだ容易に衰へなかつた。二人は近づくまいとしても、近づかずにはゐられなかつた。

或冬の夕であつた。詮房は上下を脱いで、頭巾を冠つて、月光院と二人で炬燵へあたりながら酒を飲んでゐた。そこへ可愛い將軍が不遠慮に這入つて來た。そして、「越前は上様のやうぢや」と言つた。「上様」とは先將軍家宣の事である。

前將軍の時代に、大奥で度々行はれた芝居狂言の催しも、七代になつてから愈々盛であつた。「お狂言師」と稱へて、役者も囃し方も振附も總て女子から成り立つ百七八十人程の一座が、悉く駕籠の儘、庭先から大奥へ入り込むのである。一座中には常に幾人かの女裝した男役者が交つてゐた。かれら

は馴染の老女や中老の部屋に、五日も六日も泊つてゐた。どこの長局へいつ行つても、役者狂言芝居の噂の聞かれぬ時はなかつた。勿論、近臣侍醫などと女中達の仲もみだらであつた。

大奥御用達の商人達は、競つて女中達の歡心を得ようとして、或は宿下がりの折を伺つて芝居見物を馳走し、或は宿元へ酒肴菓子の美々しきを盡して進め、或は御機嫌伺ひと稱して時好の反物を贈り、甚しきは御代參の歸途を要して、料理茶屋へかれらを招じた。かういふ賄賂の結果は大奥に幾多の新しい御用達を生じた。終には醬油御用達、酢御用達、桶御用達、箱御用達といふやうなものさへ出來るやうになつた。六代の内閣は一時これを嚴禁したのであつたが、女中達が直接將軍に向つてする壁訴訟はさういふ正しい御沙汰をも忽ち反古にして了ふのであつた。

江島の耳目は急にかういふ世界に向つて開いた。かの女は今まで夢にも知らなかつた感動を以て、城内幾多の情事に耳を傾けた。かの女は今まで嘗て覺えなかつた欲望を以て、御用達の進物に目を輝かした。かの女は夢のやうに幼時の生活を思ひ出した。最初の父が日夜出入した戯場歌舞の歡樂世界は、まざまざとかの女の腦裡に蘇生つて來た。

江島の血は始めて自由に流れた。江島の靈魂は始めて自由に躍つた。

四

その頃、淺草の諏訪町に津賀屋善六といふ諸家御用達の商人がゐた。かれは武家諸侯に手廣く出入して、何不足なく富有に暮らしてゐたが、唯本丸へだけは出入りの便がなくて、始終それを遺憾に思つてゐた。

津賀屋の同町内に、出羽屋源七といふ藏所の米宿が住んでゐた。かれは元懷月堂安支と號して、大和繪を業としてゐた者であるが、書畫骨董の周旋をも副業としてゐたところから、絶えず津賀屋へ出入をする内に、主人の庇護を得て終に今日の地位を得る事が出來たのである。かれは屋敷方に極めて顔の廣い男であつた。

或日、津賀屋と出羽屋の間に、かういふ會話が交された。

「時に出羽屋、俺は御本丸の炭薪の御用を足したいと思つてゐるがどうだらう。御城内八ケ所の御用を一手に引き受ければ、内端につもつて一年四五萬兩の儲けにはなると思ふが、表向き御用人へ願ひ出たものだらうか。それとも町奉行へ願書を出したものだらうか。」

「成程、御本丸へお出入りをなさらうといふのは好いお考へです、併し、當今は御政道が嚴しうございますから、表向き願つたところで、中々お聞き入れはございますまい。わたくしの考へでは、一應町奉行へ願書を出して置いた上で、裏道から這入り込んで行くのですな。」

「裏道といふと。」

「月光院様附のお年寄へ取り入つて、それから詞を添へて貰ふのです。」

「月光院様と言へば、當將軍様のお腹様ではないか。」

「それだから都合が好いのです。當時の御本丸は從三位様次第でどうにでもなるのですから。」

「だが、さういふ貴いお方のお附では中々手蔓が得られまい。」

「ところが、大層都合の好い事があるのでございます。わたくしの以前御贔負を受けてゐましたお奥のお醫者様に奥山交竹院といふ方がございます。」

「俺お名前は聞いてゐる。飯田町にいらつしやる方だらう。」

「左様でございます。あのお方と從三位様附のお年寄とは、なんでも御親類だとかいふ事で、大層お取り用ひになつてゐるといふ話ですから、先づあの方から手に入れてかかるのですな。」

「進物でもするのか。」

「それに限ります。」

「併し、受けて下さらうか。」

「以前骨董のお取引をしたので覺えがありますが、中々慾の張つた方ですから、お受けになる段ぢやございません。」

「成程、それなら裏道があきさうだの。」

この話があつた明くる日、津賀屋は出羽屋を案内にして、早速奥山交竹院を訪ねた。

津賀屋は初お目見えの手土産として、交竹院へ唐織の羽織二卷に裏地を添へて贈り、その妻へ紅縮緬金糸小縫の小袖四つに裏綿を添へて贈り、その子へ進物代として金百兩を贈つた。

「御丁寧な土産で恐れ入つたが、何ぞお頼みの筋でもあつて參られたかな。」

交竹院は狡猾らしい大きな目を光らして、直ぐとかう言つた。その物越態度がかういふ事にはもう馴れ切つてゐるといふ風である。津賀屋は先づ安心した。

「實は外でもございませぬが、御母公様お年寄へあなたから願つて頂いて御城内八ケ所の炭薪の御用をわたくしが足したいと存じますのでございますが。」

「それはわけもない事だ。江島様さへ御承知になれば、直ぐにも出來る事だ。一つ愚老からお話をして見る事にしよう。併し、お城は中々嚴しいから、表向き進物を持つて參るわけにも行かぬが、それには丁度よい事がある。近頃お年寄は大層芝居を見たがつてをられるから、芝居見物へお誘ひ申すの

だ。」

「併し、わたくし風情かお誘ひ申し上げたところで、お出でにはなりますまい。」

「それは勿論愚老の催しといふ事にするのだ。」

「成程、さう願へれば、大丈夫でござりませう。」

「芝居一切のお取持は竹之丞座の狂言作者中村清五郎に頼むがよい。あの男は先將軍様時分から、お狂言のお催しなどで、度々お城へもお出入りをしてゐるから、お女中方の事にはよく馴れてをる。あれの女房のお梅といふものも、以前紀伊様でお奥勤めをしてゐた時分から江島様とお馴染であるし、亭主と一緒にお城へも度々伺つてゐるから、それにもよく相談するがよい。」

「それは好い事を承りました。すべて仰せの通りに致しませう。」

「それから、お年寄の御實兄で白井平右衞門といふ方が、つひこの近所にをられるから、そこへも一度顔を出して置くがよい。この方はつひこなひだまで大阪表へ出向いてをられたのだが、かの地の商人達との間にちと宜しからぬ事があつて、江戸へ歸られたのだが、いづれにもせよ江島様には御實家の事であるから、御機嫌を取り結んで置くに如くはない。それに、さういふお方の事であるから黄白の利き目は確にある。それからお年寄の弟君に新御番の豐島平八郎といふ方がをられる。これも是非味方につけて置かなければならぬ一人だ。それから、その豐島様に地所を貸してをられる御勘定の西與一右衞門様、櫻田御殿以來のお氣に入りである御書院番の平田伊右衞門様、小謂請奉行の金井六右衞門様、越後御代官の金丸四郎兵衞様、それらは何れもお年寄の恩顧を受けてゐる者だから、それ〴〵附け屆けをするがよい。それからお城の女中方では、新御中老の宮路様、御同役の木曾路様、表御使番の梅山様などがお氣に入りであるから、これらにもそれぞれお取りなしを頼まなければならぬが、この方は芝居見物の折にお誘ひ申し上げる事にするから、それでよい。」

「どうも色々御親切にお教へ下さいまして難有うございます。早速出羽屋とも相談を致しまして、それ〴〵その手配に致しませうから、お芝居の方の事は何分宜しくお願ひ申し上げます。」

「それは承知致した。併し津賀屋・中々の物入りだの。」

「いえ、それはもう、この儀さへ叶ひますれば、暖簾の譽でございますから、如何程かかりましても厭ひは致しませぬ。」

津賀屋と出羽屋は、交竹院の貪欲らしい笑顔に見送られていそ〴〵と飯田町の奥山邸を辭した。

五

或日、交竹院は江島にこの事を話した。

「日夜のお勤めで、さぞ御心勞にござりませう。たまにはお氣晴らしも御肝心かと存じます。ついては近日狂言の座へお招きが致したいと存じますが、如何でございませう。」

交竹院は元より江島の素性を知つてゐる。江島も交竹院が自分の素性を知つてゐる事は知つて居る、併し、二人は飽くまで互に「不知」を裝つてゐなければならなかつた。

「宜しい。芝居見物承知致しました。」

「芝居はどこがお望みでございます。」

「山村の芝居が大層評判のやうだから、あすこへ行つて見たいと思ひます。」

「木挽町でございまするな。宜しうございます。してお出ましはいつになさいまする。」

「この廿五日に亡父の年囘でお宿下りを願ふから、その折にして貰ひませう。」

「畏まりました。つきましては、宮路様木曾路様梅山様などをもお召し連れが願ひたいのでございますが、この儀は如何なものでございませう。」

「少しも差支はありませぬ。それ〴〵内々に申し聞かす事にしませう。」

「恐れ入りました。その外どなたなりともお相手になりさうなお方をお供にお加へ下さいまし。」

「宜しい。承知しました。」

芝居見物はかういふ冷たい會話の間に、忽ち約束されて了つたのである。交竹院は直ぐとその旨を津賀屋へ申し傳へた。

交竹院が宮路梅山などを誘つたのは、決してかれらが唯江島の氣に入りであつたが爲のみではなかつた。交竹院は日夜大奥に出入して、かれらの淫がはしい素性をよく知つてゐたので、かかる場合の一味として、かれらに如くものはないと思つたのである。

宮路の父は糀町一丁目の奥服商松屋金右衞門といふものであつた。宮路は幼名をさだと呼んだ。生來悧發の質で、殊に容色が美しかつた。十六七の頃、堺町の芝居で、飯田町の同業者近江屋五郎右衞門といふ者に見染められて、そこへ嫁に行つた。然るに、おさだは緣づくと直ぐ懷胎して、忽ち臨月近い體になつた。夫の五郎右衞門は大に驚いて、早速醫者にかけたところが、果して姙娠といふ見立てであつた。五郎右衞門はひどく腹を立てた。そんな不埒な娘とは知らずに緣組したのがくやしいと言つて、直ぐにおさだを實父の許へ返した。そして、あとから直ぐ離緣狀を送つた。おさだの父は娘の不埒に甚しく面皮をかいて、一時は勘當をするとまで怒つたが、涙を零しての母のとりなしで、おさだは一先づ赤坂の叔父の家へ預けられる事となつた。おさだはそこで産をしたが、生れた子は果して近江屋へ緣づかぬ前に關係のあつた者

の胤であつた。それでも、おさだの親達はもう一度娘を近江屋へ再緣させたいと思つて媒人の口から頻に詫びを入れさせたが、近江屋では終にそれを聞き入れなかつた。そこで、それでは御殿奉公でもさせて、惡名を雪ぐより外はないといふので、十八の冬月光院がまだお小姓を勤めてをられた頃、お髪結といふ輕い役目で御本丸大奥へ住み込ませる事にした。宮路は江島と同じやうに、月光院の立身に連れて、自分も出世をして來たのであつた。併し、かの女が新中老の重役に出世をした時分には、もう苦勞をかけた兩親もこの世を去つてゐて、生家もいつか退轉してゐた。

宮路が兄と稱する者に、本石町一丁目に住む町醫師山田宗見といふものがあつた。嘗ては松平右衞門督から出入扶持をも賜はつて、可なりな暮らしをしてゐる者であつた。宮路は宿下りの時といふと、きつとその家に寢泊りしたものであるが、いつの頃よりかその宗見と道ならぬ枕を交すやうになつた。その後は毎年春の宿下りは勿論、お使の途中などでも度度逢引が重なつたので、宗見の妻も今は默してゐられず、「假にもきやうだいの緣を結んだ中で、犬畜生にも等しい振舞」と熱涙をこめて夫を諫めたが、宗見は少しもそれに耳を貸さず、却つて妻を離緣して了つた。さうして、愈宮路と密會を重ねた。

梅山の父も美濃屋新藏といふ町人であつた。十七歳の時、御本丸お廣敷のお年寄で清田といふのが茶の間に使ふ女を抱へたいと言つてをられると聞いて、或人の世話でお目見えに上つたところが、大層氣に入られて、直ぐ茶の間へ雇はれる事になつた。併し、所謂「又者」なので、どうぞして御直參の御奉公が勤めたいと思つた。そこで、梅山は清田の部屋を出で、その時分大年寄だつた左京の方の許へお髪結として召し抱へられる事になつた。梅山も江島宮路などと等しく左京の方の立身に連れて、出世をして來た一人であつたのである。かの女は宮路より四つ程年上であつたので、宮路の祕事については何かと世話を燒いた。

間もなく芝居見物の當日が來た。正德三年四月二十五日である。津賀屋善六と出羽屋源七とは羽織袴で朝暗い内から、木挽町六町目の山村長太夫座へ詰めかけ、狂言作者中村清五郎を宰領として、江島招待の準備に心を盡した。

棧敷は八間借り切つて、上の四間には御簾をおろして、後へ幕を打ち廻し、下の四間には幕のみを打つて、金屏風を引き廻した。仕出し一切は前々日あたりから藤屋又五郎といふ茶屋に命じて置いた。菓子は飯田町の御用達虎屋から取り寄せた。

そこへ當日の主人役たる奥山交竹院が水戸家に仕へてゐる弟の喜内を連れて來た。交竹院から招きを受けた江島の兄白

井平右衞門、弟豐島平八郎もやがて來た。御書院番の平田、小普請奉行の金井、御勘定の西、御代官の金丸なども追々と馳せ參じた。いづれも前以て津賀屋から莫大な附け屆けがしてあるので、暫くは善六と源七が阿諛の挨拶に取り卷かれた。

やがて、女中達が忍び〳〵に鍼打駕籠を釣らせて來た。かれらは一人一人用をかこつけて、離れ〴〵に本丸を出て來たのである。江島の顏が見えると、津賀屋と源七は直ぐ蔭へ隱れた。そして、蔭で江島の取持に心を碎いた。

その時の狂言名題は「花館泰平愛護」で、その二番目が、「助六」の初演であつた。役々は大道寺田畑之介後に花川戸助六が幼名を九藏といつた二代目市川團十郎、傾城揚卷が玉澤林彌、髯の意休が山中平九郎、助六母が袖岡政之助、傾城喜瀨川が藤村半太夫、白酒賣新兵衞實は荒木左衞門が前名を野田藏之丞といつた生島新五郎であつた。

團十郎と新五郎とは山村座の二明星であると共に、當時の劇壇の二明星であつた。團十郎はまだ二十六歳の壯年であつたが、技藝にも體質にも父才牛の血を傳へて、武道荒事に妙を得てゐたと同時に、父のよくしなかつた和事にも通じて、剛柔二つながら兼ね備へてゐた。新五郎は團十郎より十七も年上であつたが、中村七三郎の藝風を傳へたやつし上手の器量よしで、好色第一の丹前役者であつた。かれは濡れになると、屢「さしあひ過ぎた臺詞」を言つた。かれはいつも色めかしく肩をゆすり、物言ふ度に脣を嘗めた。

助六の狂言が始まつた。華やかな廓の景色、傾城の道中、江戸節の淨瑠璃で美々しい羽織衣裳の客意休が、白毛の髯に香をたきながら、供大勢連れての出、やがて揚卷の生醉の道中。舞臺一面華やかなところへ、黑紬に三升と牧丹のふせ繡をした着附で、巾廣の帶に長い刀を一本さし、柑子色の鉢卷をして、紺足袋をはいた助六の出。傘さしての風情。爽かな惡たいの辯舌。かんてら門兵衞の可笑しみ。白酒賣の和事。母が異見の紙子に友切丸詮議の爲と實情を明かす助六。揚卷助六があつさりとした濡れ事。意休の殺しから屋根の上の仕合ひまで、一同歡を盡して見物した。

併し、江島は樂しまなかつた。かの女は御簾内に膝も崩さず坐つてゐて、遠くからおぼろげに役者の顏を見たり聲を聞いたりしたところで、それが何で面白からうと思つた。かの女は二十年ぶりで芝居櫓の下を潛ると、急に子供の時が戀しくなつたのである。子供の時は千秋樂の日にきつと母に連れられて葺屋町の芝居へ見物に行つた。併し、決して客として行つたのではない。内裏の者として、何處でも好きな所で見物する事が出來た。勿論、樂屋へも出入りした。振袖を着た